
魔法先生ネギま！ - 東方英雄録 -

創造主モドキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法先生ネギま！ - 東方英雄録 -

【Nコード】

N3519V

【作者名】

創造主モドキ

【あらすじ】

「お腹すいた……」

全てはこの一言から始まった。

宵闇の妖怪ことルーミアの運命は、この日より変わる。

英雄の運命と共に。

この作品は「魔法先生ネギま！」と「東方Project」のクロ

スオーバー作品です。

ネギま7：東方3の割合でできています。

また、申し訳ありませんが作者は東方Projectの原作に詳しくありません。

初投稿なので不都合や未熟な点が多いと思いますが、どうかよろしくお願いします。

プロローグ「ルーミア、幻想郷を去る」

グギユルルルル……

「お腹すいた……」

本日何度目だろうか。

幻想郷と呼ばれる、人知れず存在している幻の秘境である大地の上で腹が減っていることを露骨にアピールする音を腹から出しつつ、彼女はつぶやいた。

金色の月が映える漆黒の夜空の下、森の中で腹を鳴らし横たわっている金髪隻眼の少女は、れっきとした人を喰らう妖怪の一種だ。

名はルーミアという。

宵闇の妖怪とも呼ばれている彼女は、二つ名からしてみれば大層な妖怪に思われるだろうが、実は数多くいる妖怪の中では割と弱い分類に入る。

もちろん術もろくに扱えない人間からすれば脅威には違いないし、そこそこの腕前を持つ陰陽師でも苦戦こそはするだろうが、決して勝てないレベルではない。

そもそも彼女は人を喰らう危険な妖怪でありながらかなり人懐っこく明るい性格をしており、餌であるはずの人間に「食べてもいい人間？」とわざわざ問いかけ返答次第では人間を食べないという、かなりのお人よしでもあるのだ。

その癖に、人間以外の物は食せても栄養を摂取することはできない。

以上の二つを述べることから、今のルーミアが腹ペコである理由は、餌である人間を長らく食べていないと推測するのはそう難しくはない。
しかもこうなる日は割りと多い。

だが今回のケースは特に人とのめぐり合わせが悪いらしく、ここ一週間は何も食べていない。
断食ダイエットを試みようとする女性から見れば目が霞むほどの長い断食を、この少女は経験しているところだった。

「……………お腹……………空いた……………」

よほど空腹なのか、腹の虫ですら鳴らなくなり、呟く声も蠅の羽音のように小さくなり、虚ろになった視線が宙をさま迷っていた。
視界がぼんやりしてきたし、意識が遠のいてきた。
よく空腹になって倒れる事は少なくないが、今回は妖怪の身でありながら初めて死ぬのかと思えるほどの危機感を覚えてしまう。

食べたい。食べたい。食べたい。

今のルーミアの頭の中は、普通のルーミア以上に食欲でいっぱいだった。

それも生命活動において必要最低限の欲望……………本能的な食欲だった。
生き物は窮地に追い込まれると潜在能力を超えた力を発揮するといふ。

妖怪も同じ事だった。

「……………そうだ」

ふらりと上半身を起こし、ゆっくりと立ち上がり、だらりと腕を下ろす。

その紅い瞳はただ虚空を見つめていた。

ここにご飯が無いのなら捜しにいけばいい。

刹那、ルーミアの足元が液状になり、つま先から下半身へと徐々に体が沈み始めた。

地面ではなく、月明かりを遮る漆黒の影に溶け込むようにして、ルーミアの体が沈む。

こうして常闇の妖怪ルーミアは、漆黒の闇の中へと姿を消した。

「……ついに本性を表したわね……とか言いたくなるような場面を見てしまったわねえ」

突如として空中に開かれたスキマから乗り出したのは、幻想郷において妖怪の賢者と称えられている、スキマ妖怪の八雲紫であった。

その二つ名が示すように、彼女は幻想郷の中でも屈指の実力を持ち、この幻想郷を守るだけの力を備えている強者である。

そんな彼女は、未だスキマから身を乗り出しても、大地に足を踏み入れようとしない。

まるで闇という名の底なし沼を恐れているかのように、スキマから動こうとしない。

「人喰いが恐ろしいのではない。闇を操る程度の能力が恐ろしいわけでもない。その両者が真の意味で合わさる時こそが恐ろしいのよ、ルーミア」

紫はただ大地に這い蹲りやがて萎縮する暗闇を目の当たりにして、いないとわかりきっているルーミアに向けて静かに呟く。

「外に行くだけなら私は咎めないわ。結界も壊れてないし……精々気をつけるのね」

そして紫は、閉ざされるスキマにその身を沈ませる。

ゆっくりとスキマに沈んでいく中、紫の目は暗闇へと変貌した大地へと目を配る。

「……もしかしたら……いえ、それはないわね」

意味深げにそう言い残した後、スキマと共にその姿を消した。

数多くいる妖怪の中でも下から数える方が早いほどの弱者に組しているルーミア。

そんな彼女を、幻想郷屈指の強者である紫に恐ろしいと言わしめた。

この日を榮えに、ルーミアは己の可能性を知ることになる。

そのことに彼女自身が気づくのは、まだまだ先ではあるが。

完

ブローグ「ルーミア、幻想郷を去る」(後書き)

2011/9/5: 誤字修正。

ご指摘ありがとうございました。

第1話「ルーミア、麻帆良学園に現る」(前書き)

ここから先は猟奇的な表現が含まれています。苦手な方はご注意ください。

第2話からでもある程度話が分かると思います。

第1話「ルーミア、麻帆良学園に現る」

エヴァンジェリン視点

くそっ、しくじった。

いくら魔力が封印されているとはいえ、「闇の福音」と呼ばれしこの私が、まさか三流魔術師相手に不意を突かれて取り逃がしてしまうとは。

もしこの事実が知れてしまったら、あの妖怪ひょうたん爺から笑い者にされてしまう！

それだけは絶対に避けなければ！

……いや、そもそもを考えれば教師に成り済ましたとはいえ部外者の侵入を許してしまったクソ爺にも責任があるではないか。そうだもうろく爺だって十分悪いではないか。

「マスター、何を考えていらっしゃるのですか？」

「煩い茶々丸」

私の従者である茶々丸の冷静な横槍に対して叱咤してやりたいところだが、

今はそれどころではないな。

月明かりのみを頼りに、夜の街路樹の中を逃走する侵入者の姿を見つけ出し、後を追う。

しかし街路樹に逃げ出すとはな……姿を隠せるだけでなく、迂闊に魔法を使えば、木々に衝突して視界を遮って見失ってしまう。姑息な手だけは一流なのだなあ。三流は。

「マスター、侵入者の三百メートル先に魔力反応……らしきものが発生しました」

「何？奴の他に仲間がいたのか？」

そんなばかな。侵入した形跡もないし、奴自身が単独で侵入したと豪語していた……。

いやまて、魔力反応『らしきもの』だと？

「いえ、マスターを除き生命反応があるのは侵入者だけです。ですがこれは……魔力に似た、魔力でない何か……？いえ、しかし」

珍しい事に、何やら茶々丸がごちゃごちゃと呟いている。思考に口ジックでもかかったか？

私が再び問おうとした……その直後。

「マスター、魔力反応らしきものの中から生命反応が発生しました。この反応からして妖怪の類だと推測します」

「なんだと？あの侵入者が召喚したにしても奴は西洋魔術師だぞ？ならなぜ妖怪が……」

そもそもを考えれば、何故いまになって魔力反応が現れたのだ？

仮に侵入者が妖怪を呼び出したとしても、何故いまさら？

それに茶々丸がいう「魔力反応『らしきもの』」とはなんだ？

魔力と対になる性質である『気』ですら判断せんのなら、なんだと
いうのだ？

「き、貴様いつからそこにいた！？邪魔だどけっ！」

次々に頭の中から湧き出てくる疑惑を考えつつ走り続ける私の耳に、侵入者の声が聞こえた。遭遇したか。

しかし侵入者とは関わりが無いのか？

「な、なんだこれは！？闇が、闇が……っ！」

なんだ？何がいるというのだ？闇がどうした？何が起こっている？

「何をやる気だ、や、やめ、ぎ、ぎゃあああっ！痛、あぎゃあああっ！！痛い痛い！助、助け、て、あ、ああああああああああ！！！」

痛々しい断末魔と、肉が裂け、骨が砕ける音が嫌という程に私の耳へと飛び交う。

別に盗人風情の助けなど聞く気もないし、奴の痛みなど知った事ではないが、あの先で一体何が起こっている？

麻帆良学園の連中はお人よしばかりだ。

あの金に頼り狙撃手である真名ですら安易に人殺しはせんはずだし、ましてや悲鳴を上げるほど残虐な殺害など、私を除いているはずが無い。

そもそも、今この場にいる麻帆良学園の関係者は私と茶々丸だけだ。

なら誰が？

その疑惑は、私の眼前に広がる、月明かりに照らされた光景が応えてくれた。

赤と黒 血肉と暗闇。

その二言が相応しい光景を目の当たりにするのは久しかった。故に不意を喰らってしまい、一瞬だが吐き気を覚えた。

かつて侵入者だった物らしき僅かな肉塊と骨、そして夥しい量の血液が周囲にぶちまかれ、あちこちが鮮やかな赤に染まっていた。

そしてその血の海の中心には何かを咀嚼している少女の姿があり、そいつの目と私の目が重なり合った。

ゾツとした。

血のように真っ赤な眼は驚くほどに無垢で、それ故にこちらを見つめる視線が、まるで私という獲物が喰える者か喰えない者かを判別しているかのように感じられる。

それを裏付けるかのように、彼女の口周りは真っ赤な血で汚れていた。

人を、喰ったのか。

人を殺したこともある悪の魔法使いであり、人の生き血を喰らう吸血鬼であるからか、さほど恐怖心が湧き出てこなかった。

だが目の前の光景は、素直に言えばグロい。

食人系の魔物の食事風景は何度か目の当たりにしたことがあるが、若干10代ほどの小娘が血だらけになって人肉を喰らう光景はさすがに吐き気を覚えた。

小娘がゆっくりと口を開く。

「お姉さんは……食べられない『何か』なのかー」

こいつ、一目で私が入ではないと見抜いた？

私と茶々丸は思わず身構えるが、小娘はまるで糸が切れた操り人形のように、いきなりその場に倒れた。

何事かと思いい様子を伺ってみたが……この小娘、堂々と寝てやがる

……。

べつとりと口周りに生々しい血糊をつけているくせに、腹が膨れて満足した子供のようにすうすうと寝息を立てて眠っているその寝顔は、幼稚で無邪気な子供そのものではないか……。

なら、先ほどのプレッシャーや魔力はなんだというのだ？

「……茶々丸、こいつを私の家まで運べ。私の客人として連れて行く」

「イエス、マスター」

茶々丸は小娘を起こさないように背中におぶさり、私の後に続いて歩き出す。

こうしてみると、血まみれなのを除けば、なかなか微笑ましい光景だな。

「ですがよろしいのですかマスター。学園長に報告すべきかと思われませんが」

「事後にこいつの事を話してみる。あの爺やタカミチはまだいいとして、頭の硬い連中が聞いたら黙ってはいられないだろう」

茶々丸にはああ答えたが、それだけではない。

俄然興味を覚え疑惑が耐えないこの小娘を、あの爺に簡単に引き渡すようでは面白くないからな。

私は小娘の頭を撫で、頭につけている紅いリボンに触れる。

「この小娘、微弱だが奥には中々な力を持っているようだ。おまけにこのリボン……」

リボンに触れているだけで分かる。このリボンには封印が施されている。それも強力な。

それだけ、この妖怪らしき小娘の奥底に眠る力は強大だということなのだろう。

加えて間近で見えてわかったが、あの暗闇は魔法で構成された闇だ。それも魔力だけではない、別の何かで組み込まれた闇が含まれていた……。

「闇の力を持つ人喰い妖怪……しばらく退屈しなくなりそうじゃないか」

不確定要素を引き入れることは効率的ではないことは承知している。ましてや学園の結界を潜り抜けた人喰いの化物を、あの爺に黙って匿っているとわかれば危険性は跳ね上がるだろう。

だがそれ以上に得られる何かがあると確信しているし、なにより面白そうではないか。

さて、さっさと帰るとするか。

完

第2話「ルーミア、エヴァンジェリンをで目覚める」(前書き)

2011/9/5: 誤字修正

ご指摘ありがとうございました。

第2話「ルーミア、エヴァンジェリン宅で目覚める」

ピッ

AM10:00測定。

体温、脈拍、呼吸ともに大きな変化無し。健康体です。

私は少女の額から手をどかし、再び寝顔を見つめます。

血で汚れた服はマスターの予備の寝間着に着替えることで間に合ったのですが、寝具はマスターが使用する物しかありませんので、仕方なく1階のソファに寝かせました。

寝心地に不安要素が予測されましたが、むしろ彼女はとても気持ちよさそうに眠っております。

良い夢を見ていられたのであろう、睡眠時のマスターの寝顔に似ています。

昨夜 AM1:28に寝てしまったこの子をマスターの客人としてログハウスに招いてからしばらくして、朝日が差し込んできました。

マスターが眠られている間、私はこの子を監視するよう命じられておりますので、あの後も監視を続けています。

時々センサーで体調を管理したり頬を突いたりするのは、支障は出ないであろうと考えた、私の独断です。決して魔が差したわけではありません。

「……………んう……………」

少女に反応あり。

差し込んできた日差しが眩しくて目を覚ましたのでしょうか？
もぞもぞと動き、やがて上半身を起こして目を開き、周囲を見渡します。

「……………」

私から見た判断では、彼女は寝ぼけています。

加えて状況が判断できないでしょう。周囲を何度か見渡した後、私に気づきました。

「おはようございます。お目覚めになられたようで何よりです」

「おふぁよー」

私が朝の挨拶を交わすと、少女は欠伸をしながら返事をしました。
器用ですね。

伸びをした後、瞼を指でこすると、すっきりとした眼で私をじっと見つめます。

「ところで、あなたは食べてもいい人間？」

……………質問の内容を再度確認……………解答者が人間だったとしたら解答に
困る内容だと推測します。

「いえ、私はガイノイドと呼ばれるロボットで……………」

「？」

「所謂、鉄人というもので……」

「……？」

「つまりは人の形をした物です」

「……………」

「ですから、私は食べられません」

何度も首を傾げるのでロボットを知らないだと推測。

わかりやすい単語に変換して答え、私は食べられないという事実を伝えました。

人間ではなくガイノイドですので。

「そーなのかー」

申し訳ありませんが、そのようにがっかりされても決して私を食べ
てはいけません。というより食べられません。

私を食べても無機物ですので体内で栄養に変換できないのは確実に
すし、消化不良でお腹を壊してしまいます。

「ところでここはどこ？」

「ここは……」

「目が覚めたようだな」

私が少女の質問に答えようとすると、マスターの声が聞こえてきま
した。

本日は休日なので、朝食後の二度寝は昼まで寝ているものと推測していましたが、随分とお早いですね。

エヴァンジェリン視点

珍しく二度寝から早く起きたな……やはりあの小娘が気になるという証拠か。せつかくの休日だというのに。

私はまだ睡眠を欲して閉じようとする瞼をこすり、寝間着のまま階段を降り、小娘と茶々丸の前にあるソファーに座る。

改めて小娘を見てみるが……随分と間抜けな顔をしているな……。

「あなたは誰？」

唐突に名前を聞いてくるとはいいい度胸だなこいつ……いいだろう、少し脅してやる。

「私の名はエヴァンジェリン=A=K=マクダウエル。闇の福音と呼ばれし真祖の吸血鬼……悪の魔法使いだ」

私は両手を腰に当て、ふんぞり返って大々的に言い放った。

魔法を知る者にとって、この名を聞いて知らぬ者は少なからう。

ましてや目の前にいるのが吸血鬼だと聞けば少なからず脅えを見せるはず。

ふふん、脅える脅える。その間抜け面もいずれば……。

「……エ、エヴァンジェ、リ、ン、……エー……エー……？」

少女の言いよどんでいる口を聞いて私は思わず怪訝に眉を潜めた。

恐れではなく、小学生が必死で九九を暗記するかのよう難しい顔をしているとは正直驚いた。

……というか、聞いたばかりの名前が覚えられないのか？阿呆か？バカなのか？

「……はあ……エヴァでいい」

「そーなのかー」

もう一度言うのもバカらしいからなのか、言っても無駄だと思っただからなのか、考えるのもバカらしくなったので諦めた途端にこれだ調子に乗ってる……ように見えん。

なんだこの太陽というよりお日様と呼べるほどに能天気な笑顔は。

「ついでに申し上げますが、私の名は絡繰茶々丸といいます。マスターの従者しております」

「そーなのかー」

何気に自己紹介するな茶々丸。というか茶々丸の名前は問題ないのか。なんでだ。

……まあいいとしよう。とにかく目の前にいるこの間抜けが気に喰わん。

「にしても貴様、随分と軽薄な反応だな。悪の魔法使いを、そして吸血鬼を前にして微々たる恐れも脅えも見せんとは」

「知り合いにいるよ？吸血鬼と悪の魔法使い」

あっけらかんと驚きのワードを答えやがったこの阿呆。

知り合いに吸血鬼？悪の魔法使い？本気か？いや私が言える義理はないが……。

こいつは一体何者なんだ？いや、こいつは「何」だ？

「……貴様は闇の眷属かなにかか？」

「違うよ。ルーミアは闇の妖怪なのかー」

ルーミア、という名か。

一人称がそうなのだろうが、警戒心の欠片もない奴だな。

にしても闇の妖怪か……種族としては聞いたことが無いので、恐らくは暗闇を好む妖怪か何かであろう。

まあ、その事については刹那あたりにも聞いておくでしょう。仮にも神鳴流剣士。妖怪には詳しいだろう。

「その弱々しくて間抜けな面も、学園に忍び込む為の仮の姿ということか」

「がくえん？がくえんって何？食べ物？」

「学園は食べ物ではありません。構造物の一つ……つまりは建物です」

「そーなのかー」

いちいち口を挟むな茶々丸。

大体、学園と聞いて食べ物だという発想はありえないだろう。しかもなんだ、その何も考えていませんとばかりにぼーとした顔は。

いや、とぼけているに違いない。そうだそうに決まっている。

でなければ昨夜のあのダークな光景はなんだというのだ。

「とぼけるな。昨夜に見せたあの底知れぬ闇の深さ……加えてその強力な封印を施しているリボンはなんだというのだ」

「昨日？」

「……何も覚えていないのか？貴様が食ったあの侵入者のことも」

「人間を食べたことは覚えてるけど、他はさっぱり。気がついたらここにいたの」

とぼけている……ようには見えん。相変わらず間抜けっ面を晒し続けている。

記憶操作の魔法か？しかしそのような気配ですら見えない。バカに見える。

……頭が痛くなってきたな……これだからバカの相手は疲れる……。

「……いい加減、爺にも見せてくるか。……来い茶々丸、ルーミア」

「イエス、マスター」

「ハイ」

茶々丸はいいとして、このルーミアという子はほいほいとついてくる。

純真無垢とも言えるほどに素直に。

「……もしかしたら私は、上の者に報告して貴様を殺すかも知れんのだぞ？そうホイホイと簡単について来れるのか？」

「あなたは悪いことはしない。そんな気がする」

少し怖がらせてやろうと思って威厳をこめた表情で言ってみたら、すんなりと私は何もしないと言ってきた。

思わず面喰らってしまったが……少し真剣だったので冗談で言ってるわけではなさそうだ。

疑いの欠片も見られない……ここまでくると愚直だな……。

「ほお……悪の魔法使いを前に悪いことはしないと云うのか。なんの根拠があるというのだ？」

「えーっと、なんとなく」

ずるっ

「どうしたの？エヴァちゃん？」

「マスターはルーミアさんの発言に不意をつかれ歩行機能に影響を受けて転びかけたよう……つまりはビックリなされたようです」

「そーなのかー」

「貴様らそこで一列で並べ……一発張り倒す！」

とか言ったら本気で二人して横一列に並びよった……天然って恐ろしいな。

もちろんその後叩いてやった。二発目で手が腫れたので、再度スリッパで叩いてやった。

完

第2話「ルーミア、エヴァンジェリン宅で目覚める」(後書き)

オマケ

〔紅魔館にて〕

「ふえつくし！」

「くしゅっ」

「お嬢様、パチュリー様、大丈夫ですか？」

「うー……平気よ、咲夜……今なんか呼ばれたような気がして……」

「むきゅ……私もよ……しかもなんか凄く突っ込みたい気がする……」

……

「？」

完

第3話「ルーミア、学園長と会談する」

近右衛門視点

「あなたは食べてもいい……人間？」

「いきなりそんなこと言われてものお……」

いや、食べられたくは無いんじやが。

休日じゃってのに突然やって来たエヴァンジェリン君と茶々丸君、そして彼女らが連れてきた、彼女曰く人喰い妖怪だという女の子。名はルーミアというらしい。

にしても会って早々ああ言われるとは……さすがのワシにも予想できんかったわい。

しかしよく見れば可愛い子じやの……。

「そもそも、その間はなんじやその間は。ワシはれっきとした……」

「止めておけルーミア。この爺は人間なんだか妖怪なんだかはつきりせん奴だ。例え食べられる人間だとしても不味いこと間違い無しだ」

「そーなのかー……」

酷い言われようじやのう……ワシ。

いや、だから喰われたくはないんじや。

そんな期待に満ちた目でワシを見んといてくれルーミア君や。

……おっと、話が逸れてしまったの。

「……してエヴァンジェリン君、昨夜の件についてをこれから詳しく話してくれるのじゃな？」

「ああ。私が解るだけの事を話そう。ただし信じる信じないは貴様ら次第だがな……」

「それはこの子が関わっているから……ということなのかな？」

タカミチ君もルーミア君が気になるようじゃの。無理も無いが……。にしても緊張感の無い子じゃのう。茶々丸君がそばで注意してやらんと立ちながら眠ってしまいそうな顔をしておる。いまにも瞼を閉じて夢の中へ行ってしまうそうじゃ。

「関わってるものにも、昨夜の侵入者を肉片に変えたのは、他でもないこのルーミアなのだからな」

ほう……それは驚いた。タカミチ君はもつと驚いているようじゃがの。
なにせ、こんな可愛い子が人を喰うなど考えられんからなあ。妖怪だから、と納得するにはちと苦しいな。

「しかも誰も気づかれずに結界で隔てているはずの学園内に侵入し、三流とはいえ魔法使い相手を喰ったのだからな」

「ふむ……こんな幼い妖怪が学園結界を越えて侵入してきたとはのお……」

「僕はむしろこんな可愛らしい子が人を喰う妖怪だという事実が信じられませんよ」

タカミチ君の意見には一理ありじゃな。

妖怪とは時に人を欺き不意を突いて喰らう者もある。

しかしこのルーミア君は別じゃ。眠気と食い気ばかりで殺気がまったく無い。

……これこれ、立つたまま寝るんじゃない。茶々丸君起こしておくれ。話題の中心が君だというのに緊張感の欠片も感じられんな。

「見た目に騙されるようではまだまだ甘いなタカミチ。それにこの娘のリボンは……」

「封印が施されておるのじゃろ？それもお主にかけられた呪いに匹敵する程の、強力かつ複雑な封印がの」

「まさか!？」

ルーミア君には驚かされてばかりじゃな。

見る目が無ければ信じる事が出来んぐらい、このリボンから漂う力は半端ないのじゃ。

しかしそれは、このルーミアという子がそれだけ危険だからということじゃ。

危険でありながら殺す事もできず、封印『せざるを得なかった』という意図も考えられる。

「しかしそれほどまでに強い封印を施したとなれば、学園に侵入した理由も納得できないわけではない。危険性は無視できんのう」

「だがこのルーミア、これが素かどうかは分からんが、かなりの馬鹿で能天気でお人好しだ。人喰いの癖にわざわざたずねた阿呆っぷりを見ただろっ?」

あながち間違っておらんから、この子に対する哀愁が沸くわい……。
本人はまったく気にしておらんようじゃが……。これこれ、茶々丸君
の手を齧るでない。

茶々丸君が困っておるじゃろう。

「確かにの……。そもそも、この子からは邪気も悪意も感じられん。
無垢な子供そのものじゃ」

「しかし学園長、人を喰らったのが事実なら、彼女を学園に放つて
おくわけにはいかないかと」

タカミチ君の言う通りじゃ。

事実、これまで学園に被害を及ぼした妖怪や魔物は例外なく排除し
てきた。

……。だがの。

「ならタカミチ君、君はルーミア君をどうする気かね？ 処分でもす
る気か？」

そう言うとタカミチ君は返答を渋り、ルーミア君を見る。

「？」

エヴァンジェリン君より受け取ったタンコブをさすりながら、タカ
ミチ君を見て首を傾げるルーミア君。

先ほどの話を聞いてなかったのか、それとも聞いておきながら意味
を理解しなかったのか。

たぶん前者かもしれないが……。驚くほど何も知らない眼でタカミチ君

を見る。

あの目は、普通の女の子と変わらない、無垢で無知な子供の眼じゃ。タカミチ君は渋い顔をして首を横に振った。

「……いえ、できませんね」

「わしもじゃ。こんなに真っ直ぐな目をした子をどうこうするかなど、仮にも教育をさせる立場としては放ってはおけんわい」

「甘い奴らだな」と辛口コメントを発するのはエヴァンジェリン君。フォッフオッフオ……確かにそうじゃの。じゃがな、甘い考えを抱いてしまうのも人間の証なんじゃよ。

「してルーミア君。幾つか聞いても良いかの？」

「なーに？」

さて、ここからが本題じゃ。じゃからルーミア君、茶々丸君の頭を齧るでない。

茶々丸君がオロオロし始めたぞい。

「君はどこからやってきたんじゃ？」

「幻想郷から来たのー」

……ここで日本どころかどの国にも見当たらないような単語が出るとは……。

はて、どこかで聞いたような名じゃが……。

「幻想郷？……学園長、ご存知ですか？」

「……いや、詳しくは知らんが、ずっと昔にそのような名の秘境があると耳にした事がある程度じゃ」

「私もかなり古い書物にそのような言葉が載ってあった記憶がかすかにあるだけだ。……実在しているかなどは知らんが」

まあ結論を言えば、何も分からんということじゃな。

「じゃあルーミア君、君はどうやってここに来たんだい？」

「わかんない」

「わかんないって一言で言われても困るんだけどなあ……」

タカミチ君も苦戦しとるのお……。

その後もルーミア君から色々聞きだしたのじゃが、曖昧な答えばかりじゃった。

人間だけでなく、妖精や妖怪、鬼や天狗、はてまた神ですら暮らしとるといふこと。

『スペルカードール』と呼ばれる非殺傷（しかし中には怪我をすることもあるらしい）の決闘方法。

スキマ妖怪なる妖怪の賢者が幻想郷を治めておるといふこと。

どれもこれも聞いただけでは信じられんことばかりじゃ。神様も住んどるとかありえるんじやろうか……。

はつきりと解ったこと言えば、周囲を真っ暗にしたり暗闇を飛ばしたりするという、闇を操る程度の能力とやらを実演してもらったことぐらいじゃの。

まだ隠しておるようじゃが、部屋がめちゃくちゃになるといつておったし、そこだけは諦めたがの。

「……………博霊？それが君のリボンをかけた者の名なのじゃな？」

「うん」

「……………うむ、曖昧な答えばかりじゃのう。骨が折れるわい」

「いつとくが記憶操作の痕跡はないぞ」

ワシかて伊達に長生きしておらんわいエヴァンジェリン君。ワシにだって解るわい。

……………仕方ない。反発はあるじゃろうが拾った者の責任ちゅーことでよく言っじやる、言いだしっぺの法則と。……………む？違うかの？

「場所も目的も手段も正体も不明。しかも人喰いとなれば周囲の反発は避けられそうになさそうじゃのう。……………そこでじゃな」

「言つとくが、ルーミアは私が預かる」

むむ……………先手を打たれてもうたか。勘の強い子じゃのう。

「念のため聞くが、その理由は？」

「一つ。最初にルーミアを見つけたのは私だから」

まあ元々からその理由でエヴァンジェリン君に任せるつもりじゃったし。わしもできれば面倒沙汰は勘弁したいからのお。

「二つ。リボンの封印の解明」

そこは想定範囲内じゃった。

エヴァンジェリン君の呪いを解くのは、ワシらの力を用いてもほぼ無理じゃった。

未知数じゃが強力なりボンの封印を解明すれば、呪いを解く手がかりが掴めるかもしれぬ。

じゃからルーミアを確保したかったのじゃろう。

「三つ。魔法関係者の中で常に監視でき、尚且つ対処しやすいのは恐らく私だけ」

むむ……確かに魔法先生は基本的に忙しいので常に監視はできぬ上に、腕の立つタカミチ君は海外出張が多くて預けることですら間々ならん。

不本意じゃが、エヴァンジェリン君ならサボリが多いので、イザと言う時の対応の為に授業を抜け出してもなんら不信感を抱くことはない。

それにエヴァンジェリン君は仮にも真祖の吸血鬼。実力は折り紙つきじゃ。

「四つ。いざとなれば人喰いを匿っていた悪の魔法使いである私ごと後処理ができて一石二鳥……まあこれは貴様らの言い分だな」

そんなことする気はまったく無いのじゃがのう……。少し疑い過ぎじゃ。

「そして最後に……ロリコンジジイからルーミアを保護する為だ」

「いやワシ、ロリコンちゃうし。……な、なんじゃタカミチ君その目つきは！？ほ、本当じゃって！」

「とにかくルーミアは私が預かる。異論を聞く気はないからな」

むう……こうなるとエヴァンジェリン君は言うことを聞かんからもう……いつものことじゃが。

しかしこの子に任せる方が適任といえば適任じゃな。

「孫娘やネギ君もちろんじゃないが、生徒に被害を及ぶことの無いように頼むぞい」

「子守をするつもりは無いのだが……肝に命じといてやるか」

「それと、表向きにはルーミア君はエヴァンジェリン君の従姉妹、ということにしてもらうぞい」

「な、何いつ！？こら爺、何勝手なことを……！」

「ルーミア君を預かるのなら一番しつくりする理由じゃと思っただんじゃがお。ほれ、おぬしら二人とも金髪じゃろう？それに同じ闇を持つ者同士じゃからな」

「だからといって何故この間抜けが私の従姉妹という設定なんだ！仮にも私の親族として扱うのだぞ！？こんなバカレンジャー追加確定の阿呆がいると思われてたまるかっ！！」

「ならエヴァンジェリン君、他にいいアイデアはあるのかの？」

「……………」

「……ルーミアさん、起きてください」

「……ふえ？終わった？」

ふっ、珍しく勝ってやったぞい。

塞ぎ込むエヴァンジェリン君を見てわしは内心勝ち誇る。

そんな彼女を察してか、茶々丸君は自身の膝枕で眠っておったルーミア君をぺちぺちと叩き起こす。

……というか、堂々と寝とったとは侮れん子じゃのう……。

「ルーミア君、一つ約束して欲しい事があるんじやが、聞いてはくれんかね？」

「なーに？」

「辛いのは承知の上なんじやが、むやみやたらと人を食らうのは止めて欲しいんじや。無論こち「いいよー」らでなんとかす……ふお？」

……なんとあっさりとした返答なんじや。

人間に限らず、生命が必然的に宿す三大欲求の一つ「食欲」を制限されるといふのに。

この子は僅かな嫌悪や怒りですら感じさせぬほどの穏やかな表情を浮かべておる。

「食べたいけど我慢する。食べていい人間だけにするー」

「……ありがたいんじやが、なぜそんなあっさりと引き受けてくれるんじや？」

「だって勝手に食べちゃダメなんですよ？」

「無論そうなんじやが、君自身に不満は無いのかね？」

「満足できないのは嫌。ルーミアは人間が食べたいー」

「ならなぜワシの言うことを聞いてくれるのかの？」

「さっき言ったのかー」

この子はいわば大人の躰を素直に聞き入れている子供に等しい。

例えその躰の裏に大人の都合があったとしても、この子はなんの疑いも無く頷くのじやろうな。

可哀相じやが、聞き入れてもらえなかったとしても、我慢してもらうしかないのは事実。

「……いや、わかったぞい。ありがとうルーミア君」

今はただ、無垢なるこの子に感謝の言葉を送るしかできんな……。

「……話は済んだか？……なら帰るぞ」

何か言いたそうな視線をこちらに向け学園長室を出て行くエヴァンジェリンに続き、ルーミア君と茶々丸君も一声かけてから退室していく。

……ワシらも大概じゃが、ルーミア君はもっと甘いようじゃのお。

「……博霊……のお」

歳をとると物忘れが多くてたまらんわい。

どうもあの名前が頭の中を引っかきまわっておるような気がしてならん。

それは置いておくとして。

「……それで学園長、今後ルーミア君をどうするんですか？」

すっかり空気と化しておったタカミチ君の言葉を聞いて、ワシは腕を組む。

……皆にルーミア君をどう説明しようかのう……。ネギ君への課題の件もあるし……。

……頭が痛くなってきたわい……。

完

第4話「ルーミア、エヴァンジェリンの仲間(?)になる」

エヴァンジェリン視点

ふう……長かった……。

肩にどつと押し掛かる疲れにため息を漏らしながら、夕焼けに染まる街道を三人で歩く。

夕飯の買出しなどで人が賑わい始め、人の姿が多く見られるようになってきた。

馬鹿相手にこれだけ時間を要するとは思わなかった……休日にして正解だったな。

そのバカ……もといルーミアはといえば、私の横で暢気に両手を広げて歩いている。

私は軽く咳払いをして注意をこちらに向けようとする。

「さて……まずはルーミア。貴様を預けることになったわけだが、いくつか話がある。まずは……」

ググウウ……。

「お腹空いた！……」

人が真面目な話をしようとしとるのにこの馬鹿は……！！

ていうか周りの人間を見て涎を垂らすな！爺の忠告に応えたばかりだろ！？

「……話が先だ！真面目に聞けっ！」

「はい」

聞き分けはいいんだよなこいつは……。なんかいちいち怒ってるのがバカらしくなる……。頭が痛くなるようなバカを相手に、私は溜まった疲れやストレスを吐き出すようにため息をつく。

「私は居候を泊める気はないし、ましてや貴様のような腑抜けが私を呼び捨てにするなどおこがましい。泊めてやるからにはそれなりの態度を要する。そこでだ」

私は間抜け顔を晒しているルーミアをびしっと指差す。

「貴様は今後、私のことを主と呼べ。私の忠実なる僕となるなら、貴様を住まわしてやろう」

「はい、主」

「……そんなあっさりと受け入れていいのか？」

「提案したのはマスターですが」

煩い茶々丸。

「ルーミアは主の傍に居たいのか」

「……そんな理由でか？」

「というか、匿ってやったとはいえ、一日も経ってないのに何故そんな笑顔を私に向ける？」

「屈託の無い笑顔。それが私には妙に腹立たしくあり……。羨ましかったです。」

私の過去がその笑顔を否定し、査定する。複雑な気持ちだ。

「……………何故だ？」

どうしても腑に落ちないので理由を聞くと、ルーミアは私に近づいてくる。

ピトリ

「なんか落ち着くから」

……………私の体とルーミアの体が横に並び、ぴったりとくっついてきた。肌と肌を密着させるように……………おお、頬の肌がもっちりして……………って人前でやったら恥ずかしいだろうが！

「こ、こら離れるルーミア！ええい引っ付くな！」

こんな恥ずかしい所を見せられてたまるか！ええいこいつ意外と力が強いな……………っ！

おい茶々丸助け……………て何を羨ましそうに見ているんだ！？

「ああ、マスターがあんな嬉しそうに……………」

「見てないでこいつを引っぺがせ茶々丸！」

「イエス、マスター」

その後、ひつつくどころか抱きついてきたルーミアを引っぺがすのに20分ほど掛かった。

……………余談だが、なぜか茶々丸の動きがどことなくぎこちなかった。

「はあ……はあ……しかし、後悔するぞルーミア」

「？」

引っぺがすだけでこれだけ体力を消費させられるとは思ひもしなかった……。

おかげで私とルーミアの息が荒い。変なところで強引なんだなこいつ……。

呼吸を整え、高らかに宣言する。コイツの将来を。

「私の下僕になると決まった以上、半端な実力は許せん。貴様は弱いという事に間違いはないのだからな。普通の魔法使いでは勝てぬぐらいの実力を持つ中ボスクラスになるまで、私が鍛えまくってやるから覚悟しておけ！」

「おー！」

……やる気があるのは認める。だがなんか足りないのは気のせいかな……？バカだからか？

まあいい……死ぬような修行をさせてやるとしよう……化けたら化けたでそれで良しだ。

「……阿呆な返事だが……まあいい。それとだな……」

「すみませんマスター、少々よろしいでしょうか？」

「……なんだ茶々丸」

「はい。17時よりタイムセールですので、これから買出しに向かってもよろしいでしょうか？」

「なんだ、そんなことか……勝手にしろ。私はルーミアに話が……」

「ありがとうございます。チラシによるとマスターの好きな洋菓子店にて新製品のケーキが一人様一つで販売するようです。宜しければマスターとルーミアさんも来て頂けると個数が増やせて助かりますが」

「何！？それは本当か！？こうしてはおれん！行くぞ茶々丸！ルーミア！」

「イエス、マスター」

「はい」

あそこのケーキは絶品だ！新製品となればなおさら買いに行かねば！走れ茶々丸！ルーミア！待っている、新発売のケーキ！

くとある神社にて

「……………」

「どうしたのよ、魔理沙。身震いなんかしちゃって」

「いや、なんか急に寒気が……霊夢、私にもあつゝいお茶が欲しい

ぜ」

「嫌よ、面倒くさい」

「ケチー」

「自分で淹れなさいよ」

「こたつから離れたくないからお断りだぜ」

「…………ふう」

食後のデザートに紅茶とケーキ……………至福のひと時だな……………。
新製品の『イチゴたっぷりケーキ』は大きな苺を惜しみなく乗せた
豪華なもので、しかしケーキ自体の甘さを邪魔することなく、酸味
と甘さのバランスが絶妙な苺を味わえる。

……………というか。

「……………なんだ貴様、普通に食えるではないか」

ガツガツとケーキを食らうルーミアを見て言う。……………「いつにはマ
ナーを教えてやらんといかん……………」。

おい、クリームを飛ばすな。汚い。

さきほども、つい茶々丸が作ってしまった夕食を何事も無く食べて
いたし……………本当に人喰い妖怪なのか疑わしくなってきた。

「お腹は膨れるけど、何かが満たされないんだよね」

クリームがべっとりついた口を開いて言う。……「こら、指で搦って舐めるなみっともない。」

「夕飯のお味がお気に召しませんでしたか？」

持っていたナプキンでルーミアの口を拭いながら、茶々丸が申し訳なさそうに言う。

……こいつに、あまりルーミアを甘やかさないよう言いつけておかないとな……。

「ううん、そうじゃないの。とっても美味しかったのかー」

「……ありがとうございます」

ルーミアの笑顔を見て、茶々丸はほんの少しだが口の端を吊り上げて頭を下げる。

……いつも浮かべている笑顔と一緒ではないか。なにをそんなに嬉しそうにしてる……。

……満たされない……か。

「ルーミア、先に話したいことがある。聞け」

「はい」

「貴様がしてはいけないことだ。まずは人喰い。これは言わずもがな。……まあ、そこは私の独断で決める。私の命でしか喰えないと思え」

「はい」

「二つ目に……魔法使いまたは関係者以外に自分の素性と魔法を明かすな。もちろん貴様の能力もだ。面倒になるからな……これも私の判断で使う使わせないを決める」

「はい」

「最後に……ネギ・スプリングフィールドという魔法使いの坊やがいる。こいつにだけは決して手を出すな」

「お葱？」

「食べ物のお葱ではありません。ネギ・スプリングフィールドという人物の名前です。十歳で麻帆良学園女子中等部2年A組の担任教師を勤めています」

「そーなのかー」

そういつてなぜか落胆するルーミア。まさか貴様、本当に葱だと思っただのか？というかこいつまさか葱を生で喰う気だったのか？考えてもラチが明かない。0・5秒で切り捨てる。

「奴は私が相手をする。手伝わせはするが貴様自身の意思で手を加えるな。特にこいつは決して食べてはならない。これだけは絶対に遵守しろ」

「はい」

「……貴様、本当にわかっけていて返事しているんだらうな？」

「主^{マスター}の命令以外では食べない、明かさない、ネギに手を出さない食べない……でしょ？」

もぐもぐとケーキを食べながら平然と答えるルーミア。

……本当に話を聞いて理解していたのだな。正直意外でしかなかった。

茶々丸なんか感心しましたとばかりに目を見開いて拍手を送っているぞ……。

「それでよい。今後は私の命に従い行動しろ。迂闊な真似は許さんからな。他にも話はあるのだが、明日にでも話してやろう」

「そーなのかー」

間抜けなのは痛い、聞き分けが良いことと素直な性格なのが幸いだっとな。

……ん？ケーキ？さっき食べ終わってなかったか？

……ってルーミア……貴様……まさか……っ！

「きききき、貴様っ！その苺のケーキ2個目ではないか！？」

「もぐもぐ」

「紅茶のおかわりはいかがですか？」

「いただきます」

「茶々丸！何を暢気に紅茶を振舞っている！？というかルーミアい

つの中にケーキを!？」

「……?いえ、紅茶が空になっていたの……」

「もぐもぐ」

「こらーっ!私に黙って2個も喰うんじゃない!お一人様お一つの
絶品ケーキだぞ!?2個目は私が食べたのにーっ!」

「わっはー、怒った怒ったー!」

「さて貴様ーっ!くびり殺してやるーっ!」

「マスター、落ち着いてください。次に新発売のケーキが
あります。マスターを優先的にしますの……」

「そういう問題ではないわ!ええい巻いてやる、巻いてやるからな
!」

「ああ、マスターいけません、そんなに巻かれては……」

「あははははは!」

「……これから先やってけるんだろうか、このバカと一緒に……」。

「……ケーキ……ぐすん。」

完

第4話「ルーミア、エヴァンジェリンの仲間(?)になる」(後書き)

2011年8月19日：修正ミスがあったので再度修正。

第5話「ルーミア、エヴァンジェリンと対決する」

エヴァンジェリン視点

私が吸血鬼でこいつが闇の妖怪だからか、真夜中だということのに眠気はまったくくない。お互いに夜の方が活動しやすいということなのだろう。都合が良かった。

「マスター主、マスター主。どこへ行くのー？」

「いいからついてこい」

ケーキ騒動の後、私はルーミアと茶々丸を連れて地下へ向かった。理由は言わずもがな、私の『別荘』でルーミアの力を試そうと思った。

理由は言わずもがな、私の『別荘』でルーミアの力を試そうと思ったからだ。

ルーミアの力はあの爺とタカミチにも見せたが、あんな部屋を暗くするだけの能力など一部分に過ぎない。いわば氷山の一角だ。

部屋がめちやくちやになると本人が言っていた以上、どうしてもこの目で確かめたくなくなってくる。

強さ自体は期待していないが、どのような魔法を使うのか楽しみだ。できればその魔法を応用するか利用するなどして研究し、新しい魔法を生み出したいところだ。

地下に入る入り口に立ち、茶々丸の持つ灯りを頼りに地下へと歩むと、そこには沢山の人形が並べられている。

皆、私が直々に作り上げた人形達だ。……そうだ。ついでに『奴』を拾っておくか。

「えーっと……確か奴は……」

私は移動階段を使い、小さい人形が置かれた棚を上から探す。

この辺りの棚に『奴』を置いたと思っていたが……？

茶々丸、さっさとライトを照らしてくれ。暗くて見えん。

……いないのか。恐らくは『例の物』を探しているんだろうが……。

マスターマスター
「主、主」

「どうしたルーミ」

振り向いた瞬間、斜め下からの光に照らされたチャチャゼロの顔が目の前にあった。

「どわあああっ!?!」

いくら見知った顔といえどもこれはビビるわ!手すりから手が滑ったとは言え、階段から落ちずに済んだだけでも幸いだった……っ!

「この人形しゃべったよー」

「ルーミアさん、この方は私の姉さんです。手荒に扱わないでくださいね」

「ケケケ、久シブリダナゴ主人。妹ヨ」

私が探していた『奴』……チャチャゼロと呼ばれる人形を揺らしな

がら私に見せつけるルーミアと、そんなチャチャゼロを怖い角度で照らしている茶々丸。……貴様ら、確信犯じゃないだろうな？

「テイウカ、身内ガ一人増エテルジャンネカ。ナンダコノアホ娘？」

「ルーミアだよー」

「ルーミアアツテノカ。ゴ主人モ変ワツタ客人ヲ連レテ来タナ」

ケタケタ笑うチャチャゼロに対し、ルーミアはのんびりと笑っている。…アホなのは否定しないのか。

まあいい。チャチャゼロが見つかったとなれば、あと探す物は…。

「マスター、報告が遅れましたが、向こうで『別荘』を発見いたしました」

「よし」

やはり茶々丸が発見していたか。私は一言だけ返事をしてから移動階段を降り、茶々丸の後に続く。

「別荘？何それ？食べ物？」

「マア見テロ。テイウカ何デモカンデモ食イ物ニ繋ゲルンジャンネエヨ」

よく言ったチャチャゼロ。

ルーミアが質問するが、代わりにルーミアの頭に乗っかっているチャチャゼロが答える。

何せしばらく使ってなかったからな……埃まみれになってなければ

いいのだが……。

「……ところで思ったのだが、よくチャチャゼロ相手に平然としてたな」

さすがのルーミアもビックリするかと思ったんだが……喋る人形だぞ？

しかも、もう仲良くなっているし……。

「喋る人形、知っているもん」

……おいおい……。

「オ？ゴ主人ト同ジ人形使いガ居ヤガルノカ？」
ドールマスター

「人形を使う魔法使いもいるし、毒で動いて喋る毒人形もいるよ」

……人形使いはまあ納得できるとして……毒で動く人形って何者なんだ……？

くとある森の館にて

「くっ」

「おいおい、どうしたんだぜアリス？……よくみりゃ顔色悪いじゃないか」

「風邪かしら……？上海人形の作りすぎであまり寝てなかったし……」

「さっさと寝て治した方がタダで得だぜ」

「今回はかりは魔理沙の言つとおりね……寝よ」

くとある花畑にて

「へっくしゅんっ！」

「あら、メディスンがクシャミなんて珍しいわね」

「失礼なこと言わないでよ、幽香。けど……これが寒気って奴なのかしら？」

「人形が寒気なんてするの？」

「知らない」

「わー、綺麗だなー」

私たちの前にあるのは、うっすらと光るフラスコの形状をしたガラスのボトル。

ボトルの中にある光景に興味が沸いたのか、ルーミアの顔がボトルに近寄る。

ボトルよりも中に入っている建物のようなミニチュアが気になるよ
うで、これでもかと顔を近づけ、らんらんと光る瞳でじっと見てい
る。

「コレガゴ主人ノ言ツテタ『別荘』ダゼ」

チャチャゼロの言葉を疑問に思ってるらしく、ボトルを凝視し、チ
ヤチャゼロを見つめてまたボトルを凝視するのを繰り返すルーミア。
まあそれが当然の反応だろうが、これから解ることだ。
どんな顔を見せるのか楽しみだ。

「わあー！すごい！」

広大な景色を前にルーミアは大喜びだ。子供だな……。

E V A N G E L I N E ' S R E S O R T

それがあのボトルの名称で、正確には魔法道具マジックアイテムの一種「魔法球」だ。
近づいた者の中に入っているミニチュアの世界に転移させる、とい
う物。

ミニチュアといっても、中に入れば本当の世界との違いが全く無い。
さらにここでの一日は外では1時間しか経過しないという便利な品
物だ。当然、貴重かつ高級品だ。

ここなら私も魔法が使える上に被害がでないので、思う存分ルーミ
アを苛め……もとい試してやるとしよう。

「さてルーミア、ここで貴様の実力を……ん？」

振り向いてみたが、いつの間にかルーミアの姿が無い。辺りを見渡すがどこにもいない。
ルーミアの実力を測りたいんだが……肝心のルーミアはどこいったんだ？

「マスター、上をご覧ください」

なんだ茶々丸、指を上になんか向けてて。私はそれに従うかのよう
に首を真上へと向ける。

「わっはー」

……ルーミアが空を飛んでいる。

さながらピーターパンのように両手を広げ、泳ぐようにすいすいと……魔法使いには確かに飛んで移動する者もいるが、ここまで流動的に飛べるとはな。

「……ルーミア、貴様……飛べたのか？」

私の問いかけに飛び回っていたルーミアがこちらへ滑るように向か
つて来て、私の真上で逆立ちしながら顔を向けてくる。

……なんか奇妙な気分だ。私とルーミアがお互いに見上げていると
いう光景は。

「ルーミア飛べるよー？」

「なぜそれを言わない」

「言っただけだよ？」

「なぜ人前で飛ばうとは思わなかった」

「飛ぶ気が無かったもん」

.....

.....言ってることに間違いは無いのだが.....なんか釈然としな.....
いや待てよ.....。

「.....よし、ルーミア。今から鬼ごっこをしよう。茶々丸、鬼はお前だ。茶々丸が追いかけるから、ルーミアは捕まらないよう逃げろ」

「え？ほんと？わーい」

私の提案にルーミアは嬉しそうに頷き、私が指を鳴らして音を立てるのを合図に、高速で空を飛び始めた。

そんなルーミアを見送った後、茶々丸に視線を向け、小声で囁いた。

「茶々丸。あいつの能力を試す。まずは全力で捕獲にかかれ」

「イエス、マスター」

そういうと茶々丸は両足と背中ブースターを点火、ジェット機並みの飛行速度で飛び始めた。

遠くの空を見上げてみれば、既にルーミアと茶々丸の空中鬼ごっこが始まっていた。

スピードでは茶々丸が上回っており、直進コースなら難なく後ろを取れる距離にまで縮めることができる。

だがルーミアは飛行というより浮遊に近く、ジェット推進によって

飛行している茶々丸を撒けるだけの機動力を備えている。すいすいと踊るようにして空を飛ぶ様はまるでイルカだ。だがあの茶々丸を撒くとは中々の回避能力だな。

では……私も参加するのでしょうか。

茶々丸視点

目標、尚も補足中。しかし捕まえられません。私のセンサー画面内……つまり視界の中では、ルーミアさんがあちこちを飛び回って攪乱しています。推進力では勝っているのですが、掴もうとした途端にすりと逃げていく。素晴らしい飛行技術です。

「あはははははははー！」

……楽しそうですね、ルーミアさん。

私はマスターの命令で捕らえるよう言われているのですが、捕まえられる側のルーミアさんは遊びだと思っただけから逃げています。

わかってはいるのですが、なんだか不思議です。

捕まえなければならぬのに捕まらなくて、それでも……私もルーミアさんも、焦燥感や危機感はありません。

私は機械ですから焦りが無いのは当たり前なのですが……やはり不思議です。

いかに効率よく捕らえるかということより、いかにルーミアさんに追い抜くかという思考ばかりが浮かびます。

「おーにさんこーちら、てーのなるほーへー」

こちらへくるりと振り返ると、やはり楽しそうな顔を浮かべながら、両手を叩いて挑発しています。ですが悪意はまったく感じられません。むしろ構って欲しいという意思が伝わります。

楽しい、ですね。

「フハハハハハハ！」

後方よりマスターの笑い声が聞こえてきます。

リーダーに反応も出ており、急速でこちらに接近していきます。後ろを振り向いて見ると……やはりマスターの姿が見えました。

「よしルーミア！ここからは私も参戦するぞ！いつとくが私は容赦しないからな！」

「わーい 逃げる逃げるー！」

……ノリノリですねマスター、ルーミアさん。

ここからは2対1となり、必然的に私とマスターで挟み撃ちを仕掛けるべく飛行します。

「リック・ラクラ・ラックライラック！」

マスターの詠唱が始まりました。

マスターの詠唱中は私がルーミアさんを追いかけますが、ルーミアさんはマスターが何かをやらかすと考えたのか、自然と距離を取ります。

しかし私が回り込むことでルーミアさんは回避に専念しようと空を

舞います。

ですがこれで、マスターの正面に向き合う形となりました。

『魔法の射手！氷の17矢！』

マスターから放たれる氷の魔法の射手がルーミアさんに迫ります。

ほぼ真正面からの攻撃を目の前に、ルーミアさんはどう行動するのでしょうか。

「うわっ」と！

驚くことに、ルーミアさんはスレスレながらも全ての魔法の射手を避けていきます。

ほぼ全弾が体を掠めているようですが、それでもあのスピードで避けられるとは。お見事です。

マスターも少なからず驚いているようで、その間にルーミアさんが横を通って逃げていきます。

「ちょこまかと逃げることだけは立派だな！リク・ラクラ・ラックライラック！闇の精霊29柱！！」

すかさずマスターは反転、次の詠唱に移ります。

私はマスターの補助に回ろうと、距離を取ろうとするルーミアさんを追いかけて、弧を描くようにして飛び回ります。

「よーし！ルーミアも負けないぞー！」

意気揚々とルーミアさんは叫びます。……負けない、というところなさるのでしょうか？

……？ルーミアさんの手に持たれているのは……カード、ですか？

『魔法の射手！連弾闇の29矢！！』

私とルーミアさんがマスターの射程内に入ると同時に、魔法を放ちます。

「暗符『デイマーケイション』！」

ルーミアさんがそう宣言された　次の瞬間。

大量の黒い球体のような魔力が弧を描くようにして、マスター目掛けて飛んでいきます。

数が多すぎます！危険ですマスター！

エヴァンジェリン視点

なんだ、これは？

私に向けて放たれた、黒い球体のようなもの。それが連弾となってこちらに迫ってくる。

ほぼ詠唱無しでこれだけの闇の魔法を放つだど！？ありえん！

……いや、落ち着け。冷静に対処しなくては。

そう言い聞かせて『デイマーケイション』なる攻撃魔法を回避しようとする。

総数で言えば私の『闇の29矢』を超える勢い。一発あたりの威力は……ふむ、私の一発と相殺できるほどか。

そして冷静になった今になって思うが……なんだこの避けやすさはまるで壁を描くように密集した黒い球体と、広範囲に広がる小さな弾幕に圧倒されていたが、必ず逃げ込む隙がある。

落ち着いて対処すれば必ずと言っていいほど回避できる。

「今度はこっちから行くよーっ！」

今度は様々な色合いを見せる魔法弾を、やはり無詠唱で広範囲に放つていく。

やはり凄まじい数だが、むしろ一発一発が先ほどの黒い球体よりも小さい。

しかも一発ごとの間隔が広いおかげで避けやすい。

「リク・ラクラ・ラックライラック！魔法の射手・氷の17矢！」

試しに私は『魔法の射手』を放ったが……なんとルーミアの弾幕を次々に貫通していった。威力がかなり弱いことが解る。

だが無詠唱でこれだけの数……文字通り『弾幕』を張れるのは凄まじい。

ほぼ無詠唱でこれだけの威力と圧倒的な数を持ち、しかし殺傷性は微々たるもので、しかも必ず逃げ道がある。

これが幻想郷で言う『スペルカードルール』、通称『弾幕ごっこ』。非殺傷を謳う弾幕対決。

「マスター」

なんだ茶々丸、いいとこなんだ。さっさとルーミアを追いつめ……。

「マスターの『魔法の射手』が数発ほどルーミアさんに命中。気絶しました」

「ほえ……」

……いつのまにか、ボロボロになってるルーミアを抱きかかえた茶々丸が目の前にいた。

……攻撃力はまあまあ認めるとしても、こいつ打たれ弱いなー……。目え回してるし……。

「ルーミアさん、大丈夫ですか？」

「平気ー。楽しかったよー」

地面に降りてしばらく休もうと歩き出す中、ボロボロだった癖にいまや擦り傷だけのルーミアを心配する茶々丸。

……こいつを心配するだけ無駄だと思うぞ茶々丸。

「さて……さきほどのが貴様の言う『弹幕ごっこ』というやつか？」

「うん。強さだけじゃなくて、美しさを競う遊びなの」

なるほど……確かに美しさはあったが、実戦では美しさを競うなんて無駄の極みだ。

だがこんな阿呆でもあれだけの攻撃魔法が使える、しかも疲れがまったく見えないとなれば改良の余地はある。

練習や技量次第では威力を強化させた隙の無い弹幕が撃たれるだろう。

さらにこいつは私の得意な属性である『闇』の使い手だ。教えには事欠かせない。

……おお、意外と私の下僕としては及第点か？バカだ阿呆だと思っ
てはいたが、これなら大丈夫そうか？

「よしルーミア！まずは貴様の魔力容量を見極める！ありったけの弾幕を撃ってもらおうからな！」

「はい！」

「なお、貴様は今後（私の趣味で）ゴスロリ服を着て修行してもらう！」

「おー！」

おお、結構ノリノリだなルーミア！

フハハハハ！悪の魔法使いエヴァンジェリンの下僕、暗黒のルーミアの完成はそう遠くはなさそうだ！

黒のゴスロリ服を身にまといて闇を操る、人を喰う無邪気なる悪魔！……おお、想像してみると強そうだ！バカだけどな！
ノってきたー！

「フハハハハハ！」

「あははははは！」

「ああ、マスターとルーミアさんがあんなに楽しそうに……」

「妹ヨ、アレハ楽シンデイルンジャネエ。イワユル『ノリ』ッテ奴
ダ」

外野が煩いが気にしないで置こう。

完

第6話「エヴァンジェリン、ルーミアを紹介する・前編」(前書き)

思ったよりも長くなってしまったので、前編と後編に分けました。

2011/9/5：誤字修正

ご指摘ありがとうございました。

第6話「エヴァンジェリン、ルーミアを紹介する・前編」

エヴァンジェリン視点

グー……ギョルルルル……。

「お腹空いたー……」

「今、食っている最中だろ!？」

「マスター、食べカスが飛び散ってしまいます……」

細かい事は言うな茶々丸!

朝っぱらからシユールな光景だな……。

トーストを食っているはずなのに腹を鳴らしてしょんぼりする小娘とか……。

昨夜の『別荘』による修行のこともあってか、腹の虫が偉くデカい音を立てるし……。

やはり人間を食さないと満たされないと証拠なのだろう。
放置すれば本気で人喰いをしかねんな……なんとかせんと……。

「マスター、本日の予定はいかがしますか？」

空いたカップに湯気が昇る紅茶を注ぎながら、茶々丸が尋ねて来る。

そうだな……。

「……ふむ、今日はルーミアに魔法の関係者を教えるついでに、知り合いに封印の解明に協力してもらおう」

本当はリボンの封印の究明をしようと思ったのだが……それより先に片付けることがある。

一つは先ほども考えていたこいつの人喰い。

このままだと常に腹の虫を鳴らす迷惑娘になってしまう。

……表向きとはいえ従姉妹に阿呆な真似させるものか。

それにしょっちゅう腹の虫を鳴らしては気が散るし、なによりうるさい。

加えて言えば、これは昨夜に私が考え付いた『仮説』が証明されるかを確認する為でもある。

もう一つは……私のクラスメートにも関係者がいる。

その内1人は、絶対にルーミアを誤解すると考えられる。

桜咲刹那……あいつは木乃香のこととなると周りが見えんからな

……。

「かんけーしゃ？」

「本来は一般人に魔法の存在を知らされないよう、魔法に関わるものを除き、魔法を秘密裏に管理しています。ルーミアさんにも魔法の秘匿を守る義務があります」

「そーなのかー」

暢気な間抜け面をしているルーミアと、そんなルーミアに説明する茶々丸を見て思う。

……このバカを放っておいたままだと絶対に刹那に斬られる。

うん。絶対に早とちりで斬り殺される。

「……加えて貴様の存在を知らせておこうと思ってな。……もっと

も、こそこそとした監視者付きで……だがな」

「？」

私はちらりと視線だけで窓の光景を見る。ルーミアは訳もわからず首を傾げているがな。

……あそこに居るのはあの堅物ガンドルフィーニか。まず考えられる人喰い反対派候補だな。

すぐに隠れたってバレバレなんだから無駄なんだがな。……ま、見るといいさ。

このルーミアがいかは無害で阿呆でバカで能天気なのかを（笑）

「だが問題は無かるう。今日は休みだし、ついでに見回りでもするさ。……『別荘』で修行してからな」

「えー……」

ふふん、よほど昨夜の修行が効いたのだな。ルーミアが頂垂れているぞ。

しかしやる気はあるらしく、さっさと朝食を片付けようと食べるスピードを上げてきた。

腹の虫は相変わらず鳴っているが。

「ルーミアさん、ファイトです」

余計な応援をするな茶々丸。

……お、さらにやる気が出てきたのか、ルーミアの食べる速度があがった。

……なんか腹立たしい……決して嫉妬などではないからな……一応……。
……おいっ、さり気に私の朝食まで食おうとするな！
茶々丸も応援してないで、私の朝食を守れ！

ガンドルフイーニ視点

エヴァンジェリンめ……既にこちらの存在に気づいていたか。
学園長も無茶を言う。幼いとはいえ人喰い妖怪を学園に放つなんて
学園長は封印されている上に無害で大人しい子だと言っていたが、
この目で実際に確かめない限り信用することはできない。
なにせ人を喰らう妖怪なのだから、必然的に人を喰らうはずだ。危
険に違いない。
そんな奴を信用できるものか。
そんな真似をしてみる。正義の為に、貴様を成敗してやる。
……む？三人ともどこへ行く気だ？追いかければ。

エヴァンジェリン視点

まずは桜咲刹那と龍宮真名の元に行く。
意外だったのが、初対面だというのに刹那と真名がルーミアをまっ
たく警戒しなかった事だ。
かたや神鳴流剣士、かたやプロの傭兵が妖怪を前にしても、だ。

「宵闇の妖怪……ですか。確かに妖気を感じますが……」

「なんだ、とうとう生粋の妖怪を雇ってしまう程に学園の労働基準法が歪んでしまったのか？」

「……歪んでいるのは爺の頭だ。見た目的にも中身的にもな」

あいつの異様に伸びている後頭部をエイリアンと例えて想像しつつ相槌を打つものの……。

ぷにぷにとルーミアの頬を突く刹那と、くしゃくしゃと頭を撫でる真名。

……あのお堅い刹那とクールな真名が、こつても可愛いものを愛でる女子高生らしい一面を見せるとは……。

ルーミア……恐ろしい子だ……。

おい茶々丸、貴様も混じって頭を撫でるな。ルーミアも頬を緩ませるな。

「こんにちはわー」

「こ、こんにちは」

「ほお、素直な子だな」

暢気な笑みを浮かべて挨拶を交わすと、刹那はぎこちなく挨拶に応じ、真名は小さく笑う。

だがしかし。

「……で、あなた達は食べてもいい人間？」

この直後、周囲は沈黙という名の静寂に見舞われた。

やはりこの食いしん坊は空気や場を全然読まずに堂々と言うんだな……。
見る、神鳴剣士と狙撃手が予想外だと言わんばかりに固まっているではないか。

私はこの凍りついた空間を元に戻すべく、ルーミアの頭に拳骨を落とす。

「痛っ」

おお、いい音と声がするな。

音と声と同時に意識を取り戻した刹那と真名。

警戒は見せていないものの、刹那は何があったのかとばかりに戸惑っている。

真名は見た目は無表情になっているものの、一筋の汗が浮かんでる辺り、戸惑ってるんだろう。

うん。これは仕方ない。誰だって反応に困るだろう。

「勝手に喰ってはいかんと言っただろうが。少し黙れ」

「はい……」

はい、ではないわこのバカ！

見る、このやりとりを見て二人が固まってしまったではないか。……しかしよく考えると、一般常識レベルで考えるとこの会話だけでも普通にとんでもないな。他人が聞けば固まるのも無理ない。

「そ、それでエヴァンジェリンさん、私に聞きたいこととはなんでしょう？」

刹那が話題を変えるべく踏み込んだ。それでいい。この話は避けて

正解だ……このバカには気づくわけがないがな。

「貴様に少し聞きたくてな。こいつは見てのとおり……いや見てもわからんか。人喰い妖怪らしいのだが……私は妖怪に詳しくないのだな。妖怪の食性を知らんのだ。昨夜は普通に食事をしていたが、それでも満たされないそうだ」

私の説明を聞くと、刹那はルーミアを見て唸りだした。

そもそもこのバカを本質的に妖怪だと理解できても、見た目が受け入れられないのだろう。

……こら茶々丸、ルーミアに自分の指を齧らせさせるな。げっ歯類か。みつともないぞ。

「確かに人を喰らう妖怪は多数いる反面、人間の食物を摂取する妖怪はあまり聞きません……。私が知っているのはこの程度です」

ま、普通はそうだろうな。

妖怪の食事風景に詳しい神鳴流とか居るわけないだろうし、そもそも人間を食すところを見るような酔狂な奴がいる方がおかしいか。

「そうか。では……貴様はこいつのリボンを見てどう思う？」

私は話題を変えるべく、真名と睨み合っているルーミアの頭を指差す。

刹那はちらりとルーミアの頭 正しくはリボンをじっと見つめる。

「……少なくとも私ごときでは解けません。もしかすると、長にも難しいかと……」

「詠春か……確かに奴でも無理だろうな」

見ただけで封印のレベルを知ることが出来るだけでもこいつの腕の
高さが見受けられる。

しかし見極めることができるイコール解けるといっわけではない。
まあ、刹那ごときが解けたら苦勞はせんか。

それこそ、関西魔術協会の長である木乃衛詠春ですら無理だと言
切れるほどの、強固な封印なのだから。

「すみません、あまりお役に立てず……」

「最初からさほど期待していなかった。むしろマシな方だな」

「それよりもエヴァ、君んとこの子が私の手から口を離さなくて困
ってるんだが」

……真名……貴様はクールで知的な奴だと思っていたのだがな……。
刹那とのやり取りの間に、なぜ真名の右手がルーミアにぱっくりと
噛まれている状態に陥ったのだ？

冷静な真名の表情と、顎の動きと噛み砕いていないところからして
甘噛みなのだろう。

確かに喰ってはいかんとは言った。だからといって噛むか普通？

……そして茶々丸。貴様なら即座に対処してくれると信じていたの
だがな。

「駄目ですよルーミアさん、真名さんが困っています」

何を戸惑ってるんだ貴様は。

無理に引き剥がそうとして真名の手が千切れるとでも思……えるの
だろうな。

このバカの食い意地から考えて。

「ええいやめんかみつともない！」

「えっつ」

頭を叩いた拍子に真名の手を噛み千切りそうなので、拳骨はやめて頬をビンタする。

柔らかい頬のおかげか痛みは軽減したらしいものの、大人しく真名の手から離れる。

全く、手間をかけさせるなバカ。

しかし中々いい音がしたな。おまけに柔らかい。

「……そうだ刹那。ルーミアが言うにはこのリボンが博霊という者がつけたらしい。何か心当たりはあるか？」

不意に思いついたことを、ぽかんと口を開けている刹那に問いかけを試みる。

「博霊？……いえ、ありませんね」

はっと我に返り考えるものの、やはり聞いたことがないという。

長きに時を渡る神鳴流なら少しは知ってるかと思っただが……やはり駄目か。

これ以上の詮索は無駄のようだ。ルーミアを紹介できたわけだし、よしとするか。

「そうか。邪魔したな。行くぞ茶々丸、ルーミア」

「失礼いたしました」

「バイバーイ」

礼儀正しく一礼する茶々丸と、暢気に手を振って別れを告げるルーミア。

さて……次はあいつらだな。

刹那視点

「……珍しく邪険しなかったな刹那」

呆然とエヴァンジェリンさんと茶々丸さん、そしてルーミアと呼ばれていた子の背中を見送っていた中、真名の声を聞いて我に返った。

「そういう真名こそ……普段のお前なら、あのような子に噛まれるはずないだろう？」

「あはは……甘噛みとはいえ、まさか本当に噛まれるとは思わなかったんだ。……それにしても不思議な子だったな」

「ああ……なんというか……あのルーミアという子は恐ろしいほどに……」

「邪念がない……か？」

「そう、それだ。あれが本当に人を喰らう妖怪なんだろうか……」

「私にもわかに信じられないよ。隙だらけだったしな」

……その隙だらけの妖怪に噛まれた真名って一体……。

常闇の妖怪ルーミア。彼女は何者なんだろうか……？

少なくともわかったといえば　お嬢様が喜んで可愛がりそうな子
だなあ……。

もしお嬢様とルーミアが接触したら、噛まれないように注意してお
かなければ。

ガンドルフィー二視点

あの刹那君と真名君が気を許しただと……？

妖怪を相手にする神鳴流剣士と一流のスナイパーが、人喰い妖怪を
相手に全く警戒せず接するとは……。

いや、人を欺くのが得意な妖怪なんだろう。現に真名君は甘噛みと
はいえ噛まれたんだ。

……にしてもなんで甘噛みなんだろうか……あのまま喰らえばよか
ったものを……。

いや、だから食べられたら駄目なんだが。

さて、次はどこへ行くつもりなんだ？

完

第6話「エヴァンジェリン、ルーミアを紹介する・前編」(後書き)

後編へ続きます。

第7話「エヴァンジェリン、ルーミアを紹介する・後編」

エヴァンジェリン視点

やはりというか、この二人……超と葉加瀬ですら、ルーミアが妖怪だと知っても警戒ですらしなかった。こいつらはある程度予想はついていたとはいえ、ここまで興味津々になるとは……。

「ふむふむ、これが妖怪と呼ばれる生物なんですネ……」

「葉加瀬、なんでも真に受けるものじゃないヨ？どうみてもただの子供ネ」

本来は機械学が専門だが、研究心と探究心が擽られてるのか、珍獣を見るかのようにルーミアを観測する葉加瀬。

一方の超はといえば、逆に妖怪だと信じてはいないようで、胡散臭いとばかりにルーミアを見ていた。

まあ、無理もないか。

ちなみにここは完全な防音対策が施されているので、窓の外から見ているガンドルフィーニには私達の声は聞こえないらしい。

「ほお、貴様も見た目で判断するのだな」

「私は自分で見たものしか信じない性ヨ。……ん？」

途端にルーミアは超の服の裾を引っ張り、注意をこちらに向けようとする。

超が振り返った途端、予想していたあの一言が炸裂する。

「主^{マスター}、この人達は食べていい人間？」

「……………」

二人とも沈黙……………いや絶句した。

まあ、普通はそういう反応を示すだろうな。

「できれば遠慮してください。この方達は私にとって生みの親ですので……………」

……………いや、そういう問題か茶々丸？

「そっかー。それじゃ駄目だねー」

そしてルーミア、茶々丸の言葉に納得して残念がるんじゃない。
食べてはいかんと言っとるのにこの阿呆は……………。

「……………これでもか？」

「アイヤ、事実であるかはさておき、信じることにする」

「私も食べられるのは嫌ですので……………」

私の問いかけに二人は即答した。

このルーミアが妖怪であるかないかは関係ない。

少なくともこいつは、言葉一つで、本気で喰おうとしている意思が伝わるのだから性質が悪いのだ。

その上、まったくの悪意がないのもな。

「……フム、このリボンを取ればいいのだナ？」

超がルーミアのリボンを軽く引つ張りながら、私に問いかける。

「ああ。まずは引つpegがそうとしたんだが、茶々丸ですら叶わなかった」

「えっ？茶々丸ですら？」

私の言葉に葉加瀬が信じられないとばかりに身を乗り出してきた。まあ無理もないか。茶々丸は機械だから器用さは人間の手ですら凌駕している。

仮に人間の力で千切れなかったとしても、機械ならありえる話だ。それができなかつたと聞けば、機械技術の高さ以前にリボンの結び目の固さが物語るといふもの。

「はい、破る覚悟で様々な方法を試しましたが、解くどころか傷一つ付けられませんでした」

「痛かったのかー」

「すみませんルーミアさん」

……今思い返してみれば、煙を噴出してですらリボンを引きちぎろうとしてた茶々丸には、一種の恐怖を覚えたな……。

ルーミア、お前よくあの状況に耐えられたな……。

「となると……茶々丸以上に精密な作業ができる機械はありませんので……」

一瞬、葉加瀬の眼鏡がきらりと光ったのは決して私の幻覚ではないと確信できる。

間違いなくあれはマッドサイエンティスト時の葉加瀬の目つきだ。

「茶々丸以上のパワーでリボンを解くか切断するしかありませんね」

まあそういうことになるか。

ここから先を予想できた我々の対処は驚く程に早くなる。

「え……?」

「それじゃ、有限実行ということなさっそく準備するネ」

超が白衣を羽織る。

「えー……?」

「観念しろルーミア。全ては私の為だ」

私がルーミアに諦めの言葉を投げかける。

「すみませんルーミアさん、嫌だと察することはできますが、マスターの為に我慢してください」

そして締めは茶々丸。効果はテキメンだった。

「うー……………」

渋るものの、観念したのかがつくりと肩を落として覚悟を決めたルーミア。

さてと、どんな実験 という名のショーが始まるのか楽しみだな。

まさかレーザーでリボンを切ろうなんて案を、葉加瀬が提案し実行するとは思わなかった……。

「あわわわわ！な、なんか怖い！怖いのかー！」

真っ赤な光線が台の上で拘束されたルーミアの頭スレスレ 正しくはリボン をゆっくりと過ぎ去っていく。

というか、レーザーですら耐えるとか、何で出来ているんだあのリボンは……。

「葉加瀬！ルーミアさんが危険な状態です！」

「出力120%突破したヨ！やりすぎじゃないか葉加瀬！？」

実験台より若干離れた場所でモニターの数値やルーミアの様子を観察していた二人が、叫ぶように言う。

機械には詳しくない私ですら解る。煙とか火花とか噴出している時点でかなり危険だろ。

「たかが布切れに…………たかが布切れ程度に私の発明が負けてたまる

かああああ！」

そんな危険な状況に気づかず、血眼で機器を操作する葉加瀬。科学者としてのプライドが彼女を盲目にさせている……。

「駄目だこのマッドサイエンティスト、なんとかせんと……」

葉加瀬、貴様はもっと賢く聡明な奴だと……割と信じていなかった。

……ん？なんだ茶々丸、超。

葉加瀬がぐぐーっとダイヤルみたいなものを回しただけなのに、なんでそんな驚愕した顔浮かべるんだ？

バチバチバチっ！

……ああ、わかった。電撃が機器から出た時点で気づくには遅すぎたみたいだが。

バリバリバリッ！

「あばばばばばばっ！？」

おおー、よく光るな！。

レーザーを射光していた機械から物凄い電撃があふれ出て、ルーミアと葉加瀬がそれをモロに浴びた。

あれは『雷の戦斧』に匹敵する威力だな。

超と茶々丸は危険を察知して物陰に隠れ、私は障壁を張ったので、難を逃れられたがな。

程なくして電撃は止み、ブスブスと焦げ臭い煙が実験室に充満する。

「大丈夫ですかルーミアさん？」

「痺れビレ……」

「ふむ、ルーミアがあんな目にあってもリボンの封印は解けないのか」

「アイヤ、しかしあれほどやったにも関わらず僅かな傷ですらないとは凄いリボンネ」

「私の心配はしてくれないんですか……？」

茶々丸が感電し黒焦げになりつつも生きているルーミアの救護を。

私と超はリボンの強固さを改めて思い知り感想を述べる。

そしてこの爆発の原因たる葉加瀬は焦げ臭い匂いを放ちつつ割とピンピンしてた。

意外と頑丈なんだな。

「えー……さきほどの電撃が発生した時の出力を力学的に数値化した結果、この封印及びリボンを科学的に解除することは……」

葉加瀬が分厚い書類を引っさげ、なにやら歯切りが悪そうな顔をしている。

まあ言いづらいたらうな。科学が非科学的な物に傷一つ付けられなかったことが。

しかし無慈悲にもその答えはあっさりと出ることになる。

「理論上、無理ネ」

超の結論に葉加瀬がショックを受けたようだ。まあ、どうでもいいが。

「ま、そんなことだろうと思っていたさ」

「その割にはワクワクしてたナ、エヴァンジェリン」

そんなことないぞ超。

決してルーミアと葉加瀬が痛い目に見て、ざまあみろ、なんて考えていないぞ。

「うぐぐ……ただのリボンでないかわかっていたとはいえ、科学的に負けるとは思いませんでしたよ……」

「そーなのかー……」

「ルーミアさん、葉加瀬に悪気は無いんです。だから怯えないでください」

すっかり葉加瀬に苦手意識を覚えてしまったようだな。

表情はなんでもなさそうだが、茶々丸の後ろに隠れてる辺り、ルーミアが葉加瀬を恐れていることは必然的に理解できる。

……真祖の吸血鬼がマッドサイエンティストに劣るとは、なんだか情けない気もするが……。

さて……もうここに用は無いな。

超視点

いやあ、まさかレーザー照射装置が壊れるとは思わなかつたヨ。部員達になんて言えばいいだろうネ……。

「超、ルーミアちゃんに例の件について話さなくてよかつたんですか？」

エヴァンジェリン一行を見送つた後、葉加瀬が私に声をかける。

『例の件』についての不安定要素が増えたことで対処を考えているのだろうか……考えすぎヨ、葉加瀬。

「あんな子一人増えたぐらいでは無問題ネ。エヴァンジェリンが関わらなければ自然とあの子も関わらないだろうヨ」

封印していた以上は強大な力を持っているそうだが、あの封印の強固さからして外れる可能性はかなり低い。

今すぐに強大な敵になりえることは無いだろうヨ。あつたとしても、エヴァンジェリンが止めるだろうし。

「そう……誰であろうと止めさせはしないよ」

例え……その相手が幻想だったとしても……ネ。

ガンドルフィーニ視点

……最近の生徒は過激だなあ……。実験の手伝いみたいだったが……。
……じゃなくて。

あんな危険な目にあつたというのに、何故あの子は抵抗ですらしなかつた？

それにあんな事をしてまで解けない封印だったとは……。あれほどなら万が一、生徒が手を加えようとしても被害はでないだろう。

……って何を安心してるんだ私はっ！？

本当にあの子は危険が無いのだというのか……？

……そろそろ暗くなるな。

エヴァンジェリン達は……。帰路に着くようだ。

エヴァンジェリン視点

すっかり薄暗くなってきたな。人の姿もほとんど見えない。

……というのも、私達が歩いている道は、この時間帯だと人がほとんど通らないような道なのだがな。

念のために周囲を見渡す。……うむ、あの堅物以外は誰もいないな。私は軽く咳払いをし、ルーミアと茶々丸の視線をこちらに向ける。

……おいこら、いつまでもルーミアを宥めてるんじゃない茶々丸。甘やかし過ぎじゃないか？

「さて……。ルーミア、ここからは大事な話だ。貴様の『食』に関することなのだからな」

地平線の彼方へと太陽が沈んでいく。

私も、茶々丸も、そしてルーミアも、徐々に暗闇の中へと沈んでい

く。

我らの夜が……闇が来る。

完

第7話「エヴァンジェリン、ルーミアを紹介する・後編」（後書き）

オマケ

葉加瀬と超と別れた直後

「……」

「……」
「どこかなされましたかルーミアさん？ずっと研究室をみってますが……」

「外の世界にもいるんだねー、えーっと、まっど……まっど……」

「マッドサイエンティスト、か？」

「そう、それー」

「……おいルーミア、外の世界『にも』ってどういうことだ、『にも』って」

「キカイつてのを作る河童がいてー、皆して『まっどさいえんてすと』って呼んでいたから、葉加瀬さんもそうなのかなーって」

「……幻想郷には常識というものが存在しないのか……？」

「毒人形の次はマッドサイエンティストな河童とか……徐々に混沌としてきたぞ……」。

くとある山のふもとにて

「カパックシヨンッ！」

「そのクシャミ無理がありますよ、にとりさん……」パチッ

「クシャミにも個性がいるのさ、権さん。……にしてもなんだろうね？
なんか褒められたような気が……」パチッ

「はいはい、そうですね……っと、王手」パチッ

「あ……m」

「待った無し」

「ひゅい!？」

完

第8話「ルーミア、闇を喰らう」(前書き)

ここからは作者の独自解釈及び妄想が飛び交います。
意味不明な内容かもしれませんが、ご了承ください。

2011/9/5：誤字修正

ご指摘ありがとうございました。

第8話「ルーミア、闇を喰らう」

エヴァンジェリン視点

「さて……ルーミア、ここからは大事な話だ。…貴様の『食』に関することなのだからな」

欲望とは、人間のみならず生命全てが必ずと言って良いほど持つ、本能的無意識。

これを蔑ろに出来るかと問われれば、答えはノー。

しかしルーミアの主食が人間だという以上、人間社会という世界だけでも苦悩するというのに、学園という人材を教育する施設に置いて人喰いは言語道断だ。

だからと言って、もし欲を必要以上に食欲を制限してしまつては、いずれは暴走するだろう。

見かけは阿呆でしかないが、こいつの持つ魔力は想像以上だ。

実際に別荘にて撃ち合つてさせてわかつたが、こいつは並みの魔法使い以上の魔力を持っている。

暴れて処分対象にされるなどたまったものではない。

だから、どうしてもこいつの食欲を満たす必要がある。

そのために私は、ルーミアを観察し、資料を漁り、過去の経験と勘を当てはめた。

そして導き出した。

ルーミアの『食』を。

「まず確認する。ルーミア、貴様は間違いなく人を喰らうのだな？」

「そっだよー」

「そして人を喰えばしばらくは何も食べなくて済むのだな？」

「そだよー。けどお腹は空くの」

「しかし人だけではなく、普通の食べ物も食する事ができるな？」

「食べられるよー。でもお腹は膨れるけど、何か満たされないの」

「食物は食える。が、満たされないという。……それらを踏まえて、私はある仮説を立てた」

「仮説……ですか？」

「？」

ルーミアの代わりに茶々丸が言う。

これまでの光景を見て考えた、暫定的な仮説なのだがな。

茶々丸も気になるようだし、珍しくルーミアも真顔になってこちらの言葉を待っている。

「……ルーミア、貴様の食する物とは……人間の持つ、『闇』なのではないか？」

「ほえ？」

さすがのルーミアも、真剣だった表情が一変し、予想外と言わんばかりの顔を浮かべるか。

さてと……ここからはこいつの脳みそが持つかわからないが、説明

しない限りは納得もしないだろう。

「まず貴様は間違いなく食物を摂取している。もし人喰いに特化しているのならそれ以外の食物は受け入れないはずだ。それこそ肉食動物が植物を喰えないように、草食動物が肉を喰えないようにな」

「ふむふむ……」

「仮にルーミアが雑食だとした場合、私は膨大な栄養が必要なかと想定した。妖怪も人を喰らう。これは栄養価が高いからだ。だが一人喰えばしばらくは意識を保てる程度に腹が持つという。しかも普通に食事はできるのに、腹ではなく何かが満たされないという。これらを考えた結果、栄養説ではないと判断できる」

「ふーん？」

「次は魔力説。私は血を吸うことで魔力を補えることができるが、ルーミアは血どころか肉ですら必要としている。血イコール魔力といても過言ではないが、肉まで必要とすれば魔力は有り余るはず」

「んー……つまり、ルーミアは血肉じゃなくて魔力を補給しているの？」

意外だな。きちんと聞いていたかルーミア。

だがしかし、まだ話は続くからな。眠たそうな瞼を手で擦っつけ。

「だがそうだというのならあの弾幕はなんだ。明らかに人間一人喰った程度では放てないほどの魔法ではないか。そしてそれを裏付けるのが、この麻帆良に来て貴様が初めて喰ったあの侵入者だ。三流とはいえ曲りなりにも魔法使い。一般人に比べれば魔力容量は高い。

だが仮にあの弾幕を撃てるほどの魔力容量があつたのならこの私から逃げるはずが無い。吸収効率が悪いとも考えられるが、先ほどのこともあるのでその案は除外される。よって、魔力を糧にする必要は無いと考えられる」

「栄養でも魔力でもない……とすると、マスターが申ししていた『闇』に繋がるというのですか？」

ロボットである茶々丸からすれば、どうしても目に見える栄養価……たんぱく質などを考えてしまうのは仕方が無い。

だがここからは魔法使いではなく……吸血鬼と妖怪という『化物』バケモノに類する者でしか繋がらない物がある。

「消去法で言えばそう考えることもできるだろうが、繋がりはある。あの三流は悪意を抱いていた。悪意は人間の持つ闇の一つ。悪意が大きければ大きいほど、その闇は濃くなる。ルーミアは、奴という器に溜まっていく闇を喰った……と考えれば、これまで意識を保つことができ、尚且つあれだけの弾幕を放つことができると思えることができる」

それに例外がないわけでもない。

他人に悪夢を見せその者の苦しみを糧とする夢魔。ナイトメア

夢そのものを糧とする獲ほくなど……この世にはそういった化物バケモノも存在する。

そしてこれまでの仮定が間違っていないとすれば……このルーミアはできるかもしれん。

「ルーミア。貴様にはこれから、闇だけを喰う、『闇喰い』を試してもらおうぞ」

やったこともないし見たこともない。この名称は仮称だ。

当の本人は半分眠たそうな顔をしているが……寝させはしないぞ！

茶々丸視点

録画機能チェック。オールグリーン。

感度良好。暗視スコープに切替。

ガンドルフィーニさんは、今だ監視の姿勢を崩していません。

「マスター、録画準備完了いたしました」

「うむ」

それにしても、ルーミアさんの「闇喰い」の実証の為に、マスターご自身が実験体になると言い出したとは驚きです。

無駄に面倒事を起こしたくないとは申しておりますが、やはりマスターの安全が気になります。

しかしマスターの命令は絶対ですし、なによりルーミアさんなら大丈夫だと推測できます。

「では始めるぞ」

「うむ」

マスターがベンチに座り、その背後にルーミアさんが立ち止まりマ

スターの頭を包むようにして両手を添えます。
そしてお二方は静かに目を閉ざします。

「私は今……昨夜のケーキ騒動を思い出している」

……マスター、やはり引きずっていたのですね。声色に怒りを感じます。

ルーミアさんはマスターの言葉に無言で頷きます。

こういった『感情』に関する事にはイメージが大切らしいですが、私にはわかりかねません。

ガイノイドですので。

「私は今イライラしている。これは怒りだ。貴様も思い描け。自身の好物、あるいは大事な物を取られた時の心境を。そしてその怒りのイメージを私の怒りに重ねるイメージを思い描け。思い描いたイメージを、貴様の中へと引きずるように……」

マスターの言葉にルーミアさんが頷く。

それが繰り返される中、互いに無言になり、二人の間に呼吸音だけが響き渡ります。

マスターに変化有り。

マスターの全身から、赤を混ぜたような黒い何かが溢れ出てきました。

あれがマスターのおっしやっていた、『闇』……なのでしょうか？
ルーミアさんは手を添えているだけですが、その手に導かれるようにしてマスターの闇が頭上に集まっていきます。

マスターとルーミアさんに大きな変化はありません。

やがてマスターの頭上には球体となった闇が浮かび、ルーミアさん

の顔がそれに近づきます。

大きく口を開き、それを一瞬にして喉の奥に押し込む。

スローモーションでしか確認できないほどに早い動きでした。

その直後、マスターとルーミアさんの目がゆっくりと開きました。

「……どうだ、ルーミア？」

「だ〜い満足〜」

マスターの問いかけにルーミアさんは機嫌よく答えます。
どうやら闇喰いは成功したようですね。よかったです。

「凄いよ〜、今まで食べた中で一番満たされたのか〜」

「そうか。後はあの爺に見せてやれば、とやかく言われることはなくなるだろう」

「マスター、お体は大丈夫ですか？」

外見上マスターの体に異常は見当たりませんが、やはり気になります。

「問題ない。むしろモヤモヤが消えてスッキリしている。それに今考えると……」

……なにやら言いづらそうな表情を浮かべていますね？どうしましたか？

「……ケーキ一個程度で激昂した自分が恥ずかしい……」

……ああ、なるほど……。

「おい茶々丸、なにか失礼なことを考えていないだろうか？」

いいえ、そんなことはありませんマスター。

決して驚いたり、成長しましたねとか考えてなどいません。

……ルーミアさん、上機嫌でいるのはいいのですが、今後ケーキに
関しては注意してくださいね。

マスター
「主」

ルーミアさんが飛びつくようにしてマスターに抱きついてきました。

ここで申し上げるのも難ですが、ここ数日間過ごした結果、ルーミアさんは外見に比べ意外と力強いことが解りました。

恐らく人喰いとして活動していくにつれ、持ち運びや解体など、力
作業が必要とされていたからでしょう。

幼い事を除いたとしても、その肉体的な力は、通常の成人男性を大
きく上回っています。

なので、マスターがルーミアさんの力で吹っ飛ぶのも道理の上です。

「なに冷静に分析しているんだ貴様は!？」

ああ、すみませんマスター。

ルーミアさんがあまりに突拍子なことをなさるので、つい対応が遅
れてしまいました。

マスター
「主、本当にありがとう」

すりすりとはりずりしながら、ルーミアさんはマスターにありったけの感謝をぶつけています。

……よほど嬉しかったんですね、ルーミアさん。

喜んでいられるはずなのに、目頭に涙が浮かんでいます。

食欲を満たせる最善の手段を見つけたことへの喜びか、人を食べるようになってよくなったという解放感への喜びか、単に満足できた事への喜びか。

私には解りかねません。ですが、どちらでもいいです。

ルーミアさんが喜んでいるという事実だけが、私にとって非常に有益な物だと考えられます。

……本当によかったですね。ルーミアさん。

「いーいーかーらーたーすーけーろー!!」

マスター、叫ぶのはいいのですが、もう少し素直になられてもよろしいのでは？顔が真っ赤です。

せっかくなので録画しておきましょう。貴重だと判断した結果です。

ガンドルフィーニ視点

……あんなに涙を流して喜ぶなんて。

あの子はずっと苦悩していたのだろっとな。
人を喰らうことに抵抗があったのだな。

……よかった。本当によかった。

エヴァンジェリンが発案した事だから、あまり信頼はできないが……。
あのような子が救われるというのなら、それでいい。
これで人を喰わなくなるといふのなら、その方がいい。
後日、我々の前で実証をするといふのなら、私もやってもらおう。
それで危険性が無いことを保障できるのなら、安いものだ。
……やはりエヴァンジェリンが発案したと思うと、どうにも抵抗を
覚えるが。
この疑惑も、あの子が食べてもらえたりするのだろうか？
いや、悪を許す気はないが。

茶々丸視点

ここからは後日談です。

翌日に学園長や魔法先生の方々を呼び集め、闇喰いを何度か実証。
その結果、様々な意見交換の下、高い評価を得ることができました。
……意外だったのは、実証にあのガンドルフィーニ教諭が自主的に
申し出た事です。
マスターは反対するだろうと予測していたので、マスターは非常に
驚いていました。
もちろん成功したのですが……いくらあの時に監視していたとはい
え、意外な行動でした。

しかしおかげさまで、闇喰いに危険性が無いと保障できました。
今後はストレスの溜まった魔法先生の闇を喰らうことを条件に、麻
帆良学園に匿うことを約束されました。

よかったですねマスター、ルーミアさん。

……しかし何故かルーミアは、よく私の手や他人に齧りついてきます……。

ルーミアさん曰く、噛み付くのは癖で、ほぼ無意識でしてしまつてこのようです。

………大きな問題でもないので、放っておくことにしましょう。

「いや、気にしろ!？」

完

第8話「ルーミア、闇を喰らう」(後書き)

……以上、今後下手な問題を起こさない為のご都合展開でした。

それでも噛み付く癖を直さないのは、作者なりのルーミアのキャラ個性だからです(キリッ)

……失礼しました。

それと、今回から投稿するペースを早めていきたいと思います。

第9話「ルーミア、2年A組に現る」(前書き)

ここからは、ルーミアへの妄想とねつ造がございます。
あくまで個人的な設定の上に、作中の偽造のようなもので、ど
うかご了承ください。

2011/9/13:訂正。

3年A組(訂正前) 2年A組(訂正後)

第9話「ルーミア、2年A組に現る」

エヴァンジェリン視点

そいつは、日差しが暖かな昼休みに突然やってきた。

「マス・・・おねえちゃん、おべんとー」

ぶっぶっ！

「マスター、牛乳でも虹が架かるのですね」

今は咳き込んで言えんが、かなりどうでもいい事を言っただけな茶々丸！

なぜだ・・・なぜ、ルーミアが私の弁当を持って麻帆良学園女子中等部2年A組の教室にやってきてるんだ！？

しかもタカミチと一緒に！

タカミチ視点

まずは茶々丸君の話によると。

昨夜の夕食が珍しく余ってしまったので、せっかくだからお弁当を作ると茶々丸が提案。

いつもどおり早起きし、お弁当を作ってテーブルの上に置いてからエヴァを起こしに。

しかしエヴァは寝坊してしまい（原因はルーミアへの修行）、寝ぼけてたのでお弁当を置き忘れてしまった。

茶々丸はそれを言おうとしたのだが、寝不足で気分の悪かったエヴァから黙れだの煩いだの言われたので叶わなかった。

ここからはルーミア君の話。

ルーミア君はエヴァ達が出た直後に目覚め、机の上に置いてあったお弁当を発見。

届けたら喜んでくれると信じて疑わず、お弁当をエヴァに届けようと、単独で麻帆良学園に出発。

即、迷子になったらしい。

しかも道中に変なお姉さんにイチャモンをつけられ、返り討ちにしてしまったようだ。

ここからは僕の話。

歩いて居たら偶然、シスター・シャークティに戯れるルーミアを発見。

この時ルーミアは持ち前の噛み癖でシャークティを困らせていたが、素直に謝ったので事なきを得た。

ルーミアから事情を聞いた後、共に2年A組に向かうことになった。

・・・余談だが、あえてエヴァを主ではなく姉と呼ばせたのは、余計な揉め事を増やさない為の僕の入れ知恵だ。

以上、高畑・T・タカミチからの報告でした。

エヴァンジェリン視点

「・・・というわけらしいね」

「そういうことは早く言え茶々丸！」

「弁解するつもりはありませんが、黙っていると命じられたので・・・」

「なら今後から気をつける！」

「それよりも、ルーミアを放っておいていいのかな？」

タカミチ、言っておくが放っておいたのではない。あの輪から遠ざけたいのだ。

何せ教卓の前ではルーミアを大勢の女子が取り囲んでわいわい騒いでいるのだから。

「やーん、かわえー」

木乃香がルーミアの頭を撫で、

「髪さらっさら〜！」

柿崎美砂がルーミアの髪を手で梳き、

「どこから来たの？」

大河内アキラが尋ね、

「え？初等部の子やない？」

和泉亜子が指摘し、

「海外からやってきた留学生とか？」

早乙女ハルナが仮説を立て、

「その割には日本語ぺらぺらでしたね」

綾瀬夕映が冷静に分析し、

「エヴァンジェリンさんのことお姉ちゃんって言っていたけど、どんな関係なの？」

佐々木まき絵が面白そうにルーミアに問い詰め、

「た、たた、高畑先生とどんな関係なの？教えなさいよ！」

神楽坂明日菜が挙動不審でルーミアに問い詰め、

「み、皆さん落ち着いてください〜！」

最後にネギの坊やが言うが、人混みに流されそれどころではなくなる。

・・・あんな能天気な奴らに関わるのは遠慮したいんだが・・・。

「はいはい、この子への質問はこの朝倉和美を通してね〜。まずはエヴァンジェリンさんと高畑先生、この子との関連性は？」

チツ・・・よりよってパパラッチこと朝倉和美が仕切ってきたか・・・。

マイクを片手にこちらに向けると同時にクラス一同（一部例外除く）が殺到してきた。

ええい集まってくるな暑苦しい！

「・・・従姉妹だ。親戚が麻帆良学園にホームステイを考えていて、私の下に寄越してきたんだ」

くっ…まさかここで爺の提案を受け入れる羽目になるとは…。あとでどう言われる事が…！

だが効果はあったようで、皆が納得して私とルーミアを見比べている。

…いくらこいつらが阿呆だとわかっていても、拭いきれない何かを感じるな…。

「僕は教師として挨拶した程度だよ」

タカミチはといえばやんわりと質問に答え難を逃れたようだ。まあ妥当な答えだな。

「へえ、見た目は確かに似ているけど、中身は似てないみたいだね」

煩いぞ、明石祐奈。運動部組も納得したように頷くんじゃない。

すると何を思ったか、ルーミアがくいくいと祐奈の裾を引っ張りはじめた。

「…ん？何かな？」

ルーミアが何を言い出すのかと皆の視線が一点に集まり始める。

…まさか。やめる！

「あなたは食べてもいい人間？」

何ライツテルノコノ子？

その一言の直後、教室に戸惑いという名の静寂が訪れる。

信じたかったのに…あのバカ、余計なことを言いおって……っ！

いや、あのバカを信じた事 자체가、浅はかな期待だった……私こそがバカか……！

「あー……」

静寂という名の混乱の前に、正体がバレないかと不安が過ぎる。

……タカミチですらうつすら汗をにじませている。

私もこんなに冷や汗をかいたのは生まれて始めてだ。

どうにか……どうにか言い訳を作らねば……っ！

「ルーミアさんは幼い頃、ホラー映画で人間が捕食されるシーンを目撃してしまい、以来人間は食べられる物なのかと信じきっているようなのです」

ナイス設定だ茶々丸！今日ほど貴様を見直した日はないぞ！

「そ、そういうことだ。だからルーミア、食べられんと何度も言わせるな」

二重の意味での注意を兼ねて、私はルーミアの頭を引っばたく。

「そーなのかー……」

引っぱたいたことに対しては反応が無いが、忠告には応えたようだ。申し訳ない、と言わんばかりにしょげる。

……いや、もしかして本当に食べたかったのか？
気にしないでおくとしよう。面倒だ。

「び、びっくりしたな。お姉ちゃんをからかったら駄目だぞ？」

「その子の思い込みは筋金入りみたいでね……けどいい子だから大丈夫だよ」

祐奈と周りの安堵した様子に、さすがのタカミチもほっと一息ついたようだ。

しかしこのルーミア、下手をすると何を言い出すかわからんな……。何せ、知的的には負けず劣らずだが、天然さは2年A組を上回るほどだからな……。

「とにかく、そいつから聞くのとんでもないワードが飛び出るだろうから、質問は事情を知っている茶々丸に聞け（茶々丸、都合のいように適当に誤魔化せ）」

私はルーミアがこれ以上変なことを言わせないように、念話で茶々丸に指示を煽りながらそう言う。

「（イエス、マスター）……では私が代わりに答えます。ご質問は？」

ここからは茶々丸任せだ……頼むぞ茶々丸。

そしてついに、茶々丸によるルーミア大解明が始まった。

「フルネームは？」

「ルーミア・B・D・ナイトレアです」

私の従姉妹という設定で付けた名前なのだろうが、即席でありながら悪くない。

……しかしBとDってなんだ？

「出身地は？」

「イギリスのロンドンです。父と母の三人家族です」

これは微妙だな……。即席にしてはいい方が。

「歳は？」

「10歳です」

見た目はな。妖怪だからもしかして長生きしているかもしれんが、絶対に中身は10歳未満だ。

「なんで麻帆良学園に来たの？」

「『10歳になったら世界を見よ』というナイトレア家の教えで、ホームステイで来たようです。麻帆良学園へはマスターの薦めで来ました」

ほほお・・・割とオリジナリティな設定だな。しかし私なら絶対来るように薦めんぞ。

「好きなものは？」

「じんに「肉類ですが、特にジんギスカンがお好きのようです」

ナイスフォローだ茶々丸！余計なこと言うなルーミア！

「嫌いなものは？」

「食事を邪魔されることです」

ルーミア自身から聞いた話だが……少し横取りしたら凄い剣幕を見せたことがあった。

あれは私でも多少怖気づくものだった……げに恐ろしきは食べ物の怨み……か。

「趣味は？」

「夜の散歩だそうです」

嘘ではない。実際に夜中の麻帆良学園でも魔法球内部でも、しょっちゅう散歩している。

……しかし、暗闇を纏ってふらふら移動する姿は危なっかしいな。

「特技は？」

「フライドチキンに限らず、スペアリブですら骨ごと食べることで、見事な食べっぷりでした」

これも嘘ではない。

人骨も喰っていたし、以前、夕飯に出したスペアリブをバリバリ喰っていたからな……。あれは凄かった。

「本気で人間が喰える物だと思っているのか？」

「思っているようです」

これも嘘ではないが……。闇喰いを覚えたんだからやめてほしい……。にしてもまあよくペラペラと出てくるな……。

「あ、あの」

お、ネギの坊やが前に出てきた。

おずおずとルーミアに近寄ってくる。何やら期待しているみたいだが……？

「ルーミアさんも僕と同じイギリスの出身なんですね。僕は……」

「ネギ・スプリングフィールド」

坊やが名乗り出る前にルーミアがぼそりとその名を唱える。

口元に軽く笑みを浮かべながら、坊やの中身を見据えるように紅い眼を向ける。

「え？なんで……」

そんなルーミアに多少の恐怖心を抱いたのか、戸惑いを見せる坊や。するとルーミアは途端に普段の能天気な笑みを浮かべ、坊やに近寄ってくる。

背の高さは似たり寄ったりで、不思議と二人が並ぶと違和感がない。

「……有名だもん。凄いよねー、ルーミアと同年でせんせーなんだもん」

「そ、そんな事……ルーミアさんこそ一人で日本まで来たんですよ？凄いですよ」

「えへへ、ありがとーネギせんせー」

さっきの戸惑いはどこへ行ったのやら……すっかりルーミアと打ち解けたな。

まあ、10歳のガキ同士ならこれぐらい普通だろう。妖怪と先生という異彩さを除けば。

「はっ……これはラブの気配………同年故のちっぽけで淡い恋心……イける！イけるわ！」

「ふええええつ！？」

仲良く話す二人を見て、早乙女ハルナが頭のアホ毛を揺らしながら大胆発言。

それに過剰に反応する宮崎のどか。大げさで煩いな、まったく……。

「ハ、ハルナさんにのどかさん！そんなことないですよー！」

「そーなのかー？」

「少しは空気を読め馬鹿者」

傍から見ればその気があるかもしれないと思われかねん発言をしておつて。

本当にお前は空気を読むという行為を知れ。

キーンコーンカーンコーン

む……昼休み終了のチャイムが鳴ったか。ちつ……授業が面倒だな……。

「み、皆さん！お昼休みが終わりましたので授業を始めます〜！」

坊やの呼びかけと同時に、生徒達は渋々と己の席に着く。

「さてと、僕はルーミアを送っていくとするよ。それじゃ皆、授業頑張つてね」

そっださっさとルーミアを連れて行けタカミチ。これ以上、私に負担をかけるんじゃない。

「あ、そだ。ネギせんせい」

「な、なんでしょつかルーミアさん？」

突然のルーミアの呼びかけに戸惑うが、授業はいいのか先生？……
くくく。

「ルーミアの事は呼び捨てでいいよー？」

「は、はい。……じゃあ僕のことも呼び捨てでいいからね？」

「わかったー。……じゃーね、ネギくん」

「うん。またねルーミア」

すっかり仲良しという雰囲気だな……こら雪広あやか、ガキ相手に嫉妬してんな。

（なによあのガキンチョ……嬉しそうな顔しちゃって）

（同い年のお友達が出来て嬉しいんやなあ）

聞こえているぞ、神楽坂明日菜、木乃衛木乃香。保護者じゃあるま……いや、事実上は保護者か。しかしまあ……友達……か。

タカミチ視点

……はあ。今日ほど冷や冷やした覚えは無いなあ……。ルーミア君に慣れてきたとはいえ、何を言い出すか本当に解らないな。

……それにしても、まさかルーミア君がネギ君の友達になろうとしてくるなんてね……。

僕としても嬉しいんだけど……少し気になるな。聞いてみようか。

「いいのかいルーミア君？」

「なにが？」

「エヴァが何か言っんじゃないかなあと思ってね」

二人して廊下を歩きながら、僕はルーミア君に問いかけてみる。実際、エヴァはネギ君の父親であるナギ・スプリングフィールドに因縁があるからね……。そんな彼女が、ルーミアが彼の息子と友達になるなんてことを許すのだろうか？

「マスターは怒らないよ。たぶん」

……随分とあっけらかんと答えるんだなあルーミア君。疑いの欠片も見受けられない。

「どうしてそう言いきれるんだい？」

「マスターはそんな小さなこと気にするような人じゃないもん」

……あー……。確かに彼女はプライドが高い子だし……。納得……。かな？
どうやらルーミア君は、随分とエヴァンジェリン君の事を理解しているようだね。

能天気な笑顔が逆に怖いぐらいだよ。

エヴァンジェリンの心中

……くくく……残念だったな坊や。

同じ年で同じ出身地だから仲良くなれると踏んだのだろう。

実際に仲良くなれて嬉しくて仕方ない、といった顔をしている。

だがそのルーミアが、まさか悪の魔法使いの下僕だとは思っまい……

…。

あの人を寄せ付けれる能天気さも相まって、これからも二人は仲良くなっっていくのだろう。

そしてお人好しの坊やは、そんなルーミアを友だと信じて疑わないだろう。

立ち位置としては合格だルーミア。狙ってやったかはさておき。

いずれ時がくれば……くくく……友が実は命を狙う存在だと嫌でも思い知るだろう。

その時の坊やの顔がどんな歪んだものか楽しみだ……ふはははは……っ！

完

第9話「ルーミア、2年A組に現る」（後書き）

オマケ

〈ネーミングセンス〉

（・・・そういえば茶々丸、ルーミアのフルネームの『B』と『D』って何の略だ？）

（『B』はブラック、『D』はダークです。イメージでつけてみました）

（・・・安易だなー・・・女の名前としてそれでいいのか？）

（すみません、おっしゃりたいことがありましたら作者に申しつけください）

（まさかのメタ発言っ!?!）

完

オマケその2

〈高音・D・グッドマンの受難〉

「しくしく……もう公然を歩けません……」

……これはどういうことだろう。

この僕、高畑・T・タカミチにも、この状況がさっぱりわからない。なんで高音君の身体中に齒型がついているんだろう？

「一体どうしたんだい？」

一応、横でおろおろしている佐倉君に聞いてみよう。

「あ、あの、お姉さまがルーミアさんにちょっかいをかけてしまって、それでこんな目に……」

……あー、ルーミア君の言っていた変なお姉さんとは、高音君の事だったのか……。

大方、ガンドルフィーニ教諭みたいにエヴァに近づくなと警告して、一方的な喧嘩に発展したんだろう。

しかも聞くと、高音君は魔法を使ったのに対し、ルーミアは魔法無しで応戦したらしい。

……その結果が、この齒型まみれの姿という事か…… 可愛いそうに「怖かったです……無邪気な顔で遠慮なく噛み付いてきて怖かったです……」

「お姉さま、しっかりしてください！大丈夫です！あの子は本気で食べる気はなかったと！味見だったと！」

「慰めになってません！」

……まあ、あの子に悪気はないのは事実なんだがなあ……。
というか、高音君自慢の影の鎧とやらを破るとはさすがだなあ。

「いえ、影の鎧」と噛みついた……としか見えませんでした」

……ルーミアに噛みつかれるのだけは勘弁してもらおう。

完

第10話「タカミチ、ルーミアに問う」

タカミチ視点

ルーミア君が麻帆良学園に現れてから数日が過ぎた頃。みんなのルーミア君に対する意見が代わりつつあった。この僕、タカミチ・T・高畑も含めてね。

ガンドルフィーニの証言

「あの子は本当に妖怪なのですか？その一言に尽きます。確かに最初は疑っていましたが……監視した上ではつきりしました。あの子は悪い子ではありません。あのような無垢な子をエヴァンジェリンに預ける事こそが間違っています！悪の手に染まる前に我々が正しい道を示すべきです！」

あのガンドルフィーニ教諭があそこまで認めたなんて、正直驚きましたよ。

余計な正義感をあの子に与えないでくださいよ？

シスター・シャークティの証言

「ルーミアですか？あの子は無邪気な子供そのもので、美空に見習わせたいくらいの素直さがあります。……あの噛み癖は困ったものですが、加減もできて反省もしますし、特に問題は無いでしょう。あの子には健やかに育って欲しいですね」

事前にルーミア君のことを聞いてたとはいえ、見事に噛まれてしまったしね……。
健やかに育って欲しいという意見には同意しますよ。

高音・D・グッドマンと佐倉愛衣の証言

「えー…あー…良い子…ですね？」

（えっと、お姉さまはルーミアちゃんと戦った時のショックをまだ引きずっているようなんです…学園では大人しくしてますし、基本的に良い子なんですけど…噛み癖がちょっと…）

あー、学園長が実力を試したいって言って戦わせたあの日からね…
…。
噛まれた恨みもあってか、高音君は凄くやる気を見せたけど…見事に負けちゃったね。
あの攻撃を難なく避けたり、あんな弾幕を撃ってきたり、すごかったなあ。

けど一番かわいそうだったのは…あの弾幕で逃げちゃったことか。ご愁傷様。

あの子もさすがに反省してたから、そろそろ許してあげなさいね。

瀬流彦の証言

「あの子はあちこち出歩いてるみたいで、今や生徒のみならず先生方の人気者なんですよ。新田先生なんかルーミアちゃんを我が子のように可愛がって…。最低限の礼儀も知識ありますし、心配ない

「と思いますよ？」

いつもフラフラ出歩いているのかルーミア君って……。まあ、問題を起こしていないみたいだから、いいとするかな。

ネギ・スプリングフィールドの証言

「え？ルーミア？良い子だよ？明日菜さんと木乃香さんとも仲良くなったし……。え？嬉しそうな顔してる？……。うん、ルーミアと遊んでると、なんかアーニヤを思い出すんだ。だからかな？一緒にいると楽しいし、凄く落ち着くんだ」

生き生きしてるなあネギ君。

ここに来て以来、初めて同い年の友達ができたから無理も無いかな。魔法の関係者だったこともバレていないみたいし、大丈夫だろう。噛み癖にだけは気をつけてね。

学園長の証言

「いやあ、気まぐれに駄菓子をやってたら随分と喜ばれてのお。以来、必ず挨拶にきては駄菓子をねだってくるんじや。もう一人、孫娘ができたようで嬉しくなるわい」

「……学園長、いくらなんでも甘やかし過ぎじゃありませんか？」

「ルーミア君を見ると仕事の疲れが癒されるのでお」

……。ろくに仕事しない癖に……。

「何か言いたいのかねタカミチ君？」

「いえ、別に」

勘が鋭いなあ学園長は。そんなに怖い目で見ないでくださいよ。

「しかし予想以上に多くの者からルーミア君は認められておるようじゃな。しかも早いうちに麻帆良学園に馴染んでおる」

「特に2年A組の適応が異常に早いですね。あの癖の強い子達相手に平然としてるあたり、彼女はある意味で強い子ですよ」

「ふむ、木乃香から詳しく聞いた話によると、ネギ君と明日菜君とも仲良くやっってるらしいの」

「明日菜君はよくルーミア君に噛まれているようですけどね」

この前に見かけた時なんか、顔を真っ赤にしてまで、手に噛み付いてきたルーミア君を振り払おうとしてたぐらいだし…必死だったんだなあ明日菜君。

「ふおっふおっふお、悪戯程度で収まってるようじゃから大丈夫じやろっ」

こうやって笑って話しているだけだと、とても人喰い妖怪の日常だとは思えないだろう。

話しておいて難だが、やはり無害な…いや噛み癖は小さな被害だけ…それでも大きな問題は起こっていない。

エヴァが考案し、実演してくれた「闇喰い」による被害も全く無い。

むしろ負の感情が消えるからか、大抵の人間はすつきりして安堵感を得られるようだ。

そして最も大きな変化が起こったといえば、あの「闇の福音」ことエヴァンジェリンだ。

いつしかルーミア君といるエヴァの顔からは以前の冷たさが消え、逆に暖かさを垣間見るようになってきた。

まるで世話が焼く妹を相手にしているかのように、常に叱り怒鳴っているものの、ルーミア君に親しみを覚えている。

ルーミア君もそんなエヴァを慕っているようで、殆どは彼女らと茶々丸君の三人で行動している。

しかし……だからこそ逆に不安がにじみ出てくる。

「……学園長」

「不安なんじゃな？ルーミア君がいずれエヴァンジェリン君の下から去る時が来るのが」

……いやいやいや、驚きを隠せませんよ。

亀の甲より年の功というか、学園長って実はエスパー……なわけないか。

僕の不安をズバリ見抜かれてしまったようだ。

（君の気持ちはわからないでもないが、ルーミア君が麻帆良学園に置けるかは彼女次第なんじゃ。彼女にそれを押し付ける権利はなし

らには無い)

……学園長の言葉が頭から離れないなあ。
言っていることはわかるんだけどね……。

ルーミア君が人を喰わない妖怪になったから麻帆良学園に居られる、
という問題ではない。

ルーミア君は、知らずに麻帆良学園に迷い込んだだけの迷子だ。
害が無いからと身元を預かる形で麻帆良学園に留まっているだけに
過ぎない。

いずれは彼女も自分の居場所に帰るだろう。

……いや、本当はすぐにも帰りたいのかも知れない。

けど……エヴァはどうするんだろうか？

以前、彼女にもしルーミア君が帰ることになったらどうするのかと
聞いてみたことがあった。

『好きにするがいいさ。むしろお守りがいなくなって精々する』

……とかいってルーミア君をのけ者のように言い放っていた。

けど、僕は見逃さなかった。

……見逃せられなかった。

一瞬だけど浮かんだ、エヴァの寂しげな顔を。

そんなエヴァの傍らにいた、茶々丸君の困惑した顔を。

彼女も、もとはといえば不本意でこの麻帆良学園に縛られ続けてい
るんだ。

千の魔法使い(サウザントマスター)、ナギ・スプリングフィール
ドにかけられた「登校無限地獄」が予想以上に強くて、本来なら三
年間だったはずの呪いが15年経った今になっても解けなかった。

呪いをかけたナギはといえば未だ行方不明で、死んだとまで噂されるぐらいだ。

このままずっと彼女はこの学園に拘束され続けるかと思うと・・・心が痛む。

「悪の魔法使い」として魔法使いから恐れられ、繰り返し学園に取り残される故に生徒達からいずれ忘れ去られる。

彼女は、不本意でずっと孤独の中をさまざましているんだ。

だからこそ、そんなエヴァに明るみを取り戻してくれたルーミア君には感謝しているんだ。

不必要な程に明るくて能天気な君がエヴァの傍にいて、彼女は明るくなれた。

時には叱られ、時には遊んで、時には弄られ、時には笑いあう……。エヴァとルーミア君、茶々丸君の三人で過ごす日々はとても楽しそうだった。

まるで家族のように。

彼女には、これからもエヴァンジェリンの傍に……。

「高畑先生っ！」

後ろから僕を呼ぶ明日菜君の声がした。

おっと。物思いにふけちゃったね。

「つ、つええ……さすがデス、メガネ……」

ドサッ

わー。高畑せんせーってやっぱり強いんだねー。
せんせーより大きな人を吹っ飛ばして倒しちゃった。
ポケットに手を突っ込んで避けていただけなのにね。

「さてと……無事かな？明日菜君、ルーミア君」

「は、はは、はい！ありがとうございます！」

「ありがとう」

明日菜さんと一緒に高畑せんせーにお礼を言う。

助けてもらったからお礼を言うものだって、けーねせんせーから教わ
ったもんね。

けど明日菜さんって高畑せんせーの前だといつも赤くなるんだね。
震えてるし。

なんでだろう？

「……で、なんで空手部の大学生に襲われていたんだい？」

「あー、えっと、ですね……」

高畑せんせーの前で赤くなって俯く明日菜さん。口籠っちゃった。
ここはルーミアが言うべきなんだろうけど……。

「えーっとね……」

……どつからどう説明すればいいんだろ……？

「あ、おったおった！ネギくーん！明日菜とルーちゃんおったえー
！」

あれ？木乃香さんだ。後ろで走ってるのは……ネギ君？

追いかけて来てくれたんだねー。

到着した頃には、ネギ君が肩を上下させてゼーゼー呼吸してる。

「はっ……はっ……や、やっと追いついた……！」

「ネギ君に木乃香君じゃないか。一体どうしたんだい？」

んーっとね、結果的にルーミアが悪いんだよね。

ルーミアが散歩していたら、明日菜さんと木乃香さんとネギ君に会
つてね。

途中まで一緒に歩いてたの。

そしたらお腹空いちやって……つい明日菜さんの手を食べ……じゃ
なくて噛んじゃったの。

そしたら明日菜さんがルーミアが噛み付いたまま走り出しちゃって、
二人してさっきの学ランおにーさんにぶつかっちゃって……。

「……で、明日菜さんが必死に謝ったらおにーさんが許してくれた
んだけど、そこへ高畑せんせーが攻撃してきたの」

「あー……そういえばあの子は喧嘩好きで、僕に時々挑んで来た子
だったな……」

そしたら、高畑せんせーの勘違いがきつかけで喧嘩になっちゃったんだね。

凄い戦いだっただな。あはは。

「笑ってんなー！」

あいてーっ。

高畑せんせーに何かあったらどうすんのって、明日菜さんから叩かれちゃった。

はんせー。

その後、高畑せんせーはおにーさんに謝って、問題はあっさり解決。おにーさんも、不慮の事故だけど高畑せんせーと手合わせできてよかったって言って帰っていったし……。

めでたしめでたし、だねー。

「めでたくないよルーミアー」

あいて。

ネギ君にも突っ込まれちゃった。心配させちゃったねー。

ごめん、ごめん。

「いやー、二人とも随分と仲良くなったねー」

高畑せんせーが嬉しそうにルーミアとネギ君を見る。

そつえば、高畑せんせーとネギ君って昔からのお友達なんだっけ。

「うん。ネギ君面白いもん」

「面白いって……そんな言い方じゃなくてもー」

だって本当なんだもん。
マスターが目の敵にしているのは知っているけど、遊んでいると楽しいんだよね。

「こんなところにいたかルーミア」

あ、この声。

「マス……お姉ちゃん、茶々丸さん」

ルーミアの主ことエヴァンジェリンさんと、茶々丸さんだ。
なんでここにいるの？

マスターがネギ君をちらりと見たら、ネギ君が少し脅えちゃった。
マスターの目つきって、時々怖いんだもん。しょうがないよ。

「そろそろ夕飯時だ。帰るぞルーミア」

もうそんな時間なんだ？

けど茶々丸さんの作るお料理、凄く楽しみ〜
今晚は何かな〜

「は〜い。……じゃあルーミアは行くね。ばいばい」

歩き出したマスターの背を追いかけながら後ろを向いて、ネギ君達に手を振ってお別れ。

ルーミアの隣では、茶々丸さんがぺこりと頭を下げてお別れの挨拶をしている。

「うん。じゃあねルーミア」

「気をつけて帰ってえな」

「じゃあね。(次噛み付いたら許さないからね!)」

あわわ、明日菜さん凄い目つき。怒っているんだろうな。顔がそう言ってるよー。

いい加減に噛み付く癖を直さないと、危ないかなあ？

……あれ？高畑せんせーはいいの？ネギ君達いつちやうよ？

「少しルーミアから聞きたいことがあってね」

「夕飯時だから帰る、と言ったはずなんだがな？さつさと貴様も帰れ」

^{マスター}主、なんかイライラしてるね。

わかる、わかる。おなかペコペコなんだねー……あいたつ。いたた……なんで叩くの？マスター？

「君がいる前で聞きたいんだ」

^{マスター}主がいる前で高畑せんせーが聞きたいこと？なんだろ？

「……ルーミア、君は自分の居場所に帰りたくないのかい？」

完

読者アンケート・其ノ巻（前書き）

このお話は本編とまったく関係ございません。
どうかお付き合いをお願いいたします。

読者アンケート・其ノ巻

ルーミア「祝！『魔法先生ネギま！ 東方英雄録』略して『ネギ
ろく』お気に入り件数100件突破」

エヴァンジェリン「ぶっちゃけ、ここまで読んでくれる人がいるな
んて驚きだ」

茶々丸「マスター、いくらなんでもはっちゃけすぎでは……？」

エヴァンジェリン「この回を書いた時点ではっちゃけてるだろう」

ルーミア「はつきり言うと、『他人に評価されなくても、マイペー
スに投稿』を目指していた作者が、予想外に早かった登録件数10
0突破をみて、これは何か読者への何かを送らなければと慌てたほ
どだよ」

エヴァンジェリン「落ち着きのない作者だな。予想外な出来事に本
当に弱いな。軟弱者め」

茶々丸「もう少し自分を見直す必要があるようですね……」

ルーミア「話がそれたけど、皆さまのおかげで作者はより創作意欲
が沸きました！ありがとうございます！」

エヴァンジェリン「相変わらずカメ以下の更新速度だが、これから
もコツコツ頑張るそうだ」

茶々丸「そこで作者は、100件毎に皆さまにアンケートを頂こう

と考えているようです」

ルーミア「なんでも、ルーミアの麻帆良学園での生活を描くんだって」

エヴァンジェリン「先走った事を言えば、今後も東方キャラが絡むので、その東方キャラとネギパーティーとの絡みを想定している」

茶々丸「それはルーミアさんが言うべきでは？……それはさておき、今回の課題はこちらです」

100件祝いその1「ルーミアと」

ルーミア「この には、皆さんの好きな麻帆良学園キャラを入れてほしいの」

エヴァンジェリン「今回はひとまずルーミアだが、そのルーミアが日常内での麻帆良学園キャラとの絡みを短編で書くそうだ」

茶々丸「皆さまには是非、お好きな、あるいは絡んで欲しいネギまキャラを投票してもらおうかと思えます」

ルーミア「締切は10月15日……来月までだよ。おひとり様ひとりまでだからね」

エヴァンジェリン「不都合や分からないこと、質問などがあれば遠慮なく作者に文句を言え。そもそもこの計画自体が一種の突拍子な発表だ」

茶々丸「もしこの計画が成功した暁には、100件毎にアンケートを貰おうかと思っっているそうです」

ルー&エヴァ「まあけど無計画だよね」

茶々丸「……話がそれましたが、今後も魔法先生ネギま！ 東方英雄録 をどうかよろしく願います」

第11話「ルーミア、エヴァンジェリンに願う」

エヴァンジェリン視点

タカミチめ……よりによってこんな時に余計な話をしおって……。夕飯時になったからルーミアを迎えに来てやったというのに……。それに聞くまでもない質問では無いか。

知らずに迷い込んだこの地より、生まれ育った地に帰りたくなるのは当たり前だ。いずれ去ると解りきっている相手にそんな質問をするのも馬鹿らしくなる。

「帰らないよ？」

あっけらかんと、さも当たり前のようにルーミアは答えた。

何を言っているの？と言わんばかりの表情を浮かべ、首を傾げている。

……いや、むしろ私達が首を傾げる側だろう。

私達はつきり元の場所に帰りたいのかとばかり考えていたからな。

「帰らない？」

「あ、違う。『まだ』帰らない、かな？」

二文字加えるだけで確かに意味合いは違う。だが肝心の意味合いは

まったく同じ。

『帰れない』なら解る。

行き方がわからなければ帰り方がわからないも同意で、結果、帰りたいと願っても帰れないという状況。こくなつてしまつては仕方ないだろう。

だが『帰らない』となれば話は違ふ。

帰るという意欲よりも、この場に留まりたいという意思表示があるということだ。

だが……『まだ』とはどういう事だ……？

「……いいのかい？そんな悠長に構えていて」

「幻想郷は来る者は拒まず、去る者は追わず、がモットーだから大丈夫だよ」

「いや、そうじゃなくて、君の帰りを心配している人とかいないのかい？友達とか……」

「んー、いないことはないんだけどね。けーねせんせーとか、チルノちゃんとか」

「なら帰らなくていいのかい？」

「けど、まだ帰りたくないのかー」

「……なぜ？」

ルーミアとタカミチとのやり取りは、もはや無駄な質問ごっこだ。

頑なに帰りたくないと唱えるルーミアに、タカミチも私も、疑問を覚える。

ここに残りたいという理由はなんなのか。
ルーミアの口が開くのを待つタカミチと私。

「マスター
主ともつと一緒にいたいから」

拍子抜けした。

私もタカミチも、そして茶々丸ですら、目を見開いてルーミアを見る。

予想外すぎだ。残りたい理由がそんな単純かつ……意味の無い理由だなんて。

「……ルーミア」

「なーに？」

こいつには、はつきりと伝えなくてはならないようだな。

「勘違いしているようだが……私は貴様の封印の秘密を知りたいが為に、仕方なく私の僕しもとして置いてやっているだけだ。貴様を利用しているだけだ。……そんな悪の魔法使いの傍にいたいだと？笑わせるな」

だってそうだろう？

私は女子供を殺さない主義だ。

しかし人を殺した。傷付けました。騙した。欺いた。奪った。

こいつはそれを知らない。

こいつに教えたのは、世間に出回っているナマハゲのような私の逸

話と、子供に聞かせるような昔話。

こいつは知らないんだ。

普段はバカのせいで振り回されて、遊ばれて、子供のような喧嘩をしているが。

私は、正真正銘の悪の魔法使いなんだ。

「いい機会だ。さつさと私の下からいなくなれ。貴様のようなバカのお守りはもう沢山だ」

ついでに言えば、私は貴様が嫌いだ。

バカで、阿呆で、愚直で、能天気で、子供っぽくて、変に頑固な貴様が。

……なんだタカミチ、茶々丸。

そんな可哀想なものをみるような目で私を見るな。

私はこいつが居なくなってくれのことを心から望んでいるんだ。本心なんだ。

「……………それでも」

それでもルーミアは、私を真っ直ぐと見て言う。

「それでもルーミアは、主^{マスター}……………エヴァンジェリンさんと茶々丸さんが好きだから、一緒にいたい」

いなくなれといったのに……………なんで貴様は……………！

そんな真っ直ぐとした目で私を見ることが出来る！？

「……ふざけるな!!」

もう我慢ならない!

このうち震える身体をこいつにぶつけないとやってられん!

私はかつあげのようにルーミアの襟元を掴んで持ち上げ、首筋に鋭い爪先を向ける!

「マスター!」「エヴァ!」

煩い黙れ!私はルーミアに聞いているんだ!

力技に出たにも関わらず黙って私を見続ける、このバカに聞いているんだ!

「他人を利用し、殺し、悪の限りを尽くした私が好きだ?!?こんな……こんな私を!!」

「幻想郷はそんな見ただけの物は気にしない。肝心なのは過ごした時間で知りえた事だから」

「たった数日程度で私を……私の六百年を理解できるものか!!!貴様に何がわかる!!!」

「エヴァンジェリンさんは意地っ張りで捻くれ者で我侭で怒りっぽくてえらそうで意地悪で悪者っぽくて物知りで強くてかつこよくて優しくて真っ直ぐで綺麗な……吸血鬼の魔法使い」

言いたい放題言いおつてこのガキ……っ!だがそれは表でしかない!そんなことが理解できたところで、私の過去の所業が解るはずがなかるっ!?

「六百年なんて関係ない。吸血鬼だなんて関係ない。悪の魔法使いだなんて関係ない。ルーミアは、今まで一緒にいてくれたエヴァンジェリンさんが好きなの」

関係ないはずがなろう!?

私は六百年の間、どれだけそれらに囚われ、苦められていたと思っ
ている!?

「……幻想郷は全てを受け入れる。人間も、妖精も、妖怪も、鬼も、
吸血鬼も、天人も、神様も」

それは貴様の居る地のルールだろう!?

妖怪の賢者とやらが決めた絵空事だろう!?

私と貴様に、何の関わりがあるというんだ!?

「だからね、エヴァンジェリンさん」

現在の私を知って、過去の私の所業を除いて、幻想郷とやらの包容
力を伝えて。

それがなんになるという?それがなんの意味を持つ?

私は、貴様が……っ!

「ルーミアは、エヴァンジェリンさんを受け入れたいの」

受け入れられる。

受け入れて……くれる?

「……………」

そんなことは必要ない！そんなことに意味はない！
私は貴様を傍に置ける資格なんかないというのに！
理由なんかわからない！わかりたくもない！

だから、今は放っておいてくれ！

「あでっ」

両腕で突き飛ばして吹っ飛んだルーミアを他所に、私は走る。

タカミチと茶々丸の呼び止める声が聞こえるが、そんなことに構ってられない。

私は走る。意味など無い。

ただのストレス発散だ。

タカミチ視点

「……………行ってしまったね」

エヴァンジェリン君が走り出した途端、茶々丸君、ルーミア君の順で彼女を追いかけていった。

取り残された身としては、少し寂しい気もするけどね。

……まあ、こればかりは彼女達の問題だ。

僕のような部外者が割り込むのは、無粋ってものだろう。

けれどこれで確信が持てた。ルーミアは信頼できる。

あの子は、本当に純粹で無邪気な子だ。

けれども、誰よりもエヴァンジェリン君を『個人』として見てくれる。

過去や所業などを気にせず、誰よりも真つ直ぐとした目で人を視る力がある。

これならネギ君を、英雄の子としてではなく、一人の男の子として見てくれる。

例えばエヴァンジェリンからネギ君の事を聞いていたとしても、きっとそうしてくれる。

恐らくは学園長も魔法で見ているのだろうけど、直接伝えに行こう。ルーミア君は、麻帆良学園に良い影響を与えてくれると。

本当、子供というのはいいもんだね。

ルーミア視点

ようやくエヴァンジェリンさ……主が止まってくれた。

2対1の追いかけっこが終止符を打たれた頃にはあたりは真つ暗。

月の光で照らされるのは、ルーミア達と、ゴールである主の家。主はこつちを振り向いてくれない。ただ黙っていた。

「主」「マスター」

だから、ルーミアと茶々丸さんは主を呼ぶ。

……いつか、いつでも主のことを名前で呼べたらいいのになあ。

さっきはついつい名前で呼んじゃったけど、私は主の僕。マスターしもへ
いつか、名前で呼べるぐらいの仲になるのが、今のルーミアの目標。

「……本当に甘ったれた人喰い妖怪なのだな、ルーミア……」

相変わらず、マスターは振り向いてくれない。

さっきみたいに怒ってないみたいで、なんの感情も込めずに言うてくる。

「主は、そんなルーミアといるのは嫌？」マスター

「……嫌ではない。考え方が気に入らないだけの……ただのわがままだ」

「主は誰かと一緒に居るのは嫌なの？」マスター

「私は……私の周りには、今まで、誰も居なかったから……」

だから、居て欲しいと願う資格は、私にはない。

マスターの背中と言葉には、そんな意味が込められているように感じる。

これはルーミアの錯覚か、思い込みかもしれないけど。

だから、ほうっておきたくない。

「じゃあ、主の傍に、ルーミアと茶々丸は居てもいい？」マスター

「……近い日に決行することがある。私の悲願を達成できるかもし
れん」

あ、答えてくれない。ちょっとずるい。

「私の傍に居たいと言っのなら、働いてもらうぞ。……我が僕しもへ、ル
ーミア=B=D=ナイトレア」

マスターはやつと振り返ってくれた。

それと同時に、一陣の風が舞う。

月明かりに照らされた金髪が舞い上がり、吸血鬼の尊大さを物語ら
せてくれた。

かつこいいなあ。

「……わかりました。我が主マイマスター、エヴァンジェリン」

マスターの為になるっていうのなら、ルーミア、がんばる。

どんなことを手伝うかはわからないけど。

完

第12話「エヴァンジェリン一味、悪たくみをする」

ネギ視点

『3年！A組！！ネギ先生　っ！！！！』

あぶぶ、新学期早々なのに、皆さん凄く元気だなー。

これまで本当にいろんなことがあった。

図書館島の地下に落ちたときはどうしようかと思ったけど……。けど、無事に学年トップを取れて、ちゃんとした先生になったんだ。この1年間、皆さんの先生として頑張っただけ！

「えと……改めまして3年A組の担任になりましたネギ・スプリングフィールドです。これから来年の3月までの1年間、よろしくお願ひします」

「はい！」

「よろしくー！」

こうして皆さんから元気な挨拶を貰うと、なんだか嬉しくなる。

まだ話していない生徒さん達もいるし、友達も出来たし、この1年間で皆さんと仲良くなれるかなあ。

ん？なんだろ、鋭い視線を感じる……。

視線がした方を見ると、一番奥にいるけど、明らかにこちらを見つめている生徒さんが一人いた。

確かあの子は……あった。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルさん……ルーミアのお義姉さんだ。

困ったとき相談しなさいってタカミチが書いてあったけど……？

コンコン

ノックの音に振り返ってみると、そこにはしずな先生の姿が。なんだろ？

「ネギ先生、今日は身体測定ですよ。3年A組のみんなもすぐ準備して下さいね」

「あ、そうでした！ここで、ですか！？わかりました！で、では皆さん、身体測定ですので、今すぐ脱いで準備を……ハッ」

しまった言い間違えちゃった〜！

「ネギ先生のエッチ〜！」

「うわ〜ん〜！」

そんなつもりはなかったのに〜！

エヴァンジェリン視点

本当にバカだなあの坊やは……ルーミアと仲がいいのは類友だからか？

まあいい。クラス全員が準備し始めたし、私もさっさと脱いで準備するとしよう。

「ねえねえところでき、最近寮で流行っているあのウワサ、どう思う？」

柿崎の言葉に私は耳を貸す。

中々に広まっているようだな…… 『桜通りの吸血鬼』が。

ウワサに興味津々なのか、柿崎を問い詰めるようにして大勢が集まり始める。

最近の若者は怖い話に喰らいつきやすいな。

「何かね、満月の夜になると出るんだって。寮の桜並木に……真っ黒なボロ布に包まれた、血まみれの吸血鬼が！」

キヤーツと鳴滝姉妹が泣き叫ぶ。ふふん、怖がれ怖がれ。

何を隠そう、その吸血鬼の正体とは他でもない、この私…… エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルなのだからな。

魔力供給の為の吸血鬼活動だったのだが、今となってはウワサとして広がり、いい隠れ蓑として活用している。

「しかもね……このウワサ自体は前からあったんだけど、今年は特に凄いらしいのよ」

ん？他にもなにかあるのか？流石の私も初耳だぞ……？

私は柿崎の言う特に凄いという噂を耳に入れるため、こっそりと近づいて耳を立てる。

「最近、月が綺麗な夜によく出るらしいのよ……獲物を暗闇に引き

ずり込む、漆黒の悪魔が……！」

キヤーツ！キヤーツ！と叫ぶ鳴滝姉妹を他所に、私は絶句した。

……その漆黒の悪魔の正体は、十中八九ルーミアだ……。

奴は月の綺麗な夜に、自身の周りを暗闇で包み込んでから散歩に出かけることが多い。

そのせいか、いつも何かにぶつかっているようで、帰りはいつもボロボロだったしな……。

まさかあいつ、木々だけでなく人にもぶつかっているのか……？

「ウワサではその漆黒の悪魔は吸血鬼の僕らしくて、夜な夜な悪巧みをしているらしいよ……！」

抱き合つて震え上がって泣いている鳴滝姉妹を放っておいて、私は内心焦る。

……間違つてはいない内容に驚いたな……ウワサとは恐ろしいものだな……。

散歩の途中でぶつかつたと聞いても、大した問題でなかつたから放つて置いたが……。

今度、ルーミアに自粛するよう呼びかけるか……。

「バカねー、そんな生き物いるわけないじゃん」

不意に耳に入る言葉に私は振り向く。

ふむ、神楽坂明日菜か。貴様らしい反応だな……。どれ、一つ釘を刺しておこうか。

「だが気をつけた方がいいぞ、神楽坂明日菜」

私が呼び止めた途端、周囲の視線が私に注がれる。おっかなびつくりと言わんばかりの表情からして、滅多に話さない私が話しかけたことに驚いているのだろうな。

「桜通りの吸血鬼は、貴様のように元気でイキのいい女を好むらしいからな。気をつけた方がいい」

軽く驚いて呆けている明日菜の表情を見ると気分が良くなる。

精々、夜道に気をつけることだな……クククツ。

耳を澄ますと、ドタバタと慌しい音が聞こえてくる。

恐らくは、私に噛まれて倒れた、佐々木まき絵が見つかったのだろう。

さて……これでエサは用意できた。後は坊やが食いつくのを待つとするか……。

放課後、私と茶々丸は森の中を歩いている。

この時間帯になると人の気配が薄れ、この森に入ろうとするのは私達ぐらいだ。

人の目を隠すには都合のいい場所なのだが、念のために周囲を見渡してから、人払いの結界を張る。

茶々丸が無反応なものも、人が居ない証拠。魔法教師にも見つからないようだ。

「……ルーミア」

「はい」

草むらからひょっこりと現れたのはルーミア。すっかりこの森の住

人みたいになっている。

「お疲れ様〜」と私達に近寄り、茶々丸に頭を撫でられる。……だから甘やかすな茶々丸。

「はい、これ。今日も頑張ってるね」

「うむ」

私は桜通りの吸血鬼としての活動を始める為、この時間にこの森で遊んでいるルーミアを呼び止め、預けていた吸血鬼の衣装を受け取っている。

ルーミアが差し出した、桜通りの吸血鬼の衣装 とんがり帽子と大きく黒いボロ布 を受け取り、それを身に纏う。

「ところでルーミア、貴様、夜中の散歩に人にぶつかったりしていませんか？」

「うん、よくぶつかる」

……せめて誤魔化すなり慌てるなりしろ。
リアクションもなく素直に答えると、芸が無さ過ぎてつまらないではないか。

「……次から散歩は控える」

「え〜？けどバレないように、すぐ逃げているから大丈夫だよ〜」

「大丈夫じゃないから言っているんだバカ。貴様は今やウワサになつて……」

説教してやろうと口を開くが……止める。

……せつかくだ。ウワサを最大限に活かそうではないか。

「……ルーミア、少し付き合ってもらおうぞ」

「何に？」

「なあに……貴様には私の僕しもべとして働いてもらっただけさ」

ウワサに名高い、漆黒の悪魔としてな……くくく……。

「マスター主悪い顔」

「ルーミアさん、マスターのこの顔は、かつこよくて悪い顔です」

「そーなのかー？」

煩いルーミア、茶々丸。

完

第13話「ネギVSエヴァンジェリン」味・前編（前書き）

今回は前編・後編とあります。

第13話「ネギVSエヴァンジェリン一味・前編」

ネギ視点

……うつつ、今夜は風が強いなあ……少し寒い……。

いや、弱音を吐くわけにはいかない。

倒れたまき絵さんから感じた微かな魔力……僕の他に魔法使いがいるのは確かだ。

それに、僕が歩いているこの桜通り……ここでまき絵さんが寝ていた所を見つけたらしい。

もしかしたら、ここ最近に流行っている「桜通りの吸血鬼」は魔法使いかもしれない。

だとしたら、なんでまき絵さんを？

本当は疑いたくはないけど、その吸血鬼さんはまた人を襲うかもしれない。

なぜか知らないけど、また僕の生徒が危ない目に合う気がする。

だから、念のために桜通りを見回りしてみようと思って、ここに来ただけだ……。

……夜中の桜通りって結構怖い……って、弱気になっちゃ駄目だつてば！

「キヤーツ!!」

こゝこの声は宮崎さん!?

いたっ！正面の先！それにあの黒い影……あの人が例の『桜通りの吸血鬼』っ！？

「待てーっ！」

誰かに見られるなんて言っていられない！僕の生徒が危ないんだ！僕は黒い人影　吸血鬼さんに向かって叫び、杖に乗って素早く近づ

く！
「僕の生徒に何をしますかーっ！ラス・テル・マ・スキル……風の精霊11人・捕鎖となりて敵を捕まえる！」

ちよつと手荒だけど、風の拘束魔法で……っ！

『魔法の射手・戒めの風矢！』

「氷盾……」

僕が詠唱を完了したと同時に、吸血鬼さんが何か投げってきた。あれ
っ……。

バキキキインツ！

あわわっ！？ば、僕の『戒めの風矢』が全部跳ね返ってきた！？
あちこち飛び回ったけど、僕や宮崎さんに当たらなくてよかった……
……じゃなくてっ！

もしかして今の……魔法薬？それにこの魔法……やっぱり犯人は魔法使いだっ……こと！？

と、とにかく宮崎さんを……よかった！怪我は無いみたいだ！

「くっ……」

跳ね返したことによって生じた風圧で、吸血鬼さんの帽子が飛ばされちゃった。

……っ て、君は……っ!?

「驚いたな。『戒めの風矢』でこの威力……凄まじい魔力だ」

ウチのクラスのエヴァンジェリンさんっ!?!?

なぜあなたがこんな真似を……それより、あなたは魔法使いだったの!?

「10歳にしてこの力……さすがに『奴』の息子だけはある」

え?……奴の息子って……?

「な、何者なんですかあなたはっ!?!魔法使いのくせに何故こんなことを!?!」

「……貴様は全ての魔法使いが良い人だと思っているのか?」

「世のため人のためになるのが魔法使いなんです!それを……」

「ゲームでもよく言うだろう?世の中には良い魔法使いと悪い魔法使いがいるんだよ」

エヴァンジェリンさんはそういうと、二つの小さなフラスコを取り出してきた。

……まさかあれも魔法薬っ!?

『氷結武装解除!』

武装解除の魔法っ!?! 障壁じゃ間に合わないっ! なんとか抵抗で…
…っ!

うわっ!?!?

な、なんとか抵抗レジストに成功…っ て宮崎さんの服が破れたーっ!?!?
あわわっ、ど、どうしよっ!?! 裸の生徒さんを放つてはおけないし
…っ!
あーっ!?! 煙に乗じてエヴァンジェリンさんが逃げた!
に、逃げないでーっ!?! ど、どうしよっ!?!?

エヴァンジェリン視点

『戒めの風矢』に加え、あの抵抗レジスト…っ やはり常人から見たら半端無い魔力だ。
混乱に乗じてひとまずは逃げ出したものの…っ… 近くに神楽坂明日菜と木乃衛木乃香の姿があった。
おそらくは宮崎のどかを二人に預け、すぐに私を追いかけるのだからな。

坊やの得意な魔法は『風』。運動能力を強化すれば、私を追い抜くことなど容易い。
今のうちに指示を送っておくか。

(茶々丸、作戦開始だ。例の場所に坊やを誘導するから、ルーミア

に出撃命令を送った後にそこに向かえ)

私は念波で遠くにいる茶々丸に指示を送る。

(イエス、マスター)

これでよし。いくらあのバカでも、こんな時に寝はしないだろう。……断定できないあたりが不安だ。

叩き起こしてくれると信じているぞ、茶々丸。

ちなみにルーミアに念波を教えていないので、茶々丸と連絡が取れるよう、通信機を持たせている。

葉加瀬が作った茶々丸専用の特別な通信機らしく、所謂「ケータイデンプ」ではないらしい。

残念だ。いつか欲しいなあ携帯電話。

しかし結構高いし、面倒らしいし……。

「いた！待てーっ！」

むむむ、もう追いつかれたか。つい余計なことを考えてしまった。まあいい。まずは当初の目的だった、坊やの実力を測るとするか。さて……畏だと気づきはしないだろうが、私『達』を失念させるなよ？坊や。

ネギ視点

追いついたものの、エヴァンジェリンさんは杖も箒もなしに空を飛んで行っちゃった。

ただの魔法使いではないことは確かなんだけど……おかしい。

僕の『戒めの風矢』を跳ね返したし……もしかして『氷結武装解除』を唱えたのも、明日菜さん達に見られるのを避ける為のかく乱だったのかもしれない。

咄嗟の対応や状況の先読みを考えるあたり、エヴァンジェリンさんは凄い使い手なのかもしれない。

……けど魔法の威力は弱いし、その魔法の発動の為に魔法薬を使っていた……どうして？

いや、ごちゃごちゃ考えちゃいけない！聞かなきゃいけないことがあるのだから！

「エヴァンジェリンさん！どうしてこんなことするんですか！？先生として怒りますよー！？」

僕の生徒に手を出すなんて、許さないぞ！

……エヴァンジェリンさんも僕の生徒だから、手荒な真似はしたくないけど！

「はははは！そんなことより、貴様は聞きたいことがあるんじゃないか！？『奴』の事を！」

そ、そんなこととだなんて失敬な！

……けどエヴァンジェリンさんが言う『奴』って……まさか……！

「私を捕まえたなら教えてやるよ……貴様の父親の事を！」

！？

や、やっぱり知っているの？父さんの事を！？

本当かはわからない。嘘かもしれない。

けど……僕の魔力を見てそう言ったとしたら……もしかすると……！

知りたい……少しでも、父の手がかりを掴めるのなら！

「……本当ですね？」

直後、エヴァンジェリンさんにはっと笑い出した。

「ラス・テル・マ・スキル・マガステル！」

『戒めの風矢』が防がれるのなら……数を揃えて囲んでから捕まえる！

『風精召喚！剣を執る戦友！』

武器を持つ、僕に似た風の中位精霊8体を同時召喚させて、一気に押しかける！

『捕まえて！』

僕が指示すると同時に精霊達はエヴァンジェリンさんに向かって飛んでいく。

するとエヴァンジェリンさんは懐から何かを取り出し、放り投げた。

……また魔法薬だ！

その魔法薬が破裂したと同時に精霊が5体消えた。

やっぱり威力が弱い……これなら勝てるかも！

残りの精霊がエヴァンジェリンさんに衝突した！

……よしっ！追い詰めた！この距離なら捕まえられる！

「これで終わりです！風花・武装……っ！」

次の瞬間、僕の視界は黒一色に染まった。

完

第13話「ネギVSエヴァンジェリン」味・前編（後書き）

後編へ続きます。

第14話「ネギVSエヴァンジェリン」味・後編（前書き）

後編となります。

第14話「ネギVSエヴァンジェリン一味・後編」

ネギ視点

な、なに、どうなっているの!?

エヴァンジェリンさんを追い詰めたと思ったら、いきなり目の前が真っ暗に!?

……違う!目の前で見えているの、もしかして……黒い布?

バサバサと揺れるその黒いボロ布が目の前から消えたかと思ったら、僕の周りをあちこち飛び回り始めた。

くっ……視界が遮られたからか、エヴァンジェリンさんを見失っちゃった!

よく見てみれば、それは子供のようないろんな小さい人で、けどボロ布で隠れて素性がはつきりしない……。

まさか、エヴァンジェリンさんの仲間?この人も魔法使いなのかな……?

「うわっ!?!」

っ、杖にボロ布さんが掴まってきた!離してよ!上手く飛べなくなる!

この!この!離れてよ!……やっぱり後ろにいる人に、手で払うだけじゃダメか……。

けどボロ布さんはその小さな両手でしっかりと杖を掴んでいて、振り払いたくてもできない……っ!

って、ええええっ!?!め、目の前がいきなり、ホントに真っ暗になっただ!?!

さっきまで周りが見えるくらい明るかったのに、今じゃ何も見えな
い！

これも魔法！？け、けど詠唱してたようには見えなかったのに、ど
うして！？

そ、そういえばクラスの皆さんが話していたウワサで聞いたような
……！

（最近、月が綺麗な夜によく出るらしいのよ……獲物を暗闇に引き
ずり込む、漆黒の悪魔が……！）

頭の中でウワサの内容がリフレインされる。……まさか、こいつが
黒い悪魔！？

だとしたら、こいつもエヴァンジェリンさんの仲間かもしれない！
なんとかして振り払わないと！

「ラス・テル・マ・スキルマギステル！」

視界が見えない上に振り払えないのなら、風の障壁で吹き飛ばす！

『風よ！』

「わーっ！？」

風の障壁に吹き飛ばされて、黒い悪魔さんの悲鳴が上がる。

すると暗闇が晴れて視界が見えるようになり、振り向くと悪魔さん
が力無く落ちていくのが見えた。

よかった〜振り払えて……どこかにぶつかったりもしなかったし、
とりあえず一安心……。

……けどあの悪魔さんの声……どこかで聞いたような気が……。

「……気のせい、かな？」

ぼつりと呟いたけど、今はそれどころじゃない！エヴァンジェリンさんを探さないと！

エヴァンジェリン視点

(……マスター、ルーミアさんが敗れました)

(わかつとる)

茶々丸の報告は、むしろ当然の結果というべきか。

いや、それ以前に、この地点からでも見えているんだが。

ルーミアには、坊やを攻撃するな、と言っておいたからな。

そんなルーミアを振り払えないようでは話にならない。

坊やのことだから怪我をさせることもしないだろうし、奴はタフだから直に復帰する。

……む。やっと坊やがこちらに気づいたか。

(茶々丸、ルーミアにこちらに来るよう連絡した後、そのまま待機している)

(イエス、マスター)

さて、やっとご対面、といったところか。

屋根の上で私と坊やは向き合い、視線が合う。

坊やが杖を構えている所を見ると、いつでも魔法で捕まえられ、と言っているのだろう。

マントも魔法薬もある私を相手にしても勝算があると確信している証拠だ。

「追い詰めましたよ……僕の勝ちです。約束どおり、色々教えてもらいますよ」

「色々……というのは、なぜこんなことをしたのかという事と……貴様の親父『サウザントマスター』のことか？」

ほおら、名前を出しただけで驚きでした。顔に書いているぞ？「やつと聞ける」と。

「と、とにかく！このままやりあったとしても、僕が勝ちますよ！大人しく……！」

本当におめでたい坊やだな。

そんな浅はかな勝算で私に勝ったつもりでいるなどは。

……だが残念。既に貴様は詰んでいるのだよ。

「嫌だね。まだ捕まっていないからな」

「むっ……なら……ラス・テル・マ・スキル……！」

やはり子供だな。抵抗した途端にふくれっ面を見せて呪文を唱えだした。

しかし、その詠唱を止めんと茶々丸が現れ、坊やにデコピンをお見

舞いする。

「あだっ!?!」

突如として現れた茶々丸が予想外だったのだろう。
痛みと衝撃で詠唱が止まった。

ネギ視点

い、いった〜!おでこがひりひりする……!
だ、誰ですかデコピンしたの……なんでここにウチのクラスメイト
がいるの!?

「紹介しよう……まずは私のパートナー、3年A組出席番号10番
『ミニステル・マギ魔法の従者』・絡繰茶々丸だ」

ええ〜っ!?!? ちゃ、茶々丸さんがエヴァンジェリンさんのパートナ
ー!?!?

そんなの聞いていないよ〜!

「そしてこちらは、私の僕……」

ま、まだ誰か居たの〜!?!?

……あれ? エヴァンジェリンさんの後ろに居るの……さっきの黒い
悪魔さんだ。

やっぱりあの人も、エヴァンジェリンさんの仲間だったんだ。

その人がボロ布を脱ぎさって……え……?!

き、君は……っ!?

「貴様も知っているだろう?……ルーミア=B=D=ナイトレアだ
「よ」

「やつほ〜」

ル、ルーミア……!!!??

信じられないけど、あの能天気な笑顔は間違いなくルーミアだ!
どこかで聞いたような声だと思っていただけ、まさか黒い悪魔が君
だったなんて!

「さ、さつきはごめ……じゃなくて、なんで君がここに!?!」

動揺と後悔で頭の中が入り乱れる……!け、けど聞かないと!

「ルーミアは主の僕だからだよ〜」

し、僕つて……そんな簡単に自分から言えるものなの?

けど確か、ルーミアはエヴァンジェリンさんの従姉妹だったはずじ
や……?

仮にルーミアが魔法使いだったとしても、自分の従姉妹を手先にし
て、悪い事をさせるわけが……。

まさかっ!?!?

「ひ、卑怯ですよエヴァンジェリンさん!ルーミアみたいな子を操
るなんて!」

そつだよ！そつでなければ、あんな良い子が悪いことなんてするはずない！

……やっぱりそつだ！見破られたからか、エヴァンジェリンさんがびっくりしている！

「……くくっ……くは、あっはははははははは！！」

な、何が可笑しいんですかエヴァンジェリンさん！おなかを抱えて笑っちゃって！

「あはははははは！！」

……ってルーミア、君も笑わないでよ！目を覚まして！

なんで？なんで二人して可笑しそうに笑っているの？
なんでか知らないけど……酷く不安になる。

「くははは……ほ、本当におめでたい坊やだな……予想以上ではないか……」

涙を指で掬って笑いを堪えるエヴァンジェリンさんだけ……予想以上って、どういうこと……？

ようやくルーミアも笑いを止めると、いつもの笑顔を浮かべてこつちを見る。

……いつものようにまっすぐとして綺麗な目だ……操られている人の目じゃない……。

「だってルーミア、操られてなんかいないもん」

ええっ！？

ま、まさか本当に……エヴァンジェリンさんの手先……なの？

「じゃ、じゃあ君は本当に、ウワサの黒い悪魔だっていうの……？」

お願いルーミア……違つと言つてよ……！

「違つよ？ルーミアは悪魔じゃなくて、人喰い妖怪だもん」

「ええええええええええええええ！……！」

予想以上の答えだったー！！

し、しかも妖怪つて、あのジャパニーズモンスター！？

それも人喰いだつて！？冗談じゃ……はっ！？

『あなたは食べていい人間？』

あれは冗談じゃなかったつてことゝっ！！？

そういえばよく明日菜さんの手に噛み付いたりしていたし……、それなら……。

「残念だが質問は終わりだ。……茶々丸」

話を勝手に終わらせないでくださいエヴァンジェリンさ……うぐっ！？

「申し訳ありませんネギ先生。マスターの命令ですので」

うぐぐ……ちゃ、茶々丸さん……そんなに首を絞めないで……苦し……っ！

僕が茶々丸さんの腕に絡められて動けないことをいいことに、エヴ

アンジエリンさんとルーミアさんが近づいてくる。

締め付けられた直後に杖を落としちゃったし……ど、どどっしり……

…！

「状況が理解できたか坊や？」

エヴァンジェリンさんの顔が目の前に見える。その顔は、余裕が込められた笑み。

その横では、相変わらずルーミアが能天気には笑っている。

なんでなんだろう……いつもと同じ笑顔のはずなのに……うすら寒い何かを感じる……。

「チェックメイトだ。……坊やの負けでな」

僕に告げた直後、エヴァンジェリンさんとルーミアは歯を見せて笑い出した。

僕はその時、吸血鬼特有の鋭い犬歯と、肉食恐竜のような鋭い歯並びの二つを見た。

完

第15話「ルーミア、ネギに忠告する」

エヴァンジェリン視点

フツ、決まった。

見る、私とルーミアが歯を見せて笑った途端、坊やの目は恐怖で潤んでいるではないか。

人喰い妖怪であるルーミアの歯は、鋭さを変えようと思えば変えることが出来るらしいので、脅してやろうと事前に鋭くするよう言いつけてあった。

打ち合わせをした甲斐があったな……これこそ吸血鬼と妖怪が望む人間の対応だよな……。

まあそれはいいとしよう。

……いよいよだ。いよいよ待ちに待った時が訪れる……！

「主、^{マスター}とうとう呪いが解けるんだね」

ば、バカ！余計なことを言うなルーミア！

私の完全復活を喜んでくれるのは素直に嬉しいが！

「の、呪い……ですか？」

ほらみる！坊やに悟られてしまったではないか！

……まあいい。八つ当たりついでに教えておいてやるか。

サウザントマスターにかけられた、忌々しい『あの』呪いについて……っ！

「私はお前の父、つまりサウザントマスターに敗れて以来！魔力を極限まで封印され！もう15年間もあの教室で能天気な中学生と一緒ににお勉強させられているんだよ！！」

この！この！ああもう思い出すだけで、サウザントマスターに似てる坊やに八つ当たりしたくなる！

私の苦勞など、お子ちゃまである貴様から見ればわからんだらうな！

ええいこのほつぺめ！ほつぺめ！意外とのびよるなこの！

「へ〜、マスターにはそんな呪いが掛かっていたのか〜」

……はっ！？

し、しまった！坊やに怒りをぶつける事ばかり考えてたから懸念していた！

ルーミアには黙っておこうと思っていたのに！

「……？ルーミアさんはマスターの呪いの詳細をご存知なかったのですか？」

茶々丸はそれを聞いて意外そうな反応を示す。

当然の反応だ。

茶々丸には『ルーミアに私の呪いの事を話した』と言っただけで、呪いの詳細まで話した、とは言っていないからだ。

「すごい呪いが掛かっているってこと以外はちっとも〜」

そしてルーミアの返答も当然至極。

あまりにも恥ずかしい呪いの為、呪いの詳細を省いていたからだ。
……それなのに、バレてしまった……。

「ええい！これも貴様の親父が悪いんだからな！」

「そんなこと僕に振られても〜！」

ええい喚くな坊や！八つ当たり程度で泣くな！

……こらその二人！かわいそうなものを見るような目でこちらを見るな！

もういい！さっさと始めるぞ！

ネギ視点

え〜ん、八つ当たりなんて酷いよ〜！

そ、そんなことより、さっさと始めるぞって、な、何をする気なんだろう…！？

「ぼ、僕をどうする気なんですか……！？」

「サウザントマスターから受けた呪いを解く為に……悪いが奴の血族である貴様の血を、死ぬまで吸わせてもらうぞ……！」

そ、そんな〜！？僕知らないよ〜！干からびて死ぬなんてイヤだよ〜！

エヴァンジェリンさん、茶々丸さん、お願いだから離して〜！

あいたつ！噛まれた！血を吸われる〜！

……あれ、割と痛くない……むしろ気持ちいいかも……って！

「うわあ〜ん！誰か助けて〜！」

血が、僕の血が吸われていく〜！

こ、こんなことになるんだったら、誰かパートナーを探しておくんだったよ〜！

マスターマスター
「主、主！」

ル、ルーミア！やっぱり見捨てないでくれるの！？た、助けて〜！

「吸い終わったらルーミアにも食べさせて〜」

涎を垂らしながら、すっごくキラキラした眼で期待している〜！
ナイフとフォークとナプキンまでつけて、食べる気満々なの！？
というか、どこから出したの、それ！？
なんで〜！？酷いよ〜！友達だと思っていたのに〜！

「ごめんねネギ君、これも主マスターが自由になる為に必要なの」

そ、そんなこと言われても……！
なんでそんなに淡白なの？僕がからっからの干物になるっていつのに！

ルーミアは、僕のことを友達だと思ってくれているのかな……？

「……………けど大丈夫！」

だ、大丈夫ってなに！？もしかして何か手があるの！？

「友達は骨まで食べてあげるから！」

その何が大丈夫なのさ！？

期待していたのに〜！！

あんまりだよルーミア〜！涎を拭いてよ〜！

もしかしくなくても、頭の中が食欲で一杯でしょ！？

あ、頭がクラクラしてきた……だ、誰か助けて〜！

「コラー！アンタ達　っ！！！」

こ、この声は　　っ！？

明日菜視点

屋根の上で、あのガキンちよが誰かに羽交い絞めされているのを見た時は驚いたわよ！

だからといって見過ごせるほど、私は薄情な女じゃないわよ！

とにかく、目の前に居る変質者らしき人物からネギを引き離さないと！

荒っぽいけど、変質者にはこうしてやるわっ！

「ウチの居候になにすんのよーっ！！！」

必殺！トリプル明日菜キータック！！

「あ」

「あべしっ!?!」

「はぷうっ!?!」

見たか!強靱な脚力によって生み出された、空中三連続キックの威力!

しかも三人とも顔面直撃!おかげで三人ともすっごい吹っ飛んでいったわ!

我ながら自分のパワーが恐ろしいわね!女の子としては悲しいけど……っと、着地成功!

「さあて、堪忍なさい変質者!……って、あれ?」

あ、あんた達、うちのクラスの……えっと、なんて名前だった?顔は知っているんだけど、あんまり話したことないから……。

けど、驚いたのはそれだけじゃないわよ!

「なんでここにルーミアがいるのよ!?!」

「明日菜さんこんばんわー」

そうよそうよ!なんでネギを襲った連中の中にルーミアがいるのよ!?!

しかも普通に笑顔で挨拶してくるし!お子ちゃまは寝ている時間ですよ!?!?

「よくも……」

ん？あ、クラスメートの……えっと、金髪で小さい子が……あ、泣いている。

普通に考えたら、小さな子にキックはすごい痛いわよね……！
悪いことしたんでしょうけど、ここは素直に謝らないと！

「ご、ごめ！クラスメートだって知らずについ……」

「よくも私の顔に足蹴にしてくれたな神楽坂明日菜……っ！」

あー、目頭に涙溜めちゃって……ほ、ほんとにごめん……。

「今日のところはここまでにしてやる！退くぞ茶々丸！ルーミア！」

「イエス、マスター」

退くってどこへ……って、あーっ！二人して逃げた！？ていうか落ちた！？

こ、ここ8階よ！？飛び降りて大丈夫……って、あれ！？姿が見えない！？

どうなっているの……？

「出遅れちゃったー」

「うわぁっ！？」「ひゃっ！？」

び、ビックリした〜！ネギもすごいビビっているし……。

私とネギの間の中央にルーミアが立っている。

……置いてけぼりくらっちゃったのかしら？

「……そ、そうよ！なんであんたがうちのクラスメートと一緒にネギを……」

「今は聞かないで」

私が質問しようとする、ルーミアは静かにそういつて止められた。な、なによ、黙っている気？お子ちゃまの癖に、そんな真剣な顔しちゃって……。

「ネギ君、明日菜さん。これだけは覚えていて」

そういうとルーミアは振り返ってネギを見る。

ネギがびくりと震えちゃったけど……一体どんな顔をしているのよ？

「目の前ばかりを信じていたら、いずれ足元を掬われて転んじやうよ？」

……はい？

一体何が言いたいのよあんたは？

訳の分からない事を言われたので、私もネギも少し固まっちゃった。ルーミアはそれだけ言うと、ふわりと浮かんで空を……は？へ？空を？

そのまま夜空の彼方まで飛んでいつちゃった……え？なに？あの子も魔法使い？

そもそもどうしてクラスメートと一緒にネギを……ってそうだ！ネギ！

「うわーんアスナさーんっ！」

ぎゃーっ！おち、落ちるーっ！いきなり飛び掛ってこないでよ！

「こわ、こわかったですーっ！」

「怖かったのはわかったから、落ち着きなさいよ！」

むしろ、あんたに突き落とされないか心配で怖いわよっ！

エヴァンジェリンは、己の従者である茶々丸の片腕に居座り、同じく己の僕であるルーミアを待っていた。

その茶々丸はといえば、背中のブースターで空中を漂わせ、今か今かと帰りを待ち続けていた。

そんな彼女達に伝えるようにして、ルーミアは飛んでやって来た。

「……遅いぞルーミア。何を話していた」

つい存在を忘れていたことなどこの際忘れ、到着に遅れた己の僕に問う。

「ちょっとだけ忠告」

能天気な笑顔を浮かべながら、ルーミアは答えた。

余計なことをするな、とエヴァンジェリンが言葉を漏らす。

「……でもどうしよう主、明日菜さんに見られちゃったよ？」

今頃はネギが明日菜に抱きついて泣いているのであろう、屋根の上を見てからルーミアは言った。

なるべく他人に見つかるな、と前もって忠告されていたからだ。

それが破られ、こともあるうにエヴァンジェリンのクラスメートに見られてしまった。

それ以前にルーミアは、エヴァンジェリンはネギを憎んでも殺しはしないと信じ切っていた。

だからこそ悪戯をするような気でしたが、正直、本気で干物にならないかと心の中ではひやひやしていた。

これから、主は^{マスター}どうするのだろうか？

そんな小さな疑問を胸に、ルーミアはエヴァンジェリンの反応を待つ。

「気にするな。どうせ我々に太刀打ちできるような相手ではない…

…はずなんだが」

エヴァンジェリンは、今になって己の言葉に疑念を持った。

ただの一般人なら魔法使い相手にかなうはずがない。

驕りや油断とは無縁の熟練者である彼女からしても、そればかりは確信していた。

だがあの神楽坂明日菜は、なんの支障もなく魔法障壁を貫通し、己を蹴った。

特別な能力でも持っているのだろうか？そんな事ばかり考えてしま

う。

……だがしかし、それは特に問題ないだろう。

エヴァンジェリンは本来の目的と照らし合わせた上で、そう判断した。

「とにかく、奴にパートナーが居ない今がチャンスだ。必ず奴の血を手に入れる」

当初の目的は呪いを解くこと。そのために必要な獲物を狩るだけだ。もちろん学園側が黙っていないだろうが、そこは彼の「英雄の息子」。
注意こそするだろうが、これも彼の為の試練だと大目に見ているだろう。

ようは殺さない程度にすればいいのだ。

エヴァンジェリンは、己が行動する為に必要な、様々な事を理解していた。

だからこそ動ける。だからこそ襲える。

そして、それを成就する為の手駒も、己の手の中にある。

「……お前らには存分に働いてもらうからな？」

エヴァンジェリンは己の手駒を見やる。

一方は、機械技術に優れ、己に忠実な機械人形。

一方は、底知れぬ闇と魔力を持つ、無邪気な妖怪。

「イエス、マスター」

「はい」

両者は答える。両極端な対応ではあるが、意味の違いは無い。
茶々丸は従者故の忠実さを、ルーミアは殺しはしないという信頼を
胸に抱いて。

「覚悟しておけよ、先生。……我々から逃げられるとでも思っつな」

完

第15話「ルーミア、ネギに忠告する」(後書き)

ルーミアは闇を喰らうようになりましたが、人間を食べるのも大好きです。

その上、食べれるかもしれないと思うだけで、よく頭の中が食欲で一杯になってしまいます。

つまり、典型的な食いしん坊キャラだと思ってください(笑)

第16話「ルーミア、オコジヨ妖精を捕らえる」

ルーミア視点

「今日はとってもいい天気〜 明日もきつといい天気〜」

うーん、太陽が眩しくていい天気〜

心地よくて好きなんだけど、ルーミア、眩しいのはちょっと苦手。

目が……目が……しばしばする。

^{マスター}主もこんな天気だと元気ないみたいだし……。

ルーミア達みたいなのを「夜行性」って言うんだよね、きつと。

それなのに、こんな時間にお勉強かー。大変だろーなー。

ルーミアは寺子屋で慣れっこだからいいけど、主は^{マスター}どうなんだろう？

それにしても麻帆良学園って広いなー。ちつともわかんないや。

……もしかしなくても、これって迷子なのかなあ？

それにしても、今朝のネギ君ったら可愛かったなー。

ルーミアを見た途端にすたこらさつさと逃げちゃったんだもん。

それだけ怖かったんだねー。次からは歯を尖らせないでおこうかな。

けどあれで怖がるなら、幽香さんのお仕置きを見たらどうなるんだろ？

少なくとも、生涯トラウマになるのは確定かな？

良い人なんだけど、怖いんだよねー、幽香さんって。

……相手にしてくれなかったのは、ちよつと寂しいけど。

ん？なにあれ？

なにか白くて細長いものが、ぴよんぴよん跳ねたり走ったりしている。

……興味が沸いちゃった。追っかけてみよつと

謎のオコジヨ視点

ふう……ウエールズから遙か3千里。……大げさかもしれねえけど、
けど、ついに……ついにたどり着いたぜ日本……！

俺っちはカモミール・アルベール。しがねえオコジヨ妖精でござんす。

とある事情によって追われた俺っちは、敵の目を掻い潜り……数々のドラマを繰り返す旅路を歩んできやした……。

全ては唯一頼れる人間……ネギの兄貴を求めて……！

そしてやっと兄貴がいるという、日本の麻帆良学園にやってきたってえわけよ！

聞くも涙……語るも涙……漢^{おとこ}・カモミール^{おとこ}アルベールの苦難は、
ここで……ぐぶえっ！？

な、なにごとつ！？

「……………」

さかさまの視線の中で、金髪で紅目のお常ちゃんの顔が見えやがる

……。

い、いつのまに俺っちを掴まえやがったんだこの嬢ちゃん！？た、
只者じゃねえ……！

ていうか、ものすげえ握力……ちょ、ちよつと、腹が苦し……っ！

「……………」

！』

へー、白いイタチって喋るのかー。後で主マスターに聞いてみよつと。妖獣の類かな？なんとなくだけど、てゐちゃんのお友達だったりして。

主は物知りだから、きっと喋る白いイタチについて知っているかも。

『ちょ、ちよつと嬢ちゃん！話を聞いて！せめて足を止めてくださえ！頭に血が上る〜！』

そんなこと気にしない〜

「弱肉強食が世の定め〜」

人間は別だけど、動物なら遠慮なく食べていいって、けーねせんせー
ー言っていたもん。

山の動物を捕らえて食べるのは自然界の掟。

それを言うなら人間も自然界の掟に入るんだけど、けーねせんせー
から人里の人間は例外にしてくれって頼まれたの。

……まあとにかく、この白イタチは間違いなく弱肉の類だね

『そ、そんな殺生な！？っていうか、オコジヨが喋ってもなんとも思
わないんですかい！？』

そんなこと気にしな……あれ？今なんて？オコジヨって言ったね？
とりあえず立ち止まって、握り締めたまま、逆さの白イタチを見る。
……イタチって、胴体と尻尾の長い、ネズミみたいな動物のことを
言うんだよね？

「イタチじゃないの？」

『失敬な！さつきから言おうとして言えなかったが、俺っちは立派なオコジヨ妖精ですぜ！』

オコジヨヨーサー？

妖精っていうからには、チルノちゃんや大ちゃんの仲間なのかな？
けど羽もないし、飛んでなかったし、弾幕も撃てないみたいだけど……。

……そんなのどうでもいいや。一番大事なのは……。

「食べられる？」

これだけ。

『お、俺っちを食べても美味しくないですけど！煮ても焼いても不味いこと間違いなし！おまけに毒もありますぜ！それも致死毒！』

うん、美味しくないのか。しかも毒なのか。

……けど美味しそうだな。嘘かもしれないし。
どうしよ。

「……^{マスター}主に聞くと」

うん。解らない時はこれが一番確実だよな。

というわけで、いざゆかん主^{マスター}と茶々丸さんの下へ！

『ひえ〜！お助け〜！兄貴〜！』

暴れているし、叫んでいるし、なんか手に生暖かい液体が掛かって

いるけど。

……気にしない〜 お鍋の具になるといいな〜

けど、主と茶々丸さんマスターどこにいるんだろ？

……あ！そうだ！困った時の……あつた、あつた！

茶々丸さんに繋がる通信機！

茶々丸視点

サボタージユなさったマスターを迎えに来たのですが、妙に不機嫌ですね？

この時間帯にはお昼寝しているとばかり予想していたのですが……。

「茶々丸、結界を越えて学園内に侵入した奴がいる。調べるぞ」

ああ、それでマスターは昼寝の最中から目覚めてしまい、不機嫌そうなのですね。

マスターの寝顔を録画できる、マスターの安眠を妨害した罪は重いのです。

即刻に探し出して仕置きしましょう。

と思っていた頃、ルーミアさんからの通信を確認。

機械少女通信中……。

話を聞くと、私達……正確にはマスターに用事があるとのこと。
なんでもオコジヨ妖精なる物を捕まえたとか。……なんでしょうか？
それ？

とにかく、ルーミアさんは私達の所へ向うとのこと。

ルーミアさんの知性なら、恐らく通信機のレーダー画面を参考にすれば、私達の所へたどり着けるはず。

人に気づかれないように空を飛べば大丈夫のはずです。

ルーミアさんは隠れるのがお上手なので心配は無用です。

友達と鍛えていた、とか。

「マスター、ルーミアさんが喋るオコジヨを捕獲しました。自身を毒性のあるオコジヨ妖精と名乗っているようで、毒性の確認のためにこちらへ持ってくるそうです」

それにしてもオコジヨは正確には哺乳類で、毒性が無い動物のはずでしたが……？

「オコジヨ妖精……なるほど。もしかするとそいつが結界を越えた侵入者かもしれん」

手間が省けて丁度いい、と呟くマスター。

私としても丁度良かったです。

ルーミアさんが食したいとおっしゃっていましたし、存分に腕を振るいましょう。

「ネギーっ！」

おや、この声は……明日菜さん？

明日菜視点

もー！あいつつてばどこ行っちゃったのよ！

少し目を離れただけでいなくなるなんて、いくらなんでもおかしいじゃない！

ま、まさかエヴァンジェリンに連れ去られた……とか？

ネギからはエヴァンジェリンが吸血鬼であることや、襲われたことは聞いていたけど……。

もしかして今頃、あんなことやこんなことされていたりなんかして？……つて、なに私はいいinchよみたいな妄想していいの!？

なんとしてでも早く見つけ出さないと！

「神楽坂明日菜か」

ん？この声……あつ！エヴァンジェリンちゃんと茶々丸さん！

どうしてこんな所に……やっぱり、ネギをさらったのってこいつら!？

「あんた達、ネギをどこにやったのよ！」

さあ吐きなさい！吐かないと今一度、必殺の明日菜キックが……！

「……なんの話だ？」

……つてあれ？

エヴァンジェリン……ええい、長ったらしいから、エヴァちゃんでもいいや。

彼女が首を傾げて、逆に私に聞いてきた。

「と、とぼけるんじゃないわよ!」

「とぼけるもなにも……ほれ」

そういうとエヴァちゃんは、ほっぺを引っ張り出した。何をしているの？

……あれ？歯がとがってない……あんときは解りやすいぐらいにとがっていたのに。

「次の満月までは、私は普通の人間と変わらんのだ。おまけに魔法も使えん。今の状態では坊やをさらうこともできんし、例え坊やをさらったとしても、血を吸えないから無意味なのだ」

「そうなんだ……」

えーっと、ゲームでいえば吸血鬼モード解除、みたいな感じ？

襲う気は無いつていうんだったらその方がありがたいんだけどね。

……じゃあどうしてネギがいなくなったの？

「マスター！茶々丸さん!」

うわっ！びっくりした!

誰よ後ろから大きな声で出てくるのは!?

「……って、ルーミア?」

「あ、明日菜さん。こんにちわー」

なんだルーミアか。驚かさないでよこのガキんちよ！
けどルーミアったら、昨日の夜にあんなことがあったのに、相変わ
らず暢気な顔をしているのね。

……まるで、あんときのあの顔が嘘みたいねー。

……ん？ルーミアの手に持っているのって……イタチ？

どこで捕まえたの？ていうか、なんで捕まえたの？

『は、離しやがれーっ！』

イ、イタチが喋った……っ！？

「ほう……オコジヨ妖精か。妖怪が妖精を捕まえるなんてシユール
な光景だな」

なにその変な妖精！？そんなファンシーな妖精がいるんだ？
どうせならウサギとか子猫とかにすればいいのに、なんでオコジヨ
なんだか……。

ん？

「え？……妖怪？」

って聞こえたけど……妖怪って誰のことを指しているの？

……まさかだと思うけど、そんなことないわよね。

いくらエヴァちゃんが吸血鬼だったとはいえ、まさかこの子も、な
んてことは……。

「いずれ明らかになるかもしれませんが、ルーミアさんは人喰い妖怪なんで
信じられないかもしれません、ルーミアさんは人喰い妖怪なんで

す

「人喰い妖怪くっ！?!?!?」

茶々丸さんったらさらっつと凄いを言うのね!? ルーミアが妖怪だつて!?

嘘よねルーミア……つて、何今日一番の笑顔を浮かべて頷いているのよ、あんたは!?

そつえばよく私の手に噛み付いて……まさかあれつて味見!? わ、私は美味しくないわよ!? 每晚身体を洗っているから石鹸の味がするわよ!?

「ですがご安心を。ある事情によって人喰いは止めております」

そ、そうは言われてもね……。けどルーミアは悪い子じゃないみたいだし……。

『兄貴く!ネギの兄貴くつ!』

ああもうさつきからギャーギャー煩いわねこのオコジヨは……。

ん?ネギのアニキ……?」

「わーん!やめてくださいー!」

あ、あの声はネギ!?

聞こえた方角からすると……浴場ね!

理由はともかく、早く行こう!

カモミール視点

「……何がしたかったんだ？あいつ？」

「私にはわかりかねません」

「ルーミアもさっぱり」

あのアスナっちゆう姉さんがいきなり走り出したのを見送る三人娘達。

本当に何がしたかったんでしょうかねえ？

……けど、さっきの悲鳴ってまさか……。

いや、それよりも今のうちに……っ！

「そうだマスター、これ食べられる？」

ひっっ！駄目だった！

あ、あ、俺っちをこれでもかと姉さん方に見せないでくださいええ！

興味津々、とばかりにこちらを見る目が、明らかに良いものじゃねえ！

一方なんか、なんでか知らねえが、殺意みたいなものを感じるんですけど！？

「妖精は不味くて食べないらしいが……オコジヨ妖精は聞いたことがないな」

そうです、そうです！俺っちはこの上なく不味いつすよ！？

だ、だからここは大人しく見逃してくださいることをオススメして……

…。

「せっかくだ、侵入者排除もかねて、試しに調理してみる」

げげっ、この嬢ちゃん、この学園の関係者だったのか！？
俺を敵意の眼差しで睨みつけてきやが……ひいいいい！？

なにこの幼女、目が怖い！

「イエス、マスター」

『ひっ！』

誰か助けてくれ〜！

このままじゃ喰われちまう〜！

兄貴〜！！

完

第16話「ルーミア、オコジヨ妖精を捕らえる」(後書き)

カモミールが捕まったことにより、宮崎のどかとネギの仮契約未遂は無しとなります。

期待していた方、申し訳ありません。

ネギ君やのどかちゃんを騙すはいけないよね！

というわけで、しばらくカモミールはルーミアに捕まります。

カモミールは嫌いではないのですが、この作品では少しマトモな子にさせたいと思います。

2011/10/10：修正。キャラクターの悪口を言ってしまう
申し訳ありませんでした。

第17話「ネギ、ルーミアと取引する」

ネギ視点

はー、なんとか抜け出せてほっとしたよー。

明日菜さんと歩いていたら、突然連行されたんだもん。すごくびっくりしたよー。

もつとびっくりしたのは、クラスメートの皆さんが水着でお出迎えしたことだけど……。

けど、皆さんが僕を元気つける為に開いてくれたのは、凄く嬉しかった。

おかげで少し元気出たかもー。

……明日菜さんが助けに来なかったら、僕は今頃どうなっていたんだろう……？

そう考えると、ちょっと怖いかも。

「もー、いきなりいなくなって心配したんだからねー」

「心配かけてしまってすみませんでした」

明日菜さんにも凄く心配かけちゃったし……明日からまた頑張らないとー！

エヴァンジェリンさんは怖いし、ルーミアと会い辛いけど……なんとかしないとね！

そんなこんなで無事に部屋に到着。ほっとするなー。

……よし。助けてくれた明日菜さんの為に、美味しい紅茶を淹れて

あげよつと。

「あ……ネギー、あんたのお姉さんからエメールが来てるわよ？」

え？お姉ちゃんから？

郵便受けを見ていた明日菜さんの手には、一通の手紙。

それを受け取って、念のために確認する。……ほんとだ、お姉ちゃんからだ。

帰って早々にお姉ちゃんから手紙が来るなんて、嬉しいなー。

さっそく開けてみてみよつと。

この時僕は、その手紙に衝撃的な事実が示していたことなど、知る由もなかったのです……。

カモミール視点

ひー！どうしてこうなった!？

「妖精とはいえ、オコジヨ妖精は動物のオコジヨとあまり変わらんらしい。山に暮らす小動物なら、調理次第で喰えるだろう」

やたらと目つきが鋭い金髪のお嬢ちゃんが本を開き、俺っちが喰えることを保障する。

「では臭みや肉質を考えて、捌いて臭みを取って煮て料理しようかと考えていますが、いかがでしょうか？」

まんまロボットみてえな姉さんがエプロンを付け、残酷な調理方法を宣言する。

「はいはい！お鍋！お鍋がいいー！」

やたら能天気そうな、リボンが特徴的なお嬢ちゃんが無邪気に提案する。

……俺っち、100%喰われる運命なんですかい！？

逃げてえのは山々なんだが、両足を紐で縛られていて、身動きが取れねー！

しかもご丁寧に、口にガムテ！喋れたとしても、食材には情けなしってことですかい！？

こんなことになるんだったら、大人しく捕まってムシヨで暮らしくんだったー！

ごめんよ兄貴いー！兄貴を盾にして、罪から逃れようとしちまって！だから頼むー！誰か、食材エンドまっしぐらな俺っちを助けてくれーっ！

「鍋か……よし茶々丸、さっそく鍋の調理に入れ」

即決！？

自宅のソファでくつろぎながら、茶々丸なる姉さんに命令するチビっ子。

このガキ、随分と偉そうじゃねえか。へっ、これだからワガママ嬢ちゃんはよじ。

「イエス、マスター」

ぎゃぶっ!?

いやー！俺を掴んで台所に連れていかないでー！頼むよ姉さん！
っ、ついに俺はまな板の上に置かれてしまった……姉さんの手には、
ぎらりと不気味に光る包丁が！

ひー！やめてー！切っ先をこっちに向けないでくれー！

「茶々丸さん！茶々丸さん！」

この声は気楽そうな嬢ちゃん!?包丁の動きが止まった!

あ、あんたにはまだ、子供らしい優しさが詰まっているんですね!?
そのまま助けてくれたりなんて……。

「お鍋はすき焼き風がいいな」

味付けの話ですかい!!!

駄目だこりゃ！あのガキンチョは食欲の権化ですかい!?

「何を言うルーミア。ここは無難に寄せ鍋だろう。白菜、にんじん、
豆腐、しらたき……オコジヨだけじゃ足りんから豚肉を足して、先
に固い野菜を入れてだな……」

いや……そういう問題ですかい？俺っちが言うのもなんですが。
ていうか、このお嬢ちゃんって意外と鍋奉行……？

「あれ?……ねえ、お葱は?」

「私は葱が嫌いだから脚下だ!」

「駄目だよ！お鍋にお葱は必須だよ！好き嫌いしちゃ大きくなれないって、けーねせんせー言っていたよ！？」

「鏡で自分の姿を見てから言え！それともなにか、私へのあてつけか！？」

「違うもん！お葱が無いお鍋なんて物足りないだけだもん！後、食後のうどんも！」

「食後のうどんは認めよう！しかし葱は認めん！」

「論点がずれたから戻すけど、お鍋はすき焼き味がいいー！」

「油断も隙もないな貴様！？……茶々丸！家主、いや主の命令だ！鍋は寄せ鍋だ！無論、葱抜きで！」

「茶々丸さん！ここは主の栄養を^{マスター}考えないと！せめてお葱だけはー！」

「しつこすぎるー！少し引いたぞ！？」

「マスター、ルーミアさん、お二人とも落ち着いて……」

食卓から響く凄まじい鍋論争。

こいつら、本当に人間か？嬢ちゃん達の剣幕がパねえー。

そんなチビ共の喧嘩を見過ごせないからか、姉さんは包丁を置いて食卓へ。

しめたっ！逃げるなら今しかねえ！

このカモミール・アルベールの脱出劇はここから再スタートするんでい！

ネギ視点

……ま、まさかあのカモ君がそんなことをしていたなんて……。

お姉ちゃんの忠告を聞き終えた今となつては、驚愕で頭がいつぱいだった。

それはきつと、僕の隣で顔を赤くして呆然としている、明日菜さんも一緒だと思う。

「ど、どういうことよネギーっ!? あんたが助けたオコジヨが下着ドロでウェールズから逃げ出したなんてー!」

あぶぶ、そんなこと僕に言われてもー!

確かにカモ君はエツチなオコジヨ妖精だったけど、悪いオコジヨ妖精じゃなかったもん!

けどまさか、下着2千枚も盗んだなんて!

と、とにかく、カモ君がここに来ているっていうんなら、事情を聞かないと!

明日菜さん、どうしたんですか? そんな目を開いて固まっているなんて。

「……ネギ、そのオコジヨ妖精つてやつに心当たりがあるかも……」

え?何を言っているんですか明日菜さん?

明日菜さんはカモ君のこと、会ってもないし知らないはずなのに…。

カモミール視点

せっかく両足の紐を解いて、ガムテも剥がしたっていうのに！
華麗なる俺っちの脱出劇は、ものの1時間で見事にバレちまいましたっ！

「もー！逃げちゃ駄目でしょメインお肉！」

だれがメインお肉ですか！

驚掴みされている俺っちを離してくれー！

あの極悪女共から逃げ出して、なんとか人目が着く場所にまで辿り着いたのはいいが……。

よりもよって、このルーミアって呼ばれていた嬢ちゃんにまた捕まるなんて！

あ、あ、そのまま帰路に着かないでくれーっ！

『そ、そうです！お鍋の話はどうなったんですかい？』

せ、せめて逃げ出す隙をつくらねーと！

あれだけ揉めていたんだ！まだしがらみは残っているかもしれねえ！

「茶々丸さんが

『喧嘩するぐらいでしたら、鍋はキムチ鍋（葱抜き）にします』

だつて」

まさかの妥協案!?

俺っちが喰われる運命に変わりにはねえっす!

「だから、大人しく食べられてね 年貢の納め時だよー」

使い方間違っていないませんか!?

『ぎゃー! 兄貴〜!』

どうかお助けを〜!

「ルーミア! カモ君!」

こゝ、この声は、まさか!?

や、やっぱり天は俺っちを見捨ててはいなかったんすね!
そこにいらっしやるは、我らがネギの兄貴じゃねえか〜!

ネギ視点

まさか明日菜さんがカモ君を知っていたなんて思いもしなかったよ!
エヴァンジェリンさんに捕まったって聞いた時にはどうしようかと
思った。

けど、クラス名簿を見てエヴァンジェリンさんの住んでいる所へと
向った最中、カモ君を掴んだルーミアを見つけたのは幸いだっただ。
僕と明日菜さん(ついてきてくれたんだ)は、カモ君を握っている

ルーミアの前に立ちはだかる。
え、エヴァンジェリンさんに見つかりませんように……！

「カモ君！無事！？」

『あ、兄貴〜！ご無沙汰でさ〜！』

せつかくの再会なのに、よりもよって食いしん坊なルーミアに捕まっちゃうだなんて！

「あれ？ネギ君？こんにちわー」

「こ、こんにちは」

身構えたのに、条件反射で挨拶しちゃった。
けど……やっぱりいつも通りだ。あの時の恐怖とまったく重ならない。

「この鍋の具モドキの知り合いだったの？」

な、鍋の具モドキって……カモ君を食べるつもりだったの？
というか、喋るオコジヨを見て驚かないんだ……僕が言うのもなんだけど。

「カモ君は僕の友達なんだ」

「そーなのかー」

うっ……あんまり反応が無いね……ルーミアにとってカモ君は食材扱いなのか……？

友達だつて理由だけじゃ、ルーミアは離してくれないみたい……。

「あ、あのねルーミア。よかつたらカモ君を離してくれないかな……？」

「いやー。ルーミアが捕まえたんだよ？」

カモ君を握つたままイヤイヤと身を揺するルーミア。
わぐん、カモ君を返してよ。けど怖くて強気になれないよ。

『た、助けてくれ兄貴〜！』

「お願いだよ！カモ君は僕の……」

「そんなことより！」

わっ、びっくりした！

な、なんですか明日菜さん、いきなり割り込んできて……。

「ネギのお姉さんから聞いたわよ！ウエールズで下着ドロしたんですって！」

お姉ちゃんからの手紙をカモ君に見せ付けて明日菜さんが問い詰める。

するとカモ君は「ドキンっ！」って声に出して、体中から脂汗をにじませた。

もしかして本当に下着泥棒をしたの！？

『あ、いや、それは……』

カモ君は手紙どころか僕ですら視線を反らし、泳がせている。もしかしくなくても、本当なのかもしれない。

「ネギ、こんな奴、本当に助けちゃっていいの？」

「こんな奴だなんて酷いですよ！カモ君は……」

確かに女の人の下着を盗んだと聞いたたら、普通はその人を嫌がるものだと思う。

けれど僕は、カモ君を助けたくて……。

「それでいいの？」

突如として開いたルーミアの口から出た言葉。

その目はまっすぐと僕の目を見ている。

どうしてなのか、僕の心を読み取ったかのように感じられた。

「ネギ君、この鍋の具モドキはルーミアが捕まえたの。この世は弱肉強食。喋れる妖精だとしても、それは同じ。それも泥棒だったら、食べられても仕方ないんじゃない？」

「そ、そんなこと……っ！」

「だけどね？一つ聞くよ？」

そういうとルーミアは、すっと息を吸う。

少しだけ間をおいて、口をゆっくりと開いた。

「ネギ君は、悪いことをした友達をどうしたいの？」

目の前ばかり信じていたら、足元を掬われて転んじやうよ？

あの言葉が僕の頭の中で響く。あの時のルーミアの顔が脳裏に描かれる。

ルーミアは目の前ばかりを信じているだけではなく、何か別のものを見て物事を決めているんだらうか？

とてもそうには見えないけど……けど。

考えなきや。僕はカモ君をどうしたいのか。

助けたい。けど泥棒したというのなら、それは放っておけない。友達だから。

だから……。

「……カモ君、下着泥棒をしようというのは、本当なの？」

『え、えっとそれは、冬支度の為に拝借させてもらって……』

「けど、それは盗んだっていうのと同じだよな？」

『そ、そうともいえませんが……俺っちは知らなかったんで……』

「罪だと言われて、ここまで逃げてきたのに？」

『あ、えー……』

僕の質問に対して、カモ君はずっと焦ってばかりいる。もしかしたら、いつルーミアに食べられるか解らなくて不安がっているのかもしれない。けれども……まずは確認しなきゃならない。

「カモ君は僕の友達だ。けど泥棒をして逃げたというのなら、もしかしたらそうなくても当然の仕打ちなのかもしれない」

『そ、そんなあ〜！兄貴い〜！』

「だから、約束して。一緒にウェールズの皆と話し合おう。そしてもし泥棒したのが本当だったら、皆に下着を返して謝って欲しいんだ。……できる？」

『……できます！』

そっか……一瞬だけ悩んでいたけど、僕をまっすぐ見てそう言うてくれたのは嬉しいよ。

……それが解ったなら、僕がこれからする事は決まっている。

「約束してくれるのなら……ルーミア」

今なら、僕はルーミアをまっすぐと見ることができると。怖くなくなつたから。

そのまま僕らは互いに見つめ合う。笑いもせず、怒りもせず。

そして僕は考える。どうしたらルーミアがカモ君を離してくれるのか。

その条件は、これまでルーミアと過ごしていた日々を思い返すことで導きだせた。

食材として力毛君を捕らえたのなら。

「取引をしよう」

僕が言いだしたと同時に、ルーミアは僕の考えを読んだかのように、にっこりと笑みを浮かべた。

答えが解って喜んでいる子供のような、明るい笑顔だった。

その後の対応 すなわち『取引』は順調に進んだ。

要するに物々交換である。

ネギには友達を助ける為、ルーミアは夕飯のおかずが無くなるのを避ける為に、それ相当な代価をネギが支払うことで解決するからだ。ネギはルーミアの希望で、お財布に厳しいぐらいに高い牛肉を交換される羽目となった。

それでも、友である力毛を二重の意味で救えるとなればと考えると、決して高くはないと思える。

こうして両者はいがみ合うことなく解決し、夕焼けが沈む前に帰路に着いた。

しかし、大変なのは両者ともにここからだった。

ネギは学園長を通じてウェールズに事情を聞き、場合によっては弁解や謝罪をしなければならぬ。

仮にカモの罪が晴れたとしても、その後のネギの環境に大きな変化が現れるのは間違いない。

まずやらなければならぬのは、カモの飼育許可を得ることと、明日菜が訴えている工口親父言動への忠告。

これだけでも頭を悩ませるから、今後のネギの気苦労は絶えなくなるだろう。

一方のルーミアといえば、もっと大変だ。

まず、捕まえると言っておきながら帰りが遅くなった事への叱咤。

これは腹を空かせていた上にルーミアの身を案じていたエヴァンジェリンだけではない。

ルーミアをとて心配していたからか、珍しく茶々丸も物凄く叱ってきた。

さらに、あのオコジョ妖精はネギの知り合いだったと話すと、エヴァンジェリンは軽く驚いた。

どうやらオコジョ妖精には契約の儀式を扱える力を持ち、ネギにパートナーが出来るきっかけになりかねないという。

主人の許可なく勝手に取引したことに對しても、エヴァンジェリンは全身からとんでもない気迫を漂わせて怒っていた。

ルーミアにとつては初めてとなる、幻想郷の寺子屋の先生である慧音以上の厳しい叱咤だった。

もしも高級和牛という土産が無かったら、もしかすると氷漬けの刑どころの話ではなかったのかもしれない。

もちろん反省はしている。後悔もしていない。

しかし、エヴァンジェリンの本気を垣間見た気がした。

その後は、しばし叱責を忘れて一家団欒の鍋パーティー。

茶々丸の宣言どおり、今夜はキムチ鍋。

チャチャゼロを交えての大人気ない鍋戦争（肉の奪い合いともいう）は、美味しくて楽しかった、の一言に尽きた。

余談だが、ルーミアを除く3人は、今夜になって初めてルーミアが酒を飲めることを知ったという。

完

第17話「ネギ、ルーミアと取引する」(後書き)

幻想郷に登場するキャラクターの大半はお酒を飲む描写が見受けられます。

ですので、ルーミアもお酒が飲める類だと考えております。オマケ程度の表現でしたが。

というわけで、カモは無事に生還しました。

この回をきっかけに、カモを少しはマトモなキャラに改善いたしません。

原作通りにならない展開が出るとは思いますが、どうかお許しください。

この後、カモとネギの命運はどうなるのか。しばしお待ちください。

アンケート結果発表・其ノ巻（前書き）

このお話は本編とまったく関係ございません。
どうかお付き合いをお願いいたします。

アンケート結果発表・其ノ壱

ルーミア「お気に入り件数100件突破記念小説アンケートの結果発表〜！」

エヴァ「ぶつちぎりの1位で長谷川千雨だ。以上、解散」

茶々丸「マスター、いくらなんでも早すぎでは……？」

エヴァ「む？結果発表なんだから、1位を発表すれば終わりだろう？」

茶々丸「確かにそうですが……」

ルーミア「じゃあルーミアが説明するね。マスター主ことエヴァンジェリンさん、刹那さん、木乃香さん、超さん、五月さんが1票ずつだったのに対して、千雨さんが3票とダントツだったんだよ〜」

エヴァ「作者が正直に言うのなら、作者のメーラーが不調だったこともあって、感想でしか票がこなかったから不安だったらしい。だが、結果発表できるほどの票があったのにもほっとしたらしい」

茶々丸「この反省を生かし、今後は感想のみで受け付けようかと考えているようです……また次回があればの話ですが」

エヴァ「作者はやる気満々だが、世間が認めてくれるかは別だ。クク……」

ルーミア「主^{マスター}つたら悪い顔……。……話が逸れたけど、お気に入り件数100件突破記念小説の主な登場キャラクターは、ルーミアと千雨に決定しました！投票ありがとうございました！」

エヴァ「なんでも相性がいいとか。まあ千雨は苦労人系キャラだもんな。心の闇が溜まりまくりだろう」

ルーミア「そんな千雨さんを、ルーミアが美味しく頂きますしちゃうんだよ！」

エヴァ「言葉が一つ足りん。変な誤解を受けてしまっだろう。主にそっち系に走ってしまう読者が」

ルーミア「てへ」

エヴァ「涎を垂らすな。説得力がまるでないな」

茶々丸「今回も最後になって話が逸れてしまいました。記念小説は次回……10月20日に掲載予定です。どうかお楽しみに」

第18話「ネギとカモと明日菜、茶々丸とルーミアを尾行する」(前書き)

いつのまにか、累計PVアクセス数が10万を超えていました。

最近になってアクセス解析を知ったので驚きです。

本当にありがとうございます！これからもがんばります！

第18話「ネギとカモと明日菜、茶々丸とルーミアを尾行する」

学園長視点

ようやく朝日が昇って一室を照らすようになった頃。

わしは彼の者から事情を聞き、感慨深く溜息を吐いた。

「ふむ……ウエルズの下着泥棒が、まさかネギ君の友人だったとはのう……」

まだ生徒達がまばらにしか見えていない早朝の頃、わしとネギ君、そしてカモミールというオコジヨ妖精が学園長室におる。

朝早くからお話があるとネギ君から連絡が来たときは、てっきりエヴァンジェリン君の一件についてかと思っただんじゃが。

しかしその用件が、ウエルズで盗みを働いたオコジヨ妖精が侵入した事についてだったとはのお。

どういうわけかは知らんが、ネギ君の表情はいつもの幼さが薄まり、凜として引き締まっておる。

「はい。それで、事実の確認を含めて、一緒にお伺いしたいと思いを連絡しました。朝早くからすみません」

いやいや、気にすることは無いぞい。年寄りには自然と早起きするようになるもんじゃ。

確かにウエルズから下着泥棒の話聞いておるし、先日微弱ながら侵入者も確認できた。

じゃが、その侵入者がネギ君と一緒に自ら現れ、洗いざらい事情を吐くとはのお。

『いや、もう正直にいきやすぜ兄貴。確かに俺っちは下着泥棒をやっちまいました。俺っちの住処に証拠品もありやす』

「ほお……随分あっさり吐くのお」

ウェールズから聞いた話では、頑なに姿を現さないぐらいに狡賢い奴だと聞いたのだがの。

カモミールと呼ばれるオコジヨ妖精は真摯に事実を話し、ネギ君に負担を掛けまいと自首する。

じゃから、軽くは驚いておるのじゃよ。顔に出さんだけで。

『俺っちは兄貴に二度どころか二重の意味で救われやした。もう兄貴に迷惑はかけられねえ。掛けるぐらいなら自らムシヨに入る方がマシですぜ』

思ったよりも真面目な……いや、漢気おとこいきのあるオコジヨ妖精じゃのお。

「……学園長、ウェールズに連絡を取れますか？折り入ってお願いしたいことがあるんです」

「それは何かの？」

むむ？いきなしネギ君の顔が少し赤くなったの。

かと思えば邪念を払うようにして顔を軽く振り、まっすぐとわしを見つめてくる。

「あの……お恥ずかしいんですが、僕はいつかパートナーを見つけたいと思っているんです。カモ君達オコジヨ妖精は仮契約の儀式を扱えます。カモ君には、罪を償った上で、僕の使い魔として雇いたいと思うんです」

ほほお……バクティオー 仮契約か。

子供にはまだ早いと思って話してはおらなんだが、よく知ったのお。恐らくは、先日にも桜通りの吸血鬼 エヴァンジェリン君に遭遇し、何か言われたのじゃろうな。

あやつは戦闘のプロ故に、先人としての知恵を授けてくれる義理堅い一面もある。

急にネギ君が凜々しく見えたのも、恐らくは目の前の恐怖に立ち向かっているのだろう。

その為にバクティオー仮契約も範疇に入れようという算段じゃな。

『ちよ、兄貴！？いいんですかい俺っちみたいなのはみ出し者を使い魔にするなんて！？』

おととと。つい思考に走ってもうた。

カモ君がいくなり大声を上げたことで頭が切り替わり、目の前を見る。

カモ君が大声を上げるのも無理はない。

軽いとはいえ犯罪者を使い魔にするなど、少々危なっかしいとでしか思えん。

じゃが、ネギ君はそんな犯罪者カモを見て、優しく微笑む。

「カモ君は確かに悪い子だけど、それ以上に良い所もあるじゃない。いつも僕の傍に居てくれたからわかるよ」

いい目じゃ。

背負っておる罪や経歴といった表面的なもので無く、その者の本質を見つめておる。

その目には、どこかルーミアに近いものを感じるのお。

知らない内に随分と成長したようじゃ。

「じゃが、罪は罪じゃ。罪状によっては傍に置くこともできず、その友人だからとネギ君を疎む者も出るかもしれんぞ？」

そこでわしは、会えてネギ君に負い目を与えてみる。

下着泥棒を友達に持つ魔法使いと聞けば、その者の性格を少しでも疑う要因となる。

果たしてネギ君はどう出るのかのお？

「それは仕方ないことだと思います。会えない可能性の方が高いというのもわかっています。それでも僕は友達として、せめて力夫君に真つ当な道を歩んで欲しいと思っています。……お願いできませんか？学園長」

『兄貴い……』

……うむ。立派な心構えじゃ。

今のネギ君が何よりも大切にしておるのは、友達の為にできること。友達の為に想い、自分に降りかかる災いがあるうとも、出来るだけのことをしようとする。

だからといって甘いばかりではない。

友達の罪をきちんと思つめ、それを悪いことだと悟らせ、償わせて正しい道へと導く。

他人への思いやりとは甘いだけでも厳しいだけでも駄目じゃ。それを理解しておる。

短いうちに随分と学んだの。ネギ君。

さて、話を戻すとして、これからどうするかじゃな。

薄々気づいてはおったが、ネギ君とエヴァンジェリン君は既に接触しておった。

いくら封印されておるからといって、戦闘能力と経験の差を考えれば圧倒的。

殺しはしないじゃろうが、容赦はせんじゃろう。

万が一トラウマにでもなつて、修行を辞退されたら元も子もないわい。

じゃから、正直に言えばネギ君にパートナーが出来て欲しい。

今後の成長を考えれば、自身を支えてくれる者の存在は絶対に不可欠。

そのためにも、カモ君はパートナーを見つけ出すきっかけになるやもしれん。

本来なら学生を危険に晒したくはないが……3年A組ならいけるじやろ。多分。

……これそこ、無責任だと言わんでくれんかの？ フォローぐらいはするぞい。

となれば、話はこちらから対処した方がええのお。

「まあどの道、すぐに連れて行けとは言えんからの。校長にはわしから話をつけておくから、それまでカモ君はネギ君の使い魔という形で監視を受ける、という事にしてもらおう」

すぐに連行できんのは事実じゃ。

どの道これから連絡したって、手順や話し合いというものがある。

そこで、時間が掛かるからネギ君がしっかり見張っておく、という話にする。

後はこちらで事情を話し、上手くカモ君を置いてもらえるように説得すればよい。

少しずるい手だとは理解しておるのじゃが……。

「じゃ、じゃあ……！」

こんなキラキラとした目で見られたら、どっちみち断ることなどで
きんわい。

オマケに罪悪感も増す一方じゃ……ネギ君、ルーミア君に影響され
すぎじゃよ……。

「じゃからネギ君、カモ君がまた悪いことをしないよう、しっかり
と頼むぞい？」

「はい！ありがとうございます！」

ま、まあとにかく、これで一件落着じゃ。

ネギ君もカモ君も大喜びじゃ。これからも精進するようにな、二人
とも。

そして授業があると、一人と一匹が学園長室を後にする。

ずるいかもしれんが、カモ君にはネギ君の成長の糧にしてもらっぞ
い。

……悪者のような言い方しとるが、これもネギ君のためなんじゃよ？

さて……次はエヴァンジェリン君じゃな。

おかげで少しは成長したから咎めはできんが、それはそれ、これは
これじゃ。

エヴァンジェリン君にはせめて、やり過ぎぬように釘ぐらいは刺し
ておかんとな。

茶々丸視点

放課後の茶道部の帰りに、高畑先生と遭遇。

その高畑先生とマスターが一緒に学園長室に向われてから数分後。

はて、なぜ数分間も行動どころか思考ですらしなかったのでしょうか？

高畑先生からの呼び出しに応じたマスターからの指示は行き届いています。

人目のあるところを歩くようにと。

そういつて高畑先生と共に行かれたマスターを、私は見送りました。

……なら、なぜ今まで立ち止まっていたのでしょうか？
気になるので、再度検索を……。

おや、私のスカートの裾が引っ張られています。

「茶々丸さん、どうしたの？さっきからボーっとして」

振り向いてみれば、そこにはルーミアさんが首をかしげてこちらを見上げています。

……いらっしやっていたのですね、ルーミアさん。

すみません、危うく存在を忘れてしまつところでした。

………そうでした。

ルーミアさんは常にマスターと共にあり、同じく私も常にマスターと共にあったので、これまでは当たり前のように三人で行動していました。

ここでマスターが別行動を取ったことにより、ルーミアさんと私が

残る計算になります。

つまり、ルーミアさんと二人きりになるのは、今回が初めてです。

「？」

こちらの視線が気になるのか、ルーミアさんは首を傾げています。

あ、すみませんルーミアさん、ついじっと見てしまいました。

………そうです、この後この子とどう行動を共にすればよいのか解らなくなり、フリーズしたのでした。

………どうしましょう。

明日菜視点

なんていうか……茶々丸さんとルーミアって、本当にいい人よね。いや、いいロボといい妖怪だっけ？けど全然そうは見えないんだけどなー。

エロカモの考えすぎなんじゃない？

私は機械とか苦手だし、妖怪とか信じてないし……。

とにかく、私達は茶々丸さんとルーミアを影から尾行しているんだけど、本当に悪い魔法使いの手先には見えなかった。

泣いていた女の子の風船を二人で肩車して取ってあげたり、歩道橋を上っていたお婆さんを背負ってあげたり、ドブ川に流された子猫を助けたり……。

特にルーミアがドブ川に飛び込もうとしたのを茶々丸さんが止めた

時はヒヤヒヤした……。

結局、茶々丸さんのロケットパンチで子猫を助けるというナイスアイデアで、無事救出。

街のみんなの拍手喝采を貰ってから、その場を後にした。

………つて。

「メチャクチャいい奴らじゃないのー！」

「え、えらい！茶々丸さんもルーミアも！」

そうでしょ、そうでしょ！？ネギもそう思うでしょ！？

さあエロカモ！これに懲りたら、茶々丸さんを襲うなんてバカな真似を撤回しなさい！

『い、いや油断させるための罠かもしれないませんぜ！』

う、うーん、本当かしらー？よくあるといえばあるけどー……。

カモったら、いくらネギに恩義を感じているからって、躍起になりすぎじゃない？

おかげで私が、色々と厄介ごとに巻き込まれる身になっちゃったし。

エヴァちゃんが吸血鬼ってのは事前に本人から聞いたからわかっていたけど、まさかあの子も魔法使いだっただなんてね。

なんでも、魔法使いの間ではなまなげみたいな存在なんだって。怖っ！

そんな凄い魔法使いに太刀打ちできないからって、カモは卑怯だと承知の上で奇襲作戦を打ち明けてきた。

私もネギも大反対だったんだけど、せめて満月の夜に出てこれないようにしないとネギが危ないって言うから困り者よね。

もちろん手加減はするっていうけど……それでも忍びないなあ。

で、その為に私に協力して欲しいと仮契約して欲しいって頼まれちゃったのよ。

もう契約しちゃったから過ぎた事なんだけど……なんで契約方法がキスなのよ!?

おでこにキスでなんとかなったけど、ゼーったいにファーストキスは譲らないんだからね!

二人ともそれは承知してくれて、エヴァちゃんの一件までで良いから付き合ってくださいって。

ネギは巻き込んでしまっただけですみませんって何度も謝っていたけど……

……ほんと、お人よしね。

私も。アイツも。

……はあ。なんで私はこんな長い回想をしなきゃならないんだろう?

あ、茶々丸さんが行っちゃうか。追いかけないと。

茶々丸視点

……それにしてもさすがでした。

子猫をロケットパンチで助けるというアイデアを、ルーミアさんが提案なされたとは。

すっかり懐いた子猫を頭に載せたルーミアさんは、とても嬉しそうに歩いています。

「いいことすると気持ちいいねー 茶々丸さんは、やっぱりとてもいい人だねー」

……それはよかったです。

私との行動を取って、ルーミアさんは気持ちよくなれるのですね。私が普段から行っていることを、ルーミアさんは言わずとも共に行動してくれるのが、密かに嬉しく思います。

……ですが、これだけは言わせてもらいます。

「ルーミアさん、私は人ではなく、ガイノイドです」

「そーなのかー」

……あまり意識していない上に考えていないようですね。どうやらルーミアさんは、私を人間として扱っているようですが……。いい加減、私が人形であると意識して欲しいものです。

リンゴーン

さて……そろそろ時間ですね。

私はある時刻になったことを確認し、特定の場所へと向います。ルーミアさんは何も言わず私についてきてくれます。

ニャー。

「わー、ネコだー いっぱいいるねー」

そうです、私はこの時間になると決まって集まってくるネコ達にエ

サをあげるのです。

さっそく買ったネコ缶を開けて、ネコ達に与えます。私の楽しみの一つです。

「わっはー」

……初対面なのに凄くネコに懐かれていますね、ルーミアさん。まさに埋めるようにしてネコ達が集い、ルーミアさんにじゃれられます。

……録画しておきましょう。マスターの為に。ええ、マスターの為です。

ニヤー。

「あ、こら、どこ行くの？ご飯あるよー？待つてよー」

頭から飛び降りた子猫を追うルーミアさん。

……遠くへ行かないことを祈りつつ、ルーミアさんを追いかけずに見送り、私は猫を撫で続けます。

……どこへ行くのですか？まだエサが残っていますよ？

……ああ。なるほど。……油断していました

「……こんにちはネギ先生、神楽坂さん」

振り向いて、私を尾行していたであろうお二人に挨拶します。

……ルーミアさん、どうか遠くへ行っていてください。

ルーミア視点

「もー、ちゃんとご飯食べないと大きくなれないよー？」

頭の上に乗つけた子猫ちゃんに注意するけど……聞いてないみたいだね。

思ったより遠くへ行っちゃったなー。

……おなか空いてきちゃったし、さっさと茶々丸さんと一緒に帰ろうっと。

……あれ？ネギ君と明日菜さんもいる。

あれー？なんで三人が戦っているの……って、茶々丸さん！？
危ない、危ない！なんかネギ君が弾幕を撃とうとしているよ！？

『魔法の射手！連弾・光の11矢！』

あーっ！！？なんで撃っちゃうのー！！？
こうしちゃいられない！走らないと！走らないと！

すみませんマスター、ルーミアさん……

ダメ！

ダメダメダメダメダメダメダメダメダメダメダメダメダメダメ！！

「そんなの、ダメーっ！！！」

もうなりふりかまっていられない！

茶々丸さんの代わりに弾幕を受け止める覚悟で、ルーミアは飛ぶっ！！！！

……っであれー？

飛び出すタイミング、間違えたかなー？

ネギ君の弾幕が通り過ぎていつちゃったー。

かと思つたら、ルーミアを通り過ぎたはずの弾幕がこっちにくるー。

『あばばばーっ！！！！？』

ピチューン！

ネギ視点

し、しまったー！！

ルーミアは茶々丸さんを庇ったつもりで飛び出たのだろうけど、飛び出すタイミングが遅かったんだ！

だから時間差で、強引に僕へと向けた『魔法の射手』に直撃しちゃった！

結果、凄い爆発が起こって、ルーミアの断末魔が！

「ルーミアさん！」

「ルーミア！？」

茶々丸さんも明日菜さんも、突然のルーミアの出現と撃墜に驚いている！

皆してルーミアに駆け寄るけど……うわ、漫画みたいな目の回し方をしているっ！

「だ、大丈夫ルーミア！？」

体中黒コゲなルーミアを抱きかかえて、返事を待つ。

「ピチュってないのが不思議なくらい……」

駄目だ、わけのわからないことを言い始めた！

茶々丸さんの事を考えてかなり手加減したはずなのに、どうしてここまでボロボロに！？

息も意識があつたのは幸いだけど、大怪我には違いない……どど、どうしよう！？

「どど、どうしようネギ！？なんとかしなさいよ！」

「ネギ先生、ルーミアさんをこちらへ！私が病院へ運びます！」

そ、そんなこと言っても……あぶぶ、どつすねば、どつすねば……！？

さすがの力夫君もわたわたと慌てていて「俺うちつたらなんてこと言い出しちまったんだ！」と言って自分を責めている。

しかし僕達よりも冷静にはなれるみたいで、僕の肩に飛び乗って告げる。

『兄貴！ここは茶々丸の姉さんの言うとおりにした方がいいですよ！兄貴の治癒クイラ、擦り傷ぐらいでしか治せねえんだろ！？重ねがけするならまだしも……』

それだっ！！！！

僕の治療呪文は擦り傷程度しか効かないけど……！

「……ネギ、なにをする気？」

「ネギ先生、お気持ちはわかりますが、どうかルーミアさんをこちらに渡してください」

すみません明日菜さん、茶々丸さん、少し待っていてください。

……少しでもマシになるといいけど……っ！

『治癒クイラ！』

治療呪文の淡い光がルーミアの手を包み、傷を癒していく。

ほんの少ししか癒すことはできないけど……効くのは確かなんだ！

治療クイラ！

再び唱え、傷を癒す。以後は、唱えて癒し、唱えて癒し、と繰り返す。

僕の魔力容量なら、連続でかけて全身の傷を癒せるはず！

治癒^{クイラ}！

治癒^{クイラ}！

く、治癒^{クイラ}！

「ちよ、ネギ、顔色悪いわよ！？」

「おやめになってくださいネギ先生、いくら効いているとはいえ、このままでは……！」

『そつだぜ兄貴！さつさと病院に運んだ方が……！！』

ちよ、ちよつとクラクラしてきたけど……まだやれる！

明日菜さんや茶々丸さんの心配を他所に、僕は治癒魔法をルーミアにかけ続ける。

右手、左手、体、左足、右足……少しずつだけど、ルーミアの傷は消えていく。

「はあ、はっ、はあ……く……治癒^{クイラ}……」

よし……の、残る傷は、頭だけ……！

……えっと、目の前にあるの……ルーミアの頭、だよな？
なんか視界がぼやけてきたし、体中がふらふらする……。

「いい加減にしなさいよ、バカネギ！そんなフラフラじゃ意味ないでしょーっ！？」

「もうやめてくださいネギ先生！魔力切れでお体を壊してしまいます！」

わかっていきます……それに、根本的な解決にならないのも……ただの自己満足だっていうことも……。

けど、けど……！

「僕……間違っていました！茶々丸さんは僕の生徒で、ルーミアは……僕の友達なんです！それなのに……それなのに……！」

酷いことをしちゃったから！

だから、少しでもルーミアの負担を軽くしてあげたい！

「く……くー……治療^{クーラ}！」

これで……最後！

衣服以外の体中の傷が全て塞がって、綺麗で柔らかな肌に戻り、呼吸が安定する。

まだ目を覚まさない所を見ると、まだ中のダメージが残っているんだらうけど……。

ぼやけているからはっきりとはわからないけど……

とても、安らかな寝顔を浮かべているのがわかった。

よかった……るー……み、あ

明日菜視点

「ネギ！ネギ！しっかりしなさいよー！」

『兄貴　！しつかりしてくだせー！』

このガキンチョ！なに格好つけているのよ！

息はあるから無事なんですよけど、ぶっ倒れて眠っちゃって！
ちゃんと意識を取り戻しなさいよ！私達を心配させるんじゃないの！

「大丈夫です明日菜さん。魔力切れで体力が消耗してしまい、眠っているだけです」

もー！茶々丸さんったら、冷静なんだから。

……ん？もしかして、あまり冷静じゃない？

なんかオロオロしているし、ルーミアを抱えている手が凄く震えているし。

やっぱり茶々丸さんって良い人ね。

ルーミアだけじゃなくて、襲った張本人も心配してくれて。

「すみませんが明日菜さん、ネギ先生をお願いします。私はルーミアさんを」

「オツケー。任せなさい。……ごめんなさい茶々丸さん、こんなことになっちゃって……」

『それを言うなら俺っちに責任がありやす。兄貴の為とばかり考えちまってこんな提案しちまったんだ。……面目ねえ』

そんな茶々丸さんを少しでも襲おうとした私達ってホント、悪い人よね……。

バカ力モもさすがに自覚しているみたいで、ぺこぺこ頭を下げている。

だから、せめて謝らせて。

もちろん、ルーミアが目覚めたらルーミアにも謝らないと。

「いえ。お気になさらず。……では失礼します」

ええ。急いでルーミアを病院に運ばなきゃいけないもんね。

茶々丸さんは背中から何かを生やすと、凄い風を巻き上げて飛んで

……は！？飛ぶ！？

すっごー！茶々丸さんってあんな風に飛べるんだ！いいなー！

……ルーミアをよろしくね。茶々丸さん。

『姉さん、俺たち達もネギの兄貴を運んで帰りやしようよ』

あ、そうだった！こんな所にネギを置きっぱなしにしたら駄目よね。

完

第18話「ネギとカモと明日菜、茶々丸とルーミアを尾行する」(後書き)

結局やってしまった茶々丸襲撃事件。ただし被害者はルーミア。

茶々丸が襲われてルーミアがガチになると予想された方、申し訳ありません。

物語の都合上、明日菜の参戦は不可欠です。ネギの支えの意味もあって。

最終的な仮契約のキツカケとして、この話ができました。

エヴァンジェリンとの対決はもう少し先になります。ご了承ください。

また、ルーミアの紙装甲つぶりを表現する為でもあります。

実際、襲撃の際に、ネギは本当に手加減してました。

ダメージよりも電撃の麻痺で機能を不調にさせる狙いがあったのです。

これは東方のゲームでいう、自機がたった一発で撃墜ヒチュってしまうイメージです。

というわけで、撃墜音「ピチューン」を加えました。趣味です(笑) それに加えて、私的設定のバカルテットは基本的に打たれ弱いです。

そんなわけで、茶々丸襲撃事件は終了です。

まだまだエヴァンジェリンとのガチ対決は遠いです。

早く掲載したいと思いますので、頑張ります。

外伝第巻話「ルーミア、千雨に接触する」(前書き)

このお話はお気に入り件数100件突破記念に募集したアンケートを参照に書いた小説です。

外伝とありますが、本編とは少なからず関わってきます。

また、今回は独自解釈とご都合主義を兼ねたオリジナルのスペルカードが登場します。

あらかじめ、ご了承ください。

この小説を読んで、少しでも皆さんがお楽しみ頂ければ幸いです。

10/20 修正：2年A組 3年A組

ご指摘ありがとうございました！

外伝第巻話「ルーミア、千雨に接触する」

千雨視点

3年A組の連中は変な奴らばっかだ。

だがルーミアはもっと変な奴だ。

この私、3年A組出席番号25番、長谷川千雨はそう断言する。

何が変わって？

……言い切れねえぐらいに沢山あるからだよ、チクシヨウ！

まずは3年A組出席番号8番、神楽坂明日菜。

テストで毎回最下位を取るおバカ軍団、通称バカレンジャーの一員と数えられるぐらい、奴の頭は悪すぎる。

だがな……バカにも限度があるわあ！

テストは必ず1ケタしか取れないってどんな知識だよ！？学習能力0なのか！？

しかし、ルーミアは……。

「このバカー！いつも私の手に噛み付くんじゃない！はーない！はーない！はーない！はーいーよー！」

「がぶがぶ」

ルーミアが教室に度々現れては恒例の、明日菜噛みつき……。

明日菜以下のバカっぷり晒してんだよ、この大バカ……！
いい加減、人間は喰えないって理解しろよ！
わけわかんねえよあいつの頭のなかなんざ！
ていうか教室で噛み付くな！バカ共が騒ぎ出す火種になんだろうが！

「こらルーヤん、人に噛み付いたらアカンえー」

ボゴツ！

3年A組出席番号13番近衛木乃香！

トンカチでツツコミなんかしてんじゃねえよ！普通死ぬからな！？
のほほんとして割りと良識人の癖に、なんで平然とルーミアの頭に
手加減抜きで叩きつけるんだよ！？

第一、どこから出した！？ていうか常時携帯してんのか！？

しかし、ルーミアは……！

「あでで……ごめんなさい」

トンカチ脳天に喰らっていても平然としてやがんだよ！ケロリと
ていんだよ！

どんだけ石頭なんだよ！？ていうか鉄か！？鉄頭なのか！？ステゴ
ザウルスみたいに脳みそが小さいのか！？

んで、そんなルーミアに少しは疑問を持ちやがれ、木乃香！

……で、そんな三人を陰からじつと見ているあいつは、3年A組出
席番号15番、桜咲刹那。

なんか木乃香の幼馴染みたいなんだが、刹那の方から敬遠されてい
るらしい。

ま、あいつらが仲違いしてようが私には関係ないがな。

……関係ないんだがな、刹那。

そんなルーミアと木乃香をハラハラして見ているぐらいなら、さっさと出てきやがれよじれつたい奴だな！ストーカーか！

「刹那さん何みているのー？」

「っ！？い、いえ、私は別に……！」

ほーら、んな視線で見ているから、ルーミアが気付いちまったじゃねーか！

ルーミアと刹那とは顔見知りのようで、なんでかルーミアは刹那を見つけると近づいてくる。

「あ、せつちやーん」

で、ルーミアを理由に木乃香が刹那に近づく。

しかし刹那は何故か木乃香から逃げる。

そしたらルーミアは追いかける。その後が続いてまた木乃香が追う。……なんだこの追いかけっこ。私の見えない所でやっている！

「まーまールーミア、肉まんやるから、そこまですてあげるネ」

おいでルーミアちゃん。

「肉まん」

子供を餌付けしてんな超！五月！ていうか簡単に釣られるなよルーミア！

麻帆良の頭脳こと、ありえねーぐらいの天才、3年A組出席番号1

9番の超鈴音。
チャオ・メイリン

こいつは何故か知らんが、ルーミアを気に入っている。……ていうか飼慣らそうとしている。

こいつの店の味見役として重宝していると噂されているが、私にはなんでもんな食いしん坊バカを餌付けしているあいつの頭がちつともわからん。

ていうか、知りたくも無い。

そんなルーミアを釣る餌を作るのは、3年A組30番・四葉五月。まあ、こいつはまだわかる。

五月は子供に美味しい物を食べさせてやりたいっていう母性本能みてえのがある。

事実、ルーミアは五月の料理の大ファンだし、五月自身もその食いつぶりが気に入ったらしい。

だがな……それを餌付けっていうんだよ！気づけや！

けど無理だろうな！ルーミアが美味そうに肉まんを食っているのを見たらな！

ていうか、いつのまに混ぜって肉まん頼張ってやがんだ、古！^ク

ア~~~~っ！ほんっとこの大食い大バカチビは意味わかんねえええええっ！！

この時、ルーミアが私のことをじっと見つめていたなんて、知る由もなかった。

ルーミア視点

「…………はあ」

さつきからあのおねーさん、ため息ばかりだねー。

放課後になった途端、千雨さんはふらふらと歩き出して、公園のベンチに腰掛けて落ち込んでいる。

ルーミア、なんか千雨さんが気になって、こっそり後をつけてきちゃった。

千雨さんのため息からは、なんていうか、美味しそうな感じが漂ってくる。

匂いとかじゃなくて、なんとなく的な感覚。多分これが『闇の感覚』なのかな？

今日教室で千雨さんを見てから、ずっと美味しそうな気配が漂ってきてる。

『闇喰い』を何回か繰り返したからか、なんとなく闇の気配がわかるようになって、それで千雨さんが気になったんだと思う。

そーいえば、^{マスター}主があのおねーさんについて話していたっけ。

『長谷川千雨……奴は不憫な女だ。認知障害の魔法結界を受け付けない体質であるが故に、異常な日常や周囲を受け入れきれず、馴染めずに孤立していく。半端者ほど厄介なものはない。いずれ巻き添えを食らうだろうな。……奴にはあまり関わるな』

マスター
主はきつと、関われればこちら側に巻き込まれトラブルを起こすであ
ろつと、あのおねーさんとルーミアを心配して言ったんだと思う。

……苦勞しているんだね。千雨さんって。

きつとその暗い顔には大きな闇を背負っているんだろつね。

なら、ルーミアが食べて、軽くすることはできるかな？

決して、おやつ感覚で食べようなんて考えていないよ？

口から出ている液体は、実は涙なんだよ？

それにせつかく知り合える機会に恵まれたんだもん。話してみたい
なあ。

それじゃ、一旦隠れて、周りに誰も居ないことを確認してつと。

闇符『負の吐息』

スペルカード発動オツケー。それじゃ、突撃〜。

千雨視点

さつきからこつちを見ているルーミアの姿は、ちらほらと見かけ
ていたけどよ……。。

「こんにちわー」

ついにこつちにきやがったか…！なんでこいつが私の所に来るんだ
よ！？

追っ払いたい所だが……引きこもり族に入りかねない、ネット中毒

のこの私にその笑顔は耐え切れねえ……！
眩しすぎる……その田舎の元氣娘みてえな純粹な笑顔が、都会の暗い個室に閉じこもってばかりいる私には眩しすぎる……！

「……なんかようか？」

そんなルーミアに、こんな挨拶しか出来ねえ私が悲しくなるじゃねえか……！
するとルーミアは、ちょっと困ったようにしてこちらの様子を伺っていた。

……なんだ？何がしたいんだよ、お前は？

「なんか元気ないなーって思って。悩みでもあるの？」

……ああもう駄目だ。

空気も顔色も読めないようなバカに読まるぐらい、今の私の顔は酷いんだろっな。

なんていうか、いつもそうなんだが、今日は特に疲れたんだろっな。普段なら言い訳したり突っ返したりするんだろっが……なんかする気がしない。

私は息を大きく吸うと、観念したように溜息を吐く。

……あ、少し軽くなった気がする。

「……わーった。わーったよ。話すから。話せばいいんだろ？」

ガキ相手に愚痴を言う気は無かったんだが、どうしてなんだろっな。なんだか不思議と、こいつにならある程度打ち解けちまっても良い気がする。

それにこういう奴は聞くまでしつこく聞いてくるタイプだろう。諦めた。

それを知ってか知らず香、ルーミアは黙って私の隣に座り、言葉を待つ。

少し私と距離を取ってくれた辺り、私に対する遠慮と考慮が垣間見ることができた。

私は話した。

驚くぐらいにクラスに対する内に秘めていた事を話した。節度を保ちながら。

ただし、ぜってえ私がネットアイドル「ちう」だってことは明かさねえ。

それでも私は話し……いや、吐き出したって感じが正しいかもしれねえ。

ルーミアは私がまだ話し続けているからか、黙って頷いたり相槌を打ったりしてくれた。

そのおかげもあってか、まるで体中の毒を吐き出しちまうかのよう
に、私は話し続けた。

そして私は、ついついルーミアをいかにバカだと思っていたのかと話ししてしまった。

さすがにこれは不味いと思ったんだが、ルーミアは……。

「そっかー。ごめんね千雨さん。ルーミア、考えるのは苦手だから」

なんて言って笑っていた。平然と。

けど、自分に非はあるって認めてやがんのか？

「いや、さすがにおかしいだろ。普通はバカにされて怒るもんだろ？」

「うーん、自覚はしているの。けどね千雨さん、ルーミアは今のル

「ルーミアが好きなの」

「今のルーミアを？」

「うん。ルーミアはバカで食いしん坊だけど、毎日を楽しく暮らせる、今のルーミアが好きなんだ」

「……毎日を、楽しく……」

「人によって価値観は色々。それを他人と比べるなんて、ルーミアには難しくできないや。けど千雨さんは、色々な価値観を知っていて、それを比べている。自分が一番楽しくなる為に頑張っているんだと、今の千雨さんの話を聞いていて思ったよ」

色々な価値観……それを他人と比べるのは難しい……か。

私は他人と自分を比べ、世間一般と比べて、それが納得いかないからイラついていた。

非日常を認めたくなかった。だからこいつやあいつらみたいなバカの相手をしたくなかった。

けど、それは決して間違いでない。

自分にとって素敵な毎日を見つける為に頑張っていることなんだと、自分の事ばかり考えて周りを巻き込んでいるあいつらに比べたら、私はまだマシなのか？

穴だらけな考え方だが、そう考えると少し心が晴れる気がする。

……よりによって、あいつら以上にふざけているようなこいつに教えられるなんてな。

「それに、千雨さんの周りはまだ良い方だよ？ルーミアの暮らしていた所はもつと凄い人が居たもん」

イマ、ナンテイイヤガツタ？

まてまて、トントンデモ発言に一瞬、頭の中が真っ白になったぞ。なんだよ、まだ良い方って。まさかだが、あれ以上にカオスな連中がいやがるのか？

暮らしていた所って……そっいゃ、こいつはイギリス出身だったな。

「死ぬまで借りるって言って、堂々と強引なやり方で人の物を奪う人もいるしー」

「泥棒だってそんな大胆かつ理不尽なことしねーよ！」

「お花を一本でも踏むと、笑いながら怒って傘で滅多打ちにしてくる人もいるしー」

「ドSすぎる！もはやUSCじゃねえか！」
アルティメットサティステックククリーチャー

「門番なのにお昼寝ばかりして侵入を許しちゃういる人もいるしー」

「本末転倒じゃねえか！仕事しろそいつ！……門番って、警備員のことか？」

「明日菜さん以上に頭の悪い友達も沢山いるもん。1足す1も答えられない程度の知力なんだよ」

「それこそありえねーっ！5歳児だって答えられるぞ！1足す1は2って！」

「けど悪いことばかりじゃなくて良い所もある、ルーミアにとって大切な人達なの。毎日が楽しくなれる、とても素敵な人達なんだよ」

はーん……大切な人、かぁ……。ありえねー奴らばっかだけだな。嫌すぎる。

やっぱり支えがある人が必要なんだろうな。日々を過ごす為にも。

ていうか、私のクラスよりとんでもない連中がいるんだな。世の中には……。

「……お前も苦労してんだな……」

こんな明るい笑顔していんのに、波乱万丈な人生送っているじゃねえか……。

私だけじゃないんだな。とんでもない連中に振り回されているのはなんか気分がいいから、コイツの頭を撫でてみる。……サラサラしてんな、羨ましい。

まあ、バカで食いしん坊だから、友達になろうなんては考えられないがな。

ルーミア視点

「じゃーねー千雨さん」

「おう。気いつけて帰れよ」

夕焼けが沈んできた頃、私と千雨さんは別れの挨拶を交わした。だいぶ気分が良くなったみたいだね。よかったー。

というわけで……成功！

私が千雨さんに会う直前に発動したスペルカード 闇符『負の吐息』。

このスペルカードは、ルーミアが『闇喰い』を覚えてから造った特殊なスペカ。

相手の闇を放出しやすくする見えない力を施すという、かなり特別なもの。

具体的に説明すると、相手が心に大きな闇……怒りや悲しみがあつた場合、それらが溜息に混ざって吐き出される。

溜息ってよく負の感情 疲れや憂鬱感 などが混ざるから、それに心の闇を混ざりやすくするの。

溜息に混ざつた闇は、私の食料になるだけでなく、私の弾幕として操れたりもする。

このスペルカードを使ったことで、千雨さんの抱えていた心の闇が言葉と一緒に吐き出され、それをルーミアが美味しく頂きました。

闇は晴れる、闇は食べられると、私にとっては文字通り美味しいスペカなのだ！

とにかく、これで千雨さんの気は少しでも晴れるといいな。
ルーミアの心も満たせたい、今後からはもう少しお近づきになりたいなあ。

ググウ……。

……まあそれはそれ、これはこれ
心は満たせてもお腹は減るんだよね

「今日のご飯はなーにつかな」

気分も良いし、大好きなお夕飯の時間になったし、いい事尽くだね
はーやくかーえろ

後日談なんだけど、たまーにルーミアと千雨さんは放課後に会うようになった。
主に千雨さんが愚痴を吐いて、ルーミアがその闇を吸う。
いつもゴチになってまゝす

完

外伝第巻話「ルーミア、千雨に接触する」(後書き)

今回は相手が一般市民ということもあり、エヴァンジェリンにやったような闇食いは実施できませんでした。そこで発案したのがオリジナルスベルカードです。ネーミングセンス？なにそれ美味しいの？

ご都合主義かつ勝手な妄想が入ってしまい申し訳ありません。

ちなみにゲーム的に解説するところになります。

闇符「負の吐息」

自機から黒いオーラが漏れて散布し、自機を取り囲む弾幕となって襲いかかる移動ストレス系。

お楽しみいただけただけでしょうか？

また縁があればアンケートを取りたいと思います。

これからもどうかよろしくお願いします。

第19話「ネギ、エヴァンジェリン宅に訪問する」

ルーミア視点

茶々丸さんがネギ君達に襲われて（被害があつたのはルーミアだけ）から二日後。

目覚めた後に茶々丸さんから教えてもらったけど、主マスターにネギ君からの襲撃を話さなかつたみたい。

その時ルーミアは気絶していたからわからなかつたけど、ネギ君は傷ついたルーミアを治してくれたって。

回復が早いなーって思っていたらそういう事だったんだ。今度会つたらお礼を言わないとね。

……で、その二日後に何があつたかというと。

マスター
主が風邪を引いた。

「げほっ、げほっ」

「大丈夫？主？」マスター

「大丈夫な訳あるかバカモノ……」マスター
「げほっ、げほっ」

朝からベットの上で咳き込む主マスターを見てみると、ルーミア心配でたまらないよ。

茶々丸さんは、魔力減退のせいで、普通の人間の女の子と変わりないから風邪を引くんだって言っていた。

レミリアさんは花粉症ですらなったことないのにねー。

「マスター、学園側に連絡しておきました。今日はお休みになってください。私も介護の為、お休みしますので」

あ、茶々丸さん。連絡しに行っていたんだね。

……ルーミアの頭を優しく撫でてくれた。

えへへ、ルーミアすっかり主を見ていたもんね。

「うむ……げほ、げほ」

「マスター、お粥を作ったので、少しでも食べてください」

わー、さすが茶々丸さん。お粥でも美味しそう

ことりとベットの脇のテーブルに置いてレンゲを持つ茶々丸さん。

あ。ちょっとまってー。

そしたら、茶々丸さんは何も言わないで場所を交代してくれた。
さすが茶々丸さん。話がわかるなー

さっそくレンゲにお粥をよそって、フーフーする。

……アチチ。少し顔に掛かった。

「はい主、あーん」

これ、一度はやってみたかったんだよねー

……そんな顔真っ赤にしてプルプル震えてまで怒らなくてもいいじゃない……。

やっぱりダメかなー？主はこつこついうことしなさそうだし……。

「……あむ」

そう思っていたら、主^{マスター}がちゃんと食べてくれた！
なんだろう、ちっぽけなことはずなのに、凄く嬉しい！

待っていてね主^{マスター}！いまフーフーするから！

「……おい茶茶丸、まさかだと思っが」

「いえマスターそんな事はありません決して愛らしく可愛らしい光景を目の当たりにしてこれは将来の為にも思い出作りの為にも保存せねばと思ひ録画などしてませので問題はありませんどうぞ続けてくださいそして気が済んだら交代してください」

「出てけっ！」

「あゝん」

なんか凄い早口で何か言っているみたいだけど、気にしない！
食べて、食べて、主^{マスター}

『オーオー微笑マシイジャネエカ。妹ヨ、一生ノ思イ出トシテ残シテ置ケ。後デ酒ノ肴トシテ見テヤルゼ』

「……ルーミア、その性悪人形を物置にでもしまっておけ」

「らじやー」

もーチャチャゼロつたら！主^{マスター}のご飯を邪魔したらダメでしょ！

弱っている主をからかうような悪い子は、しまっちゃんおうね。
……なんていうのは冗談だから、大人しく居間で待っていてね。

さてと、早く置いてきて、茶々丸さんと一緒に主を介護してあげな
きゃ！

ルーミア、がんばるよ！

ネギ視点

えーっと、エヴァンジェリンさんの家は、この道を真っ直ぐだった
ね。

それにしても、まさかエヴァンジェリンさんが風邪で休みだなんて、
少し信じられないなあ。

だって、吸血鬼って血で魔力を供給する生き物なんだよね？

魔力を外部から供給できるのなら、風邪ぐらいなんとかできると思
うんだけどなー？

だから、もしかしたら仮病かもしれないし、そうでなかったとして
も先生としては放っておけないや。

もし本当に風邪なら様子を伺ってから授業に戻るもよし。

嘘だったらちゃんと学校へ来るように言って、ついでに果たし状を
受け取ってもらおう。

……多分、ルーミアもいるんだよね……元気でいるかな……？
ちょっと会いづらいけど、会ったらちゃんと謝っておこう。

えっと、この家かな？……素敵なログハウスだなー。

吸血鬼の住処って、怖いお屋敷とか、お墓に囲まれた廃墟だとばか

り思っていた……。えっと、この玄関のベルを鳴らすんだね。

カランコロン

「あの、こんにちわー。担任のネギですけど、家庭訪問に来ましたー」

はーい

返事と一緒に、とてとてという足音が聞こえてきた。玄関の扉が開かれると、ルーミアが出てきてくれた。元気そうなルーミアの姿を見て、僕の心は罪悪感と安堵感を同時に得ることになった。

「ネギ君やつほー」

「こ、こんにちはルーミア」

片手を挙げて挨拶してきたので、反射的に挨拶をする。

「昨日にあんな事があったのに、ルーミアはいつもと同じ笑顔を浮かべているなあ。」

けど……謝らないと。」

「あ、あのねルーミア……この間は酷い事をごめん！」

僕は深く頭を下げる。

あんな事をしちゃったから、許してくれるとは思えないけど……。

「ホント酷いよー」

うつつ……やっぱりルーミアでも怒るよね、あんな痛い思いしちゃったら……。

「茶々丸さんにあんなことするだなんて！」

……え？そつちななの？

いや、親しい人が襲われたら、誰でも怒るだろうけど……。けれどもルーミアは茶々丸さんが襲われた事に腹を立てているみたいで、まだぷりぷり怒っていた。

……考えてみたら、僕って凄く失礼だよな。

ルーミアにはかり目が行っていて、茶々丸さんへの謝罪が後回しになってただなんて。

「だから、一昨日の事はルーミアじゃなくて、茶々丸さんに謝ってね」

「……あの、ルーミアはいいの？あんな酷い目にあつたのに……」

もちろん茶々丸さんにも謝るんだけど……こればかりは聞いておくう。

ルーミアは首を傾げている。……もしかして、あまり気にしていない？

「けど、ネギ君は少しだけど、ルーミアを治してくれたんでしょ？」

「それは、僕が傷つけちゃったから、僕が治さなきゃと思ってやったことだし……」

それでも、傷つけてしまったから治した、というだけでは割に合わないはず。
だから、てっきりルーミアは痛い目にあって怒っているかと思っていたのに……。

「そんな当たり前のようではできない事をする人に、悪い人はいないよ」

そういつてルーミアは、にぱっと歯をむき出しにして笑顔を浮かべた。

……この間みたいな鋭い歯並びは無く、白くて綺麗な歯だった。
けど、どうしてかな？今日のルーミアの笑顔はいつもより……。

「治してくれてありがとう、ネギ君」

とっても暖かかった。

傷つけられた自分よりも、傷つかなかったけど襲われた親しい人を
気遣い。

傷つけられたことよりも、治してくれたこと目を向け、敵意でなく
感謝を送ってくれる。

……僕がしてきたことへの罪深さを自覚すると同時に、とても暖か
な気持ちにしてくれる。

ルーミアは、僕を敵ではなくて友達として見てくれる。

ルーミアは、僕を友達として接してくれる。

ルーミアは……僕の勝手な都合かもしれないけど……友達なんだ。

「う、うん……無事で、よかった」

ほんとに、よかった。

「……………どうしたの、ネギ君？涙なんか流して？」

……………はわわ、ほんとだ、涙が溢れてきた。

拭い取って……………っと。ちよつと恥ずかしいかな……………。

「そ、そういえば、エヴァンジェリンさんは大丈夫ですか？風邪つて聞きましたけど……………」

本来の目的を忘れていたよ……………どうしているんだろうか？

「ちよつと待つてね。……………茶々丸さーん、ネギ君が来たよー！」

振り向いてそう叫ぶと、ルーミアは僕を中に入れてくれた。

お邪魔しますー……………うわ、ファンシーな人形やぬいぐるみが沢山ある。

ルーミアの趣味に合わせたのかな？あの怖いエヴァンジェリンさんが集めた……………とはあまり考えられないや。

「ネギ先生、こんにちは」

あ、茶々丸さん。

「こ、こんにちは茶々丸さん。あの、この間はすみませんでした」

「いえ、こちらこそ……………。それと遅れましたが、ルーミアさんを治してください、ありがとうございます」

ぺこぺこ頭を下げる僕だけど、茶々丸さんも頭を下げてきた。
あう、先にやった僕が悪いのに……。
本当に良い人達だなあ……。あ、人じゃなくて、ロボと妖怪なんだっ
け。

……。やっぱりそうは感じられないなあ。どうみても人間だよね。
こんなに良い方々が、エヴァンジェリンさんの手先としたら……。も
しかして……。

「……。そうだ、エヴァンジェリンさんの容態はどうですか？」

「現在、マスターは風邪を引いております。軽度なものですが、2
〜3日は安静にする必要があります」

「なんかね、今の主は満月マスターじゃないと力が発揮できなくて、体が人
間並みに弱くなるんだって。しかも花粉症にかかったみたいなの」

そ、そうなの！？知らなかった……。
この人達に限って嘘をつくような人じゃないって信じられるけど。
……。というか、なんで僕、普通に二人の後に続いて二階に上がって
いるんだろう？

「現在マスターはご就寝中ですので、お静かにお願いします」

あ、そうなんですか。

じゃあ起こさないようにそっと、そっと……。

そこには、ベットの上で眠っているエヴァンジェリンさんがいた。
寝ていると解ったからか安心したけど、寝ていても辛そうにしてい
るエヴァンジェリンを見ると、少し不安だな……。早く治るとい
いですね。

カモ君から不老不死の吸血鬼だつて聞いていたから、風邪とは無縁だと思つていたのに……。
というか、花粉症にもかかったつて……。本当に吸血鬼かどうか怪しくなつてきた……。

「ではルーミアさん、私はこれから大学の病院で薬を取りに行きます。留守の間、マスターをお願いします」

「ラジャー！」

ルーミアが敬礼してそう言つと、茶々丸さんから手ぬぐい入りのタオルを受け取つた。

それじゃ、僕は帰つた方がいいよね。邪魔だらうし、授業もあるし。果たし状はエヴァンジェリンさんが元気になつてから渡そうつと。

……。な、なんですか茶々丸さん？僕とルーミアを交互に見て……。

「……。ネギ先生、失礼ですがルーミアさんだけ残すのは不安ですの
で、よろしければ一緒にマスターを診てもらえますか？」

「え！？ぼ、僕もですか！？」

そ、そんなあ、僕、看病なんかろくにしたことがないのに……。
というかいんですか？仮にも僕は、エヴァンジェリンさんから見
たら敵なのに……。
それに、張り切つていたルーミアが頬を膨らまして不貞腐れていま
すよ？

「はい。ネギ先生ならお任せできると判断します。……。すみません
がルーミアさん、これもあなたの安全の為です」

「はい……」

そういうと茶々丸さんはペコリと頭を下げたから、出かけて行っ
ちやった。

何を考えているんだろうかあの人……いやロボだっけ。

介護にはりきるルーミアを他所に、僕は困った。

授業とか……始めての看病とか……いきなり襲われたりしないか
か……。

少しの不安と恐怖に脅えつつ、断りきれなかった僕でした……。

完

第20話「ネギ、過去が気になる」

ネギ視点

ふう……や、やっと落ち着いた……。

ルーミアと一緒にエヴァンジェリンさんを診ていたんだけど、ここまで慌しくなるとは……。

日差しが暑いと言われてカーテンを閉めたり、喉が渴いたからって僕の血を吸ってきたり（指先だけだからよかったけど）、

汗で塗れた寝間着をルーミアが交換したり（凄い似合わない下着だった）、

ルーミアがリングを剥こうとして指を何回も切ったり（治療クイラで治せた）。

色々あったけど落ち着いて、エヴァンジェリンさんの呼吸が穏やかにになった。

ついでに言えば、張り切りすぎて疲れたのか、ルーミアもエヴァンジェリンさんの横でベットに持たれて眠っている。

凄く頑張っていたから仕方ないかな？

……よほどルーミアにとって、エヴァンジェリンさんは大切な人なんだね。

……けど、こうしてみると本当に普通の女の子にしか見えないな……。

エヴァンジェリンさんは真祖の吸血鬼、ルーミアは人喰い妖怪だって聞いたけど……とてもそうには見えない。

そもそも、なんで吸血鬼化したんだろ？

ルーミアはなんの妖怪だろっ？

三人……いや、二人と一体の関係は？

どうして父さんに呪いをかけられたのだろっ？

もしかしたらルーミアも父さんの事を知っているのかな？

うー、考えたら気になってきた……。

そもそも考えてみれば、ここの人達って謎が多すぎる……。

……写真とかなかったりしないかなー……なんて。

「や、め、る」

うひいっ!?

お、起きていたの!？す、すみません悪気があったわけじゃ……。

……あれ？エヴァンジェリンさん寝ているよね……なんだ寝言かあ……。

ほっとしたような、そうでないような……。

「や、やめろ……サウザント、マスター……」

え？

も、もしかしてエヴァンジェリンさん、父さんの夢を見ているの？

どんな夢を見ているんだろっ……？

……そういえば確か、夢を覗く魔法つてのを習ったなー……。

「ルーラー」

ひゃあああっ!？

ごっごめんなさいー!

父さんの事を知りたいからって、女の子の夢を覗こうなんてしてすみませんでした！

……こ、今度はルーミアの寝言か……驚かさないでよ……。

「まっつてよチルノちゃん……けーねせんせー、ゆるして……ア
ーッ」

ちるのちゃん？けーねせんせー？

ルーミアのお友達と先生かな……？

それにしても、どんな夢を見ているんだろ？

楽しそうだったり、辛そうだったり、怖がっていたり……叫んでビクッと震えたり。

そういえば、カモ君が言っていたっけ……。

『兄貴、エヴァンジェリンを調べてみて解ったんだが、ルーミアとの血縁関係なんてこれっぽっちもかかれてませんぜ。むしろ、ルーミアがイギリスにいたかつてのも怪しいぐらいだ。奴が何者で、どこからきて、いつからエヴァンジェリンと一緒にいるのかが一切の謎だ。こりゃ何かありそうですぜ？』

……父さんの事ももちろん気になるんだけど、友達の過去も気になるな……。

考えてみれば、僕は何も知らない。

エヴァンジェリンさんの事も、父さんの事も、友達の事も。

ルーミアは本当はイギリスの出身ではないとカモ君は言っていた。もしかしたらそうなのかもしれない。

だって紅茶にたっぷりとミルクと砂糖を入れるような子だもん。紅茶派の僕から見たら、あれはちよつと……。

……そうだとしたら、ルーミアは一体何者なんだろうか？

……うつ……どちらも見たい……というか、夢を覗くことは確定しちゃった……。
けどもしかしたらすぐに起きちゃうかもしれないし、諦めるってのも……。
うーん……だけど見てみたい……すごく見てみたい……！

ええい！まずはエヴァンジェリンさんから見ちゃえ！

やっぱり父さんの事が知りたい！もちろんルーミアの事も知りたいけど！

けどけど、優先的に考えたらこつちだよね！

この際、覗いちゃいけないなんて考えなくていいや！

僕は二人が眠っていることを確認してから、杖に魔力を込める。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル……夢の妖精・女王メイヴよ……」

両手を合わせて呪文を唱える。

「扉を開けて夢へといざなえ……」

呪文が完成すると、僕の意識は徐々に闇の底へと沈んでいく。よし、成功した。

僕の知らない、父さんとエヴァンジェリンさんの関係かあ。

この時ネギは、過去を知りたいが故の探求心と好奇心、覗きへの罪悪感で頭がいっぱいになり、忘れていた。

夢を覗く魔法は、他に眠っている者にもその夢を見せてしまふということに。

完

十万アクセス記念小説「東方迷惑録 チルノバーサーク」(前書き)

今作は感想を頂きましたkusari様のご意見を頂いた上で書いた記念小説です。

この作品に足りなかった東方プロジェクト成分の補充の為の投稿でもあります(笑)

ルミアが居なくなった日からしばらくした後のお話です。

10/26:修正:リグルの一人称「僕」「私」

ご指摘ありがとうございました!

十万アクセス記念小説「東方迷惑録 チルノバーサーク」

博麗霊夢の朝は早い。

どのくらい早いかというと、幻想郷の山々から朝日が登り始めた途端に目が覚めるぐらいに。

まどろみはまだ残るが、早寝早起きを習慣にしていた霊夢はすぐに目を開き、布団から這い出る。

薄暗い空を照らす太陽の光に誘われて縁側へと歩み、背伸びをしてまどろみから覚める。

顔を洗って寝巻から巫女服に着替え、軽い朝ごはんを取ってから外へ出る。

毎朝恒例の賽銭箱チエック（別に貧乏ではないのだがつい見てしまう。今朝は賽銭が二枚）を済ませ、鳥居へと向かう。

そして鳥居の先の光景を見下ろし……霊夢は重苦しくため息をこぼした。

そこに広がる光景は緑豊かな幻想郷の全土を見渡せる絶景だったのだが……今朝も酷い。

何せ幻想郷の東西南北至る箇所には氷塊が見えるのだから。

「おーい霊夢ー」

空から声が聞こえる。それも馴染みのある、しかし疲れたような声だ。

「おはよう魔理沙。酷い顔ねえ」

霊夢はため息をこぼしてその人物 箒に跨り空を飛ぶ霧雨魔理沙に朝の挨拶を述べる。

だが、魔理沙の顔は酷い。クマはできてるし、彼方此方が草まみれだ。

それでも霊夢は、魔理沙の身に何が起こっているのかが予想できる。

十中八九、原因は『ヤツ』だろう。

「あんたもやられたのね。チルノに」

「ああ。私のマイハウスを氷山に変えられちゃった。おかげでこの繊細な私が野宿する羽目になっちゃったぜ」

繊細ねえ……霊夢は魔理沙の言葉にあきれ返った。

弾幕はパワーだという奴のどこが繊細なのだろう。

ここしばらく、チルノがアチコチで暴れている。

ただ暴れているわけではなく実は人探しをしているだけなのだ。

だがしかし、あっちこっちに喧嘩を売っては氷まみれにするのだから、暴走以外の何物でもない。

しかも例えしばいても、持前の再生能力をフル活用してまた暴れるのだからタチが悪い。

「なあ霊夢ー、いい加減にアイツを止めてくれよおー、もう数週間も続いているんだぜー？」

「マスパ喰らっても夢想封印喰らっても復活してくるバカをどうや

って止めるっついでいのよ」

魔理沙がなんとかしてくれよとすがすがすが、こればかりは霊夢だってどうしようもない。

何気に自分達の必殺技を喰らっても普通に復活してるのだから。悔しさ倍増である。

力づくでも説得でも通じないバカだからこそ、これまでの異変以上に苦戦するのだ。

人々は異変のよう形で異変でないこの事象を、後にこう呼ぶ。

東方迷惑録と。

人里

ガキーン！

コキーン！

「ルーミアーーーーっ！どこーーーーっ！？」

今、人里は大惨事だ。

たった一人の氷精 チルノによってあちこちに氷塊が生まれていく。テンションが上がっているからか、無差別だからというのが厄介。

「待つてよチルノちゃん！」

そんなチルノの後を一生懸命に追いかけるのが、彼女の親友 大妖精。

チルノが心配だからという理由でついてく彼女は、決して彼女の後を見失わない。

「こらチルノー！いい加減にしなさいっ！」

そんな二人をさらに後ろから猛烈な勢いで追いかけてくるのは、寺子屋の先生、上白沢慧音。

チルノ達の先生にして保護者的存在である彼女は、問答無用で暴れているチルノを止めるべく紛争する。

しかしハイテンションのチルノはぶっちぎりだ。

「止めないでけーねせんせー！ルーミアはあたいが見つかるんだー！」

そういつて空の彼方へと飛び去ってしまった。大妖精の腕を掴んで。普段はあんな天狗並みの速度など出せないはずなのに、どうしたものだろうか。

「ぜえ……ぜえ……」

慧音は追いつけなくなったチルノを見送り、深呼吸を繰り返す。

チルノの気持ちは分からなくはない。寺子屋の生徒が見つからないとなれば探さないわけがない。

だが懸命に探しても見つからなかった。頼みの綱の八雲紫も姿が見えないとのこと。

友達の為に一生懸命になれるあの子の思いやりは認めたい所だが…。

「せめて氷漬けにするのはやめてくれーっ!!」

本日のチルノの被害者……器物及び人体を含めて十六件。

今日も頭を下げる回数は増えてしまいそうだ。

紅魔館

「ワクワク」

「妹様、お部屋で大人しくなさった方が……」

「イヤ！ここでチルノが来るの待つもん！」

紅魔館の門に立つ二つの影。

一人はこの館の門番である紅美鈴。最近専ら保母さん扱いされているとの評判らしい。

そしてもう一人は驚くなかれ、あの『悪魔の妹』こと、フランドール「スカーレット」その人である。

美鈴の手に持つ傘によって日差しから守られているフランは、今か今かと友人を待ち焦がれている。

ついでにいえば、お気に入り的美鈴と一緒にいたいという秘密の欲

求もあつたりするが、当人は気づいていない。

キラン、と青空で一つの星が輝いた

「来たっ！」

「へ？」

二人が振り向いた直後 氷点下の彗星（オマケ付き）が紅魔館門前に降り立った。

そんな光景を窓から眺めていたレミリアはため息をこぼし、最も信頼する従者に門の修理を依頼した。

その従者 咲夜は主のため息と悩みの種に同調したかのように、ため息をこぼした。

ちなみに、当たり前だがここにもルーミアは居ない。

太陽の畑

ここは向日葵が海のように咲き乱れる場所 太陽の畑。

その中央で如雨露で水をやる女性が二人いた。

一人は蛍の妖怪 リグリ・ナイトバグ。チルノ達バカルテットの一人だ。

そしてもう一人は知る人ぞ知る超危険人物……『四季のフワラーマスター』、風見幽香。

花の恩恵を受ける蟲の妖怪と花を愛する妖怪の水やり作業は丁寧に
行われている。

大事に育ててきた向日葵達を見渡して、幽香は笑みを浮かべる。

「おーい！幽香ー！」

……また来たのね。

幽香は空から聞こえた声に疲れたようなため息をこぼし、空を見上
げる。

そこには知り合いの氷精……チルノと、大妖精の姿があった。

わざわざ空を飛んでやってくるのは、チルノは自身の冷気が花に影
響があると知つての考慮だ。

幽香はそんなチルノの小さな心遣いも気に入っている。だからこそ
侵入を許しているのだ。

「ルーミアなら居ないわよ」

「そうだよチルノちゃん。私もみすちーも一生懸命さがしているん
だから、そう何度も尋ねなくてもいいじゃない」

幽香の言葉に続くようにして、リグルはチルノに言う。

仲良しバカルテットの俗称は伊達ではない。

今はこうして水やりをしているが、リグルもみすちーも一生懸命探
している。

その中で最も行動力があるのがチルノだが……いくらなんでも無鉄
砲かつ暴れすぎだ。

「そっか！じゃあねー！」

ろくに挨拶もせず、大妖精を振り回しながら次へと向かうチルノ。相変わらずの無鉄砲さだ……幽香とリゲルはそう思いつつ、水やりを再開するのだった。

「こらリゲル、そこ水やりすぎよ」

バシーン！

「ぎゃーっ！…！」

地霊殿・灼熱地獄

「うにゅ？ルーミア？居ないよ？」

「だからなんとも言ってるじゃにゃいか。氷精ちゃんに大妖精ちゃん。死体の中に見つかったら連絡するって。そうなんでも襲ってくるんじやにゃいにゃー。……ていうか、あんた大丈夫？」

「えっと、大丈夫じゃありません……！」

上から順に、霊鳥路空ことお空、火焰猫燐ことお燐、大妖精。そして残りのチルノはここにいるが……とけて雪だるま状態になっていた。

ここは地霊殿の灼熱地獄。

核融合の炎を操るお空の仕事は、灼熱地獄の温度管理。

つまりは目茶苦茶熱い場所である。

迷いの竹林

「し……死ぬかと思った……」

「チルノちゃんなら簡単に死ななそうウサ」

「そうだね」 チルノちゃんは最強だもんね」

灼熱地獄を抜けてようやく元の身体に戻ったチルノは、屋台の机に突っ伏して疲れを露にした。

本日のみすちーの屋台は、因幡てゐが縄張りとする迷いの竹林。

すっかり夜中になった今、途中偶然見つけたみすちーの屋台に二人揃ってお邪魔することにした。

「チルノちゃん、無茶だけはしないでね？」

「無茶でもしなきゃルーミアは見つけられないよ!」

大妖精の優しさを無碍にするわけではないが、友達の不在にチルノは落ち着いていられなかった。

数週間経った今となっても、ルーミアどころか八雲紫ですら姿を見

せない。

ヤケになって探しまくっているというのに、どこにいるのだろう？

だが、チルノはおバカだ。

「明日こそ見つけてやるんだからー！ーっ！！」

そんな大声であげた誓いを前に、三人は健気に拍手を送るのであった。

とにかく三人に分かることは、明日もまたチルノは各地で暴走するのだという事だけであった。

行方不明のルーミア。消息不明の紫。

これらが何を意味するのか？

チルノが求めている答えは、いずれその身を持って知ることになる。

その時には、小さな存在の運命は大きく変わっていくことだろう。

完

十万アクセス記念小説「東方迷惑録 チルノバーサーク」(後書き)

私的東方キャラ紹介

今回はチルノが絡むキャラクターを中心に紹介します。
全てねつ造及び妄想が飛び交います。ご注意ください。

霊夢

鉄拳制裁がモットーの乱雑巫女。しかし面倒見が良く皆から慕われる愛さレイム。

魔理沙

努力家魔法使い。各所で無意識で恋を奪い片思いを受けているモテ女。超鈍感。

チルノ

バカルテットブルー。すこぶるバカ。本気出すと最強。友達思い。

大妖精

心優しい苦勞人。実はバカルテットに加わりたらしい寂しがり屋。

リグル

バカルテットグリーン。男じゃないよ？女だよ？密かにM。だからこそ幽香さん大好き。

ミスティア

バカルテットピンク。実はバカルテットの中で一番大人。おかみすちーですから。

慧音

皆のお母さんの存在。優しいが体罰系教師。その頭突きは幽香ですらたじたじ。

美鈴

門番より保母さんの方が似合うほどの子供好き。紅魔館のお母さんの存在。

フラン

無邪気すぎる破壊魔。異変後は姉と母と友達にレミリアメイリンハカルテット囲まれスクスク育つてます。

レミリア

主にカリスマ時々かりちゅまなお嬢様。暴れん坊な妹の将来が密かに心配。

咲夜

レミリアに忠実な従者……というかお母さん。瀟洒なようで実はドジッ子。

幽香

ごぞんじ超ドSな大妖怪。子供には優しいゆうかりん。

お空

チルノとはおバカ友達。覚えているもの…さとりと友達・忘れがちなもの…自分の能力と仕事。

お燐

お空のストッパー。意外と常識に富んでいる。お空を心身共に支える苦勞人。

てゐ

チルノ達の友達う詐欺。友達には嘘つかないよ。ホントだよ？

短いですが、これが私的設定の東方キャラクター達です。

お楽しみ頂けるのなら幸いです。読んで頂きありがとうございます。
た。

これからもよろしく願います！

第21話「ルーミア、ネギとエヴァに宣言する」

ルーミア視点

あれー？どうしたんだろー？

さっきまでけーねセンサーに捕まって、頭突きを喰らう寸前だったのに。

どうして目の前がいきなり真っ暗になったの？能力を使った覚えがないのに。

なんていうか、川に落ちちゃった時みたいに、ゆっくりと沈んでいく感じ。

うーん、寺子屋じゃないのは確かだけど……そうでないのなら、ここはどこ？

辺りを見渡しても、暗くて何も見えない……ルーミアは闇が好きだからいいんだけど。

あ、ネギ君発見。

「おーい、ネギくーん」

遠くに見えるネギ君に呼びかけてみる。

……あ、こっちから向こうへ近づくことができるみたい。

というわけで接近。声掛けに応じて振り向いたネギ君に近づく。

「る、ルーミア！？なんでここにいるの！？」

「その様子だと、何か知っているみたいだねー。今さっきここに来

たのー」

予想外、とばかりに凄く驚いたネギ君。けど、どうしてそんなに驚くのかな？

なんか顔赤くして、ちらちらとこっちを見ては、視線を反らしているけど……まあいいや。

なんでか知らないけど裸でいるネギ君を見てから、ルーミアは周りを見渡す。

「ねえネギ君、ここはどこ？」

「こ、ここはエヴァンジェリンさんの夢の中だよ」

「え？夢の中？それも主の？^{マスター}どうやって？」

「夢を覗く魔法があつて、それを使っているから僕らがここにいるんです。……そっか、この魔法って他に寝ている人にも効いちゃうんだつた……」

一人で納得しないでよー。ルーミア、さっぱりわかんないよー。

「……じゃあ、なんで主の夢を見るの？」^{マスター}

面白そうだからいいんだけど、なんでネギ君が主の夢を見たがつて
いるんだろう？^{マスター}

……あ、ネギ君が気まずそうにしている。

もしかして主には内緒なのかな？^{マスター}バレると痛い目に見るかもしれない？

それならやめておきなよー。氷漬けの刑にされちゃうよー。あれすつごく寒いんだからねー？

「……正直に話すよ。どうやらエヴァンジェリンさんはサウザントマスター……僕のお父さんに出会った頃の夢を見ているみたいなんだ。僕は父さんの事が知りたい。だからいけないとわかっていても、夢を見ることにしたんだ」

うん。素直でよろしい。いい子いい子。頭撫で撫で。照れない、照れない。

確かサウザントマスターって、主を封印した^{マスター}凄^{マスター}い魔法使いなんだよね。

魔法球の修行で体験したからわかるけど、主は^{マスター}むちゃんこ強い。

力を封印されているのに、同じ魔法使いの魔理沙やアリス、パチュリーよりも強いかも。

あ、けど今だとレミリアさんや幽香より弱いかもだけど、DS度は幽香さん並かな？

そんな凄^{マスター}く強い頃の主を封印した魔法使^{マスター}いって、どんな人なんだろ！。

「あ、あの、いい加減に頭から手をどかして……」

「ねえねえネギ君、ルーミアも一緒に見ていい？」

とにかく手をどかして、ネギ君に尋ねてみようつと。

強い頃の主^{マスター}を見たいし、ネギ君のお父さんがどんな人なのかも見てみたい。

ルーミアの目は期待に燃えているよ！一緒に怒られるのは承知の上だよ！

「それなら、もうすぐ見ることが出来るよ」

あ、そうなんだ？……そういえば段々と回りが明るくなっていくよ
うな……？

なんかネギ君、嬉しそうな顔をしているね？なんでだろう？

とにかく、ルーミアも一緒に主の夢を見るぞー！
マスター

ごめんね主！自由奔放が幻想郷の生き様なんだ！

「とても強かった頃の主か」
マスター

「父さんとエヴァンジェリンさんの出会いか」

なんか、すっごい楽しみだね、ネギ君！

お菓子と飲み物持ってくればよかったかな。持ってこれたのかな
？

段々と景色が真っ白になってきた……いよいよだね！

ネギ視点

お、驚きと戸惑いの連続だったよ……。

父さんって凄い魔法使いなんだよね？英雄って呼ばれるぐらいの。

昔のエヴァンジェリンさんも凄かった。まさに吸血鬼の魔法使いで
感じて。

そんなエヴァンジェリンさんを……まさか落とし穴（にんにくとネ
ギ入り）で迎え撃ったなんて……。

呪文はろくに覚えていないって豪語していたし、変な呪いをかけた
りしたし……。

こ、これはどう見てもエヴァンジェリンさんに同情せざるを得なく

なる……。
それに……。

ルーミア……怒ってない？

笑いも怒ってもいないけど……なんていうか、気配が……。

「ネギ君」

な、なに？

どうしてだろう、声色が凄く怖く感じる……。
相変わらずの無表情で、けどこちらを見る視線がある感情を物語っている。

静かな怒りって、こういう目つきをする人を言うんだらうか？
そんなルーミアがこちらへと振り向いた直後・

「起きて」

「はっ!?!」

な、なに!?!一瞬で闇に包まれたはずなのに！
目を覚ますと、目の前には眠っているエヴァンジェリンさんの姿。

あれ？確かあの魔法は対象が起きないと、こちらも目が覚めないんじゃない……。

ふと思つてルーミアを見たら……：やっぱり無表情で怒っている！あんな光景と過去を見たら当然なのかもしれないけど、ルーミアがここまで怒るのは珍しい。

五月さんからもらった肉まんを古クさんに取られた時だって、ここまで怒ったことなんてない。

そんなルーミアを見て僕は不安になる。

何かをやらかしそうな気がするのと、僕自身が感じている罪悪感のせいで……。

「あ、あの、ルーミア……？」

「ごめんネギ君、しばらく顔見たくない」

え？

不意打ちのような言葉に、僕の耳を疑った。

それと同時に、胸の中が空っぽになったような感じがした。

ルーミアは立ち上がると、有無を言わずに僕の腕を有無を握って引っ張った。

うわ、ちよ、そんなに手を引っ張らないで……：というか、凄い握力……。

「後は」

そのまま僕を引っ張って階段を降りて。

「ルーミアが」

居間を抜けて玄関へと足を進めて。

「やっておくから」

僕の手を掴んだまま玄関の扉を開けて。

そして両手で僕の手を掴んで……。

「帰って」

ブンッ

ええええええええ！？

ぼ、僕飛んでいる！？杖も無いのに空を飛んでいるよ！？

いや、解っているんだけどね！？僕がルーミアの力で投げ飛ばされたくらい！

全てがスローモーションのようにゆったりと動く中、僕はルーミアを見た。

「ルーミア決めた。絶対に主の……マスター……エヴァンジェリンさんの呪いを解く」

全ての動きがゆったりしているのに、ルーミアの言葉ははっきりと聞こえた。

そして僕は、ルーミアの顔を見て、心を痛めた。

いつしか僕に忠告した時のような、あのまっすぐとした目でそう

告げたのだから。

その後、僕は無様に地面に落ちていった。

怪我はしなかったけど、体よりも心の方がズキズキと痛む。

僕と父さんは関係ない。

けれども、僕の血さえあれば、エヴァンジェリンさんは自由の身になれる。

ルーミアはエヴァンジェリンさんの事が好きなんだ。姉のように家族のように。

だからこそ、あんなことをして封印した父さんに怒りを覚えたんだ。それが許せないあまり……直接は関係ないとわかっていても、僕を許せなくなつた。

どの道、僕の血が必要だから、ルーミアが酷いことをすることは解つていた。

大切なエヴァンジェリンさんを救う為に。

エヴァンジェリンさんは父さんに

ルーミア視点

好きだって伝えたかったのに。

玄関を閉めた後……いや、夢を見てネギ君を見てから、ルーミアの胸は痛いまま。

あの夢の主の最後の言葉を聞いて……ルーミアは怒つた。

サウザントマスターは酷い人。好きだって思いを無視してあんなことをして。

あんな目にあつた上に封印した、あのサウザントマスターがムカツク。
思わずネギ君に酷いことしたくなつた程だもん……ごめんね、ネギ君。

けど、この先にまたごめんなさいを言うかもしれない。
もしかしたら、それを言うのはネギ君が死んだ後になるかもしれない。

けど、ルーミアは……。

「……む……」

^{マスター}
主が起きた。

だいぶ回復したみたいで、顔色がよかつた。
けど、どことなく寂しそうな顔をしていた。ルーミアにはわかる。
それでも主^{マスター}……エヴァンジェリンさんは。

「……なんだ、ルーミアか。どうかしたか？」

ルーミアを見てくれる。

さっきのことをありのままに話そう。
氷漬けの刑にされたってかまわない。
だから……だから……。

^{マスター}
「主」

震えるのを懸命に押さえ込みながら、エヴァンジェリンさんの手を
掴む。

エヴァンジェリンさんは何なんだといわんばかりに首を傾げてばかり。

ごめんねエヴァンジェリンさん。今はなにも言わないで。

ただ言わせて。ルーミアの覚悟を。

「絶対、ぜーったいに、主マスターの呪いを解いて、自由になるうね」

絶対果たしてみせる。

果たして、主マスターの自由を掴んで、サウザントマスターを探して、仕返ししてやる。

そしていつか……いつの日か、エヴァンジェリンさん、茶々丸さん、チャチャゼロを……。

幻想郷に連れてきて、皆で一緒に暮らすんだ。

その後、ルーミアはさっきのことをありのままに話した。

もちろん凄く怒られた。

同時に、ルーミアに言ってくれた。

「頼りにしている」……って。

完

読者アンケート・其ノ弍（前書き）

このお話は本編とまったく関係ございません。
どうかお付き合いをお願いいたします。

10/30：アンケート締切・アンケート補足追加

読者アンケート・其ノ貳

茶々丸「魔法先生ネギま！ 東方英雄録、略して『ネギろく』お気に入り200件突破！」

エヴァ「お前が言うのと盛り上がりには欠けるな……」

茶々丸「すみませんマスター。ですが言えて満足です。ありがとうございます」

ルーミア「というわけで皆さん、いつも『ネギろく』を読んで頂きありがとうございます！おかげさまで10万アクセスを突破しただけでなく、こうしてお気に入り件数200件を達成することができました！」

茶々丸「他の作者様の作品に比べると、派手さやバトル描写、爽快感などに自信が無いので不人気ではないかと不安ばかりですが、皆さまのお気に入り登録及び感想が創作及び後続の励みになっています。これからも頑張っていくそうです」

エヴァ「ぶつちやけ遅すぎるんだ。更新ではなく展開が」

茶々丸「マスター、またもやはつちやけてますね……」

ルーミア「けどそこが作者の悩みなんだよね。本当ならアンケート其ノ貳になる前に京都旅行編に突入したかったんだけど、作者の技量や集中力、この後の展開を考慮すると中々進めないんだよ」

エヴァ「京都旅行編になれば東方キャラが一気に出てくる予定で、

アンケートの幅も広がるはずだったが、やはりあれこれ入れすぎて展開が遅れているという結末になったそうだ」

茶々丸「というわけで、まだまだ東方キャラの登場は遠いようです。申し訳ありません。どうか暖かく見守ってください」

エヴァ「さて、そろそろアンケート内容を発表せんとな」

ルーミア「今回のアンケートは二種類あるんだよ。その内容はこちら！」

アンケートその1「ルーミアと」

アンケートその2「読者希望アンケート」

エヴァ「まずその1の説明だ。これは前回のアンケートと同じで、ルーミアの学園生活を描く内容となっている」

茶々丸「この には麻帆良学園の生徒やキャラクターを募集しております。このままだと前回と同じになりますが、もちろん違いがあります」

ルーミア「それは前回1位を取った千雨さん以外のキャラクターを投票することと、投票権の復活なんだよ」

エヴァ「前回の千雨を除く投票結果をそのままに、再度読者が麻帆

良学園のキャラを投票できるようになる。前回の投票が今回の投票に加担される、というわけだ」

茶々丸「今回のアンケートは感想のみ受け付けます。前回と同じキャラクターを選ぶのも有りです」

ルーミア「続いてその2の説明だよ。これは今後のアンケート内容をアンケートするんだよ」

エヴァ「分かりづらい言い方をするんじゃない！」

ルーミア「あてー」

茶々丸「・・・説明します。これは今後も行い予定の100件毎の読者アンケート募集内容を、皆さまの希望に合わせてみようという目論見です」

エヴァ「頭の硬い作者が、アンケートのネタの幅を広げられないと悩んだ拳句、結局読者にすぎることにしたようだ。軟弱者め」

ルーミア「例えばだけど、『もしこの東方キャラがネギま!の魔法を使えたら』とか、『もしこのネギまキャラが幻想入りしたら』とか、『もしこの東方キャラが麻帆良入りしたら』とか、本編に關係のないアンケートでも大丈夫だよ。番外にするから」

エヴァ「とにかくアンケート内容は自由。こういうのが欲しいという希望があればどしどし送ってくれ」

ルーミア「けど読者の知識不足や描写力もあって、全部は叶えられないかもしれないから期待のし過ぎは禁物かも。作者の版權物への

範囲はかなり狭いけど、他作品クロスオーバー希望も一応は受け付けるって」

エヴァ「というか、この作品にアイテムや技とはいえ他作品クロスオーバーしようかどうか悩んでいるそうだ。例えば？つながりでない、モガモガ」

茶々丸「すみませんマスター、それはさすがに言わせません」

ルーミア「・・・これはこれで皆さまにお伺いしていいでしょうか？他作品クロスオーバーしても問題ないかどうか。ご感想やアドバイス、お待ちしております」

エヴァ「むが、もがーっ！」

茶々丸「すみませんマスター、少し大人しくしてください。……それでは皆様、何か分からないことがありましたら感想にて受け付けます。お手数をかけるようですが、よろしく願います」

ルーミア「それでは皆様、今後も『ネギろく』をお願いします！」

エヴァ（貴様ら後で覚えておけよ！これが終わったら氷漬けの刑にネジ巻きの刑だからな！）

・その後しばらくして

（2mはあろう氷塊の中心には、驚愕の表情を浮かべたルーミアが）

茶々丸「ああいけません姉さん、そんなに、巻かないでくだ、ああ

ああ……」

チャチャゼロ「ケケケ。恨ムナラ、オレニ螺子を巻キ続ケルヨウ命令シタ、ゴ主人ニスルンダナ。ホレホレ、マダマダ巻イテヤルゼ？コレガエエンカ？コレガエエンカエ？」

茶々丸「お許しを、姉さ、あ、アアア」

エヴァ「まったくあいつらは……。そうそう、報告し忘れたが、アンケート結果発表は11月10日にするそうだ。前回より少し早いので注意してくれ。また、アンケート2の募集内容は正確に言うところ『テーマ』だったらしい。皆さんの感想を見てから考えなおしてしまい、報告した次第だ。すまなかった。幻想入り及び麻帆良入りの希望はこのまま受け付けるそうだ。いずれ番外編として書く予定を考慮しているらしい。報告は以上で終了。諸君の投票を期待している」

ルーミア（あ、お腹冷えてきた……）

第22話「月明かりの戦い 幕開け編」(前書き)

痺れを切らしてしまったので、少しペースアップしようかと思いません。

ところで余談ですが、ギャグが足りないと言われてしまいました。もう少しギャグに力を込めたいと思います。しばらくはシリアスが続くと思いますが。

11/3：台詞修正。ご指摘ありがとうございました！

第22話「月明かりの戦い 幕開け編」

ルーミア視点

街中が全て暗闇に飲み込まれ、月明かりに照らされる。

これが大停電ってやつかー。さっきまで街中がきらきら輝いていたのに。

けどこれで……これで主の封印^{マスター}はしばらくの間、解けるんだね。

魔力の封印が解けるだけで、サウザントマスターの掛けた呪いは解けないみたいだけど。

ルーミアと主は^{マスター}今、街中を見渡せる時計台の天辺に居る。

両手の爪を壁に食い込ませて時計台に張り付くルーミアの隣には、主の姿が^{マスター}。

月明かりに照らされた、黒いマントをはためかせる主の姿^{マスター}ってかっこいい。

こういうのを、ロリカツコイイ、っていうのかな？

……変なこと考えてごめんなさい。だからそんなに睨まないでください^{マスター}主。

「い、いよいよだね、主^{マスター}」

ルーミアは話をそらしつつ、確認の為に隣にいる主^{マスター}に尋ねる。

主は黙ってルーミアを見た後、もちろんだといわんばかりに笑みを浮かべる。

ルーミアって信頼されているのかな？だったら嬉しいな。

ちなみに茶々丸さんは居ない。なんでも「はつきんぐ」しに行ったんだって。

主マスターや今はいない茶々丸さんの為にも、気を引き締めていかないとね。
今夜、ルーミア達はネギ君を襲う

のはいいんだけど。

「ねえ、これからどうするの?」

あ、主マスターが手と足を滑らせて落っこちた上に子供に戻っちゃった。

……かと思つたら、すぐに浮かんで体制を立て直した。器用だねー。

「あほかー！ 雰囲気壊すな雰囲気を！」

落ちかけても余裕はあつたみたいで、主マスターはルーミアを叱ってくる。

そんなこと言われても、ルーミア、ネギ君を襲つて聞いただけで手段は聞いていないしー。

雰囲気だけじゃ状況は解らないんだよ！

「とにかく少し黙ってみている」

そういうと主マスターは静かに夜景を見つめている。

ばたばたと風が靡く音だけが聞こえるだけで、何も起こさない。

……ん? どうしたの、主マスター? そんなに驚いて。

「おかしい……何故だ? 佐々木まき絵と連絡が取れんだと……?」

まき絵さん？

まき絵さんって、みすちーに似ている、ネギ君のクラスメートのまき絵さん？

あれ？まき絵さんって主とグルだったっけ？

そのまき絵さんと連絡してどうするつもりだったんだろう？

「まき絵さんはあなたに従いませんよ」

「あれ？」

「なに？」

ルーミアと同じタイミングで主も、あの声を聞こえて驚いたみたい。同時に後ろに振り返ってその先を見ると……意外な人物がそこに居た。

……どうしてここが解ったんだろうかと思っただけど、高いところに居たからかな？

月明かりを背景に、凄く沢山の武装を施したネギ君の姿があった。

ネギ視点

見回りの時に凄い魔力を感じて、もしかしてと思っただけど正解だった。

この時の為に用意した骨董魔法具アンティークを持ちだして向かってみれば、二人の姿があった。

ルーミアと一緒にエヴァンジェリンさんの夢を見てしまったあの日から、僕は考えた。
ルーミアがあんな顔をして決意を語ってくれた以上、僕も黙っては
いけない。

もちろん殺されたくは無いし、死にたくも無い。
けれどそれだけじゃない。

僕のせいで誰かに迷惑を掛けたくもないし、僕のせいで誰かを不幸
にさせたくもない。

だから考える。どうするのが最善なのか。

その為に力王君から多くの助言を貰い、対策秘策奇策、あらゆる手
段を考えた。

その対策の内の一つが エヴァンジェリンさんに噛まれたまき
絵さんへの対処。

「あなたに噛まれたまき絵さんを吸血鬼化させて操り、僕を誘き出
すだったでしょうけど……既に対策を施しました。これであなたの
命令は届きません」

魔力の残り香だけだったけど、吸血鬼に噛まれたのは事実。

きつと満月になって魔力が復活すれば、まき絵さんを吸血鬼化させ、
意のままに操ることができる。

そうなってしまうたら人質どころか、クラスメイト全員を連鎖的に
吸血鬼化させて、それを盾にするかもしれない。

その為に僕は、吸血鬼化対策を施した。

「……それをわざわざ私に告げるとは随分と余裕だな？わざわざ私
に噛まれた生徒全員を処置したのだから当然か」

苦労しましたよ。

肩こりに聞く薬だとか色々理由をつけて、全員に塗りつけたのは…。

それでも、エヴァンジェリンさんは動揺ですら見せていない。やっぱり対策を一つ施しただけじゃ駄目か……。

「だがいくら武装しているとはいえ、たった一人で」

「ねえねえ、ネギ君の持っているそれってなに！？すごい！かっこいいー！」

……興味津々なルーミアの横でエヴァンジェリンさんが空中ですっこけた……。

「け、けどそんなにかっこいいのかな？」

今まで集めてきた骨董魔法具コレクションを褒めてくれるのって、やっぱり嬉しいかも……。

「そ、そうかな？」

「そうだよー。……腰につけているそれなに？」

「あ、これは魔法銃だよ。攻撃魔法を込めた銃弾を撃つ魔法具なんだ」

「へー。そんなの凄いの？おもちゃっぽいのに」

「おもちゃなんてとんでもない！これすっごく貴重なんだよ！？ウエールズの雑貨市場で偶然見つけたんだけどね、魔法銃にしては珍しく大口径で……」

「無駄話するなガキ共　　っ!!」

「へぶう!?!」

「うひーっ!ごめんなさいエヴァンジェリンさん!」

すっごい剣幕で怒ってきたー!ルーミアなんか顔を殴られたしー!?
ルーミアの埋まった顔から「前が見えねえ」って聞こえて、ふらふらしている……。

それでも倒れないどころかふらつきもしないなんて、なんてタフな子なんだろう……。

つつい自慢話をしちゃったけど、エヴァンジェリンさんはが睨みつけ、それを許さない。

いつの間にか顔面が元に戻っているルーミアも、今回は珍しく本気になってみるみたいで、キッと僕を睨んできた。

……なんか調子狂うなあルーミアが相手だと……って、いけないじゃない。

二人とも僕を襲う気満々だけど……まずは話さないよ。

「この武器は保険です。……エヴァンジェリンさん、どうしても僕を殺して血を奪う必要があるんですか?」

「愚問だな。いまさら命乞いか?」

「確かに命は惜しいです……けど」

力で挑むだけじゃ駄目だ。
少しでも会話する余地があれば、提案を打ち明けることくらいは出来る。

受け入れてくれないのは尺も承知だけど……。

「僕の血だけじゃ駄目ですか？例えば、血を定期的に輸血するとか……」

ぼんつ。

「そっか、その手があったね！」

うわぁ、ルーミアがすっごくいい顔で納得している。

そんなルーミアの反応を見て、エヴァンジェリンさんが隣でまたずっこけた。

けど、すぐに空中で体制を建て直し、僕をキッと睨む。

さっきもそうだったけど、芸が細かいですねー。

「甘いぞ貴様！私は悪の魔法使いだぞ！？悪者を野放しにして、身の安全が保障されると思っっているのか！？」

やっぱり納得はしてくれないみたい。

エヴァンジェリンさんの夢をみたからこそ、僕への当て付けも少しは解る。

だけど、悪の魔法使いだからってという理由には、納得いかない。

だって。

「そこは解りません。……けど、茶々丸さんやルーミアさんが慕っ

「……それだけで」

「それだけのことで。」

「あなたが悪い人だとは思えないんです」

僕は、あなたを倒すことはできません。

「……いいだろう坊や」

途端に、エヴァンジェリンさんは怒りも憎みもせず、僕をまっすぐに見つめてくる。

エヴァンジェリンさんに襲われて、ルーミアに忠告されて、茶々丸さんとルーミアを襲ってしまって、エヴァンジェリンさんの過去を見た。

それらの経験が今の僕を冷静にさせていることで、はっきりとわかる。

エヴァンジェリンさんの全身からあふれ出る魔力と 殺気に。

「なら示してやろう！私が『ダークエヴァンジェリン闇の福音』、エヴァンジェリン＝A＝
K＝マクダウエルだということをして！」

己の二つ名を堂々と述べ、仰々しくマントを翻して決める。

その姿と名乗りには、残酷無情な悪者ではなく、誇りある悪の魔法使いの威厳を感じ取れた。

ルーミアが懂れる理由が、ちょっとわかったかも。

名乗りはしたけれども、エヴァンジェリンさんはすぐには動かない。動かすのは手だけ、横に薙ぎ払うように振るい、その指を僕に向ける。

「まずは行け、ルーミア！」

「了解なのかー！」

え？先にルーミアに行かせるの？

いや、様子見のつもりなのだろう。

エヴァンジェリンさんの指名もあり、ルーミアは時計台から飛び降りた。

まるで十字架のように両手を広げ、空中を飛びまわり、僕と視線を合わせる。

それでもすぐに襲うようなことはしない。

じっと視線を合わせ。様子を伺っている。僕の言葉を待っているかのよう。

「ルーミア……どうしても戦うの？」

「それで、主の自由を手に入れることができるのならね！」^{マスター}

戦わなければならないことがとても悲しいけど、ルーミアは本気だ。ルーミアにとって大切な人の自由を手に入れる為に、僕に本気で挑んでくる。

なら、僕は応えなければならない。

どんな手を使ってでも、ルーミアを、茶々丸さんを、そしてエヴァンジェリンさんを止める。

皆が解り合えるようになるまで、僕は何度でも止めてみせる。

完

第23話「月明かりの戦い ルーミア編」(前書き)

本日は4日だと思いこんで投稿を忘れていました、すみません！
(汗)

11/5:ピザ戦車様のリクエストにより、ラカン式強さ表を追加
ご指摘ありがとうございました！

第23話「月明かりの戦い ルーミア編」

ネギ視点

「それぞれそれー！」

「ひーっ！！」

いきなり一方的だーっ！なんなのこれーっ！？

どうやったらあんなに沢山の魔法弾を撃てるのーっ！？

僕は杖に乗って飛行し、ルーミアから逃げ回ってばかりだ。

かなり早いはずなのに、ルーミアはそんな僕を斜め後ろの方角から、つかずはなれずの距離を保っている。

そんなルーミアを中心に、物凄く沢山の魔法弾がまるで球体を描くように飛んでくる。

まるで壁のように密集したそれは、なんとか避けきれぬ隙間を潜り抜けて避けるので精一杯。

これじゃ、せつかくの魔法銃や魔法薬を放つ暇がない！

こんな魔法知らないよー！

「ふはははは！どうした坊や！いきこんでいた割に逃げ腰じゃないか！」

時計台の天辺に居座って僕らの追いかけてるを観戦しているエヴァンジェリンさんの声が響く。

そんなこと言われても、これはさすがにやりすぎですよー！

それでも、エヴァンジェリンさんが参戦してこなかったのは助かつ

た。
もしこの猛攻に加えてエヴァンジェリンさんが攻撃してきたら、勝てる気がしないかも……。

けど今はこの弾幕から避けないと！

避けながらでいい！まずはこの魔法がなんなのかを確かめないと！頭の中で冷静を訴えながらも、僕は魔法弾の雨を避けて観察を開始する。

ルーミアに詠唱している様子は無い。もしかしてこれは無詠唱魔法なんだろうか？

だけど、確か無詠唱魔法は時間差攻撃のはず。

この弾幕は明らかに連続で発動している。

じゃあ、この魔法はなんなのだろう？

避け続けることで徐々に余裕を持てるようになってきたけど、回避に専念しなければならぬこの状況では詠唱に集中できない。だから、この魔法銃で攻める！

ドドン、ドンッ！

「うわわっ!?!」

発砲された魔法弾は　ルーミアに直撃せずはせず、空へと消えていった。

あれだけ撃っているにも関わらず、ルーミアはまるでお魚のように空を舞って避けている。

うう……このままじゃジリ貧だ……！

せめてルーミアに近づけさえすれば……！

「よーし！次はこっちからだよー！」

ルーミアが高らかにそう宣言すると同時に、何故か弾幕がぱったりと止んだ。

いまだ！一気に接近する！

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」

今度は威力を落として……！

僕は確実にルーミアに命中させる為に接近し、詠唱する。するとルーミアは両手を広げ、何かを見せ付けてきた。

あれは……カード？

その内の一枚……左手に掲げたカードを手の平の中で踊らせ、それを輝かせる。

何が来る……！？けど、僕の方が早いし、この距離なら……！！

「魔法の射手！連弾・光の11矢！！」

「夜符『ナイトバード』！！」

10mぐらいの距離の中、僕とルーミアから光り輝く魔法弾が同時に現れた。

一方は僕の放った「連弾・光の11矢」。高速で飛ぶ攻撃魔法だ。もう一方はルーミアが放ってきた……15羽のカラス？

違う！まさかあれは、闇の攻撃魔法！？

高速かつジグザグに飛び交う白と黒の連弾の何発かは相殺しあって

爆発。

残る連弾は……うわわ、こっちにも来た！？逃げないと！
だけど向こうにも僕の連弾が向っているようで、ルーミアも高速で飛行して逃げ出す。

けど、このカラスのような連弾は一体？

それは僕の連弾にはない、まるで本物の鳥のような動きを見せて追いかけてくる。

何度も引き離そうとするけど、しつこくて振り切れない……！
ルーミアもそれは同じのようで、僕の連弾から逃げ続けている。

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」

なら、もう一度！

「それーっ！」

ええええええええ！？

さつきみたいな宣言も無く、すぐさま同じ連弾と弾幕を放ってきた！
後方とは別方向から黒い連弾が迫ってくることで焦燥感が沸き、すぐさま回避する。

ええい、もつたないけどつかっちゃえ！

僕は体中に撒かれたベルトから二つの魔法薬を取り出し、それを放る！

ドオオンッ！

やった！上手くまとめ吹き飛ばすことが出来たみたいだ！

だけどそれだけでは済まないようで、ルーミアからはどんどんあの黒い連弾と弾幕が放たれていく。

逃げてばかりじゃ負ける！

怖いけど……接近！カラスのような連弾を避けつつ、僕は魔法銃をお見舞いする！

さすがのルーミアも魔法銃の連続射撃には焦っているらしく、自然と僕との距離を取る。

回避と攻撃の両立はやっぱり難しいみたいで、向こうの連弾を放つ早さが遅くなっていく。

ただし弾幕は相変わらずの密度と威力で、僕の魔法弾の行方を妨げる壁となって立ちはだかる。

それに……この弾幕を避け続けてきたことで、ようやく解ってきたことがある。

この広範囲攻撃魔法の欠点……！

魔法弾の射出パターンが決まっているということに！

エヴァンジェリン視点

まさかここまで粘るとは。

実力的に言ってしまうえば、ルーミアが圧倒的と言ってもいい。

魔力容量こそ坊やに劣っているが、攻撃性や戦闘経験は段違いだ。

それでも坊やは、持ち前の魔力と魔法具を使い、拮抗状態を維持している。

加えて坊やの動きを見るところを考えると、どうやら見抜かれたようだ。

初見ならあの広範囲攻撃……『弹幕』とやらに驚愕するのは間違いない。

私が初めて見た時も驚いたが、一発ごとの威力と密度の薄さがその評価を下げた。

魔法球での修行で身についた力は、それらを向上させることに成功、威力と密度を大幅に強化できた。

だが、私達がどれほど学習・反省・研究・練習しても治らない欠点の一つだけあった。

それが、坊やも見抜いたであろう、魔法弾の射出パターンの定着化だ。

無詠唱無操作に加えて無意識故の欠点か、その魔法弾の軌道にはいくつかの決められたパターンが存在する。

見抜かれて回避手段を見つけられては弹幕の意味が無くなる。

しかしそれらを改善しようとすれば途端に弹幕としての機能が低下してしまい、半端な攻撃となってしまう。

その欠点がある程度埋めるのが、唯一意識を集中できるスペルカードでの攻撃。

今ルーミアが放っている「夜符『ナイトバード』」も、その欠点のカバーに役立つている。

加えてルーミアのスペルカードの技は闇属性の攻撃魔法に酷似している。

私が徹底的に研究・指導・修行してやった結果、その性能は格段に

上がった。

『ナイトバード』も、最初期に比べれば段違いの追尾性と威力を發揮できた。

だが坊やはそれを『魔法の射手』で打ち消し、尚且つそれから逃げ続けている。

……やはり侮れないな、スプリングフィールドの血筋は。

あ、あれは直撃するな。

ネギ視点

「あうちっ!?!」

やった!一発命中した!

変な声を上げたルーミアの顔からは、魔法弾が直撃した証拠であるかのように煙が吹き上がる。けど威力は調整してあるから、少なくとも顔にパンチされた程度のはず。

直撃のおかげで集中力が切れたのか、弾幕も黒い連弾も霞みのように消えていった。

煙が風で流されると、そこには半泣き状態のルーミアの顔が、痛みを震えていた。

ご、ごめんねルーミア……やっぱり痛いよね……。

「よくもやったなー！」

けどルーミアは泣き言どころか怒り出して、もう一枚のカードを掲げる。

また何か別の攻撃が来るかもしれない……今度は何が飛んでくるのか……。

いや、怖がってばかりじゃ駄目だ！

ルーミアが痛い思いをしても立ち向かってくるのに、僕だけ逃げるなんて！

こうなったら、いちかばちか……一気に攻め込む！

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル！」

弾幕がこない今なら、接近しつつ詠唱することができる！

「月符『ムーンライトレイ』！」

カードを手の中で輝かせ、両手をまっすぐとこちらに向けてくる。すると両手の間に光の球体が現れ……えーっ！？レーザー！？

ルーミアの両手から光線が二本伸びてきて、こちらに向ってくる！これならなんなく避けられるけど……やっぱり一筋縄じゃないか！また弾幕が降ってきた！

けどそれは見切っている！

詠唱中だからといって、手は動かせる！

ありつたけの魔法薬と魔法銃で、行方を遮る魔法弾を相殺する！
まるで光の柱を振り回すようにレーザーが僕の行方を遮るけど、当たらないよ！

「光の精霊・29柱！」

色彩豊かな弾幕を潜り抜け、

いくつもの小さな爆発が鼓膜を刺激し合い、

金色に輝くレーザーが縦横無尽に振り回される。

それでも、僕は不思議と恐怖心を感じられない。むしろ……楽しい？
ルーミアも同じだった。もうすぐで詠唱が完了するというのに、凄く楽しそうだった。

この勝負……もらったよ！

『魔法の射手！連弾・光の29矢！』

この距離でこの数なら、弾幕の魔法弾が2、3発当たっても消滅しない！

幾つかは弾幕に相殺され、レーザーに焼き払われる。

そして一発の魔法の射手が、ルーミアに直撃した。

「あべぶーっ！！」

ピチューン！

エヴァンジェリン視点

「ハツハツハ！まさかルーミアが敗れるとはな！」

面白い！本当に面白いぞ！くそ、酒でも持つてくるんだったかな。

坊やの魔法の射手を直撃したルーミアは、そのままふらふらと地面に落下。

どうやらスペルカード発動中は極端に撃たれ弱くなるらしく、自慢のタフさも少しは衰えるそうだ。

スペルカードルルという癖がついたかららしいが、いい加減直して欲しい。

まあいい。少しは退屈しの手にはなつたし、時間稼ぎにもなつた。

「お待たせしました、マスター」

「随分遅かったではないか、茶々丸」

私は傍に接近してきた茶々丸に目を配り、その姿を確認する。

背中に火を噴かせながらぺこりとお辞儀をする姿は間違いなく茶々丸だ。

ただ、その表情は少し不安げだ。

心配するな。ルーミアは時期に復活するだろ。

さて……次はさっきのように生ぬるくないぞ？

完

第23話「月明かりの戦い ルーミア編」(後書き)

第1回ラカン式強さ表(漫画参照)

順に

ルーミア(修業後)	400
ネギ(現段階)	250
戦車	200
ルーミア(修業前)	200
魔法学校卒業生	100
達人(気未使用)	350
明日菜	15
千雨	1
ねこ	0.5
ゆっくり	0.1

ルーミアは、攻撃性能は高いが体力・防御力が低い、みたいなステータスで考えています。
ゆっくりを混ぜたのは趣味です(笑)

第24話「月明かりの戦い エヴァ編」(前書き)

11/9:誤字修正。 第23話 第24話

第24話「月明かりの戦い エヴァ編」

ネギ視点

「はあ、はあ……っ」

な、なんとか切り抜けた……。こ、怖かったかも……。ルーミアは地面に落ちこちたけど、落下速度は速くないし、どうやら無事みたいだ。襲撃の時みたいに目を回しているけど、体に目立った異常は無い。よかった。今度はきちんと加減できたみたいだ。しばらくは麻痺で動けないだろうけど、時期に自然回復できるから、大人しくしていてね。

次の相手は、エヴァンジェリンさんと茶々丸さんなのだから。

「ふははは！中々どうして見事なものだったよ、坊や！」

僕の目の前には、エヴァンジェリンさんと茶々丸さんが空中に浮かんでいた。

エヴァンジェリンさんはコウモリのようにマントを広げ、茶々丸さんは背中から火を吹かし飛行している。

あのルーミアを自らの僕とした吸血鬼……勝てる気がするではないよお……。

「だがな……ゲームでいうならあいつは中ボス。ここからはガチのラスボス戦だ」

両手を広げてパキパキと音を鳴らせながら氷の魔力を蓄積するエヴ

アンジェリンさん。

おまけに隣では茶々丸さんが、何故かシャドーボクシングをしているし……。

けど、二人ともやる気満々だぁ……！

「さぁ行くぞー！リク・ラクラ・ラック・ライラック！」

「失礼します。ネギ先生」

ひーっ！来たーっ！

けどすみません、エヴァンジェリンさん……！

僕は……！

「カモ君！」

『合点承知之助！』

僕はあなたと戦いません！

エヴァンジェリン視点

「な……っ！？」

馬鹿な！？

茶々丸が接近しようとした途端、坊やのマントからオコジヨ妖精が

出てきただと!?

なんでこいつがこんなところにいる!?

だが……驚いたのはそれだけではない。

一人と一匹は、そのマントの下に隠された、大量の魔法薬と魔法爆弾を一気に放り投げてきた。

しかもご丁寧に、そいつらは素早く口と鼻を手で覆った。

そして試験管同士が割れて液体が混ざり合い、魔法爆弾が着火される。

その直後、周囲を覆う大爆発が私達を襲った。

派手な爆風と爆音が、鼓膜を破けかねないほどの振動を体全体が受け止める。

だがあれらはどうやら煙幕の類らしく、爆発による被害は風圧と音だけで済むようだ。

かと思えば、目と鼻に強烈な痛みが襲ってきた。

「ぶえつくし、はつくしゅん、へくしゅ、ぶええつくしゅんっ!」

だ、駄目だ! 涙とくしゃみが止まらない……!

くそ、これは催涙弾だったか! 目が、目が痛い……!

「マスター、落ち着いてください」

落ち着けて止まるのなら無理ないわ!

いいよなお前は! 口ボだから催涙弾こんなもん、効かんよな!

茶々丸は煙の中で私を抱きかかえて煙の外へと向かう。

やっと周囲が見渡せるようになって、私の目と鼻の痛みは止まらない。

「くそ……ぐず……茶々丸、坊やはどこへいった!？」

目が見えないから、茶々丸に任せるしかあるまい……!

「……ネギ先生を補足しました。棧橋へと向っているようです」

棧橋へだと？

というか坊や、私から逃げる算段だったのか!？

あれだけ戦いましょう的な雰囲気を出しておいて、逃げるとは何事か!？

だが現状を考えてみれば、確かに私から逃げるのが最も友好的な手段とも言える。

恐らくはあのオコジョ妖精の入れ知恵だろうな……くそつ、案外使えるなあ鍋の具モドキ……!

「こうしてはおれん! 追うぞ茶々丸! 最大速度で奴を追え!」

「イエス、マスター。しっかり捕まっています」

こいつの最高速度は本当に速いからな……しっかりとしがみついている……つと。

そして風圧という強大な負荷を受けて茶々丸は発進する。

この速度ならすぐに追いつけるだろう。その間に目が治るといいのだが……。

あの坊やと具モドキめ……ギッタンギッタンにしてやるから覚悟しておけ!

ネギ視点

うっ……凄い寒気が……やっぱり怒っているだろうなあ、エヴァンジェリンさん……。

後ろを振り向くと、球状に広がる爆発の煙と、こっちに向ってきて飛ぶ茶々丸さんの姿が。

『いいか兄貴！最終的に言っちゃえば、エヴァンジェリン達に対抗する必要はまったくねえんだ！連中は確かにあくどいこともするだろうが、結果的に奴から逃げ切れればそれで無問題モクマンタイだぜ！』

風を切る音に混じってカモ君の声が聞こえてくる。

……まだエヴァンジェリンさんと茶々丸さんとの距離はある。聞こえてはいないだろう。

それでも僕の姿を確認したのは間違いない。

だけどそれでいい。少しでもこちらが逃げ切れるようになるなら。

エヴァンジェリンさんの魔力が今になって復活したのは予定外だったけど、封印が生きていられるだけでも幸いだった。

なんとかして封印が有効な距離を見つけないと、エヴァンジェリンさんはどこまでも追いかけてきそうだ。

だけど、それだけじゃ駄目だ。

もしかしたらエヴァンジェリンさんは、人質をとって僕に要求してくるかもしれない。

だからこそ、エヴァンジェリンさんにさも戦いを挑むようなことをして、

こうして必ず相手の目に着く距離を保って逃げ続ける。

貴重品だけど、人払いの結界の符もあちこちに設置したし、襲われる心配はないはずだ。

対策に対策を重ね、一度きりの奇策を投じ、情けなくとも確実な秘策で逃げ続ける。

これが僕らに考えられる、真祖の吸血鬼に対する精一杯の抵抗。誰に迷惑もかけず、誰も死にはしない、最も確実であろう手段。そのためにルーミアが傷ついたけど……今はこうするしかない。せめて、僕を殺そうとするエヴァンジェリンさんの力を抑え、何とか話し合いに応じてもらう為に。

両者が解り合える時が来ることを信じたいが故の、苦肉の策。

だからこそ、僕は逃げ続ける！

「こらー！待て坊やーっ！！許さんからなーっ！！！」

ひーっ！？

茶々丸さんに抱きかかえられたエヴァンジェリンさんが、氷の魔法をどかどか撃ってきたーっ！！

ルーミア視点

……あ、体が動けるようになってきた。

さすが主^{マスター}、すつごく頭がいいなー。

ネギ君も、まさか前もって主^{マスター}から麻痺解呪の薬を貰っていたとは気づくまい。なのかー。

なんとか薬を出して飲める程に動けるのが幸いだっただね。

あの魔法受けると、凄く痺れるんだもん。

けどこのお薬って凄いなー。凄く早く痺れが取れていくんだもん。

「……んー、気分爽快っ！」

体力も回復したし、伸びをして、ルーミアふっかーっ！

起き上がって両手を挙げて復活のポーズをとっちゃうんだよ！

さてと！

「待っててね、マスター！今行くよー！」

さっそくマスターの元へ向うのかー！とおっ！ハイジャンプ！

あっちでドカンドカンいつているから、多分あっちだよな！

急いで飛んで向うのかー！

今、チリンって音がしたような……まあいいか！急ぎーっと！

完

第25話「月明かりの戦い ピンチ編」(前書き)

少々筆が追いつかないので、元の更新ペースに戻します。
期待させるような宣言をしておいて申し訳ありません。

第25話「月明かりの戦い ピンチ編」

エヴァンジェリン視点

『魔法の射手！氷の17矢！』

「うひゃー！」

この！避けるな！

当たっても氷漬けになる程度だろうがっ！

よくも私に催涙弾なんてセコイものを使わせてくれたな！まだグスグスする……！

坊やは氷漬けにして、具モドキは今度こそ寄せ鍋の具にしてやるから覚悟しろ！

運河のあちこちを氷に変えつつ、私達は逃げ続ける坊やを追う。

ようやく目が見えるようになった私は自ら飛び、魔法を乱射する。

だが坊やはあくまで逃げに徹するようだ。

自身に命中しそうな魔法だけを魔法銃で撃ち落とし、時節オコジヨ妖精が魔法薬を投げて逃げる為の距離を稼ぐ。

それに辺りを見てわかったが……時節見えていたのは、人払いの結界の符か。

なるほど、この運河は最初から逃走ルートとして想定されていたらしい。

人や建築物の被害が少なく、なおかつ障害物の少ないこの道ならますます逃げるには適している。

今回は逃げばかりの作戦だというのが癪だが……中々考えられてい

る。

元々頭がいい奴だったが、冷静になったことでより状況を把握し、自らに有利でかつ被害が出ない手段を見つけ出した。

教え次第では相当な戦術家に化ける可能性もあるな……ますます興味^アが沸いてきた。

む……あの橋に逃げるつもりか？

あそこは学園の端だから、そこへ逃げ込んで難を逃れるつもりか。だがな……そうはせん！

「氷爆！」

「うわっ！？」

私の氷爆で坊やは吹き飛び、体勢を崩し地面に落ちる。

体を地面に打った衝撃が痛むのか動きが鈍くなり、その場にうずくまる。

それを逃すほど私は甘くない。一気に距離を縮める。

「こ、この！この！この！」

まだ立ち上がれないが、坊やはフラフラとした手で魔法銃を乱発する。

……おいおい、照準ですらまともに合っていないではないか。

掠りもしない魔法銃の攻撃を気にせず、私達は地面に着地する。

そして弾切れ。カチンカチンと音が鳴る。

……坊やの青い顔を見る所、どうやら次の魔法銃は無いらしいな。あれだけ骨董魔法具^{アンティーク}を使いまくったんだ。無理も無い。

「さあて、どうした？まだまだ結界外から距離はあるぞ？」

「うう……っ」

逃がすつもりもないが、私はからかうようにして坊やを追い詰める。坊やは涙目になりつつ、ずりずりと後退りする。

む！？足元に魔法陣！？

ネギ視点

やった！上手く掛かった！

エヴァンジェリンさんと茶々丸さんを包む光は、足元の魔方陣から発せられているものだ。

魔方陣が二人を包み込み、続いて何本もの光の糸が二人に絡みつく。

これは、熊でも解けない強力な捕縛結界！

「やったぜ兄貴！」

捕縛結界の強さが保障されているからか、カモ君がマントから出てきて僕の肩に乗ってきて喜ぶ。

僕はほっと溜息を零すが、エヴァンジェリンさんはまだ諦めきれないようだ。

「まさかこんな物まで仕掛けていたとはな……全ては計画通り、か？」

なんだろう、エヴァンジェリンさんのこの余裕は？

「……もう動けませんよ？大人しくしてもらえませんか？」

「ま、こうなってしまうえば私の負けだろうな」

やれやれ、と言わんばかりに溜息を零すエヴァンジェリンさん。ただその表情には、やはり余裕じみた物が入り混じっていた。

……まさかだと思うけど……！

「だがな、まだまだ甘すぎだよ！茶々丸！」

「イエス、マスター。結界解除プログラム、作動」

やっぱり、まだ何かがあるみたいだ！

すると茶々丸さんの耳（？）からアンテナみたいなのが伸びてきた。

……あれ！？捕縛結界の糸がひび割れてきた！？

「な、え！？」

「熟練の魔法使いは予知に近い物が身につくものさ。……このくらいなら想定範囲内さ」

ゆっくりとだけど、徐々に捕縛封印が解かれていく……！

このままじゃ封印が完全に解除されてしまう！

ですけどね、エヴァンジェリンさん！

「それは……！」

僕はマントを、あえてエヴァンジェリンさんにマントの裏を見せ付けるようにして翻す。

「な……っ!?」

マントの裏にある『それら』を見たエヴァンジェリンさんは、啞然とした表情を浮かべた。

マントの裏に隠されていたもの。それは……！

縄・鎖・トリモチ・漁獵用の網・トラバサミ・瞬間接着剤・粘着テープ・手錠・南京錠・その他諸々！
もしもの時に用意した、エヴァンジェリンさんの動きを止められそうな物です！

「こっちだって同じです！」

捕縛結界が解けない限り！ありとあらゆる手段であなたを止める！！
これが、ダメモトの最後の秘策です！

ルーミア視点

ふよよん、ふよよん。

あ、見えてきた。

橋の上にネギ君と茶々丸さん、そして主^{マスター}を上空から発見。
なんか光り輝く魔方陣の上に主と茶々丸さんが捕まっている。
そんな二人を相手に、ネギ君はなんか色んな道具を使い始めた。

あ、魔方陣が消えた途端、ネギ君が吹っ飛んだ。

手錠とかトラバサミとか二人についているけど、引きちぎって壊しちゃった。

吸血鬼とロボット相手じゃ駄目だったみたいだねー。

ま、とにかく向おうっと。

そしたら、三人とも気づいてこっちに振り向いた。

「早かったなルーミア」

「無事でよかったです、ルーミアさん」

ルーミア、ふっかーっ！なのかー。

二人の前で着地して、ポーズを取っちゃうんだよ。

「……ところで主^{マスター}、なんでモチまみれになったまま、ネギ君にチヨーククリーパーを掛けているの？」

すっごく様になっているよ主^{マスター}。かっこいいー。

小さい身体で、しかもあちこちにモチがついているのに、よくネギ君を抑えられたね。

けど、どうしておモチ？

「ただの腹いせだ」

あーら、主マスターを怒らせるようなことしちゃったかな？可哀想にねー。
だけどいいのかな？ネギ君の顔が青くなっているよ？

「ご心配いりません。マスターはあれでも手加減しています」

そうなのカー？

というか、なんで茶々丸さんの頭にトラバサミが噛み付いているんだろう？

取らなくていいの？

……あ、よく見たら茶々丸さんの手には、あの鍋の具モドキが握られている。

『兄貴！』

具モドキもさすがに心配だよね。

「……まあ、このガキもよくここまでもったよな……」

呼吸をするぐらいに力を緩めたけど、決してネギ君を離さずに主は言った。

気絶してここまで来るまでの間に何があったか知らないけど、主マスターが寝めるなんて珍しいねー。

「さて、ではこのまま血をいただくとするか……」

ギリリ、と犬歯を光らせてマスターは口を開く。

それを察したネギ君はばたばたと目がくけど、あの姿勢じゃ無理だよー。

いよいよ主^{マスター}の封印が解けるんだね！

「あの、マステ」

「一気！一気！一気！」

あ、ごめん茶々丸さん、何か言った？
けどルーミア、すぐくハイなんだよ！
さあ吸って！吸って復活するんだよー！

「コラーツ！！」

あれ？この声……。

振り向いて見ると、そこには猛烈な速さで走ってくる明日菜さんの姿があった。

あれー？なんでここに居るのー？……あ、あの構えは……。

「必殺！トリプル明日菜キック改いーっ！！」

ライダーキックを優に超える跳躍を見せ付けてから、明日菜さんの足の裏が見えた。

デジャヴー。

「あ

「へぶっ！？」

「あぶるばあっ!?!」

痛いーっ!

明日菜さんの強烈なキックがルーミアに直撃したのかー。

おかげで三人とも吹っ飛んじやったよ。地面に跳ねてすっごく痛いー。

^{マスター}主なんか何度も跳ね飛んじやったみたい。

身体の節々の痛みを手で軽く押さえつつ、ルーミアは立ち上がった。茶々丸さんは倒れたまま立ち上がらない主の^{マスター}もとへ向ったみたい。

……さっきのキックで、茶々丸さんのトラバサミが取れたみたい。よかった、最後までほったらかしとかじゃないんだ。

じゃあルーミアがネギ君と明日菜さんを　　？

明日菜さんとネギ君、どこに行ったのー？

完

アンケート結果発表・其ノ式（前書き）

このお話は本編とまったく関係ございません。
どうかお付き合いをお願いいたします。

アンケート結果発表・其ノ貳

エヴァ「お気に入り件数100件突破記念小説アンケートの結果発表だ。今回は2種類あるので、順に発表していく」

ルーミア「じゃあまずは、アンケート1の発表だね」

茶々丸「今回のアンケートは前回の投票も含めて、木乃香さん、図書館島探検部も含めて夕映さんのお二人と……このさよとはどなたでしょうか？」

ルーミア「3年A組の幽霊さんなのかー」

エヴァ「なんだ、貴様見えていたのか？」

ルーミア「幻想郷に、お偉いさんの幽霊知ってるもん」

エヴァ「……もう驚かんぞ」

茶々丸「……話が見えないので先に進めます。上記3名がそれぞれ2票ずつという結果になりました」

ルーミア「正直、すごく悩んだんだよねー。どれもお話は浮かんでいるんだけど」

エヴァ「そして悩んだ結果、短いながらも3人分まとめて書くことにするそうだ。短編集みたいなものか」

ルーミア「投票してくださった皆さんに悪いと思ったけど、次回に

また投票ルールを追加するかもしれないって」

茶々丸「作者の我儘をどうかお許してください」

エヴァ「まったく優柔不断な作者だな……投稿は11月20日を想定している。何せ3人分だからな……」

ルミア「どうかお楽しみに！なのかー」

エヴァ「では、続いてはアンケートその2の発表だ。発表といえるほどのことはしないがな」

ルミア「幻想入りと麻帆良入りのアンケートが予想以上に多かったですよー」

茶々丸「また、他作品のクロスオーバーもいくつか見受けられました。ですが作者がご存じない作品ばかりですので、応えられるかどうかが妖しいです」

エヴァ「後先考えないバカ者が……これはできる限り叶えようと考えているらしいが、あまり期待はするな」

ルミア「幻想入りと麻帆良入りは、お気に入り件数突破危険のアンケートが、PV突破記念小説に採用しようかと思っけています」

エヴァ「というものの、この作品の中心でもある東方キャラがまだ登場していないので、幻想入りと麻帆良入りは先延ばしするかもしれない」

茶々丸「ですが御希望も多かったなので、なんとか次のアンケートに

幻想入りまたは麻帆良入りができるように努力いたします」

ルーミア「というわけで、次回のアンケートをお待ちください！」

茶々丸「では、第2回お気に入り件数突破記念アンケートの発表を終わります。皆様の沢山のご意見、本当にありがとうございました」

エヴァ「珍しく今回はゴタゴタも無く終わったな」

ルーミア「ほんとだよ〜。何か一つぐらいはあるかと思ったのに」

茶々丸（それは禁句というものではないでしょうか……）

エヴァ「聞こえたぞ茶々丸」

茶々丸「いえ、なにも申し上げては……な、なんですかマスター、ゼンマイなどお持ちになって」

ルーミア「それじゃあ皆さん！これからもネギろくをよろしくお願
いしますー！」

第26話「月明かりの戦い 明日菜参戦編」

明日菜視点

「フー……危なかったー」

ほんと、一時はどうなるかと思ったわよ。

まさか咄嗟で思いついた『トリプル明日菜キック改』が命中するなんてねー。

……じゃなくて。

三人を吹き飛ばした後、私達はすぐに柱に隠れて身を潜めた。

おかげで少しは難を逃れたみたい。向こうは必死で探し回っているみたいけど。

ネギにプロレス技かけたエヴァちゃんを引っぺがせてよかったわ。

……といふかなんでエヴァちゃんにプロレス技かけられていたのよ、こいつは？

「あ、ありがとうございます明日菜さん……！」

あーあ、目にすっごい量の涙を浮かべているわねこの子は……。

泣くまいとしているようだけど、ぐずぐず言ってるあたりやっぱりガキンチョよねえ。

『無理もねえですぜ……自分の血を狙う吸血鬼ってだけでビビってたのに、あんな死ぬような思いしちまったらなあ』

そんな私の視線に気づいたのか、エロガモが説明する。

……その長い胴体に握った跡がくつきりと見えるけど、聞かないでおじう。

「ごめんなさい明日菜さん……」

「別に気にしなくていいわよ。あんな問題児に襲われたんじゃ助け
ないわけには……」

「いえ、助けってくれたことは嬉しいんです……けど」

「けど、なんなのよ」

「……僕、明日菜さんや学園の皆さんに迷惑をかけないようにって
頑張ってきたのに、また明日菜さんに助けられて、巻き込んでしま
って……」

……エヴァちゃんが怖いつてのより、自分のせいで他人を巻き込ん
だって理由で泣いているってわけ？

「……バカネギ」

「じっつん

「あだっ」

どうよバカネギ。私のゲンコツは効くでしょ？

他人に迷惑かけないようにっていう心構えは認めるわよ？

魔法っていうのは面倒事ばかり起こる。

このガキンチョの主な被害者として断言できるわ。

ましてや、バカネギを狙っているのは、吸血鬼とロボと人喰い妖怪……もはや魔法なんて関係なくない？

あの三人を相手に他人を巻き込めるわけないってのは、私でも解るわ。

……けどね。

「あんな問題児トリオを相手に、ガキ一人が意地張ったってしょうがないじゃないの」

「……」

ほらほら、いつまでも泣きそうな顔をしないの。

……気晴らしにしかならないけど、落ち着かせようとこいつの頭を撫でてやる。

「巻き込まれた以上、今さら関係ないからって無視できるわけないでしょ？私が助けたいと思ったから助けに来ただし、全然迷惑じゃないわよ」

うりうり、と撫でるといふより髪をめちゃくちゃにするように撫でる。
こつこつ時は優しくするより、ちょっと荒っぽくやった方がいいのよ。

「あ、アスナさん……っ」

ぐらぐらと頭が揺れているネギを他所に、私はきっぱりと言ってやる。

「ここからは私も協力するわ。二人と一匹で、あの三人をどうにかしましょー!」

もう決めたんだからね!

『姐さん……』と、私の肩の上に乗っかっているカモが何故か感動していた。

頭数に数えられていたことがよほど嬉しかったのかしら?

「……で?」

「で……って?」

「あの三人をどうするのよ?」

とにかくこいつはあの三人をどうするつもりなのかしら?

ルーミアが少し焦っていたけど怪我は無かったし、殺したりはしな
いわよね。

少し悩んだ後、ネギは私を強い眼差しで見つめてきた。

「お願いしますアスナさん。エヴァンジェリンさんとルーミアの為にも、僕はあの人達に勝たなきゃいけないんです。……力を、貸してください」

……エヴァちゃんとルーミアの為に勝つ、か。

まったく、バカネギらしい答えよね。

『よく言ったぜ兄貴!けどよ、状況はまだ劣勢だぜ……もう使えそ

うな骨董魔法具は残ってねーし……」

バカカモが喜んだのもつかの間、途端に思い悩みだした。

私が入ったからといって、道具も無い状況でどう立ち向かうべきなのかと、二人は途端に悩み始める。

ちよつとちよつと、さっきの意気込みはどうしたのよネギ。

はあ。

「……ネギ、エロガモ」

仕方ない……わよね？

いや、決して仕方なくはないし、奪われたくないものだし……。

そう！これは緊急事態！ついでにネギはガキなんだし、無効よ、無効！

「……本当はやりたくはないんだけど、私に提案があるわ」

まさかここでファーストキスを捧げてしまう羽目になるなんてね……。

ルーミア視点

どこかなー？どこかなー？

「ルーミアさん、さすがに橋の下にはいらっしやらないと思います
が」

ありり、やっぱり？

マスター
主と茶々丸さんとルーミアは、ネギ君を探してあちこち飛んでいま
す。

明日菜さんの蹴りを喰らった後、主はもーカンカン。
そう遠くへは行っていないはずと探しているんだけど……。

「見つからないねー」

「だから変なところばっかり探しているんじゃない！」

変なところなんて失礼な！

物陰に隠れているかもしれないじゃない！橋の裏とか！橋の下とか！
それに主のトリモチを取るのも、時間が掛かって大変だったんだよ
！？

うわっ？まぶしっ！

なになに？いきなり光った場所があったよ？ルーミアびっくりした
！。

「今のは……仮契約の光か！」

ぱくていおー？なにそれ？

マスター
主もさっきの光を感じ取ったみたいで、三人そろってそちらへと飛
ぶ。

それにしても、今のは何の光だろ？ぱくていおーとか言っていたけ
ど……？

あ、ネギ君に明日菜さん発見。

よくプロレス技を受けた後だっというのに、逃げ出そうとしなかったね？

むしろ、二人してこちらに向かうとうとうとしているかのようにな、堂々としているよ。

もしかして明日菜さんが助っ人になったのかな？

「ふん。出てきたか坊や」

よく逃げなかったな、と主^{マスター}が付け足す。

だいぶ怒りが収まったみたいだね。よかった、よかった。

明日菜さんの事なんか気にも留めず、私達三人は着地してネギ君達と向かい合う。

「まさか坊やと仮契約するとは思わなかったよ、神楽坂明日菜。なんだ？いいinchよと同類だったのか？」

「私をいいinchよと同じにすんなー！」

^{マスター}主^{マスター}つたら、明日菜さんをからかつちゃダメだよ。また蹴られるよー？

けど仮契約したからなんだっというんだらう？

明日菜さんもネギ君も真っ赤にしちゃったよ。……まあいいや。

「まあどうでもいい。これでお互いにパートナーができてマシにはなったるうさ」

「ちょっと待ちなさいよ！こっちは二人でそっちは三人！一人多いじゃないの！」

「別に対等に戦うつもりは無いんだがな？」

「ごもつともー。明日菜さんも口出しできずにイライラしたよ。数でいえば確かにこっちが有利だし、あっちはただの人間だもんねー。」

「けど主^{マスター}の表情は固い。さっきまで余裕ぶってたのに、どうかしたの？」

（茶々丸、ルーミア。神楽坂明日菜には気をつける。意外な難敵かもしれない）

（ハイ、マスター）

（了解なのかー）

小声で忠告する主^{マスター}に応えるルーミアと茶々丸さん。そういえば今になって思い出したけど、今回の主^{マスター}ってバリアみたいなのを張っていたんだっけ。

それなのに明日菜さんは難なく蹴ったから、なんかの特殊能力でも持っているんだろうか？

……まあ、ルーミアが考えたって仕方ないよねー。

分担は主^{マスター}がネギ君、ルーミアと茶々丸さんが明日菜さんだね。

「坊や。念のため言わせてもらうが、まさか今になってでも」

「いえ、もう対策はありませんし、逃げもしません。……出来る限り、本気で戦わせてもらいます」

「……いい度胸だな」

マスター
主もネギ君も、ついに本気を出すんだね。

なら、ルーミアも全力で明日菜さんと戦っちゃうんだよ！

……別にこの機会に明日菜さんを味見しておこうだなんて考えていないからね！？

完

外伝第貳話「ルーミアの麻帆良生活・その1」（前書き）

このお話はお気に入り件数200件突破記念に募集したアンケートを参照に書いた小説です。

外伝とありますが、本編とは少なからず関わってきます。

また、今回はアンケート結果により3話分のお話が入っています。

この小説を読んで、少しでも皆さんがお楽しみ頂ければ幸いです。

11/17：誤字修正：世界中 世界樹

ご指摘ありがとうございます！

外伝第貳話「ルーミアの麻帆良生活・その1」

ルーミアと夕映

麻帆良ドリンクなるものがある。

読んで字の如く、麻帆良学園で販売されている飲料類ドリンクの総称を指す。別に麻帆良学園で販売しているだけならそんな総称いらなくね？なんて思ったあなた。

それは麻帆良ドリンクが奇天烈な飲み物ばかりだということをご存知ないから思えるのだ。

数多くの、どうしてそんなものを混ぜたんだと言わんばかりの不可解ドリンクの数々。

しかしその謎と種類の多さ故に、試してみたいとついつい購入してしまう魔性の魅力が、そのドリンクにはあった。

その購入の結果は人により様々。

大抵の者は飲んで様々な症状（気分が悪くなる、口から噴水、1週間寝込むなど）が出て悲惨な目に遭う。

そして中は、麻帆良ドリンクの魅力にとりつかれた奇異なる者が現れたりする。

本日はその麻帆良ドリンクの魅了に取り込まれた者と、麻帆良ドリ

ンクの魔性に懲りない者の光景をご紹介しよう。

ガシャコン

「どうぞです」

「いただきます」

自販機の前に人影二つ。

その身長差は大差なく、子供二人並んでいると素直に思える光景だ。だがしかし、一方は女子中学生、一方は実は妖怪であると誰が信じようか。

アホ毛が生えた紫の長髪と光り輝くデコをしたのは、3年A組の綾瀬夕映。

図書館島探検部所属の、読書と本を愛するバカレンジャーブラック。

紅いリボンが生えた柔らかな金髪の少女は、ルーミアⅡBⅡDⅡナイトレア。

話ではイギリスから来た留学生とされるが、学園のあちこちに出没する謎の存在である。

そんな二人は、たった今自販機から出てきたドリンクを手に取り、今まさに口をつけんとしていた。

本日の麻帆良ドリンクは『炭酸コーヒー』

「苦いーーーーっ!!!!!!」

ピチューン

口の中で弾ける苦味成分カフェインに思わず叫ぶルーミア。

ちなみに効果音のみで本当に撃墜ピチューっていないのでご安心を。

一方の夕映は突如叫んだルーミアの事など気にも留めず、炭酸コーヒーを飲んでいた。

子供っぽいルーミアとは違い、冷静かつ論理家な彼女はコーヒーも嗜めるのだ。

「この苦味が炭酸となってさらに口や喉を刺激するので、読書のお供にはうってつけです」

確かに炭酸+カフェインなら眠気は覚めるだろう。

だがそれを平然と飲んでいる辺り、この子の麻帆良ドリンクへの中毒性が物語る。

しかしルーミアは別だ。あまりの苦味に思わず涙目になって舌を突き出してしまふ。

「ルーミアは苦いのはイヤなのか」

「何を言うんですか同士。この程度で根を上げるようでしたら麻帆良ドリンクの素晴らしさは堪能できません」

なんの宗教勧誘だ。

そもそも事の始まりは、夕映が飲んでいた所を、腹ペコルーミアが興味津々で近づいてきた時からだ。

試しに飲んだ麻帆良ドリンク（練乳ミートソース）が美味しかったと評価した所、夕映は心より感激を受けた。以来、夕映は麻帆良ドリンク愛飲家としてルーミアと親しくなり、時にこうして麻帆良ドリンクを買いに行く程の仲に発展していったのだ。

そして今に至る。ちなみにルーミアへの愛称は「同士」だ。

「じゃあ口直しにこれ飲むー」

び、ガコン

「む……『甘ミックス』ですか。それは私も飲んだことが無いですね。後で分けてください」

「くくくく」

「……いかがですか？」

「甘さ」

「どっど甘いのです？」

「凄く甘い」

「もっと具体的に」

「お汁粉のつぶつぶに練乳と蜂蜜のとろけるような甘さがねっとり
とミックスして、喉と息にまで甘さがべたべたと溶け込んでいくよ
うなかんじー」

「うむむ……甘党にはこれ以上ない一品かもしれないですね。ご感想は？」

「美味しかったー」

「それはよかったです。では私にも、そのとろけるような甘さを分けてください」

「いいよー」

「……あんた達、本当に飽きないわねえ」

「あははは……」

そんな二人のやり取りを見て、早乙女ハルナことパルが呆れたようにして呟き、宮崎のどかが苦笑いをする。

二人とも、綾瀬夕映と同じく図書館島探検部の部員にして、夕映の親友だ。

そんな親友でも、二人が好き好んで飲んでいるという麻帆良ドリンクには手を出さないのである。

完

ルーミアとさよ

草木も眠る丑三つ時の学園。

こんな場所こんな時刻に、一つの影が動いた。闇に乗じて自らを暗闇にして溶けこみ、学園の廊下を足音も立てずに移動する。

いや、実際にそれは闇なのだ。

真っ黒な球体が廊下を走り……壁に激突。それにあわせて闇が晴れた。

そこに居るのは一人の少女だ。名はルーミア。宵闇の妖怪。

夜の散歩を好む彼女は、時にこうして闇に乗じてあちこちに出没する。

もちろん魔法教師には内緒だ。見つかったとしても悪さをしなければ問題ないが。

そしてぶつかるからと暗闇を纏うことをやめた彼女は、ある場所へと向かう。

そこはネギ・スプリングフィールドが担当する3年A組の教室。ルーミア以外に誰も居ないはずの教室に、別の人影があった。

ぼんやりと青白く光る、妙に陰の薄い半透明の少女。

それこそが、ルーミアの捜し求めていた存在だった。

「こんばんわー」

ルーミアはそんな少女の後ろを難なく取って挨拶をした。

『うひゃああああっ!?!?』

夜中の教室で後ろから声をかけられたらそれはびっくりするだろう。少女は思わず飛び上がった。

……比喩などではなく、本当に空中を飛んで。

それどころか教室内を我武者羅に飛び回り、混乱によって見失った恐怖から逃げ惑う。

そして少女はルーミアを通り過ぎ、机の下に潜り込んでガタガタと振るえだした。

『おおお、お願いします! たた、食べないで下さい!』

「お姉さんは食べられない人間だから食べないのかー」

『ほ、本当ですか?』

どうやらこの少女はかなりの天然らしい。

ルーミアのずれた答えを聞いて、少女は安心の表情を浮かべて机の下から這い出てきた。

『……………あれ?』

ふと、少女はあることに気づいた。彼女にとっては一大事ともいえる、ある事に。

『……あの、私が見えるんですか？』

「見えるよー？白髪のお姉さんなのかー」

『し、白髪だなんて言い方は酷いです〜！』

「あはは、ごめんねー」

『け、けど、本当に私が見えているんですね！？声も聞こえているんですよね！？』

「見えるし聞こえているのかー」

『う、うう……うええ〜ん！』

少女は泣き出した。涙がぼろぼろと零して大声で泣いた。だが、ルーミアでもその顔を見て分かった。これは喜びの涙なのだと。

彼女 相坂さよは正真正銘の自縛霊である。

何十年も前に亡くなったはずの彼女は、どうしてか学園では病欠扱いとして、何十年もここで自縛霊をやっている。幽霊としての自覚が薄い上に、存在感がとてつもなく薄く、いつも取り残され寂しい日々を送っていた。

さよの頭の中では、この可愛らしい笑顔を浮かべる少女にあらぬ妄想を抱いてしまった。

その結果　　再び机の下にインしてしまう。

『わわわ、私なんか食べても美味しくないですよー!』

「うん。お姉さんは食べられないからね」

だから出てきてよ、と丸まってガタガタと震えるさよの背を指で突くルーミア。

「……で、幽霊も亡霊も、私のような妖怪も仲良く暮らしている場所があるの」

『へえ、色んなのが居るんですね』

さきほどまでの恐怖心はどこへ行ったのやら。

さよは、御伽噺のようなルーミアの故郷の話聞いて、とても楽しんでる。

妖怪も人間も、はてまた幽霊ですら仲良く暮らしている場所がある。とても信じられない話だが、ルーミアを見ているとそれは事実なのだと思えてきた。

「……じゃあ、ルーミアはそろそろ帰るね」

『え……っ?』

突然のお別れにさよの表情が曇る。

「大丈夫だよお姉さん。また来るからね」

『ほ、本当ですか！？』

「うん。ルーミアは夜のお散歩が好きなのか。一人は寂しいから、お姉さんも一緒に居てくれる？」

『は、はは、はい！喜んで！』

しかし再来どころか、一緒に散歩に連れてってけると聞いて、さよの表情はみるみる内に明るくなる。

自縛霊とはいえ、近くを散歩する分には動くことができるから大丈夫だろう。

「じゃあ、ルーミアは行くね」

『あ、あの、あの、あのあ、あの！』

「んー、ちよっと待ってー」

こほん、と軽く咳き込んでから、ルーミアはにかつと笑顔を浮かべる。

「よければ、ルーミアとお友達になってくれますかー？」

『も、もちろんです！お願いしますー！』

数十年ぶりに、初めて友達になってくれるかと言われた。

さよにとつてそれは是非であり、思わずまた泣いてしまいそうになるぐらいに喜ばしいことだった。

今ここに、幽霊と妖怪という奇妙な友情が生まれた瞬間である。

完

ルーミアと木乃香

よじよじよじ……ずるずるずる……。

よじよじよじ……ずるずるずる……。

「なー」

よじよじよじよじよじ……ずるずるずるずる……。

「なー、ルーヤーン」

背後から声がする。それも下から。

ある場所をよじ登っているのに夢中だったルーミアは我に返り、その声に向けて振り向く。

「なーにー？」

「そないなとこ上つたら危ないえー」

自分と呼ぶのは誰かと思えば、ルーミアにとってお馴染みの友人である近衛木乃香だ。

その木乃香が遙か下方にいる。

何故か。答えは簡単。自分がある場所によじ上っているからである。

ここ麻帆良学園のシンボルともいえる、世界樹と呼ばれる巨大な木にである。

ずるっ

「あ」

「あ!？」

ルーミアは思わず手放してしまった。

ちなみに本日の記録は高さ14m。

これまでよじ登った中でも最高記録だった。

「大丈夫かえルーヤん？」

「あだだだ……うん、平気」

「嘘いったらあかんー。でっかいタンコブが出来てるやん」

ルーミアの身体を気遣う木乃香は、見せてえな、とルーミアの頭に

近づく。

さすがのやんちゃなルーミアも、大人しくタンコブが生えた頭を見せることに。

突如として3年A組に現れたイギリスからの留学生、ルーミア。

最初は可愛らしい子とでしか印象がなかったが、今では「ルーヤん」と呼べるほどに仲良くやっている。

ネギと友達になったから、というだけではない。

実はといえばこの二人が再び出会うようになったのは、この世界樹のおかげだったりする。

「ほんま懲りへんなー。この間会った時も確か落っこちたやる？」

「だって好きなんだもん、木登り」

無謀にもそんな理由でこの世界樹によじ登ろうとするとは。大した度胸である。

木乃香はそんなルーミアを見て小さく笑ってしまう。

木乃香は、この麻帆良学園に聳える世界樹が好きだった。

ルーミアもこの世界樹を気に入っていた。

本来なら妖怪はこの木に宿る神秘さを苦手とするはずだが、ルーミアは違う。

バカ故にそういったものを感じないからかは定かではない。

暇を見つけてはこの木に立ち寄る似た者同士の親睦、という小さな仲。それだけである。

……そんな他愛の無い二人を、遠目で見る人影が一人あった。

（ああ大丈夫だろうかお嬢様……噛み付かれたりしないだろうか……）

桜咲刹那である。

木乃香の幼馴染にして護衛。

ただしとある事情により木乃香を避けており、現在は疎遠状態。だがそれはあくまで事情であって、内心は木乃香を想い続けている。ぶっちゃければ愛しているかもしれないほどに。

想い続けるあまり、噛み癖のあるルーミアと居るのが心配でたまらないのだ。

故に本日も陰から木乃香を見張っている。決してストーカーなどではないと自称する。

（ああお嬢様、ルーミアにあまり手を近づけないでください！噛まれては……？）

ふと、刹那はあまりにも木乃香を見続けていた為、気づかなかった視線を不意に感じた。

ルーミアがこちらを見ている。

(まずい！)

ルーミアは妙に勘がいい。

それも何故か刹那が遠くから見ていると、高確率でこちらを発見する。

「刹那さん発見」

「えっ？ほんま？」

さっそくルーミアは木乃香に報告。

直後、期待に溢れた木乃香の視線が刹那を射抜く。

正直心を奪われてしまいそんな瞳に刹那は紅潮するが、今はそれどころではない。

木乃香にとってルーミアは友であり、同時に刹那発見器でもあるのだ。

「せつちゃん」

「刹那さん」

「ななな、なんでもないんです」！

こうして、2対1の追いかっこは本日もまた決行するのであった。

ちなみに1/3の確立で二人に捕まる。
そうなった後どうなるかは誰も知らない……。

完

第27話「月明かりの戦い 決着編」(前書き)

皆様のおかげで無事20万アクセスを超えました。ありがとうございます。

20万アクセス記念の小説を近日中に投稿しますのでお待ちください。

11/20：誤字修正。用紙 容姿

ご指摘ありがとうございました！

第27話「月明かりの戦い 決着編」

ルーミア視点

あれー？おかしいなー？

さっきから闇符「デイマーケーション」を放っているのはいいんだけど……。

あまり明日菜さんに効果が出ないよー？

「いだだだだだ！」

マスター
主との修行ですつごく強くなったはずなのに、どうして？

明日菜さんに当たる直前に風船みたいに弾けて、弾が小さくなっちゃうよー。

しかも、何故か明日菜さんがすつごく強くなっていることもあって、余計に効きづらいみたい。

痛い痛い言っているけど、明日菜さんはなんなくルーミアに近づいてくる。

「痛いつつーてんでしょーがー！」

わーっ！こっち来たーっ！

思わず「デイマーケーション」を一旦解いて、明日菜さんから離れる。

「失礼します。明日菜さん」

そこへすかさず茶々丸さんの攻撃。明日菜さんに格闘戦を仕掛ける。

「ただ明日菜さんは、そんな茶々丸さんを難なく押し返している。強いなー。」
「けど、どうしてルーミアの弾幕が弱くなっちゃうんだろー？足止め程度にしかないや。」
「やっぱり明日菜さんは特別なんだろうか？美味しそうに見えるのはそのせいかも。」

とにかく弾幕が効かないとわかった以上、撃っても無駄かも。

「じゃあルーミアも突撃しちゃうのかー！」

「おりゃー！」

「あわわっ！こっちないでーっ！」

茶々丸さんの相手でいっぱいいっぱいなんだろうけど、そうは問屋がおろさないよー！

弾幕が駄目なら、肉弾戦なのかー！ついでにオマエ、マルカジリ！ほんとに味見だけだから！

エヴァンジェリン視点

やはりルーミアの弾幕も効果がないか。

ちらりと見た所、驚く光景を目の当たりにした。
あれだけ強化したルーミアの弾幕を、小石程度のダメージでしか受けていないのだから。

ダイオラマ球内で研究してきた結果、ルーミアの弾幕は魔力だけで

はないことがわかった。
妖怪に宿るといふ妖力に加えて自身に宿る能力が合わさること
で弾幕となり、スペルカードとなる。
我々のように純粹に魔力を魔法に変える物とは異端な物だ。私には
習得できない。

だが、神楽坂明日菜はそれを弱体化させた。

私の魔法障壁を難なく破ったことも含めて、奴が特殊能力持ちなの
は確定できた。

まさかだと思いが、あの魔法無効化か？
マジックキャンセル

爺め……こんなレアスキル持ちを学園に持ち込んでいたとはな……！

『魔法の射手！連弾・光の29矢！』

おっと！

『魔法の射手！連弾・闇の29矢！』

つつい気にかけてしまったが、今は坊やの相手が優先か！

この私相手に純粹な魔法戦を挑んできているんだ！それなりに相手
をしなければな！

悪くない！悪くないぞネギ・スプリングフィールド！

明日菜視点

う、動けない……！

「離しなさいよ、あんたらー！」

「申し訳ありません明日菜さん。マスターの命令ですので」

「いやなのかー！」

二人かかって私を取り押さえるとか卑怯じゃないの！

茶々丸さんは私を羽交い絞めするし、ルーミアは私の腰に抱きついてくるし！

殴ったり蹴ったりしないのはいいんだけど……き、きつい……っ！

「ええいこのーっ！」

ええい！ルーミアの頭を引っ叩いてやる！

「あ」

「あ」

あ、途端にルーミアの力が抜けた！

なんでか知らないけど、これはチャンス！

茶々丸さんを振り払って脱出！思いのほか呆気ないわね！

……あれ？これ……ルーミアのリボン？

さっき引っ叩いた時に、思わず解けちゃったのね。

……どうしたの茶々丸さん？そんな唾然とした顔で私を見て？

「ア」

坊やもこの気配を感じ取ったそうで、驚愕を隠しきれないようだ。

そして放たれた黒い閃光　あらゆる色素と光を塗りつぶすほどの闇。

存在を消されてしまうかのように闇に包まれる。

身体にはなんの変化も無い。

代わりに訪れているのは、自分が無くなってしまいかもしれないという恐怖。

そして徐々に世界に色素と光が戻ってきた頃に　そいつは居た。

その内に強大な闇の力を宿した、金色の髪を持つ女性に。

だが、その身体にはとんでもないほどの闇の魔力が込められている

……！

これではまるで、私が編み出した『闇の魔法』そのものではないか！
しかもこの感じだと、まだ奥に多くの封印が施されているようだな

……！

すなわち、こんな状態でもまだ本性には至らないということ！

こんな化物がまだ浅瀬程度だとは驚きだ……！

！いかん！

明日菜視点

真つ暗な世界が晴れたと思ったら、私の目の前からルーミアが消えた。

代わりに金髪の女性が出てきた。

けど、ルーミアと目の前の女性の容姿が似ている気がする。

……もしかして、消えて現れたんじゃないかって、ただルーミアが変化しただけ？

けど……。

この人……誰？

それが私の素直な感想だった。

だってルーミアはネギと同じぐらいちっさいはずなのに、今は私と同じぐらいの身長なんかもん。

いいんちよみたいに髪が長くなっているし、なによりめっちゃくちゃ美人さんじゃない。

それに……なんだろ、このぴりぴりとした空気……。

その大きくて紅い目を見てみると、魂が飲み込まれそうな気がして……。

『や、ヤベエ！こいつはやべえぜ！逃げる姐さん！』

何よバカカモ？なんでそんなに毛が逆立っているのよ？
そんな、ルーミアを猛獣みたいなこといわないでよ。

！！？

なに？なんなのこの人？本当にルーミアなの？
さっきまではただの綺麗なお姉さんってしか見えなかったはずなのに……。

どうして私は、あの子をライオンのように思えるの？

こっちを見る目が怖い。口が怖い。涎が怖い。気配が怖い。
なに……なんなの……？なんでこんなに怖いと思えるの……！？

けど私は、どこかでこの恐怖を感じたことが……ある？

だ、駄目……足がすくんで動けない……。

「明日菜さん！！」

あ……ネギの音がする……。なんでこっちに来てるの？

振り向いた途端、牙だらけの口を大きく開けたルーミアの姿が目

の前にあつた。

ヤバ、終わったかも。

目を開いた直後に居たのは、光るリボンに縛られたルーミアだった。あれってさっき引っぺがしちゃったリボン……？怖さのあまり手放しちゃったのかな？

そしてルーミアはみるみるうちに小さくなり、いつも見慣れた姿に戻った。

皆そろって様子を伺うけど……すやすやと眠っているだけみたい。よかった。

そんなルーミア頭にはさっきのリボンが。これのおかげだっていうの……？

こうして、ルーミアの暴走(?)は呆気なく静まった。

その後、学園の電源が復旧し、再びエヴァちゃんが封印されちゃった。

呆気ないわね。

完

第28話「マクダウェル家の誓い」(前書き)

11/20: 誤字修正 脚下 却下

ご指摘ありがとうございました！

第28話「マクダウェル家の誓い」

ルーミア視点

「んう………?」

あれー?ルーミアどうしたんだろー?凄く眠いよー?
いつの間にルーミアは寝ていたのー?

「……きろ……」
「らルーミア!起きろ!」

あ、マスター主だ。

起きろっっていわれたからには起きたいんだけど……まだ眠いよー。

「後5分………」

「ベタなこと言っていないで起きろ!」

「あいてーっ!」

いつもより強く引っ叩くことないんじゃないー!?

頭の中はすつきりだけど、頭はすっごく痛いんだよー!?

……ってあれあれ?何?なんで皆ルーミアを囲んでいるの?

「ルーミアさん………!」

「よかったルーミア!気がついたんだね!」

「ほんつとつに心配したんだからね、このおバカ！」

『いやー、一時はどうなるかとおもいやしたよ！』

順に、茶々丸さん、ネギ君、明日菜さん、鍋の具モドキ。
なんで皆してそんなに心配してんの？

「なになに？一体どうしたのー？」

本当にどうしたの？いつからルーミアは寝ていたの？教えてー？
けど主^{マスター}や皆はなんか悩ましげ。どうしたの？

「……神楽坂明日菜に頭を強く殴られて気絶していたんだよ」

「ちょ……っ!?!」

……そうだったけ？確かに頭が痛いけど……。

けど主^{マスター}が言うからには本当なんだろうね。

明日菜さんも何か言いたげだし。

……けど、本当にそうだったかなあ？

そうだった！

「主^{マスター}！勝負は!?!」

そつだよそつだよ！ネギ君の血を掛けた大事な戦いはどうなったの
!?!

「戦っていた最中に封印が掛かった。……私の負けだよ」

………そっかー。

^{マスター}主は残念そうだけど、そこまで悔しがつてないみたい。
^{マスター}けど、主の呪いは解けないのに、どうしてそんなに悔しくないの？

「………心配させるな、この大馬鹿者………」

そういう主は、^{マスター}ルーミアの頭をくしゃくしゃと撫でてくれた。
まるで、呪いの事なんてどうでもいい、と言っているみたいに。

だから、まあいいかなー。

「………というわけだ坊や。今回は勝ちを譲ってやるよ」

ゆっくりと立ち上がってネギ君を睨む主。^{マスター}

その目には諦めが無い。夜道には気をつけるんだな、と言わんばかり。

それでこそ主だよ！かつこいー！

「本当ですか！？よし、名簿に『僕が勝った』って書いておこー

」

勝ちを譲ってあげた途端にこれだよ！

勝ったことを喜ぶ余り、ネギ君は嬉しそうにとんでもないことを書き出した！

なんか許せないのかー！主だっマスターてそう思うよね！？

「何するんだやめろ！てゆーかどこから出した！？」

「そつだそつだー！今回は仕方なく負けたんだからねー！？」

「えーだつてー！」

ルーミアがドジったり、停電が続かなかつたら主が絶対^{マスター}に勝つたもん！

……こらネギ君！そのメーボとやらを、大人しくこっちによこすのかー！

2対1が卑怯だなんていわせないからねー！

「よし取つたー！」

「うわーん！僕の名簿ー！まだ書きかけなのにー！」

「へい主^{マスター}！パス、パス！」

「……よしっ！ナイスキャッチだルーミア！」

「返してよルーミアー！」

「こっちによこせルーミア！そして坊やから消しゴムを奪えー！」

「了解なのかー！とおっ！……ナイスキャッチ！続いて、どりゃー！」

「うひゃ〜っ！」

名簿の奪い合いはルーミア達が制したのかー！

いくらネギ君でも、ルーミア&主^{マスター}の華麗なコンビネーションには勝てまい！

消しゴム、消しゴムはどこー！？ネギ君をひん剥いてでも手に入れ

「やるー！」

「……あれって仲直りってことでいいのかなー？」

「ああ、マスターとルーミアさんがあんなに楽しそうに……」

茶々丸さん！「ロクガ」ってのをしていたら、後でルーミアにも見せてね！

……よーし！消しゴム取ったー！

「やめてよーっ！」

あーっ！消しゴムが奪われたーっ！素っ裸になってもまだやるかー！？

ネギ君のくせに生意気なー！負けないんだからねー！？

401

エヴァンジェリン視点

「……何やっていたんだろうな、私達は……」

「名簿の奪い合いです」

「結局、消せなかったねー」

「くそ、まさかマジックペンで書いていたとは……」

あの騒動の後、とりあえずは互いに和解したということとで解散となり、我々は帰路についている。

ちなみにルーミアの封印に関しては、暗黒の了解を得ることができた。
せめて後日に話してやるとするか。あいつらならこいつの事を話してもいいだろう。

「ねえ主^{マスター}」

「……なんだ」

「あの時の答え、まだ聞いていないな」

……今になってそれを聞くか？

だが、私は忘れられなかった。あの時のルーミアの言葉。

^{マスター}主の傍に、ルーミアと茶々丸さんは居てもいい？

呪いを解くことが出来なくなった今になっても、私は諦めきれない。
それまではこいつの手助けを借りるのもいいかもしれん。

……いや、もう無駄に考えるのはよそう。

「好きにしる」

これが私の答え。居たいと思うなら居てもよいし、居たくないのなら居なくていい。

こいつが居ると良いこともある。居ると面倒なこともある。恐るべき所もある。
それらを全て理解した上で、それでも私は、こいつをもっと理解したい。

だがこいつは生き物だ。
モルモットのような実験体などではない、人間よりも自由な生き物。
そんな生き物を籠に閉じ込めているようではつまらない。
だから私は、こいつ自身の自由にさせる。

私はこいつを必要としているのではない。私は自由に生きるこいつを見ていたいんだ。

ルーミアは私の応えが満足いくものなのか、にーっと笑い出した。

「茶々丸さん、茶々丸さん」

「なんででしょうか？」

ルーミアは手招きして呼び止めると、背伸びをして茶々丸に耳打ちをする。

なにやら内緒話をしているらしいが……何を話している？

茶々丸はなにやら戸惑っているようだ……また変なことをしでかすつもりか？

すると話が済んだのか、ルーミアがこっちを向いて楽しそうに笑い出した。

……いつもと似たような笑いなのに、なにやら嫌な予感がする……。

「マスター」
「主」

そしてルーミアは私に近づいてくる。くっつきそうなくらいに。

「ぎゅーっ」

「うわっ!?!」

なんでいきなり私に抱きついてくるんだ!?

それも思いつきり力を込めて!く、苦しい……っ!

振り払おうにもしっかりと抱きついてくるから離れられん……!

「茶々丸!こいつをなんとか……」

「申し訳ありません、マスター」

……ああ……お前の困り顔をみてわかったよ。

今のお前は、ルーミアの味方なのだな。

「ぎゅー」

何故だか知らんが、こいつも抱きついてきた。

身体が大きいからか、私とルーミアをまとめて抱きつき、適度な力で抱擁してくる。

「茶々丸、貴様もか!?!は、離せお前ら!」

「いやー」

「その命令は却下させて頂きます」

なんでだ貴様ら!?

私の僕しもへと従者のくせに、なぜ私に逆らう!?

だが……なんだか暖かい。

人形であるはずの茶々丸から、そしてルーミアから暖かな体温が伝

わってくる。

思わず抵抗する気が薄れてしまった……。ええい、ままよ。

「大丈夫だよ主^{マスター}」

抱きついたまま、ルーミアは言った。

「私達は好きだから傍にいるんだもん」

「……………本当か？」

「本当だよ」

「嘘ではないか？私のご機嫌取りとかではないか？」

「違うよ。本心だよ」

「私はマスターに隠し事はできません」

「ホントに、本当に傍に居てくれるんだな？ずっとか？」

「ずっとかはわからないけど、ルーミアは主^{マスター}が好きだから居たいし、マスターがルーミアを必要としてくれるなら、ルーミアはいつでも傍に行くよ」

「私は常にマスターと共にあります。私はマスターの従者として、一人として、マスターの傍に居ることを望んでいます」

「……………そうか」

思わずありのままに聞いてみた。

二人ともありのままを応えてくれた。

上からの命令だからではなく、私の我侷を受け入れて応えてくれた。

だから、私はありのままを応える。

「茶々丸、ルーミア。 1度しか言わん」

真祖の吸血鬼でもなく、悪の魔法使いでもなく、ましてやこいつらの主でもない、ありのままの私の応え。エヴァンジェリン

「……………今日から、私達は家族だ。これからも私の傍に居続ける」

「もちろんだよ（です）、主」マスター

うむ。いい返事だ。

「だが表向きは変わらず、ルーミアは私の僕、しもへ茶々丸は私の従者と
して扱うからな。それを忘れるな」

「はい」

「了解しました」

それでいい。でないと私は恥ずかしくて表を歩いていけないからな。
二人はやっと私から離れるが、手はつないだまま。
左手にルーミア、右手に茶々丸。

……ま、まあ誰も見ていないだろうし、よしとするか……。

「帰ったらチャチャゼロにも教えてあげよーっと」

「よセルーミア。あいつが聞いたら当然冷やかしてくるに決まっている」

「ですがむしろ教えて差し上げないと当分はグレてしまいそうです
が」

「あいつは元々からグレてるだろう」

「不憫なチャチャゼロ」

「可哀想な姉さん」

「なんだ二人ともチャチャゼロの味方をする気か？」

「せめてもう少し愛を注いであげてよー」

「あの口の悪い殺戮人形キリングドールを愛でる私の姿を想像してみろ」

「……グッジョブ、グッジョブですマスター」

「何を妄想しているんだお前は！」

「あはははー！」

まったく、本当にくだらないなお前ら。

光に生きてみる

……ふっ、今になって思い出してしまつとはな……。

闇に生きた吸血鬼と、暗闇を好む妖怪と、闇でも活動できる人形。

………見ているか？サウザントマスター！。

闇に生きていても、私は寂しくなどないぞ。

完

裏話其ノ零「観測ヘノソキミ」(前書き)

思わぬ決着となるまで陰で見守っていた、とある者達の様子。

裏話其ノ零「観測ヘノソキミ」

「いやあ、両者とも何事もなかったようであったわい」

「ですが良い事ばかりではありませんね。……学園長、本当によかったのですか？」

「タカミチ君、君が不安に思っておるのは分かるぞい。じゃが、あの子なら大丈夫じゃろ」

「あまり楽観的に考えないくださいよ……ただでさえルーミア君の力に驚いて不安だというのに……」

「ふむ……じゃがこれで、あの子自身により深く強い封印が施されておるといのは確認できた。あのリボンでも序の口のようにじゃな」

「やはりとんでもない子のようにですね……」

「今は触れぬ方がいいじゃろ。なに、あの子は良い子じゃから悪いことはせんじゃろ」

「……では警戒中の皆に連絡しておきますね」

「頼むぞい」

「む………?」

「………どうかしましたか？学園長？」

「………いや、気のせいのような。では解散するとしようかの」

私としたことがぬかったわねえ。つい気を許しちゃった。

けど甘いわ。本当に甘いわ。単に歳をとっただけの狸爺なのかしら？
大層なものでもない結界に守られている癖に、余りにも腑抜けているわ。

ま、境界を操るこの私

やくもゆかり
八雲紫を前に結界なんて無意味なんだ

けどね。

ルーミアの第一封印『野生的本能』が解けたのを感じた私は、
気になって監視ソシキミしていたけど……どうやら心配ないみたいね。
再度封印が施されたし、残る九十九層の封印は今もなお健在。なん
の問題も無いわ。

……それにしても予想外すぎる連中に会っちゃったわねえ。

真祖の吸血鬼・エヴァンジェリン＝A＝K＝マクダウエル

神木「番桃」

高畑・T・タカミチ

ナギの子供

そして『あの子』

第一封印が解けたのも無理ないわ。
だからといって、まさかこんな所で、こんな縁で出会うことになる
なんて。

……いえ。そんなことはないわね。
既に私は、ある形であの子達と縁えにしを結んでいる。
これは偶然ではなく、必然。
今では懐かしい、古き友人の言葉が浮かぶわね。

この世に偶然なんてない。あるのは必然だけ。

幻想郷との縁が結ばれたルーミアが、ここで縁を結んだことで、幻

想郷との間に小さな縁が結ばれる……。

まさかここまで『あの子』に関わることになるなんてねえ……。

さて、いい加減に私も帰りますか。ルーミアの事も問題なかったし。聞いた話では氷精が幻想郷中で暴れているっていうし……はあ、面倒ねえ。

ルーミアの居場所を教えてあげたら、少しはあのバカ妖精が大人しくなるかしら？

腹いせついでに、ちょっとだけ誰かを神隠ししてやるうかしら？

完

裏話其ノ零「観測ヘノソキミ」(後書き)

麻帆良生徒の幻想入りフラグ。20万アクセス記念小説のちらみせです。

どなたになるかは、近日投稿予定のアクセス記念小説をお待ち下さい。

二十万アクセス記念小説「東方喧嘩録 勇儀VS古菲」(前書き)

この小説は、皆様のアンケートで頂いたご意見を参考にして作成した小説です。

今回のテーマは「麻帆良学生が幻想入り」。主役はサブタイトルの通りです。

言わば今後の番外編小説へ向けての試作品です。お楽しみ頂ければ幸いです。

皆様のご意見ご感想をお待ちしております。

これは、とある妖怪が密かに行われていた、後に学園都市伝説の一つに数えられる出来事である。

「およよ？」

突如として古菲は目覚めた。

周囲をぐるりと見渡してみるが、そこは知らない光景。

辺りは暗いが点々と屋台や軒並みが並び、提燈と人の気が明るく照らしている。

天井を見上げれば土色の景色。どうやら洞窟のようであると、古菲も理解できた。

そもそも自分はさっきまで自室で寝ていたはずだ。なのにどうして知らぬ場所にいるのか？

それはここが夢だからよ。

「およよ？誰アルか？」

ぼんやりと聞こえる声に古は周囲を見渡す。

しかし自分を呼ぶ姿は見受けられない。むしろ周囲にいるのは、人

の形をした化物ばかりだ。

いいじゃない。これは全て夢なんだから。

「夢アルか？」

そうよ。だから知らないし、辺りは化物だらけでしょ？

「そういえばそうアルね。さすがのマホラも化物は居ないアル」

そうそう。ほら、あの鬼とか強そうでしょう？

「およ？」

謎の声に導かれるまま、古クはとあるどんちゃん騒ぎを目撃する。

その騒ぎの中心にいるのは、見るからに立派な棘……もとい角を生やした巨軀の女だ。

筋骨隆々ながらもナイスバディなお姉さんは、自身よりも大きな鬼を腕で締め付け、酒を飲ませている。

どうやら彼女は相当な酒豪かつ強い人らしい。

戦闘バトルマニアな古クにとっては是非とも戦ってみたい相手である。

そうそう、あの紅い角を生やした鬼のお姉さんよ。凄く強いもの？

「おお！強いアルか！古ク菲フェ、強い人と戦うの大好きアルよ！」

さあ古ク菲フェ！その闘魂を持ちて鬼と戦うのだ！

「アイサー！」

謎の声に導かれるまま、古は己の本能と欲望に任せて突進する。

そしてその鬼のお姉さん 星熊勇儀 の直前で止まる。

「うおっ!？」

星熊勇儀は突如として現れた古の登場に驚くが、古はお構いなし。

古は瞬時にして勇儀の懐に飛び込み、突進の勢いを生かし、足を振るう。

咄嗟の勢いとそのスピードにさすがの星熊でも着いていけず、横腹にその蹴りを受ける。

刹那、凄まじい衝撃が勇儀の肉体を伝って貫かれ、飲み屋の柱を粉砕する。

手応えあり……古は足を伝って確かに実感した。

同時に……異常なまでの腹筋の重さと硬さも、痺れる足を通じて感じていた。

「……いきなし蹴り入れるたあ、いい度胸してるな」

勇儀は笑っていた。

とても楽しそうに、さも苦しみや痛みを感じていないかのよう。

その微動だにしない態度と威厳は、まさしく不動そのもの。

古は自然と笑みを零した。

勇儀の手が、まるで喉笛に狙いを定めた寅のように、古の足を捉えようとする

だがスピードと反射神経は古の方が上。

腹筋を足場に蹴り上げ、その勢いに乗じてバツク転で素早く後方へと飛んだ。

だが勇儀はそれを追わない。よっこらしよつと声を上げて立ち上がるだけだ。

「せめて用件ぐらいは言いなよ。びっくりするじゃないか」

驚きはしたが、痛むどころか痒いとも感じていないかのように平然と。

ゴキゴキと肩の関節と指を鳴らしながら、勇儀は古に問う。

古はこれから始まるであろう戦いに備えて十分な距離を取り、構えを取る。

「古と勝負するアル！」

「よし乗った！」

売り言葉に買い言葉とはまさにこのこと。即決即売であった。

「だが鬼と決闘するってのは、負けたら鬼に攫われるということだ。それでいいのかい？」

「どうでもいいアル！古は強そうな人と戦いたいだけアル！」

「……いいねえいいねえ！久々に血沸き肉踊る！」

単に鬼を知らないだけなら少しは憤慨を覚える。

だがこの褐色肌の少女は純粋な強者への戦いを、分かりやすいぐらいに望んでいる。

純粋な闘魂を前に勇儀は歓喜し、酒を注いだ大きな杯を片手に持つ。

「私は杯を手に持ち、零さないように戦う。手加減といえはそこままでだが、いわばこれは強者としての誇りだ」

古^クが首を傾げたのを見て、勇儀は自身の行為の意味を説明する。

多少唸^ウってはいたが、やがて了承を得たかのように呼吸を整え、構えを取る。

それを見た勇儀はにいつと歯をむき出しにして笑い、地面に足を踏みつけ踏ん張りをつける。

刹那、旧都が震え、ごくわずかだが旧地獄そのものが揺れた。

「名乗りを上げようか！私は鬼の四天王が一人、『力の勇儀』さね！」

「中国武術研究会部長・古菲^{クイフェ}！」

「では……いざ、尋常に……っ！」

勇儀は足に力を込め、地面を陥没させる。

「勝負アルツ！」

古菲^{クイフェ}は獣よりも早く行動を示し、懐へと飛び込む。

不動の勇儀と瞬動の古菲。

鬼の拳と人間の蹴りが、今飛び交う。

もちろんだが、この後、古^{クイ}は見事なまでに惨敗した。

いくら達人の域に達しているとはいえ、相手は鬼。身体能力の差が違いすぎた。

あらゆる技法を驚異的なスピードで試すものの、勇儀の筋力とパワーの前では通用しなかった。

だが鬼を認めさせるほどの闘いが出来たことを、古^{クイ}は誇りにすら思えた。

勇儀自身もまた、自ら枷を課したとはいえ、これほどまでに闘い甲斐のある人間と出会えたことに感激ですら覚えていた。

その後は、勇儀と古^{クイ}を中心としたバカ騒ぎに発展。

取り巻きや己の友人であるヤマメやパルスィを交えての大宴会にまで勃発した。

拳句の果てには古^{クイ}に遠慮なく酒を注ぎ込み、酔った勢いで第2ラウンドだと二人が暴れ、旧都混乱と破壊に包み込むほどだ。

古菲^{クイフェ}を神隠しした張本人である八雲紫も、さすがにこれは無視できなかつた。

翌朝、ベットから目覚めた古^クは元気ながらも全身打撲と二日酔いに悩まされる羽目となる。

「いやあ、凄くリアルな夢だったアルよ。まるで本物みたいだったアル」

これが、後に麻帆良学園に広まる都市伝説が一つ『麻帆良の幻想入り』の始まりである。

完

二十万アクセス記念小説「東方喧嘩録 勇儀VS古菲」(後書き)

古^クは難しいです。勇儀も難しいです。どうでしたか？

ご意見次第では今後も番外編で活用していこうかと思えます。

第29話「ルーミア、学園長に頼まれる」

エヴァンジェリン視点

……来たか。

あの決着から後日経ったとある放課後。

私達マクダウエル一家は、あるカフェにて坊やと神楽坂明日菜を待ち合わせていた。

理由は言わずもがな、サウザントマスターの情報を教えてやる為だ。パフェを頼張るルーミアを他所に、やっと来た坊やと明日菜の姿を目撃した。

「遅かったな」

「すみません、書類の整理もあつたもので……」

「いや、本気で謝られても……」

坊やが素直に遅刻を謝罪してきたから、ちょっと戸惑ったぞ。そつえば忘れがちだが、こいつはあくまで教師だったな……。

「あ、そのパフェいいなあー」

「一口食べるー？」

「いいの？」

「後でしろお前ら！」

他所ではルーミアと明日葉がカフェー押しパフェに喰らいついたし！
この間までの死闘の空気はどこへいった、どこへ！？

「マスター、落ち着いてください。せつかくのカリスマが崩れま
したよ」

「変なことをいうんじゃない茶々丸！」

茶々丸は茶々丸でマイペース過ぎだ！

第一なんだカリスマって！私はいつでもマトモだ！

これから大事な話をするんだから、落ち着かんか貴様ら！

まあ色々あったが、ようやく坊やの欲しがっていた情報を提供で
きた。

それは、サウザントマスターの死だ。

呪いを解きにまた来るとっておきながら、もう十数年も音沙汰が
ない。

それは10年も前に死んだということに繋がる。私の呪いを残した
ままな……。

……なんだ坊やに神楽坂明日葉？そんなぼかんとした顔をして。
もう少し神妙な顔をすると思っていたのだが……。

「エヴァンジェリンさん、落ち着いて聞いてください。……実は6年前、僕は父さん……サウザントマスターに会ったことがあるんです」

なんだと？

坊やが何を言い出すのかと思えば……生きてるだと？サウザントマスターが？

「ほ、本当か！？本当に奴が活着ているのか！？」

「は、はい。父さんから授かったこの杖が証拠です」

つい熱くなつて問い詰めてしまったからか、坊やは若干引き気味だ。それでも坊やは、坊やが常に手に持っていた杖を私に差し出して見せる。

……確かにこの杖には、奴の魔力が微かに残っている……。

「だから、きつと父さんは活着ています。だから僕は、父さんの事を少しでも知りたかつたんです」

「そんな……」

活着ているだと？奴が……？

……そうか……そうか、そうかそうかそうか！

奴は活着ているのか！

「ふは、ふはははは！そうか！奴は活着ていたか！要らぬ心配だったな！」

そうだそうだよな！あのバカがそう簡単に死ぬわけがないよな！
だめだ、心の底から笑いがこみ上げてきて止まらない！
ここまで愉快的な気持ちになったのは久々だ！

「よかつたねー主！」^{マスター}

「おめでとうございます、マスター」

まさにその通りだルーミアに茶々丸！そうかそうか、お前らも嬉しいか！

どれ、気分が良いから、その口周りについたクリームを私が直々に拭ってやるう！

「あ、あのー……」

おっと、すまん坊や、私としたことがつい舞い上がってしまった。
だが嬉しいんだから仕方ないだろう。許せ。

ルーミアの汚れをふき取ってやったことだし、席に戻って落ち着くとするか。

私は紅茶のカップを持って、坊やに視線を向ける。

「……で、他に聞きたいこともあるのか？」

「え、えっと、実はこの杖以外に手がかりがまるで無くて……他に何か知っていたら教えて欲しいんですけど……」

まあ、小僧一人が杖一つで奴を見つけられたら苦労はせんよな。

にしても、奴の手がかりか……他に何かあったか……？

死んだというのが嘘ならば……もしかすると。

「京都に行ってみるがいい」

「京都？あの有名な京都ですか？」

「ああ。奴が一時期住んでいた家があるはずだ。ヒントぐらいは見つかるかもしれん」

それまでは奴の死亡説が強かったから誰も詮索はしなかったが、今なら話は別だ。
よく探してみれば、なんらかのヒントが隠されていても不思議はない。

「あ、京都？丁度よかったじゃないネギ」

「え？」

ルーミアと共にパフェを食べていた神楽坂明日菜が横入りしてくる。
明日菜は『あれ』について知っているからいいが、坊やは分からずじまいだ。

というか仮にも教師だろう貴様……連絡がまだなのか？

「じゃあエヴァちゃん、私からも一つ聞いていい？」

「……なんだ？」

本来なら応える気が無いのだが、仕方なく神楽坂明日菜の質問を聞くとしてよう。

恐らくは、昨夜の暴走の件や、ルーミアの封印と正体についてだろう。

丁度いいからこの機会にこいつの事を教えておいて……。

「もしかしてエヴァちゃんって、ネギのお父さんのこと好きだったんじゃないの？」

ブッフウー！

「マスター、紅茶でも虹が架かるのですね」

お、同じネタを二度も使うな茶々丸！ゲホ、ゲホ……！

なんでそんな関係の無いことを聞くんだ神楽坂！ま、まさか坊やが話したのか！？

「えー？けど主がサウザントマスターの事を話してくれたときって凄く、もごもご」

だーっ！貴様も余計な大胆発言をする気がルーミアーっ！
だが言わせはせん！言わせはせんぞーっ！

「ええい私に黙って言うつのはこの口か！もつちりやわらかなこの口かー！」

「いふあいいいふあい」

本当にもつちりとしているな、お前のほっぺは！

このこの、どこまで伸びる気だこのほっぺめ！限界まで伸ばしてやるるか！？

それと坊や！秘密を漏らした罰としてお前のほっぺも引つ張ってやるから覚悟しとけ！？

結局、二人（と一匹）はルーミアの事について何も聞かなかった。友達だからという理由でルーミアの事を信じて、あえて何も聞かない事にしたそうだ。
甘い奴らだな……。ま、いずれはわかる時が来るだろうさ。

それからさらに数日後。

突然あの爺に呼び止められた。私達三人とも。

一体何がしたいというのやら……。おかげで早起きする羽目になってしまったではないか。

「おはよーございます」

「おはようございます。学園長」

こら、ルーミアに茶々丸。

この瓢箪爺相手にいちいち挨拶なんぞしないでいい。

「おはよう。朝早くからよく来てくれたのお」

呼んだ張本人が言う台詞ではないぞ爺。

「さて、来てもらってさっそくじゃが、折り入って頼みたいことがあるんじゃないか」

「何事かと思えばそんなことか。爺の雑用など受けるつもりは」

「いや、頼みたいのはルーミア君になんじゃ」

「ほえ？」

「なんだと？」

この爺、とうとう狂ったか？朝ボケにしてはボケすぎだろう。

わざわざ朝から呼び止めてなんだと思えば、ルーミアに頼みごとだと？

こんなバカ相手に何を頼もうっていうんだまじろくじい耄碌爺が。

「この度の修学旅行が京都に決まった件については聞いておろう？」

そんな私の考えを読んだかのように、爺は私に問いかけてくる。

……ああ、そういうことか……これだから爺の戯事は……。

「単刀直入に言ってやろう。……近衛木乃香の護衛と、ネギの坊やのフォローか」

「その通りじゃ」

私達の会話に追いついていないルーミアと茶々丸が首を傾げているが、それはどうでもいい。

この麻帆良学園は、関東魔法協会と呼ばれる団体に所属している。

そして修学旅行先である京都は関西呪術協会。いわば敵対組織だ。

この二つの組織は昔から折り合いが悪い。言ってしまうえばガキ同士の喧嘩だ。

だがこの爺は関西呪術協会の長 『紅き翼』 に所属していた英雄の一人・詠春 を婿に取っている。二人は関西と関東を纏めようと検討しているが、もちろん反発する者が出てくる。

そこへ『あの』ネギの坊やが来ることにより、関西呪術協会は警戒と反発を強め、妨害工作の可能性が出てくる。

自分達は英雄の息子が居るんだぞ と連中に自慢しているようなもんだぞ。バカらしい。

それをこの爺は逆手にとり 坊やの成長の糧にする気だ。

そしてそれに拍車をかけるのが……近衛木乃香の存在だ。

関西呪術協会の長の娘にして関東魔法協会の孫という立場に居る彼女には、驚くほど絶大な魔力を宿している。

その魔力と立場を狙っている連中は多く居ると聞く。ネギの坊やへの妨害に乗じ、木乃香を誘拐する連中も出てくるだろう。

つまりこの京都旅行は、かなりの危険が示唆されるとんでもないイベントだ。

「……それにルーミアを巻き込む気か」

「実力には見合っておる。それにルーミア君は関東魔法協会とは無縁じゃ。連中から文句を言われないじゃろつて」

そういう問題か！

確かに関東魔法協会の連中を混ぜれば互いに一悶着起こるだろう。

だからといって、いくら実力があるとはいえ、このバカを向かわせるな！

ただでさえ放っておくと危なっかしい奴だというのに！

茶々丸に聞いた話だが、スーパーの試食を片っ端から食い散らかしたと聞いた程だぞ！？

それにルーミアが居なくなったらさみs……いや、なんでも。

「ルーミア君、お願いできんかね？」

「何を？」

……うおい！話をそらすな爺！そして聞けよルーミア！

わざわざ私を呼んだのは許可を得る為とかそんなんじゃないのか！？

「木乃香とネギ君を悪い連中から守って欲しいんじやよ」

「木乃香さんとネギ君を？」

爺の言葉に、ぴくり、とルーミアが反応する。

友人二人が関わっているからか、ルーミアは少し真面目な顔になる。

「うむ。君になら任せられると思っている。……力を貸してはくれんかね？」

爺は素直に頭を下げ、頼み込む。

幼女相手に頭を下げる爺とかシユールな光景だな。

まあ、友人が危険に晒されているんだ。お人よしのルーミアが横に振るわけが……。

「じめんなさい」

……あつた。

ルーミアは申し訳なさそうに首を振った。

これには爺だけでなく私も茶々丸も驚いた。

「……………どうしてかの？」

ルーミアなら断らないと思ひ込んでいたのが、爺が啞然として問いかけてくる。

するとルーミアは、おもむろに私に抱きついてきた。

「だって、主はマスターきょーとりよこーに行けないんでしょ？」

ルーミアは私に抱きついたまま、真剣な表情でそういった。

確かに私は呪いの性で京都旅行に行けんし、元々行かせるつもりはなかったが……そんな理由で断るのか？

「だったらルーミア行かない。マスター主と茶々丸さんが居なきやダ」

「そ、そこをなんとか頼めんかのお……大事な孫娘と教師の危機なんじゃし……」

「イヤー」

こ、こら強く締め付けるなルーミア！苦しい……っ！

だがルーミアは、爺がいくら頼んでも了承しない。珍しく食い物にも釣られない程に。

私と茶々丸が居ないだけで断るこいつは、まさに駄々っ子同然。

念のため言うが、う、嬉しくなんかないぞ。

「う、ううむ……困ったのお……」

よほど困っているらしく、ちらり、と爺が私を見てくる。こっちは見んな。

なるほど、このために私を呼んだか。

だが私は知らん。むしろ困り続ければいい。ざまあみる。

む？なんだ？この気配は？

ドスンッ！

「むぎゅっ！？」「もぎゃっ！？」「あだっ！？」「きゃっ！？」

「マスター！？」

な、なんだなんだ！？

突然上から何かが落ちて……く、苦し　　というか冷たいっ！？

なんだこの、身体の芯までくる冷たさは！？

ていうかなんだこれは！？もぞもぞ動いているし、声がするし！

「だぁーっ！！どけーっ！！」

会心の吸血鬼パワー炸裂っ！どけこらーっ！

落ちてきたものが軽かったからかもしれんが、どけてよかった……。

「ていうか茶々丸！動けるのならさっさと助ける！」

「すみませんマスター、行動が遅れてしまいました」

まったく、最近の茶々丸はたるんでいるな……後で巻いてやる。

で。

「なんだこれは？」

「気絶しているルーミアさんと他二名です」

冷静に分析しているようだが、そんなことは私でもわかっている。
気絶している人数が二人増えたことぐらいはな。

問題は、上から降ってきたこの青妖精と緑妖精はなんだ、ということだ。

完

第29話「ルーミア、学園長に頼まれる」(後書き)

まさかの青妖精チルノと緑妖精だいやうせいが麻帆良入り。

原因はもちろん神隠しの主犯者です。来た理由は次回明らかに。

そして学園長と茶々丸が空気。ごめんなさい学園長。ごめんなさい茶々丸。

第30話「八雲紫、麻帆良学園に現る」(前書き)

12/4：前書にて消し忘れの文章を削除。

ご指摘をありがとうございます！

第30話「八雲紫、麻帆良学園に現る」

ルーミア

こんにちは。ルーミアです。

今、ルーミアとチルノちゃんと大ちゃんは、^{マスター}主の前で横一列になつて正座しています。

三人とも、頭にタンコブ一つ。特にチルノちゃんの大きい。^{マスター}騒いでいたルーミア達に主から制裁という名のゲンコツをもらったの。

けーねせんせーに怒られてばかりいた経験が生きてきたのか、珍しくチルノちゃんも大人しくしている。

「……で、誰だこいつらは」

「チルノちゃんどー、大妖精の大ちゃん」

^{マスター}主がチルノちゃん達を見てから質問してきたので、答える。
ルーミアの大事なお友達なんだよ。いつか^{マスター}主に紹介したかったんだ
！。

「ルーミア、このチビ誰？」

「ち、チルノちゃん！」

あ、チルノちゃんが禁句ワードを言っちゃった。

「誰がチビか！」

「あんだ」

「なら貴様もチビだろ！」

「チビ言っなー！」

「貴様が言っなー！」

「落ち着いてくださいマスター」

ありゃー、チルノちゃんったらー。主マスターに喧嘩マスタを売ったら大変だよー？
チルノちゃんと主マスターの口喧嘩マスタが始まっちゃった。
茶々丸さん、残念だけど止めようとしても無駄だと思っなー。

それにしても驚きだなー。なんでチルノちゃんと大ちゃんがここに居るんだろう？

あ、けどここに来ることができた理由がなんとなくわかったかも。
こんなことができるのはあの人しかいないもんね。

「そんなことよりルーミア！今までどこに行っていたのさー！探したんだよー！？」

「おいこら、そんなこととはなんだ！」

「そっだよルーミアちゃん。リグルちゃんやみすちーもけーね先生も心配していたんだよ？」

「聞けお前ら！」

チルノちゃんも大ちゃんもルーミアに寄り添ってきてくれた。

そっかー。みんな心配してくれたんだねー。
ここに残ると決めていたけど、やっぱりルーミアの事を心配してく
れるのは嬉しいな。

「ごめんねー」

「ごめんじゃないよー！」

「そっだよー」

「ごもつともー。心配かけちゃったもんねー。
けど懐かしいなー。チルノちゃんと大ちゃんの顔を見ているとほっ
とするなー。」

「そっいえばリグルちゃんとみすちーはどうしているんだろう？」

「騒がしい子達ねえ」

「あ、この声は紫ゆかりさんだ。」

エヴァンジェリン視点

っ!!!?

爺も感づいているか！

なんだ、この禍々しい気配は!?

何も無い空間に一瞬にして毒が充満したような、そんな一瞬の不意打ち。

そしてその気配の正体は、突如として現れた空間の裂け目からゆっくりと姿を現した。

まるで繭から誕生した蛾のように、妖しく、そしてゆっくりと頭から出して全身を見せ付ける。

室内なのに日傘をさし、ゆったりとした紫を貴重としたドレスを纏う妙齡の女性。

見た目からすれば若そうだが、どうも胡散臭さばかりが目立つからか、かなり歳を食っているようにも見える。

いや、全身から漂う圧倒的な妖気と気配からして、既に存在自体が胡散臭いと露骨に表現しているようにも見える。

まるで、胡散臭さそのものが具現化したかのような存在。

しかしはつきりとした、強者故の絶対的優位を全身から滲み出している。

そんな私達の考えを見据えてもいるだろうが、女はにたりと不気味に笑う。

……一瞬だが、寒気を感じる。そんな笑みだった。

「あらあ、ノックも了承も無く侵入してきたのは詫びますけど、そんなに警戒しないでくださる？」

「……そのような禍々しい気配を漂わせておいてよく言えるな、侵入者」

「エヴァンジェリン君、少し大人しくしてくれんか？」

事の重大さを理解したからか、爺が険しい表現で私に注意する。

……仕方ないが大人しくしましょう。今の私ではこの女に勝てる気がしない。

いや……この気配と力から見て、もしかすると全盛期の私ですらてこずるかもしれん。

「そうそう。ピリピリしているとお体に障るわよ？……失礼、再度申し上げますが、無断侵入についてはお詫びしますわ」

そんな私の杞憂など知らぬと言わんばかりに、女は私に向かって小さく笑う。

そして女は、自然とこの場における最高位の存在を理解したのか、爺に軽く会釈する。

「ふむ、失礼ながらお主の放つ気配と急な侵入に驚きましたが、少なくとも敵意なし、と見てよろしいですか？」

「ええ。間違いなく」

胡散臭いことこの上ないが、少なくとも事実だろう。

でなければ、爺はこの女にあっさり暗殺なりされているに違いない。

この女がそれだけの実力者だということが、用意に理解できるからだ。

「なら、まずは名乗り上げますぞ。わしは近衛木乃衛門。ここ、麻帆良学園の長を勤めておるものですじゃ。そちらの少女は……」

「ここに居るということは……世に名高き『闇の福音』こと、真祖の吸血鬼・エヴァンジェリン=A=K=マクダウエル……でなくて？」

ちらり、とこちらを見て、扇子で口元を隠して女はさらりと言つ。正直、少し驚いた。

私の正体を一目で見抜いたから……というだけではない。

私が封印されて以降は、私の所在や生存は世間に隠していたはず。それなのにこの女は、この麻帆良学園に私が居ると知っていた。

「……何故、それを知っている？」

「ご謙遜を……あまりにも有名な方ではありませんか」

そういつて女は、扇子で隠した口元から小さな笑い声を漏らす。

何故ここに私がいることを知っているのか、という意図を誤魔化すつもりか。

「では、こちらを改めて乗り上げますわ」

己のドレスの裾をつまみ、軽く会釈する。

「私の名は八雲紫^{やくもむかし}。図々しくも妖怪の賢者を名乗り、幻想郷と呼ばれし地より参った妖怪ですわ」

八雲^{やくも}……？

……なるほど。どこかで聞いた名だと思っていたが、こいつだったのか。

ルーミアが話していた、幻想郷と呼ばれる妄想のような地の創造主か。

だが、この頭の奥の引っかかりはなんだ？

「なるほど……お主が八雲殿^{やくも}ですか。お噂はルーミア君より聞きましたぞ」

「あら、ではお話が早いですわね。私は知人の友人を送りに来ただけですので……」

白々しい事をよく平然といえるな、この女怪が……。

「そんな理由だけで……この学園結界をなんなく潜り抜け、なおかつ我々以外の者の侵入を拒むような結界を張ったとは………どういうことかな？」

爺も今更になって気づいたようだな。

この部屋に施されている、僅かに感じられる力……。

もしこれが人払いの結界に似ていなければ、まったく気づかなかつただろう。

そんな極小さく僅かな力でありながら、警戒と用心を兼ね揃えているという、非常に完成度の高い結界だ。

それをこの八雲やくせと名乗る妖怪は、さも当たり前のように施した。

「余計な混乱はお互いに御免被るものではなくて？小さな心遣いを虐げるなんて失礼ねえ」

「どうだか」

「これこれ」

この女の言うことは、例え正論であったとしても、裏があり過ぎるようで間々ならない。

余計な混乱を避けるのは同意するが、どうもこの女が好きになれん。まあ……今は大人しくしておいてやるとしよう。

「では、話を戻しましょう。何故ここ来たか」

そういえばインパクトが強すぎて忘れていたな。この妖精どもの存在を。

なんでこんな妖精どもを連れてきたのか、きっちり説明してもらっからな。

話によるとだ。

幻想郷ではチルノと呼ばれるクソガキが暴れまわっていたという。皆から苦情が来たのでチルノを止めようとした所、ルーミアを探しているという。

そこで紫はチルノにルーミアの居場所を教えた所、連れていけと駄々をこねた。

あまりにも煩くてしつこいので、お望みどおりにとこちらに送ったという。

「……だからといって上から降らすな」

「あら、落とした先に人が居るとは思わなかったもの」

よくもまあぬけぬけといえるなこの女……！

どうもこの女とは気が合わなさ過ぎる……。

「まあ、そんなに怒っていると、大きくなってから肌に皺ができるわよ？」

「……貴様、私が誰だか本気で解っているのか？」

私が不死の吸血鬼と知っていながらんな事を言うとは良い度胸だなこのアマ……！

「あらー、私が知っているのはお名前だけですものー。あなたの歳の事なんて知りませんものー」

明らかに棒読み。こいつ絶対に知っていて弄んでやがる。

アルレビオ以上に面倒くさいな……世の中には上がいるということか……！？

「貴様、自分から私を真祖の吸血鬼とか言っていたよな？」

「あーもーめんどくさーい」

なんだそのいまどきのチャラけた女子高生みたいな言い方は。ウザい。

すると八雲やぐもは本気でどうでもよさそうに溜息を漏らし、あーはいはい、わかったわかった……と言わんばかりに扇子を振る。

「ならお詫びとして、そのちゃんな呪いをどうにかしてあげるわ」

……………は？

「なにいいいつ!?」「」

こればかりはさすがの爺も私も驚きを隠しきれんぞ!!?!?
みる、ルーミアと茶々丸も目を丸くして驚いている!
わ、私のこの呪いをどうにかできるのか!?
ていうかこれをちゃん呪いと言い切れるのか!?

「ねえ大ちゃん、みんなしてなに騒いでんの?」

「さあ………?」

完

第30話「八雲紫、麻帆良学園に現る」（後書き）

まさかのエヴァ京都行きフラグ。毎度の事ですが原作ブレイクし過ぎて申し訳ありません。

あくまで京都市のフラグであり、解放フラグではありませんのであしからず。

そして今回はチビっ子トリオが空気。ごめんね。

第31話「八雲紫、ぬらりひょんと吸血鬼を弄ぶ」(前書き)

あとがきにアンケートがございます。

よろしければ、皆さまのご意見をお聞かせください。

よろしく願います。

12/5:アンケート締切日修正。正しくは12月9日です、すみませんでした(汗)

ご指摘ありがとうございました！

加えて描写ミスがあったので修正。エヴァの呪いは掛ったままです。

第31話「八雲紫、ぬらりひょんと吸血鬼を弄ぶ」

八雲紫視点

あらあら、想像以上にガつついて来たわねえこのロリ吸血鬼は。てつきりその呪いはそのまま放っておいただけで、自分で解ける物かと思っていたのに。今後の交渉の材料として温存しておけばよかつたわ。惜しいわねえ。

「失礼ですが八雲殿^{やくも}、そのようなことが本当に可能なのかね？」

狸爺も信じられないってばかりの表情ね。

誰も解けないと諦めていた呪いが当然のように解けると言ったから、さすがに驚くわよね。

……この狸爺が狼狽している理由はそれだけじゃないようだけどね。

「ではお試しということとで……」

百聞は一見にしかずってね。疑うようなら見せるまでよ。

頭の中でイメージする。エヴァと呪いを隔てる境界を。

「はい」

スッ

「……おおっ!?!」

私はエヴァの身体を横一文字に切るようにして扇子を振る。

その直後、エヴァの身体から膨大な魔力があふれ出てきた。

そのあふれ出る魔力はまさに燃え盛る炎のよう。

ルミア達もバカもその様子が見えるみたいで、その力に感心しているわ。

……なめるほど、聞いていた通りの凄まじい魔力ね。

レミア以上、幽香以下……って所かしら。どの道強大には違いな
いけど。

レミアが言っていたことは本当だったのねえ。

酒の席で話していたから、尾ひれのついた逸話かと思っていたのに。

「やっと……やっとあの忌々しい呪いから解放されたのか……！ふ
は、はーっはっはっはー！」

……えらくハイテンションねえ。そんなに嬉しいのかしら？

六百年生きてきた吸血鬼のくせに、たかが十数年ぶりの解放に何を
喜んでいるのかしら？

ま、そんなことは置いといて。

「はい」

境界解除

「お、おお？」

途端にしぼんでいく己の魔力に戸惑うエヴァ。

「ほい」

境界発動

「おおっ！」

「あらよつと」

境界解除

「あ……」

「ほいさつた」

境界発動

「おい……」

「よいてーっしょ」

境界解除

「遊ぶなっ！！」

おおっと危ない。

不意打ちでの飛び蹴りは反則よー。避けられるけど。ちよつと遊ぶぐらいの猶予があったっていいじゃないのよー。

「いや、しかし、これは驚きじゃわい……一体どうやって……？」

驚いてばかりいると疲れますわよ？

「人を寄せ付けないう空間を隔てる事が出来る私に、身体と呪いを隔てる空間を作ることなんて朝飯前ですわ」

ようは私の能力 『境界を操る程度の能力』の応用。

言葉の通り、エヴァの身体と、身体に張り付いている呪いの間に境界を隔てただけ。

ま、つまりは解説したわけじゃないんだけどね。結局は呪いが掛かったままなのよ。

なんたつてあいつが掛けた呪いだもの。

出来なくはないんだけど、解くだけでも面倒くさそうじゃない。

向こう二人は私の真意を知ってか知らずか、一方は残念そうに、一方はほっと溜息を零す。

「一応は礼をいうぞ、八雲紫。……それで？何をお望みだ」

あらあらエヴァったら、お早いお話ですこと。

さあて……どう答えようかしらねえ……？

エヴァンジェリン視点

どうも怪しすぎる。

こいつは私の正体を知っている。それならば私の事は十分理解しているはずだ。

だがこいつは、解呪ではないとはいえ、私の呪いをなんの前触れも交渉も無く、すんなりと実行に移した。

自分に火の粉が降りかかろうとも、返り討ちにできる自信があるからこそか。

そもそもなんの見返りを望んでいるのかですらわからない。純粹な思いやりではないのは確実だ。

不当な後払いという事も考えられるが、踏み倒される可能性も示唆できるはず。

とにかく情報が足りない。まずはこちらから出方を伺う。

爺はひとまず八雲が私の質問に対してどう答えるかを待つらしい。

「別にい、お礼なんかいらぬわよお。そもそもこれはお詫びだしね……ただ」

にたり、と八雲は笑った。来るか。

「私がいなくなった場合、その呪いの境界がどれほどの力で、どれほどの時間を保てるかなんてことは知らないけどねー」

あえて放置の意思を示したか……っ！

つまり、私と呪いの境界は八雲の管理下になければならない。

加えて、力加減や持続時間も思いのままだとも豪語している。先ほどのお遊びがその証拠だ。

下手に私が脱走なり逆襲しても、八雲の維持が無くては、時期に呪いと境界が切れて自滅するのがオチ。

だが京都旅行の護衛を欲していた爺にとって、私という人材はできれば手に入りたい品物だろう。

しかもルーミアと茶々丸のオマケつき、さらには呪いの加減が出来るというのだから。

よって今後一切この女と関わらない、という決断は皆無に近い。

その弱みを八雲は利用し、今後の境界の維持は私と爺の交渉次第でどうにかしてやるうと売りに出してきた。

私と爺はどうか自分には有利な条件、あるいは拮抗状態を保つ為、八雲に何かしらの代価を支払うことになる。

自分から言い出すより相手から言い出してきた方の方が何かと後付けしやすいからだ。

中立こそが儲かる。それを理解しているのだ。この女怪は。

そんな八雲を前に迂闊な行動は首を絞めると理解してか、私も爺も今は黙っている。

対して八雲は扇子で口元を隠しこちらをじっと見ている。

……その扇子で隠した口元は絶対に笑みを浮かべているに違いない。ちなみに茶々丸はチビ共の相手をしている。なんだこのほんわかした光景は。

まずは私達の意思を示す必要があるな。

「爺、話がある」

「……聞こうかの」

静かに爺は言った。ここから大事な話だと分かりきっているが故に。

「この女の言う事は信用できんが、実証はできた。木乃香の護衛云々は引き受けてやるから、私を京都に行かせる」

「ふむ……」

私は京都に行きたい。物凄く行きたい。

京都だぞ京都！日本の古き伝統がぎゅっと詰め込まれた魅惑の都だ！こんな機会が早々めぐってくるとは思わなかったので諦めかけていたが、今なら別だ！

「お主が行きたい理由はわかるぞい。じゃが……目立ち過ぎるのお」

私の熱意は理解できたが、爺は返答に難色を示している。

確かに私が居ると連中が知れば放っておけないだろう。

なにせ私は、世に恐れられた悪の魔法使い。

連中の警戒を深めるどころか、より反発力が高まり危険度が倍増すること請け合いだ。

そこで私はある提案を出す。

「問題は無いさ。私達は別行動を取ればいいのだから」

爺が微かに微動する。感心のものなのか、驚愕のものなのかは知らないが。

話はこうだ。

我々は生徒としてではなく、観光客として京都に紛れ込むというシンプルなもの。

元々、私が堂々と京都旅行に混ざりこんでいたら元も子もないからな。

既に修学旅行を辞退してしまったから、今更取り消しもできんし。

ならば名を変え、姿を変え、力のある程度にまで押さえ込めばいい。そうすれば修学旅行の連中を巻き込まずに追っ手や刺客を叩き潰すことができる。

しかも班行動という縛りも無いので、好き勝手に行動できる。

……まあ、本音を言えば自由に京都巡りをしたい、という理由もあるのだがな。

その旨も伝えてある。

代わりに爺の要求は以下の通りだ。

- ・護衛対象と学生の安全の保証
- ・ある程度の力の抑制
- ・不用意な殺傷を極限控えること
- ・ネギや木乃香に気づかないように行動すること

三つ目の条件にはいささか不本意だが……まあいい。

大まかなことが決まった以上、次の行動に移らなければならない。

それは、八雲紫の要求内容だ。

「……というわけだ。八雲、境界の維持を願うとすれば、貴様は対価に何を望む？」

まずはこいつが求めている物をはっきりさせなければならない。

だからこそ早々とこちらから提案を出した。調整はこの後からでも

ゆつくりできる。

爺がごちゃごちゃ言わないも、向こうの要求内容に応じて対策を練るためだ。

八雲は、そうねえ、と言いながら首をかしげて悩む素振りを見せる。

「じゃあ、村一つ養えるほどの岩塩と外国の調味料をもらえないかしら？」

は？

「あら駄目？」

あら駄目？……ではない。

悪の魔法使いの解放の対価が、そんな安物でいいのか？

「幻想郷は内陸なのだから、塩は貴重品よ？それに加えて外国の調味料なんかは贅沢品にも等しいわ。」

心を読みやがった！？いや、気のせいだ！そうに違いない！

「まあ、八雲殿がそうおっしゃるのなら調達しますぞ」

さすがの爺も呆然としている。そりゃそうだろう。

ナギの呪いを解いたお礼が、たかが塩と調味料なのだから。

「感謝いたしますわ。……ああそうそう、一つ言い忘れたことが」

爺の了承に頭を下げたかと思えば、思い出したかのように唐突に言葉を挟みこむ八雲。

「私は空間を越える能力を持っているので、東西南北あらゆる場所をめぐってきましたわ。そんな私には、『神隠しの主犯者』なんて通称を貰っていますの」

神隠しの主犯者か……大げさだが、この女らしいぴったりな二つ名ではないか。

しかしそれがなんだというのだ？胡散臭さが倍増するだけではないか。

「……もしや」

……なんだ爺？心当たりがあるのか？

「大停電の翌朝、ある生徒が原因不明の重症を負っていたという謎の事故がありましたな。まさかだと思えますが……」

ああ……あつたなそんなこと。

ていうか、ある生徒とは古クの事ではないか。

うちのクラスメイトだったし、大怪我を負ったということで朝倉が大々的に公表していたしな。

まさか。

「あ、それ私がやったわ」

「なんと!？」

さらりと自分のやったことを認める八雲に、予想していたとはいえ驚愕した。

馬鹿な？何故ここで自ら不利になるような不安要素を言い出す？

爺と八雲がその件について揉めているが、私はそれどころではない。こいつの目的は境界の維持に対する見返りではなかったのか？

先ほどまで自分が欲しがっている物を提示しておきながら、下手をすれば門前払いを受けるような行動に走ってきた。

目的が見返りであるというのは明らかだ……ならなぜ今になってそれを言う？

純粹にただおちよくっているだけという線も強いが、さすがにそれだけだとは思えない。

つくづく、謎の多い女だ……。

「ま、急ぐ必要ないんだけどねー。急かしてもないし。お二人でこゆっくり話し合うなりして考えてくださいまし。私の名を呼んでいただければ、こちらの事情が無い限りはすぐに伺うわ」

さらに八雲は猶予を与えてきた。

ようはじっくりと話し合ってから決めろ、ということだろう。

投げやりのように見えるが……この女の事だ、ここで終わりにするはずがない。

安い対価を要求し、不安要素を躊躇無く言い放ち、時間の猶予を惜しまないという……。

……なんだ？この女は一体何がしたい？

「では……ひとまずはこれにて失礼いたしますわ」

やがて八雲紫は再び空間を開き、その中に身を沈めようとする。呼び止めようと私と爺は動いたが、その頃には既に八雲の姿は無かった。

まるで最初から居なかったかのように、姿も存在も結界も消えていった。

なんなんだ？あの妖怪は……。結局、呪いはそのままにしていたし……。

「あの、マスター」

「なんだ茶々丸……」

背後から聞こえる従者の声を聞いて私は振り返る。

「この子達をどうしますか？」

そこに居るチビ3人を困ったように見てから、私に尋ねて来る。

きよとんとした顔で私を見るチビ3人。

いつのまにか増えていたチビ3人。

ルーミアと八雲紫が送り出したというチビ2人を加えて、チビ3人。

八雲が送り出した、チビ2人。

……………チビ……………2人……………。

……………ん？なんだ茶々丸、その紙は？

「先ほどの空間の裂け目から出てきた手紙です。読み上げます。」

人払いの結界やペースを乱すといった謎の行為は、全て当初の目的の為の目くらまし！

私達からこのチビ共の存在を忘れさせ、姿を消すと同時に請求するあくどい手口！

一度消えてしまえば最後、追うことも問い詰めることも出来ない！

なんて……なんてせこいババアなんだ！！

「というわけで、今後しばらくは皆さんのお世話をいたします」

「あ、あの、よくわかりませんが、よろしく願います……」

「なんかわかんないけど一緒に居るんだね！わかった！」

「わーい、チルノちゃんと大ちゃんも一緒」

「ふおっふおっふお、仲良きことは美しきかな」

今はただ、この湧き上がる怒りをぶつける先をくれ……っ！！

完

第31話「八雲紫、ぬらりひょんと吸血鬼を弄ぶ」(後書き)

といわうえけでワンクッション。京都行きを期待していた方々には申し訳なく思います。

頭を使うような場面を書くのは苦手なのですが、謀略とか読み合いとかを読むのは大好きです。

というわけで、書けるだけ書きました。悔いはありません(笑)

ここで、エヴァを京都行きさせるかのアンケートを実施したいと思います。

原作ブレイク気味だと指摘されましたが、京都行きに期待している声もあります。

私なりに流れをいくつか考えてあるのですが、皆様のお気持ちを尊重したく思います。

そこで、留守番ルートと京都行きルートの二種類に分けました。内容は以下の通り。

エヴァ一家京都市行きルート

メリット：エヴァ一家＋ 京都旅行(幻術で大人化して別行動)
戦闘描写多め(関西からの刺客相手)

デメリット：展開が長引く(悪魔襲来編及び幻想郷訪問編が遠のく)
原作よりもややこしい展開になる(キャラ多数なので)

エヴァ一家留守番ルート

メリット：展開が短くなる(時節京都の様子は描きます)

原作通りの展開となる(原作よりネギは冷静となっています)

幻想郷からの訪問者あり（誰かは秘密）

デメリット：序盤から京都に行けなくなる（原作通り終盤には出てきます）

共通点：エヴァ家による仮契約イベント（ルーミア・チルノ・大妖精の三人）

大妖精の名前（さすがにそのままでは無理があるので）

終盤の登場（エヴァ一家VSスクナ）

個人的には留守番ルートで行きたいのですが（原作ブレイク回避と展開を早める為）、皆様のご意見を元に決定したいと思います。

感想にて、12月9日の午前0時まで受け付けます。ご意見・ご要望なども是非。

特に3人のアーティファクトまたは大妖精の名前について、よいアイデアやご意見（他作品アイテムなど）があればお願いします。ある程度は決めているので参考程度になります。

作者が優柔不断ばかりにご迷惑ばかりおかけしますが、どうかご協力をお願いします。

これからもどうかよろしくお願いします。

第32話「マクダウェル家の日々・初日その1」(前書き)

アンケートの結果、留守番ルートに決まりました。

ご意見をしてくださいました皆様、本当にありがとうございます。

第32話「マクダウェル家の日々・初日その1」

ネギ視点

ピ……

目覚ましよしっ！

今日から皆さんで京都旅行っ！

憧れの地に行けると思うだけでこんなに早起きできるんだなあと、少し感激する。

朝日が昇ったばかりからか、外はまだ薄暗く、明日菜さん達はまだ就寝中。

起こさないよう心踊る気分を抑えつつ、寢床から降りて再度チエツクをする為に荷物を取りだす。

『ふぁ？兄貴もう起きていたんですかい？』

あ、起こしちゃったかな？

寝ぼけているのか、ボクの元へやって来たカモ君の足取りはどことなくおぼつかない。

「うん。なんか楽しみで楽しみで仕方ないんだ」

だって京都だよ京都！清水寺に五重の塔、奈良公園に八橋に鹿さん！すっごく楽しみだなー

『喜ぶのもいいけどよ兄貴、任務の方を忘れちゃなんねえぜ?』

う……あまりにも楽しみすぎて一瞬忘れかけていたよ……。ありがとうカモ君……。

僕は手元にもっている封書を見る。

一見するとなんの変哲もない封書だけど、実は関東と関西の仲立ちを決める大事な親書だ。

学園長から頼まれたこの任務は、正直に考えると僕には荷が重いかも……。

いくら人手が足りないからって、教師としても魔法使いとしても未熟な僕に勤まるかなあ……?

『なにしょげてんだよ兄貴! その為の対策^{コレ}じゃねえかよ!』

顔に出ていたのか、カモ君が僕を元気付けようと声を掛けてくれる。その証拠にと言わんばかりに、カモ君は僕の代わりに鞆を素早く開く。

鞆の中には、多くの魔法具^{マジックアイテム}や骨董具^{アンティーク}。

防犯系から捕縛系、はてまた攻撃系まで揃えた多種類のそれは、エヴァンジェリンさんとの戦いで学んだ結果だ。

あ、もちろん旅行の必需品も入って……いるよね。よしよし。

『頼まれた以上はやるしかねえんだ! 締まっつていこうぜ兄貴!』

「そうだね……っ」

カモ君には勇気付けられてばかりだ。いつもありがとう。

意気込んでからもう一度だけ持ち物をチェックしてから鞆を閉じる。

あ、あと……あつたあつた。

一枚のメモにぎっしり書かれたそれは、旅行にいけない三人に頼まれた物。

エヴァンジェリンさんと茶々丸さん、それとルーミアのお土産のリストだ。

これも大事な用事だから、しっかり覚えておかないと。……にして
も食べ物が多いなあ。

マクダウエル一家の皆さんの分まで、楽しむぞ京都旅行ーっ！

「うるさいっ！何時だと思っっているのよバカネギ！」

あうーっ！声に出ちゃってしまいました！？

起こしちゃってごめんなさい明日菜さんーっ！

エヴァンジェリン視点

AM7:00

……てくださいい……。

んー……？身体が揺れる……地震か……？

……起きてください……。

微かに聞こえる女の声……ああ、茶々丸か。もう少し寝かせてくれ

……。
京都旅行にいけなくなったショックをまだ引きずっているんだぞ……。
……。
少しは主の苦勞を考えてだな……。

「あの、起きてくれませんか？」

うつすらと目を開いた先には、メイドを着た少女がぼやけて見える。
……ていうかちっこい。茶々丸はこんなになちっぽけだったか？
重たい瞼をなんとか開かせ、目をこすって視界をはつきりさせる。

「おはようございますエヴァンジェリンさん」

ぺこりと礼儀正しく頭を下げているのは、背中に羽を生やしたメイド少女。

……ああ、糞爺に押し付けられて昨日から居候することになった妖精の一人か。

茶々丸に似た爽やかな緑の髪の方は……確か大妖精といったか。
茶々丸には無い爽やかで明るい笑顔が、どうしてか眩しく見える。
笑顔に太陽光と二重の意味で眩しいので、仕方ないから起きるとする。

……うむ、着替えを用意しているとは気の利く奴だな。

「……ところでなんでメイド服を着ている？」

こいつを見て思ったんだが、どうしてこのチビっ子がメイドなんかやっている。

私が何もせずともせつせと着替えさせようとする大妖精は、手を止

めずに首を傾げる。

「えっと、せつかく住ませてもらっていますから、何かお手伝いできないかと思って茶々丸さんをお願いしてみたんです。そしたらこれを着てくださいといわれて……」

まあ殊勝な心得だ。働かざる者、喰うべからずというしな。

そもそもなんでそんなサイズのメイド服をアイツがもっているんだ？

ちなみに、大妖精と私との背丈はさほど変わらない。

……深く考えないでおう。そうしよう。

「ところでエヴァンジェリンさん、ぐっじょぶって何か知っていますか？」

「は？」

AM7:30

ルーミアが来てからというものの、優雅で静かな朝食は崩れ去っていったが……。

ワイワイガヤガヤ

「手で食べたら失礼だよチルノちゃん」

「だってこのぴかぴかしたの使いづらいんだもん!」

「チルノさん、フォークとナイフはこう持ってください」

「モグモグ」

「大妖精さん、チルノさんの利き手……よく物を持つ手は右か左かご存知ですか？」

「えっと、こっちです」

「ではチルノさん、こう持ってください」

「……」

「そうです。それで、フォークをこうして食べ物に刺して……」

「てやーっ!」

「そんなに力を入れたら危ないよチルノちゃん!もつと弱めに!」

「はぐはぐ」

「ではこちらの先割れスプーンを使ってみてください」

「あ、これ使いやすいです。……チルノちゃんどう？」

「……うん!あたいこれ使える!」

「それはよかったですね。安心しました」

「食事ぐらい静かにせんかお前らーっ!!」

二人増えた程度でこんなに騒がしくなるとは思わなかったわ！
ていうか誰だ、私の目玉焼きを食ったのは!?

「ごちになりましたー」

やはり貴様かルーミア!

後でほっぺグニグニの刑にしてやるから覚悟しておけ!

朝食後、ルーミアのほっぺをある程度グニグニしてからチャチャゼ
口を起こし、私達はダイオラマ球内に入った。

「うわー、綺麗ですねー」

「日差しが暑い」

広大な光景に大喜びする大妖精と、喜びつつも夏の日差しに負けて
いるチルノ。

さすがルーミアの友人だということもあって、反応が似ているな…

…。

…ていうかチルノ、体中汗だくじゃないか。大丈夫か？

「溶けるっ…」

力の無いチルノの声……っつーか本気で溶けてないか!?

身体どころか服ですら、まるでソフトクリームのようにどろどろと
輪郭を失って溶けていく。

さすがの私でも、アイスのように溶ける妖精とか聞いたことないぞ！？

ど、どうすればいいんだ！？自然と焦ってくる……っ！

「おおお、おい！チルノが、チルノが溶けているぞ！？」

お、お前ら二人はこいつの友人なんだろ！？

こっとう時、どうすればいいの知っているのではないか！？

「あー、チルノちゃんは暑い日には溶けちゃうからねー」

なにのんびりしているんだルーミア！？

それともこれが日常茶飯事なのか！？夏は毎度溶けてるのか！？

「すみません茶々丸さん！近くに川とありませんか！？冷やしてあげればチルノちゃんは戻るんです！」

ほれみるルーミア！大妖精とやらは必死でどうにかしようとしているぞ！

茶々丸に何か冷やすものを求めているらしいが……とにかく冷やせばいいんだな！？

「わかりました。いま氷嚢をお持ちしますので……」

「冷やせばいいんだな！？よし！待っている！」

その必要はないぞ茶々丸！

私は氷の魔法を放つべく両手に魔力を募らせ、詠唱する。

「リク・ラクラ・ラックライラック！契約に従い、我に従え氷の女

王！」

私が好む氷魔法だ！これならチルノも一瞬にして冷やせるだろう！

「マスター、それはさすがにやりすぎでは……」

ええい口出しするな茶々丸！

女子供を殺さない心情を持つ私の前で子供が溶けていると知ったら、取り乱さずにいられるか！

それに気分も乗ってきたし！詠唱も今更止められないし！

「来たれとこしえのやみ！えいえんのひょうが！」

「ルーミアさん、大妖精さん、今すぐ非難を」

「退避」

「ふえ？え？え！？」

茶々丸が二人に忠告してからジェット噴射で空を飛ぶ。

ルーミアが危険を察知して高速で飛行し茶々丸の後を追う。

遅れて大妖精が何事かとあちこちを見てから、一瞬にして姿を消した。

今のは瞬間移動テレポート？詠唱も無しですか？

そう思いつつも魔法は完成へと導かれ、周囲が冷気で満ち溢れていく。

もしあの三人が出遅れていたら体中に霜が走るだろうが、逃げ切れなかったからよし。

ではいくぞチルノ！学園の呪いが掛かっているから全力とは言えんが、これがダイオラマ球内での私の全力！

『じおるせかい！』

ガキンツ！！！！

……ふむ、直径10m、高さ20mの氷塊で限界か。

やはりマナが満ちたダイオラマ球内部とはいえ、全盛期に比べると弱いな……不満だ。

急に冷やされた影響で周囲の地面に霜が走り、空気中の水分が凍り周囲が霧に包まれる。

その氷塊の中心には……駄目だ、太陽が反射して見えづらい。

まあ……冷やせたからいいだろ。

「ふう……これだけ氷があれば一安心だろう」

「やりすぎる気が致しますが」

む？人が余韻に浸っているというのに、横から口を挟むんじゃない茶々丸。

残りの二人も安全を確認できたからか私に近づいてくる。

「ふわぁ……すじょい……」

白い息を吐きながら大妖精が感想を漏らす。

そうか。凄いか。素直でいい子ではないか大妖精。

……前々から思ったが呼びづらい名前だな……名前でも考えてきてやるか。

パキンッ

む？なんだこの音は……って。

バキバキバキバキ……っ！

な、何！？氷塊から何かが生えてくる！？

バキバキと棘のように氷塊から生えてくるそれは、一見すると氷柱のように見える。

だがそれは氷塊の冷気や氷を吸収するように、徐々に太く大きくなり……人の上半身を象ってきた。

氷の柱改め氷の像から、腕が生え、羽が伸び、そして頭が生えて顔の輪郭がはつきりとしてくる。

やがて氷像は身体の輪郭を象り、それを服のような薄い氷が包み込み、足が出てくる。

その大きさと背丈からしてまさに子供。氷塊から氷の子供が誕生したのだ。

最終的に氷の子供は氷塊から剥がれ落ち地面に落ちるが、ゆっくりと起き上がる。

そして透き通っていたはずの氷に色素が一瞬にして広がり、肌の色と服の色が映える。

「し、死ぬかと思った……！」

私達の前には、氷に閉じ込められていたはずのチルノが立ち止まっていた。

(氷の冷気を吸収して自己再生したというのか?)

身体どころか服ですら修復するなど、私は聞いたことが無い。そもそも、氷漬けにされたと思っただら氷から誕生しました、などという時点で次元が違いすぎる。妖精だからという理由ではあまりにもぶっ飛んでいる……。

闇を操り、闇を食らう妖怪

タイムラグ無しで瞬間移動できる妖精

そして氷から再生する妖精……

空間を自在に操る八雲紫といい……幻想郷の連中は化物か?

「けど、すげえ!」

……あ?

ついつい思考に更けてしまったが、唐突にチルノの声が聞こえてきたので我に返った。

その私を見る目は憧れと尊敬に満ち溢れた光で輝いている。

「きょーから、ししょーとよばせてください!」

元気よく叫ぶようにしてそう言うてから、大きく頭を下げるチルノ。

「は？」

いきなし何を言い出すんだこのバカは。

「そういえば、ネギ君は今頃どうしているかな？」

「この時間でしたら、今は京都行きの新幹線に乗っているはずですよ」

「何事もなければいいんだけどね」

「そうですね」

茶々丸、ルーミア。現実逃避していないでこのバカをどうにかしてくれ。

「その頃ネギは」

「待てーっ!」

まさか新幹線の中で沢山の力エルに埋もれた上、ツバメに封書を奪われるなんて!

まあ親書ではないけど……。

親書は杖の包帯に巻き込んでいる。いつも手放さない物だからね。ただどお土産リストを無くしたなんて知られたら、エヴァンジェリ

ンさんに怒られるーっ！

というわけで全速疾走中です！こんな所で魔法は使えないし！

それにあれがシキガミっていう使い魔の一種なら、追いかければ術者がいるはず！

逃げられてなければいいけど……っ！？

あそこに居るのは、桜咲刹那さん？

……あれ？その手に持っているのって……奪われたはずの封書だ！
どうして刹那さんが……それに、そこに落ちているの……縦に割れた鳥型の紙？
もしかしてこの紙、さっきのツバメ……？

「コレ、先生の物ですか？」

「あ、ありがとうございます……」

さっと封書を差し出してくれたので、思わず反射的に受け取ってお礼を言う。

「気をつけた方がいいですよ先生……特に向こうについてから」

「はい」

意味ありげな刹那さんの言葉に、僕はただハイと応えるだけ。
そのまま、その場を去って自分の席に戻ろうとする刹那さん。

もし、奪われていたのが封書でなくて新書だったら……。

『兄貴、奴あもしかすると……』

しゅるり、と僕の肩へと登ってきたカモ君が神妙な顔を浮かべている。
けど僕はそんなカモ君に、わかっているよ、と伝えるべく無言で頷く。

……刹那さん、あなたは一体……？

閑話休題

話を聞くと、あの再生能力は本人ですら初めてだったらしい。
妖精とは自然から生まれるとされ、自然がある限りは死ぬことが無い。

例えやられたとしても、しばらく活動できなくなる「一回休み」なる状態になるという。

先ほどの話から考えてみて、恐らくは自然に還り回復しているのだろうな。

中でもチルノは復活が早く力も強いらしいが、気温によって差が激しいらしい。

さらに言えば先ほどのような氷の魔法は幻想郷でも見たことがないそうだ。

冬の妖怪・レティィホワイトロックですらあんな氷は出せないだろうと言う。(冬の妖怪ってなんだ?)

まあつまりは、このチビ二人は私を凄い魔法使いだと分かっただけらしい。

「だからししょー！あたいにさっきのスペルを教えてください！」

「がつつくな近づくな！冷たい冷たい！」

「けちー！教えるーっ！」

「それが師匠に対する態度かーっ！」

本気でくつついてくるな！めちやくちや冷たい！

氷どころかドライアイスかこいつは！？それともさっきの『こおるせかい』のせいか！？

それでもチルノは私を師と崇め、教えを乞うと必死だ。

必死になればなるほど私の距離は縮み、その分だけ冷気が私に襲いかかる……っ！

「ああ、マスターがあんなに慕われているなんて……」

「チルノちゃんがあそこまで必死になるなんて……凄いなあエヴァンジェリンさん」

「二人とも感激しているのかー？」

そんな子供を見守る母親のような優しい視線をこちらに向けるな茶々丸に大妖精！

そしてルーミア！こいつの友達だってんならなんとかしるーっ！

それでも、このバカを含めた妖精コンビに見込みがあるのは確かなんだが。

完

第32話「マクダウェル家の日々・初日その1」（後書き）

徐々に茶々丸がメイド長に似てきました。ロリメイドはロマンです
（キリッ）

というわけでまだ仮契約イベントは出てきません。

ある程度決定いたしましたので、大妖精の名前ともども次回に公表
致します。

期待していた皆様には大変申し訳なく思います。もう少しお待ち下
さい。

単行本の解説にて、「おわるせかい」と「こおるせかい」となるパ
ターンがあるらしいです。

間違っていたらすみません（汗）

だからといって溶けたチルノを「こおるせかい」で冷やすというの
は、さすがエヴァンジェリン、と納得してください（苦笑）

第33話「マクダウェル家の日々・初日その2」(前書き)

今回は他作品ネタが多いです。ですが悔いはありません(笑)
皆様のおかげで30万アクセスを突破することができました。
いつもありがとうございます!これからもよろしく願います。

第33話「マクダウェル家の日々・初日その2」

エヴァンジェリン視点

まずこのバカ妖精について学んだことは一つ。

ゲンコツをすると大人しくなる習性がある。

「いいかお前ら、今後の為にキチンと話を聞いておけよ」

私は手に持っている指揮棒で、後ろにあるホワイトボートをばしばしと叩く。

私の前には、頭にタンコビが生えたバカ妖精と、チルノを心配そうに見つめる大妖精の二人が正座している。

さらにその後ろには茶々丸とルーミアとチャチャゼロ。

チャチャゼロはチルノを見てケケケと面白そうに笑っている。

まるで授業参観みたいだな……。

「まずお前らについてわかったことがある。チルノの再生能力の高さと、氷を吸収する力、そして高熱が弱点、ということだ」

ホワイトボートに描かれた簡素的な絵に注目するよう、指揮棒で叩く。

チルノが氷でパワーアップ絵とチルノが溶ける絵を見て、当の本人はうんうんと頷いた。

……この様子だと、絵ならある程度の理解はできるらしいな。

「そして……大泉は瞬間移動を無詠唱かつ瞬時に行えることだ」

ぱしばしと、大妖精こと大泉が消えて現れる絵を示すように指揮棒で叩く。

当人はといえば、私がつけた彼女の名に気づかず、誰の事？と首を傾げている。

私はそんな彼女　　おおいずみきりか
大泉霧夏おおいずみきりかに視線を向け、こちらに注意を向けさせる。

「……お前の事だ。大いなる泉に霧の夏と書いて、おおいずみきりか大泉霧夏。」

「私の名前……ですか？」

いつの間にか付けられた自分の名にようやく気づいたのか、自身を指差して呆然とする大泉。

まあ無理も無いか。唐突に名前を決められたとなれば、少しなり驚きもするだろう。

「そうだ。大妖精という名ではそのまんま過ぎるからな。せつかくだし名前を考えてやった」

「なぜそのような名前になったのですか？」

いい質問をいいタイミングで聞くな茶々丸。それでこそだ。

こほん、と私はもったいぶるかのように軽く咳き込む。

そして少し間をおいて　　その名の由来を口にする。

「ゼルの伝　から」

というわけで大妖精と聞いたらあのシリーズの大妖精だ。
スーファミからやってはいたが、64で登場したあの姿のインパク
トは凄まじかった。

泉から出てきたし、似合うと思いつきで考えた名だがな。

「ありがとうございます！嬉しいです！」

「お、おお？」

突然飛びかかるようにして感謝の意を伝える大泉に、私は思わず怯
んだ。

そ、そこまで喜ばしいことなのか？

「よかったね〜大ちゃん。ちゃんとしたお名前だね〜」

「おめでと大ちゃん！けど大ちゃんは大ちゃんなんだからね！」

「うん！ありがとうございます！ルミアちゃん！チルノちゃん！」

ルミアとチルノが祝福するほど喜ばしいことだったのか……。
考えてみれば、大妖精という名は上位妖精ゆえの記号化のような名
前だったのだろう。

私が名づけるまでは本当の意味での名前はなかった、というわけか。

思いつきで考えてしまったからか、どこことなく罪悪感が……。

ええい余計なことを考えるな！結果オーライだ！

「とにかく！チルノに大泉！今日からここでビシバシ特訓してやる
から覚悟しておけ！」

「は、はいっ！」

「おー！特訓だーっ！」

こいつら相手にごちゃごちゃ考えても仕方ない！

考えるより慣れるだ！理論で無理そうなら身体で覚えさせるまでよ！

「ルーミア、お前はいつも通りのメニューだが、今日は茶々丸にしごいてもらえ！」

「はい」

「イエス、マスター」

今回はこの妖精コンビの力を測り、それに見合ったメニューを組まなければならん。

しばらくルーミアには基礎トレーニングと基本的な格闘訓練を詰ませておくか。

さて始めるか……ルーミアに続く、魔改造修行を！

まずは氷の妖精チルノ。分かっているのは以下の通り。

バカレンジャーを上回るバカ。1足す1も答えられない程度の知力。実在したのか。

驚くことに、魔法や魔力云々をすつ飛ばして直接冷気を操っている。これも能力故か。

めちゃくちゃ弱い。打たれ弱さはルーミア以下。氷属性なら全て

吸収。

考えるより先に動くタイプ。そのためか直観及び直感がピカイチ。以上を踏まえて、まずは私の氷魔法を真似させてみる。似たようなことができるかできないかによって、氷魔法を教えるに値するかを試す。

「パーフェクトフリーズ！」

そう叫んでチルノは己の弾幕を凍らせ、氷玉の雨あられが飛び交う。だがあちこちに飛び交うだけでの的には一向に当たらない。……むしろ私を狙っていないか？魔法障壁がなかったら直撃だぞ。

「だから違う！こつやるんだ！リク・ラック・ラクラ・ライラック！氷の1矢！」

初歩的だがまずは「魔法の射手」から真似させておこつ。何事も基本からだ。

一筋の氷の魔法弾が飛び、前方にある的に直撃し凍らせる。

「おーっ！」

何度見せてもよく感心しているなこいつは。

だがお前が撃てるようにならなければ意味がないんだぞ？

「さあ、もう一度やってみろ！」

「ラジャー！パーフェクトフリーズ」

「三度目だ馬鹿者　っ！」

真似をしろというのに、なんでその技を露骨に使いたがる！？
こいつって、ホントバカ……！

やっとの思いでチルノが「魔法の射手」に似た攻撃をできるように
なった……。

溶けていたチルノをアイスボックスに閉じ込めた後、私は大泉の下
へ向かう。

大泉で解ったことは以下の通り。

根本的に争いごとを嫌い、苦手としている。性格だから仕方ない
か。

弾幕は撃てるがチルノにもルーミアにも劣っている。ただ魔力を
込めただけの弾同然。

気づいたときから瞬間移動を使ったので、詳しいことは本人にも
わかっていない。

むしろ特徴といえる特徴が瞬間移動ぐらいしか見つからない。

上記からして、こいつを戦闘員に育て上げるのは無理だ。

こいつは性格的にサポートに徹した方がよさそうだ。

なので、こいつには戦闘を回避する手段や支援する手段を教えてや
る。

その為にも、瞬間移動の特化は今後役に立つはず。

大泉が今やっていることは、反復横飛びならぬ反復瞬間移動^{テレポート}。

10mの距離を行ったりきたりする単調な特訓だが、効果は目に見
えている。

徐々に大泉の瞬間移動^{テレポート}にタイムラグが生じたからだ。

「そこまでっ！」

私が叫ぶと、大泉が私の目の前に姿を現してその場で座りだす。呼吸が荒く体中が汗まみれだが、結果を知りたいからか私を見続ける大泉の視線は熱い。

私は手に持っているストップウォッチと表を見比べて検証する。

「……瞬間移動テレポートに2秒以上のタイムラグが出てきたぞ！休憩したら次は200セットだ！」

「は、はい！」

力強く返事をする大泉。その言葉と目には強くなりたいたいという意志が物語る。

……うむ。気の弱い妖精だとばかり思っていたが、悪くない。

次は私とチャチャゼロの二人がかりによる模擬戦。

ただしチルノは武器を持たせぬばかりか、反撃もさせない。

その上、私とチャチャゼロの攻撃は、休まず隙を与えずの素早い連続攻撃。

この動きについてこれるように鍛えるのがこの模擬戦の目的だ。

「動きが鈍くなっているぞ！きりきり避け続けて、直感を磨け！」

『ケケケ！イイ加減二斬ラレチマエヨ！』

「あたい頑張るって、ぎゃーっ！」

ピチューン！

とうとうチルノがチャチャゼロに斬られたか。
だがチルノは弾けるように消えただけ。冷やせば元に戻る。お手軽
だな。

「ヤツパ斬り甲斐ガネエナア。ツマンネエ」

「17分……新記録とはいえまだ短いな。……チャチャゼロ！こいつにドライアイスをぶっかけてやれ！」

「アイサー、ゴ主人」

後で新作のB級ホラー映画をレンタルしてきてやるから、キリキリ働けチャチャゼロ。

「では『治癒魔法の書』763ページ、第6章9節を開け」

「はい！」

熱心でよろしい。

大泉はチルノやルーミアと違って頭が良い。

魔法の概念を教えてやった所、ある程度には理解できたほどだ。

ホワイトボードと指揮棒とテキスト、それに二人分の眼鏡を用意してお勉強。

本人も魔法を覚えようと必死で勉学に励んでいる。

だがな……本が逆さまだ。

茶々丸とルーミアは基礎トレーニングと模擬戦の繰り返し。

ルーミアは魔法と身体能力をひたすら鍛えるだけの、基礎ステータス向上型。

基本スペックは妖精コンビより高いからこそそのトレーニングメニューだ。

さて、せっかくのダイオラマ球だ。

存分にこいつらを鍛えあげてやらんとな……！

くその頃ネギはく

「大変ですく！」

新田先生か瀬流彦先生かしずな先生は居ませんかく！？

凄く大変なんですく！どこですかく！？

「な、何事ですかネギ先生……？」

あ、三人とも居ました！よかつたく！

こればかりは僕一人じゃ解決できませんく！

「た、大変なんです！音羽の滝の上にお酒が！」

「なんですって!?!？」

事情を知った先生方はすぐに駆けつけてくれました。

音羽の滝の前では、酔いつぶれてしまった僕の生徒さん達やお客さんでいっぱい！

「これは酷い……うっ、酒臭……っ」

「悪戯かなにかでしょうか……?？」

多分、関西呪術協会の嫌がらせなんだろうけど……。

だからといって報告しないわけにはいかない。

悪戯だと言っておけば少しはわかってくれるはず。

「まったくけしからんな!……とにかく連絡を入れてみます。ネギ

先生に瀬流彦先生、すみませんが運んでくれますか?」

「わかりました!」「お願いします新田先生」

新田先生の指示の下、僕と瀬流彦先生は生徒さん達を運び出そうとする。

残りの生徒さん達とはいえばしずな先生に中止にしないでと訴えている。

どうか修学旅行が中止になりませんように……っど。

ちよ、いいんちよさん苦しいです……お、お酒の臭いがっ!

早いことに、既にダイオラマ球で一日経過し、時が経って昼食時。

そろそろ腹が空いてきた頃だ。

茶々丸が昼食を作ると台所へと向かう中、我々はリビングでくつろいでいる。

太陽光と疲労で溶けかけているチルノ（だいぶ慣れたか放っておけるようになった）。

机に置いた本のページを開き、熱心に読んで勉強している大泉。

チャチャゼロと一緒にB級ホラー映画を鑑賞して涎を垂らすルーミア。

平和だな……。

「
そうだ。仮契約バクティオーしよう」

手っ取り早い強化方法をすっかり忘れていた。

「京都にちなんだボケにしては唐突過ぎるか」と

「誰がボケるか！」

まるで突っ込みにきましたと言わんばかりに、昼食の用意を済ました茶々丸が口を挟む。

上手いこと言ったつもりなのになー、なんてこれっぽっちも考えていないからな!?

そこんとこ勘違いするなよ!?!絶対だぞ!?

「マスター、バクティオー仮契約ってなーに?」

映画が終わったからか、食卓へ足を運んだルーミアが私に問いかける。

他の二人も(チルノはいつのまにか復活してた)気になったようで、私に近寄る。

「まあ、それは飯を食ってからやってやるさ」

話すのも面倒だし。今は飯だ、飯。

騒がしい昼食からしばらくして。

私は床に魔方陣を描き、3バカどもを呼び集めた。

「マスター主、これ何?」

「これがバクティオー仮契約の魔方陣だ」

知識では知っていたが、実際するのは初めてだ。

まずはルーミアから。こいつが一番付き合いが長いからな。

私とルーミアが光り輝く魔方陣に足を置くと、下から風のようなものが吹き上げてくる。

うあ……なんか気持ちいいな、これ……。

「なんか変な感じ」

にへへ、と笑うルーミアだが、その顔は赤い。

恐らくこいつも感じているんだろうが……やめろ、そんな顔で私を見つめるな！

「……で？これからどうすんの？」

ふわふわとした中で見つめあう私とルーミア。

……少し待て、心の準備というものがあってだな……！

ええい！考えても仕方ないか！

ついに私は、ルーミアと仮契約を交わす　　口付けで。

「ルーミアさん、今のご感想は？」

「ふあゝすときっすはゝ、過激だったゝかゝ」

サムズアップをして真っ赤でふらふらになっているルーミアに質問するな茶々丸！

……その二人！逃げようとしても無駄だからな！

ていうかバカでも解ったか！己に降りかかる危機が！

結局、残る妖精コンビも（強制的に）仮契約を結んだ。

ちなみに大泉は「チルノちゃんもしたことなかったのに……」と嘆いていた。

……正直すまん……。というかあのバカとするつもりがあったのか？

落ち着いて（落ち込んで）から数時間後。

夕飯も済ませたので、改めて手に持っている仮契約カードバクティオーを見やる。ルーミア達も己のカードを見て、感心を持ったり、顔を紅くしたりしていた。

ちなみに三人にはこれがどういうものなのかは説明済みだ。後は実際に試してみるだけ。

「ではまずは……ルーミア。出してみる。《アダアット》で出せるぞ」

まずはルーミアからだ。

闇を操る妖怪からどのようなアーティファクトが出てくるのか楽しみだ。

「了解なのか」。『アダアット』」

ルーミアの手に持つカードが光輝く。

光が収まってきた頃には、ルーミアの手には細身の剣が持たれていた。

禍々しいオーラを漂わせる、白い刀身の剣と紅い刀身の剣　　双
剣か。

大きさからして軽いであろうその剣を軽く振るうルーミア。やめる
危ない。

『？双剣・夜剣ニユクス&星剣シュテル』

ニユクスは精神……つまり魔力を。シュテルンは生命力……つまり
気を指す。

さしずめ精神と生命を喰らう　　魔力と気を喰らう剣といったと
ころか。

……伝説級の対魔導士殺しのアーティファクトではないか。

「みてみてー、これ合体するよー」

ガシン、と二つの剣が合体し、紅いオーラを漂う一本の大剣になっ
た。

確か紅いオーラはニユクスから出てたな……それが倍増したとい
うことは、魔法吸収に特化したのか？

しかしルーミアはその剣を分解し、かと思えば別の形で双剣を合体
させた。

今度は柄に当たる部分の溝にもう片方の剣先を納めることで、鎌の
ような形状になる。

すると先ほどとは逆に、その鎌から気を吸収する黒いオーラがあふ
れ出てきた。

なるほど、双剣を合体させることによって、吸収を特化することが
できるのか。

それにしても……。

吸収……大剣と鎌に変形……そして闇を喰らう……

まさかこれは！

「……ブラッド ヅジ！」

「ゲームネタが多めですね」

本当に多いな。

ちなみに私の主な使用キャラだったりする。あれはハマる。

ただでさえ心の闇を喰らい力とする能力があるのに、加えて他の吸収攻撃……。

ある意味チートキャラではないか。今後の伸びに期待がかかるな。

続いて大泉のアーティファクトだが……なんだこれは？

出てきたのは、中央に宝玉が埋め込まれた、逆三角形の小さな緑色の盾が四つ。

それらが大泉の周りを直角に飛びまわっている。

このアーティファクトの名は『言霊の妖精』。

……名前だけでは判断がつかんな。

にしてもこの動き……

「ファンネ でしょうか？」

「いや、形状からしてシールドビツ かもしれん」

そういえば茶々丸は逆襲の紅い彗星がお気に入りだったな。それにしても世代が進んでいるな！。

どう考えてもファンネ なのに、あれをファグと呼んだのだぞ？しかし光線が出るわけではなく、それらを自在に操れるということぐらいしか今は解らない。

「ま、後回しでいいだろ」

残りのアーティファクトが早く見たいしな。

……茶々丸に大泉、そんな残念そうな顔をするな。

そしてチルノのアーティファクト。これは解りやすかった。

「どう見てもスイカバー（だな）（ですね）」

思わず茶々丸と声がハモってしまった。

そうか、茶々丸にもどや顔のチルノが持っているものが同じに見えるか。

見事なまでに巨大なスイカバーだ。一応刃があるのが幸いか。

ただ、このアーティファクトを出した途端、周囲が凍りつくぐらいに寒くなった。

『氷刃 ヒョウジン 雷牙姫 ヒョウガキ』これがこいつのアーティファクトの名だ。

名からして、このスイカバーソードは敵を凍て付かせる能力があるのだろう。

詳しい能力はわからないが、これほどわかりやすいアーティファクトはなかるう。

何故スイカバーなのかはわからんが……きつとこいつの精神年齢に
合わせているんだろう。

まだまだ謎が多いが……そこはまた明日にでも試してみるか。

「というわけだ。また明日だな。……茶々丸、飯だ飯」

お楽しみは明日に取っておいた方がいいだろう。

チビ共も了承したところで、夕飯にしよう。

ところが茶々丸は私の前で立ち止まると、一通の手紙を取り出して
私に見せ付けた。

「ところでマスター、手紙が届いています」

……人が飯だつて言っているのに何を暢気な……。

「そんなことは後回しでいいから……。」

「八雲紫様からで」

私は有無を言わず手紙を茶々丸から奪い取った。

「それはもう神風の如く」

余計なナレーションは要らん。

今はあのババアの手紙を読ませろ。

「エヴァンジェリンへ

明日の午後、あなたに会いたいという者を呼びます。
妖精二人を迎えに行くわけではないので、あしからず。

以上。

八雲紫より」

「その頃京都では」

「……ぐずつ、いい話でした……！」

刹那さんの、西を抜けて裏切り者扱いされてでも木乃香さんを守りたい思い、ぐつときました！

関西呪術協会からのスパイだと目一杯疑っていた自分が恥ずかしいです……！」

「木乃香を嫌っていないってんなら話は早いわ！友達を守るのなら私も協力するわよ！」

明日菜さんは元気付けるようにして刹那さんの背中を叩く。
刹那さんは少しびっくりしているようだけど、嫌じゃなさそうだ。

「僕もできる限りお手伝いします！」

「明日菜さん……ネギ先生……」

「そうと決まったら！」

ドサッ

「うわっ、何コレ！？どこから出したの！？」

「ネギ先生、これは一体……？」

「いやがらせの時には使えなかった、数々の魔法具と防犯グッズです！」

「明日菜さんには、この催涙スプレーとマスク、カラーボールと魔法の粘着玉を！投げるだけでグリズリーですら身動きが取れなくなる強力な粘着液が出ますよ！」

「粘着液？」

「刹那さんにはこれ！簡易捕縛結界です！投げるだけで一時的に敵の動きを封じる結界魔法が発動します！簡易なので持続時間や効力は期待できませんが、あれば便利な品物ですよ！」

「捕縛結界……？あの、こついった類の魔法具って相当高いのでは……？」

「それとそれと、お二人にはこの巻物をいくつか持っておいてください！魔法が掛けられていて、書いてある文字を読むだけで魔法が放てる優れ物ですよ！確かこの巻物にはバシール……！」

「それって物凄く高いじゃないですか！と言いますか、一体どこ

で買ったんですか!？」

「あ、そうだ!確か使い魔を通さない結界の陣があっただけだ!式神も対象だったはずでしたから、やってみる価値はあるかも!さっそく書いてきますね!」

「行っちゃった……なんかテレビ通販の売り手みたいね!。熱心だからいいけど……」

「それにしても、些か張り切り過ぎなのでは……?」

『兄貴は根っからの魔法具コレクターでなあ。加えてある一件がきっかけで防犯グッズにも興味が沸いちゃってな。使える機会ができて嬉しいっていう気持ちもあるんだろうさ』

(あ、あぶなー……もう少し入るのが遅おなったらどないなっただことやら……)

完

第33話「マクダウェル家の日々・初日その2」（後書き）

ようやく3バカトリオのアーティファクトと大妖精の名前を公表できました。

にしてもネギまのアーティファクトのルビは何語なのかさっぱりわかりません……誰か教えて！（涙）

ゲームネタや二次創作に走ってしまいました。いかがでしたでしょうか？

大妖精の名前及びアーティファクトの提案者はk u s a r i様と山竜様。

ゼルダの伝説の大妖精にあてはめたことの納得と、大妖精に夏のイメージが

あったので、丁度よく二つを掛け合わせることができました。

まずはルーミアのアーティファクト。

能力は本分にあつた魔力吸収と気吸収。

分離と合体のアイディアは私の後付けです。蛇足のようでしたらす

みません（汗）

バクティオ

私的設定の仮契約は、使ってみないと解らない設定になっています。なのでわかりやすいイメージをあてはめる必要があります、合体と他作品ネタに走りました。

イメージを掴めるようになったら良いなと思っています。

続いて大妖精のアーティファクト。

現在は表明していませんが、能力は思念操作と言霊による能力付加。次回以降に公開します。

どうしても大妖精が戦う姿がイメージできず、初期設定の銃からシ

ールドビットになりました。

最後にチルノのアーティファクト。能力は氷属性付加。こちらは今も未公開ですが、ありとあらゆる物を凍てつかせる能力があります。

自身を凍てつかせて氷再生を行うなど、使い方次第では凶悪な武器になりそうな予感。

これも後々になって明るみになると思います。

スイカバーになってしまったのは当然の流れだと私は信じています
(キリッ)

明日菜のハマノツルギの件もあったし、最初だったらいいかなあと
思ってたやってしまいました。

だいぶ先になりますが、氷牙姫はあるべき姿に戻りますのでご安心
ください。

kusari様、山竜様。

今後3バカトリオは、このアーティファクトを持って活躍していきます。
ます。

様々な改変や蛇足を加えてしまい申し訳ありません。

そして素晴らしきアイディアをありがとうございます。

さて、今回のあとがきをば。

最近忙しくなってきたのでやつつけ感が否めません。すみません(汗)

それでも詰め込めるだけ詰め込みました。

ようやく決まった育成路線とアーティファクト、そして大妖精の名前。

チルノの名前も決まっていますが、それは次回に公開いたします。
ネギの京都旅行編は、少々強引な気もしますが、少々冷静に対処で

きるように。

そして流れと私的設定で加えてしまった、ネギの重武装化。どこから出したって？秘密です。

だが残念。すでに千草は侵入してしまったとさ。これが今回のオチ。真名弟子入りフラグが出てきましたが、原作通りに進めますのでご安心ください。

活躍が少ないとは思いますが、どうかご了承ください。

そして八雲紫からの訪問の手紙。幻想郷からの訪問者。誰なのかは秘密です。

これこそが、楽しみであり早く書きたいと思う展開の一つです。

色々入り乱れてしまいましたがこの辺で。

お付き合いして頂きありがとうございます。

読者アンケート・其ノ三(前書き)

このお話は本編とまったく関係ございません。
どうかお付き合いをお願いいたします。

読者アンケート・其ノ三

ルミア・チルノ・大妖精「祝！魔法先生ネギま！東方英雄録
『略して『ネギろく』お気に入り件数300件突破〜！』

エヴァ「一斉に言うなうるさい！」

茶々丸「早い物で、もう300件を突破しましたね」

ルミア「それだけじゃないよ〜？ついにアクセス数も総計三十万に達したんだよね〜」

大妖精「それに私の名前や私達のアーティファクトのアイデアを提供してくれる方も出てきて、この作品がいかに読者の皆様によって支えられているのかを改めて実感したそうです」

チルノ「1日1回はアクセス数を見ているぐらいだっつて！」

ルミア「というわけで、いつもネギろくを読んでくれてありがとうございます〜」

エヴァ「今回も例によってお気に入り件数突破記念小説のアンケートを取るうと思うのだが……今回は特別だ」

茶々丸「丁度よいので、今回は三十万アクセス記念小説のアンケートも実施するようです」

ルミア「内容はそれぞれ以下の通りだよ〜」

お気に入り件数記念小説アンケート」 が幻想入り」

アクセス件数記念小説アンケート」 が麻帆良入り」

大妖精「 は麻帆良学園のキャラを、 は東方のキャラを記入して、感想にて投票してください。お一人様につきそれぞれ一名までとなっております。締切は12月20日です」

チルノ「年末年始は忙しくなるし、二つ書くと時間がかかるから、投稿は1月以降で考えてるって！」

エヴァ「その頃には京都旅行編が終わりに近づくだらうと想定しているから、麻帆良入りと幻想入りを同時にするそうだ」

茶々丸「チルノさんも仰っていた通り、作者は年末年始に忙しくなりそうなので、もしかすると投稿が遅れるかもしれせん。前もって説明は致しますが、念のため公表いたします」

ルミア「ただでさえ最近は執筆が遅れているしね。頑張っているけど」

大妖精「じゃあ、そろそろこの辺で終わりにしましょうか？」

茶々丸「そうですね。その他分からないことや聞きたいことがありますしたらご連絡ください」

エヴァ「今度こそきちんと締めるぞ。では……」

3 バカトリオ「「「今後も魔法先生ネギま！ 東方英雄録 をどう
かよろしくお願いしまーす！」「」」

茶々丸「よく言えました」

エヴァ「だから三人一斉に言っな！うっさい！」

第34話「マクダウェル家の日々・二日目その1」(前書き)

東方の二次創作ネタにアレンジPVネタが混ざります。ご了承ください。

第34話「マクダウェル家の日々・二日目その1」

エヴァンジェリン視点

なんというか、凄まじいな……。

「大丈夫チャチャゼロ？」

「大丈夫ジャーネーヨ」

私の目の前には、アーティファクトを持つルーミアと、ルーミアの目の前で倒れているチャチャゼロがいる。

立ち上がればいいのだが、今のチャチャゼロには手足を動かすことですら困難だから無理だろう。

ルーミアが動けないチャチャゼロを心配していることには違い無い。

チャチャゼロとルーミアは仲がいい。

家ではルーミアの頭にチャチャゼロを乗せているという光景が多いほどだ。

というのも、ホラー映画（特に人が殺されるシーン）が好きという共通点があるおかげだな。

人殺しを好む殺戮人形と人食いを未だに好む妖怪。相性は抜群だ。そうでなくともルーミアはチャチャマルを人形としても個人としても扱い、親しみを覚えている。

チャチャゼロはそんなルーミアの扱い方が嫌いではなく、むしろルーミアの無邪気ながらも残酷な一面が気に入っている。

閑話休題

そんな二人だが、稽古は別。
せつかくルーミアが剣を手に入れたので、チャチャゼロが自慢のナイフで相手をしてやることになった。
もちろんアーティファクトの性能を確かめることもあり、今朝早くからさつそく家の前で稽古を始めた。

始めたのはいいが……そこから先は続かなかった。

なんてことはない。

チャチャゼロのナイフを、反射的にルーミアが己のアーティファクト（大剣モード）で防いだだけだ。

ただそれだけで、チャチャゼロが力無く地面に平伏してしまったのだ。

なんてことはない。

これが「呑双剣 夜剣ニユクス&星剣シュテル」……いや、「闇夜剣ニユクス・アバター」の能力なのだから。

「オレノ魔力ヲ根コソギ奪イヤガツテ。マトモニ動力セネーゾ」

「そんなこと言われても」

口を動かし手を動かすだけの魔力はあるようだ。

チャチャゼロの口は遠慮なく毒を吐き、手はルーミアの頭をポカポカと叩く。

対してルーミアはそんなチャチャゼロを気遣って、頭の上に乗せて機嫌直してとあやしている。（ダメージは無い）

己のアーティファクトを合体させた大剣を傍に置いて。

傍から見ている私の視線にはほのぼのとした光景が、頭の中では先ほどの光景がリフレインされる。

チャチャゼロを動かしている魔力は、昨夜ダイオラマ球で充電（充電力？）した私の魔力が使われている。

糸で操作する操り人形なら、人形の強度維持と操り糸に魔力を込めるだけでいい。

だがチャチャゼロのような完全自立型となれば、己の意思を身体で表現するだけの繊細かつかなりの魔力を込めなければならぬ。

さらにマナの無いダイオラマ球外となれば、それを数日維持する為に、より多くの魔力をその人形の身体に定着させなければならぬ。

ようやくするなら、チャチャゼロの身体は骨であり、血肉は魔力。

それだけチャチャゼロに宿している魔力容量は多く割り振っているということだ。

それをルーミアは奪った。

魔力容量としては中位魔法程度のものとはいえ、人形の身体に定着させた魔力の大半を呆気なく奪ったのだ。

いくら魔力吸収に特化したモードとはいえ、チャチャゼロの攻撃を防いだけで吸収するとは……。

この調子だと気吸収特化モードの鎌形態 「星天鎌シュテル・アバター」も同等の吸収率を誇るな……。

……思わず冷や汗が出てしまったぞ。

間接的にも中位魔法クラスの魔力を吸収できるとか、反則を超えてチートだ……。

「おいルーミア、気分はどうだ？」

私はチャチャゼロに髪を引っ張られ軽く涙目になっているルーミアに声を掛ける。

いくら能力で吸い取ったとはいえ、元は他人の魔力だ。

なんらかの違和感、あるいは変化があるのではないかと予想していたのだが……。

「なんか元気が湧いてきた」

チャチャゼロを神輿のように頭の上で揺らしながら、ルーミアは上機嫌で言う。

この様子で見ると、むしろメリツトのみか。

……いや、それを聞いたことで、おおよそだが仮説が立てた。

ルーミアはこちらに来て、私が相手の心の闇を食らう『闇喰い』を覚えさせた。

これもいわば吸収系の魔法。私が諦めた禁忌の技法『太陰道』の片割れみたいなものだ。

だがこいつは違う。

人を食らい己の糧とする妖怪……いわば元から吸収系能力を備えた、私とはまったく違う「化物」だ。

だからこそ他人の魔力を吸収する力という異質の能力を、「元気が湧いてきた」程度で捉えられた。

そこへさらにルーミアの『闇を操る程度の能力』が加速させ……闇属性の吸収魔法の効果を高めたとしたら？

すなわち、『闇を操る程度の能力』×（『吸収系体質』+『吸収系の魔法または魔法具』）÷『吸収チート化』の公式が完成する。

「……」

私はそんな公式を頭の中で思い描きながら、無言でチャチャゼロとルーミアを見る。

「テメコノヤロ、柔ラケエホツペシテヤガツテ。斬リタクナルジャネーカ」

「いふあいいふあい」

頭の上のチャチャゼロがルーミアの頬を両手で引っ張って弄んでいる。

ルーミアはチャチャゼロのご機嫌とりもあつてか、涙目になるだけで抵抗できない。

とてもそんなバグドレインキャラには見えんなー。

「ししよー、見ふえ見ふえ！」

ん？この声は　あの馬鹿妖精チルノか。

昨日あれほどアイスバーを啜えながら喋るなど言ったのに、またやっつてやがるのか……。

そう思いながら私はチルノの声がした方角へ振り返り　。

「でっかくなっちゃった！」

古いギャグ（本人は知らないだろうが）を言いながら、そいつは意味も無くポーズをとる。

チルノ
馬鹿妖精が巨大馬鹿妖精になっていた。

身長が3倍……いや、3倍に拡大になったチルノが氷刃を啜えながらドヤ顔で見下している。

……おい、確かチルノは私と背丈がさほど変わらなかったよな？
なんでこんなんでっかくなっているんだ？

「すいませんマスター、チルノさんが美味しそうだとアーティファクトを啜えた途端、みるみるうちに巨大化してしまって……」

「ごめんなさいエヴァンジェリンさん、私が目を離れた際にこんなことに……」

茶々丸、説明ご苦労。

大泉、あれほどチルノが変なことをしないよう見張れと言ったのに、どういうことだこれは。

まあ、二人が持つてきてくれた上着に免じて許してやるとするか。

……うむ。あつたか、あつたか。
さて、現実逃避もこれまでにして、この巨大化チルノをどうにかせんとな……。

恐らくはあの口に啜えられているスイカバー……もとい『氷刃 氷牙姫』の力だろう。

これは単純明快なことに、その刃に触れたものを全て凍て付かせるというもの。

絶対零度に近いそれはあらゆるものを凍らせる。

傍から聞けば強力だろうが……これだけしか特徴が見出せないのだ。ただ凍らせるだけでは芸が無い。今のご時世、氷属性対策なんか山ほどある。

スイカバーになっていたこともあるが、恐らくは奴の精神年齢が影響している。

実戦を経験するなり、成長すればなんらかの変化は見出せるかもしれん。成長すればだが。

だが今になって思い出した。

……こいつも吸収能力持ち、というか冷やせば活性化する体質だった。

『氷刃 氷牙姫』の温度はほぼ絶対零度。私の魔法「こおるせかい」に近い。

チルノがあの手カバーを啜えたことにより、その絶対零度が身体に注がれたのだろう。

冷えに冷えまくった結果、身体の中に冷氣エネルギーが蓄積され……

……行く場の無いそれは『巨大化』という現象を生み出した。

もしかすると、鍛えるなり力の応用を享受してやれば、様々な使い方が見出せるかもしれん。

それはともかく、そんなアーティファクトを食おうとするな。仮にも剣だぞ？

まあいい。今はこの巨大馬鹿妖精チルノをどうにかしなければ。

……まあ冷氣が原因なら、大泉のアーティファクトで対処可能か。

「大泉、チルノを熱して元に戻せ」

「は、はい！アデアット！」

私の命令に反射的に答えつつ、大泉のアーティファクト『言霊の妖精』を発動させる。

カクカクと四つの盾が飛び交い、大泉の意思によりチルノの周辺を囲む。

『言霊の妖精』の能力。それは大泉が発する言葉が発動キーになる特異的な物だ。

「『熱』い！」

大泉が叫ぶと同時に、盾に埋め込まれた宝玉に『熱』の感じが浮かぶ。

浮かび上がった直後、徐々にその盾は熱を帯びて紅くなり、言葉通り『熱』くなった。

「あつ、あつつつ！」

その熱はチルノを怯ませるほど。元々熱がりだから、熱自体は微々たるものだろうが。

盾二つが容赦なくチルノを溶かさんと熱を放ちつつ近寄るが、やはり出力不足だ。

そこへ、残る二つの盾の出番だ。

「『高』！」

またしても大泉は叫ぶ。
残る二つの盾の宝玉に『高』の字が浮かぶが、別段変化が無い。
だが、『言霊の妖精』の真価はここから発揮される。
大泉は意識を集中させる。この二文字から浮かぶ言葉のイメージを鮮明にする為。

チルノが熱する盾二つから逃げようとするが、逃げる方角を残る盾がふさごうとする。
囲まれて戸惑うチルノを他所に、『高』の盾と『熱』の盾が4方位を取り囲む。

「ごめんねチルノちゃん！後で治してあげるからね！」

これから大事な友人にする事を深く謝罪しつつ、大泉は友を止めんと叫ぶ。

二文字からなる言葉と、その言葉でイメージした力を頭に描きながら。

「『高熱』！！！」

『高』の盾と『熱』の盾がいい音を立てて合体する。

そして合体した盾から、先ほどのとは比べ物にならないほどの高熱を発する。

じゅうじゅうと冷氣によって生まれた霧を蒸発させ、空気を歪ませるほどの熱が、チルノの両側から攻め込んでくる。

「あづづづ！あづ、あづーっ！！！」

あまりの高熱に場が歪み、チルノに熱を与えることで、見る見るうちに縮んでいく。

むしろこちらも熱い。家から遠ざかった場所でやって正解だったな。

大泉のアーティファクト『言霊の妖精』は、言葉を力に変えるという品物。

漢字一文字からなる言葉から発動者が連想する物へと変換し、それを実現する。

先ほどのように『熱い』といえは熱を運び、『冷たい』といえは冷気を発する。

逆に訓読みで言えば、言葉を宿すだけのものになる。さっきの『高』がその代表格だ。

そしてその言葉と言葉をつなぎ合わせることでさらなる言葉が生まれ、その力を実行する。

先ほどの『高熱』のように、『治す』と『癒す』と言ってあわせれば『治癒』になり傷を癒す。

言葉の組み合わせ次第ではあらゆる手段を生み出せる、汎用性の高すぎるアーティファクトだ。

ただ、もちろん欠点も存在する。検証済みだ。

その1つが、『死』や『殺』、『滅亡』や『呪殺』など、過激なものや実現不可能な言葉は受け付けないこと。

元々からこのアーティファクトに制限を掛けたのだろう。でなければさすがにヤバイ。

また、大泉の想像力や性格にも反映される。

争いごとや傷つくことを嫌う上、思いやりや優しさもあって、能力に多くの制限が出てきた。

チルノを溶かす高熱も、本人を蒸発させず、周囲の木々を燃やさない程度に温度を設定しているようだ。

だがしかし、最大4文字の漢字がある以上、汎用性の高さは否めない。

大泉はサポート役に徹するがゆえに、このアーティファクトが入れば鬼に金棒、いや妖精に盾か。

こいつも物凄く化ける。なにせ言葉がそのまま力になるんだ。

回復・防御・索敵・強化・妨害・攪乱・転移・浄化……あらゆる方面で役に立つ。

「もー、大ちゃんったら酷いー」

「ごめんねチルノちゃん。けどあのままだとお師匠様の家が駄目になっちゃうよ？」

「あ、そっか！大ちゃんったらあつたまいー！」

駄々こねるチルノを宥める大妖精の姿を見ながら、私は軽く溜息を漏らす。

チルノを中心に集まる連中……心配する茶々丸と楽しそうに笑うルミア&チャチャゼロのコンビ。

そんな和気藹々とした連中を見ると……ばかばかしくなるな。

あれだけ驚異的な力を持っているというのに、こいつらはまんま子供だ。

本人達もその力の素晴らしさを真に理解しておらず、私達に親しく接してくる。

鍛えるには違いないが……こいつらなら下手に奢ることも、他者を見下すようなこともしないだろう。

無論、この私の僕せしである以上、私の育てたいように育てるがな。

むしろこれだけの力をもてあますようではもつたいないではないか。楽しみだなあ……こいつらを鍛え上げ、世にも恐ろしい妖精と妖怪に育て上げるのは……！

「ねえねえ主^{マスター}」

ルーミアが私の注意を払おうと裾を掴んで引つ張る。

「なんであのフラスコの中でやんないの？」

ルーミアの言うフラスコの中とはダイオラマ球の事を指している。確かにあそこなら被害も少ないし、思う存分実戦や模擬戦、アーティファクトの能力開発などできる。

だが今はとある事情によって使えんのだ。その事情とは……。

「マスターは午後に来るといふ客人が楽しみで仕方ないのです。ですからダイオラマ球を使ってしまふと会うまでの時間が増えてしまうので、使いたくないようです」

しばし、空気が固まる。

「……あー」「」

同時に、ポン、と手を叩いて納得して何度も頷く3バカ。

やめる！三人揃ってそんな「わかるわかる、友達が来るのって凄く楽しみだよなー」という顔をして私を見るな！

だから言いたくなかったのに、どうして口に出してしまうんだこのボケロボは！？

……べ、別に楽しみだったからあそこを使わなかったんじゃないか

らな！

断じて、ダイオラマ球は客が来たときに使ってゆっくりしたい、だなんて考えていないからな！？

まったくもって偶然だ！決して昨夜から計画を練っていたわけではない！

「誰が来るんだろうねー？」

「エヴァンジェリンさんに会いたい人って誰かな……？」

「お客さまが来るときは静かにしなさいって、けーねんせーが言ってた！あたいえらい！」

こらその3バカ！私の訴えを無視してお喋りなんかするな！

茶々丸にチャチャゼロ！お前らも何か言ってる……。

「では私はお茶菓子の買出しに行ってくるので、皆さんお留守番をお願いしますね」

「ツイデニ酒ノツマミモ買ッテキテクレ」

「あたいアイスがいいー！」「ルーミアはクッキー」「あ、あの、できればキャンディーも買ってきてくれますか……？」

「わかりました。この茶々丸、選別に選別を重ねて良い物を選んできます」

そこでどうして真剣な顔で頷く！？お前絶対にこいつらに甘くなっているだろ！？

断じて認めん！お前の主はこの私だ！私の命令が第一なんだーっ！！

ルーミア視点

ひゅんひゅんひゅん

手を交差させてそれを回す。気分はバトンを振り回す感じ。とつても軽くて、けれどもきちんとした重さが手に伝わり、どう回せば効率なのか自然と頭に浮かんで手を動かす。

今ルーミアが回しているのは、ルーミアのアーティファクトを鎌に変形させたもの。

鎌に変形させると手に持つ方の剣の刃が消えるみたいで、普通に手に持てる。

そうでもないよ、こうして円を描くように鎌を両手で回せないよね。ひゅんひゅん風を切って回し、右から左へと円を描いたまま移動させる。

最後に空中に放り投げ 両手でしっかりとキャッチ！

パチパチパチパチ

「素晴らしいですルーミアさん。見事な手腕です」

えへへ、茶々丸さんから拍手とお褒めの言葉をもらったよー。

「随分と上達したではないか。少し早すぎるぐらいだ」

やった、主^{マスター}からも褒められたよ！えへんえへん！

「だがそれだけでは大道芸人ぐらいでしかやっていけん。次は実戦だな」

ごもつともー。ただクルクル回しただけだもんね。

それでも主マスター曰く、まるで昔使っていたかのように上達が早いんだって。

ルーミアは全然知らないんだけどねー。寺子屋のお掃除で箒を振り回したぐらいだよ。

ぐーぎゅるるる……。。

「おなかすいたー」

「ではそろそろ昼食にいたしましょう」

あ、もうお昼なんだ？練習頑張ったからかな？気づかなかったー。

チルノちゃんもチャチャゼロを相手に直感を鍛えるトレーニング中。大ちゃんは茶々丸さんのお手伝いの傍らでお勉強。大ちゃんの家事スキルが急上昇なんだよ。

「ほれ、さつさと済ますぞ」

あ、主マスター、待つてよー。

いくら楽しみだからってそんなに急ぐことないんじゃない？

「つつさい」

あ、心を読まれちゃった。主マスターって、実は覚妖怪？

「その頃、京都では」

「私、ネギ先生のこと大好きですーっ!!」

ウェールズのネカネお姉さん。元気でやっていますか？

僕は今、宮崎のどかさんに告白されました。

「え？」

えっと、のどかさん、今なんておっしゃいましたか……？

「あ、いえ、わかっています。突然こんなコト言っても迷惑なのは……」

こんなコト？こんなコトってどんなコトでしたっけ？

「せんせーと生徒ですし……ごめんなさい」

えっと、僕がせんせーで、のどかさんは僕のせーとさんですね、はい。

「し、失礼しますーっ！」

えーっと、失礼って何がですか？

私の目の前には、ソファアの上で寝転がり足をばたつかせているマスターの愛らしい姿があります。

酷く落ち着かず、それでも口は釣りあがっており、午後の1時を過ぎた時計を何度もちらちらと見ています。

そもそも、午後に来るというだけで、明確な来客時間は決まっていないはず。

ですがマスターがそれを理解していないわけがありません。

なので自らわかっていて、そわそわしながら待っているのかもしれませんが。

その姿はいつもの威厳が見えず、漫画で見るような「歳相応の女の子」にしか見えません。

ルーミアさん達は各自自由行動中。

ルーミアさんと姉さんは、先ほど見終えたホラー映画を話題におしやべりを。

大妖精こと霧夏さんはメイド服に着替えてお掃除中。

本来なら私がするべきでしょうが、霧夏さんは自ら掃除がしたいとおっしゃっていたので、無理強いできませんでした。

それを見たチルノさんもはりきって手伝うと宣言。

せっかくなので水色のメイド服に着替えてもらいました。

何故同じサイズが何着も持っているか？はて、なんのことやら。

偶然です。

ああ、不器用ながらも懸命に働くお二人が実に可愛らしい……いつかルーミアさんにも……。

「来たか」

はっ。私は今まで何を？

マスターのお声が聞こえたので何事かと思いましたが、マスターはどこか嬉しそうです。

？生体センサーに反応あり。

何も無いはずのリビングの空間から、突如として現れた空間の裂け目。

目のようなものがいくつも浮かんでいるその裂け目は……以前八雲紫様が表れた空間に酷似しています。

その空間の裂け目が大きく開かれ、そこから一人の少女が現れました。

室内だというのに日傘を指し、薄紫を基調とした、フリルの多いドレス服を着た子です。

いえ……一人ではありませんでした。

その少女の後に続くようにして、銀髪のメイド、水色の長髪の女性が出てきました。

この方々が……八雲紫様のお手紙に書いてあった、マスターに会いたいというお客さまでしょうか？

「慧音先生！」

「レミリアさんこんにちはー」

「あー！いつも門番を虐めてるメイド長！」

？霧夏さん、ルーミアさん、チルノさんのお知り合いですか？

……マスター、なぜそのような顔をしているのです？

そんなマスターの前に立ち止まった少女は、マスターに向かってぺこりと頭を下げて会釈します。

遅れて背後の銀髪のメイドも軽く頭を下げます。

この少女、よく見ると背中に大きな羽がありますね……。

「初めまして。『闇の福音』にして『真祖の吸血鬼』・エヴァンジェリン＝A＝K＝マクダウエル様。お会いできて光栄の極みよ」

少女はマスターを見てとても嬉しそうに笑みを浮かべます。

その仕草に可愛さがあるものの、眼はとても鋭く、どことなく雰囲気
気がマスターに似ています。

「……まさかこんな所で同属に会えるとは思わなかったぞ……『永遠に幼い月』・レミア＝スカーレット」

マスターもとても嬉しそうに、それでいて黒い笑みを浮かべながら、
レミア様を見えています。

対してレミア様は、私の事をご存知で？と嬉しそうに首を傾げて
います。

はて？マスターのお知り合いですか？

ですがレミアさんは初めましてとおっしゃっていました……。

とりあえずお茶のご用意をいたしましょうか。

「教育的・指導……！！！！」

ゴズンッ！！！！

な、なんですかこの振動は！！？

慧音と呼ばれた女性がチルノさんに頭突きをしたただけなのに、なぜこれだけの振動が生じたのですか！？？

計測不能！計測不能！

「……とりあえず落ち着いたら？」

「……ご心配ありがとうございます、メイドさん……」

完

第34話「マクダウェル家の日々・二日目その1」（後書き）

というわけでネギ君が頭の中で描いた曲は

「魔理沙は大変なものを盗んでいきました」

- です。なんでこれをチョイスしたかは謎^{コラ}

また今後こういった音楽ネタが出ると、誰かが受信するかも？（謎

そして能力解明はかなりチートが混ざってきました。

というのも、ルーミアとチルノの能力がアーティファクトの能力を倍加させた感じですよ。

東方における能力とは魔法ではなく自身に宿る力だと解釈しています。

なのでそれは魔法においてもアーティファクトにおいても影響されるのでは？と解釈されました。

チルノはまだ精神年齢の影響もありますが、今後開花する予定です。もちろん各種弱点や欠点などもありますが、強力な力というのは書いてて楽しいですよ（笑）

エヴァンジェリンが徐々に解りやすいツンデレになってきます。

このエヴァンジェリンを皆さんはどう思いますか？

最後に幻想郷からの来訪者。

予想された方も多いと思うレミリア様と咲夜。慧音先生はどうでしたか？

今回のメは慧音先生の教育的指導……という名目の頭突き。威力絶大。

レミリアはともかく、慧音先生の来訪の理由は次回にて。

今回も読んで頂きありがとうございました。

第35話「マクダウェル家の日々・二日目その2」

レミリア視点

あれは、とある酒の席（博霊神社開催）で八雲紫が漏らした言葉だったわ。

『あ、そういえば私、エヴァンジェリンっていう吸血鬼に会ったわ』

信じられなかったけど、八雲紫が言っていたことは本当だったのね。

・・・！

念のために私の能力を使って予兆を感じ取ったからいいものの、相手があの紫だから、能力ですら騙せる嘘をついたのかと思っただわ……。

そもそも大物に出会える予兆を感じ取っただけであって、本人に会えるかなんてことはわからないのだけだ。

けど私の目の前にいるのは、正真正銘の、あの『闇の福音』！

まるでマントのように長い金の髪と、鋭い視線をした少女。

見た目は私と同じ子供だし、魔力こそおかしくも強力な封印されていてわからない。

しかし！私の吸血鬼としての勘が、彼女が確かに同族であると伝えているわ！

そんなマクダウェル様は、蝙蝠の翼を生やした私を目の前にしても平然としている。

その姿からはどことなく貫禄があふれ出ているわ。

……か、カリスマ度なら私が上よね。うん。

ああ……感激極まりないわ……！500年程生きてやっと出会えたなんて……！

（年齢的に）幼少の頃より私が憧れてきた存在が、ついに目の前に……！

膨大な対価を支払った苦勞が一気に拭われるってものよ！

「……時にレミリア＝スカーレット」

おっと、感激で固まっちゃったわ。

子供のように感情を表に出して騒ぐほど私は愚かでないし、子供ではない。

だから表向きは平然と、それでいて優雅に振舞わないと。何より失礼よね。

「呼び捨てにしてかまいませんわ、マクダウエル様」

階級的にはあちらが上なのだし、敬語ぐらいは言わないとね。

けど敬語ってなれないのよね……。

「ではレミリア……敬うのは構わないが、敬語は苦手というか嫌いなのでな。慣れない敬語もな」

そういうとマクダウエルさ……いや、エヴァンジェリンが冷ややかに笑う。

う……さすがに駄目だったかしら？……咲夜！今小さくだけけど笑ったでしょ！？

「こほん……失礼、それでなにかしら？エヴァンジェリン」

こういう時は咳き込んで誤魔化して話を戻すのに限るわ……。カリスマを維持しないと……。

「あいつはなんだ」

エヴァンジェリンは私の後方を指差して問いかけてくる。

振り向いて見たくはなかったのだけど……仕方ないので私は後ろを振り向く。

そしてしばし目の前の光景を見てから……私は口に出す。

「慧音よ。3バカの先生」

「そうか」

解っている答えを合えて聞くだなんて変わっているわね。

それとも軽い現実逃避かしら？それなら気持ちはわからなくもないわ。

「ほんつとくに心配したんだからな……！無事でよかった……っ！」

涙を流しながら、そのバカのようにでかくて丸い胸部にチビトリオを力いっぱい抱きしめる慧音。

けど慧音、むしろ自分の教え子をその無駄にでかくて柔らかい胸部で窒息させているわよ？

チルノにいたっては、お仕置き頭突きのダメージが酷くて気絶しているし。

残る二人は無駄に手足をあがいて抵抗するけど、どうやら無駄みたい。

そんな光景を見て、思わず私……『達』は己の胸を確かめるようにして見て触る。
達が誰なのかは、あえて言わないでおくわ……。彼女達の名誉の為にもね。

「胸なんてもん、あつても邪魔なだけよー？もー肩こりばかりで……」

「「「うっさい！！」」」

いつ出てきたのかは知らないけど、それはむしろ勝者の言う台詞よ八雲紫！！

エヴァンジェリン視点

くそ……途端にペースが崩れてしまった……。

まあいい。ようやくこの頭突き女……慧音と呼ばれていた女が落ちて着いた頃だ。

立ち話もなんですからと茶々丸が席に着くように指示し、全員が席に腰掛けた。

私、3バカ、レミリア、八雲紫、そして慧音の7人。従者二人は私の隣で立っている。

一気に大所帯となったところで、慧音は私に向かって軽く頭を下げる。

「失礼した。この子達がいると聞いて無理にでも連れて行ってもらったんだ」

謝罪と説明を口にすると、慧音は頭を上げて私と視線を合わせる。

「改めて名乗ろう。私の名は上白沢慧音。幻想郷の人里で寺子屋の先生をしている」

「エヴァンジェリンだ。吸血鬼だが、現在は事情によりここで暮らしている」

……この女が、ルーミアが話していた「けーねせんせー」とやらか。聞いた話では、とても優しい先生だが、怒るととても怖いという。頭突きが凄いと聞いていたが……聞いていた以上の破壊力だったな……。

先ほどの頭突き、もしかするとジャック＝ラカンの拳にも匹敵するやもしれん。

こちらの視線が気になるのか首を傾げている彼女からは、そんな恐ろしさの欠片も見受けられない。八雲といいレミリアといい、つくづく幻想郷つてのはカオスな所だな……。

まあいい。話を進めるとしよう。この女が来た理由を聞いた限りで考えられるのは……。

「こいつらを引き取りに来たのか？」

「最初はそのつもりだったんだが、どうやらその必要はないみたいだ」

は？そのつもりだったはずなのに、何故その必要がないといえる？

3 バカも菓子を食べて大人しくしていたが、こちらの視線が気になつたのか首を傾げている。

「それと、あなたに話を……いや、お礼を言いに来た」

そういつと慧音はおもむろに席を立つた。

私に礼？こいつが私に礼を言うことなんて一つもありはしないはずだぞ？

一体何を

「ルーミアを、そしてチルノと大妖精を受け入れてくれて、ありがとうございます」

静かに、丁寧に、そして敬意を込めて、慧音は私に向けて深く頭を下げた。

茶々丸視点

「あ……いや、大した事は……ない……」

驚きです。マスターが戸惑っていらっしやいます。

慧音さんのお礼の言葉だけでどうしてそこまで戸惑ってしまうのでしょうか？

ルーミアさん達から聞けば、慧音さんは自分達にとって先生であり

母のような存在であるそうです。
教師として、そしてこの子達を世話する者として、礼を述べるのは間違っではいけません。

「……さーて、私はそろそろ帰ろうかしら。夕方頃に迎えにいけばいいかしら？」

あ、八雲様、いらっしやっていたのですね。すっかり忘れていました。

唐突にそう言うや否や、やれやれと溜息をついて背伸びをして、再び空間を裂きました。

恐らくあれは、帰路に着く為の空間でしょうか？不気味な空間ですね。

それをマスターが、いやまて、と声を掛けて止めます。

「1時間後に来てくれれば問題ない。」

何事かと振り返った八雲様に向かって、マスターは言います。
しかし、それを由としない者がいるそうです。

「ちよっ……なんで？なんでそんなに短いの？」

そのお言葉にわかりやすいほどの反応を示したのはレミリア様。

あ、まだいらっしやっていたのですね。慧音さんにはかり気を取られてしまいました。

よく見るとその目には涙がにじんでおり、ずんずんとマスターに詰め寄っていきます。

「そりゃあ私は興奮の余りアポも相談もなしに着ちゃったからそちらの都合なんて考えもしていなかったわ。そちらにも何か予定はあ

るとは思っけど、まだお互いの詳細ですら明らかにしていないじゃない？ 私達はきつと解り合えるはずよ！ だからせめて後もう1時間……いえ30分ぐらいの猶予ぐらいはあってもいいでしょ？ ねっ、でしょ？ でしょ！？」

言葉を進めることに鬼気迫るようにしてマスターに詰め寄るレミリアさん。

しかし涙を浮かべながら真剣に訴えるレミリアさんに恐れをなしたのか、マスターが一步退きます。

やがてその追いかけっこはマスターを壁際に追い込み、顔と顔の距離が限りなく0になります。

こちらからは見えませんが、マスターの目にはレミリアさんの目がどのように見えるのでしょうか？

念のために録画しておきましょう。美しい光景です。

「お嬢様、少々落ち着いてください。エヴァンジェリン様は何か考えがあるのでは？」

そんな錯乱状態のレミリアさんを、彼女の従者にしてメイド長・十六夜咲夜さんが止めに入ります。

それが効いたのか、浅い呼吸を繰り返しながらレミリアさんがこちらを振り向きます。

あまりの光景に固まってしまった私達を見渡してから、ゆっくりとマスターに視線を戻します。

「え……？」

本当なの？と言わんばかりのレミリアさんの呆然とした表情。

マスターは身の安全を確かめたのかほっと息を零すと、呼吸を整え

て落ち着きを取り戻します。

「……そのメイドの言うとおりだ。いくら私でも、理由も無く来客を拒むようなことはせん」

むしろマスターは来客を心から喜んでいましたしね。

それを聞いたレミリアさんは、力が抜けたように方を落とし溜息を零します。

心の底から安堵しているようですね。

「いくら憧れのエヴァンジェリン様に会えて嬉しいからといって取り乱さないでください。いくらなんでもカリスマをブレイクしすぎです」

起立の姿勢と冷淡とした表情を崩さないまま、咲夜さんは子供を躡ける母のようにレミリアさんに告げます。

何故かわかりませんが、頬の赤い咲夜さんを見ると、他人とは思えない気持ちになります。

「余計なこと言わないでよ咲夜ーっ!」

己の失態を明らかにしないでと泣き叫ぶレミリアさん。

これも録画しておきましょう。実に可愛らしい光景です。ですが大丈夫ですよ、レミリアさん。

「ご安心ください。実はマスターもこの日の為に貴重な別荘を使うなど、来客が楽しみで仕方なかったようです」

なのでマスターの心情はレミリアさんと同じです。

「貴様も余計なことを言うなーっ!!」

おっと、危ないですよマスター。

いくら私でも、顔面に向かって飛び膝蹴りなどされてしまったては壊れてしまいます。

マスターは綺麗に着地。……ですが攻撃してくる気配は無いようですね。

……咲夜さんがサムズアップしてこちらを見ていたので、同じくサムズアップでお返ししておきましょう。

「じゃあ、私は行くわねえ〜?……ぶくく」

あ、お気をつけ……と言う前に八雲紫様がスキマの奥へ消え、スキマ自体も消えてしまいました。

それにしても何が可笑しいのでしょうか?とても楽しそうに笑みを浮かべていましたが……。

「さ、さて三人とも、せつかくだ。これまでの話を聞かせてもらえないか?」

慧音さんはいえ、マスターとレミリアさんから遠ざけるようにルーミアさん達を呼び止めます。

喋りたいことが一杯あるのか、ルーミアさん達は喜々として同意し、あれこれと話を始めました。

「……あなた確か、茶々丸さん、だったかしら?紅茶の葉があるんだけどどうかしら?」

咲夜さんの声がしたので振り返ります。その手にはバケツがもたれています。

紅茶の茶葉の香りが香ばしいですね。マスターが好みそうです。

「ありがとうございます咲夜さん。別荘に入ってからさっそく淹れましょう」

選びに選び抜いて買ってきた茶菓子も持って行きましょう。

「……レミリア」

「何も言わないで」

あ、まだそこにいたのですかマスター。レミリア様。
お二人とも顔が真っ赤ですね？

エヴァンジェリン視点

やっと、本当の意味で落ち着いてきたな……忘れてしまいたい……。

舞台は変わり、ここは『別荘』の内部。

3バカは入るや否や、広大な景色に呆然とする慧音を案内すると言
い出して飛び出ってしまった。

自慢したいことや話したいこともあるのだろう。3バカの顔が活き

活きとしていた。

ま、あれだけはしゃいでは修行に影響が出る。今だけは遊ばせておいてやるか。

……後でたっぷり凝縮させた修行をしてやるがな。

そんなこんなで、私とレミアアの二人は今、席に腰掛けて対面している。

茶々丸と十六夜咲夜というメイドは、私が二人きりになりたいと言って追い出しておいた。

茶菓子の用意と3バカの様子見もあつたので丁度良かった。

「……なるほど。それで幻想郷とやらで身を隠していたか」

「悔しいけど、そうなるわ」

これまでじっくりと話を聞いたことで、このレミアア＝スカーレットの素性がわかった。

レミアア＝スカーレット。

魔法世界ではなく人間世界でその名を広げていたという吸血鬼の名だ。

転々と各地を廻っていた私とは違い、一定の地に留まり、そこから徐々に勢力と領地を広げてきたと聞く。

しかし自らがその地から発つことが無いことから、世間への知名度は低く、しかし一部では有名な話だ。

だが、いつしかその名どころか存在の有無ですらぱったりと途絶えた。一説では滅んだかと思っていたが……。

それが今日で明らかになった。

「ようは人間に追い詰められただけか」

「痛いことを直に言わないでくださる……?」

知ったことか。一定の場所に留まる方が悪い。まとめて襲ってきてくださいと言っているようなもんだ。

だが世間から急にその存在が消えた疑問が解けた。

あの紫の婆の力なら、姿どころか拠点地そのものを転送しかねんからな……。

「それにしても、またダイオラマ球で過ごせるなんて思いもしなかったわ。懐かしいわね」

諦めたように溜息を零すと、ぐるりと周囲を見渡してレミリアは言う。

「なんだ、持っていたのか?」

「ええ。……といっても、我が友・パチュリー＝ノーレッジの失せ物だけだね」

「……パチュリー＝ノーレッジだと?」

「やはりご存知のようね」

何気にとんでもない名を口にしたことなど気にせず、レミリアはくすりと笑う。

私はその名をキーワードに脳内の記憶と知識をかき集める。

「パチユリー＝ノーレッジ」といって、賢者の石を生み出し、まったく新しい術式と精霊魔法の運用を開発した、異端の魔法使いだと世間から疎まれ、いつしか姿どころか詳細ですら消えていったというあのパチユリー＝ノーレッジのことか？」

「ええ、そう。私の友人よ」

凄まじい友人を持ったな、レミリア……。

噂には聞いていたが……なるほど、どこへ消えたと思えば吸血鬼の懐に逃げ込んでいたわけか。

その名と姿をくramした時期も、今を考えればレミリアが消えた時期と一致する。

「そのパチユリーなんだけど、あなたのことを話したら、ぜひ会いたいと言っていたわ」

「私にか？」

「なんといつてもあなたは、吸血鬼にして悪の魔法使い。だけどパチユリーからして見れば、あなたは偉大にして伝説の魔法使いですもの。興奮のあまり咳き込んだぐらいよ」

確かに私は、吸血鬼の不死を利用して、永きに渡り様々な魔法に精通してきた。

悪の魔法使いとしての知名度も高かく疎まれ恐れられることが大半だ。

しかし、偉大にして伝説の魔法使いと呼ばれるとは思いつたな……。

しかも相手は、かのパチユリー＝ノーレッジ。有名といえば有名で

はないか。

て、照れてなどいないぞ。

「けど残念ね。その咳き込みのせいで喘息が発作して寝込んでしまったのよ」

肩をすくめてレミリアは言う。確かパチュリー＝ノーレッジは病弱だと聞いていた。

「それは……確かに残念だな」

是非とも語り合ってみたいものだ。賢者の石の精錬法や、精霊魔法の原理について。

「むきゆうむきゆう言いながら泣いていたあの顔が忘れられないわ……」

嘆いているようだがなレミリア。顔が黒い笑みを浮かべているぞ。人が悪いではないか……ククク、悪い子め。

ふと気づけば、レミリアは笑っていた。嬉しそうに。

「こうしてあなたと出会えたことが喜ばしいわ。エヴァンジェリン」

先ほどの黒い笑みや、当初にあった威厳がまったく見受けられないほどの柔らかな笑み。

他人を許したからこそ見せる、敵意も警戒心も持たぬ笑み。

本来なら受け付けられないようなその甘い笑みを……私は拒むことができなかった。

「ああ、美しい光景ね……今ここにカメラが無いのが口惜しい……
っ！」

「大丈夫です、咲夜さん。現在バッチリ録画中です」

「あ。確かあなたはロボットだったわね。……その映像、後で写真
にできるかしら？」

「高解消度でプリントできます」

「完璧ね」

柱の陰に隠れている従者二人に狙いを定める……！

「氷爆！」

「神槍『スピア・ザ・グングニル』！」

む？今のは高エネルギーの魔力を槍状に変化させ、超高速で投げつけたのか。

凄まじい威力だ。柱どころか壁ですらえぐりつつたぞ。さすがレミア『スカーレット』といったところか。

しかし、ネーミングセンスがいまいちな……。

残念だが、当然のように従者二人は逃げ延びていた。

完

第35話「マクダウェル家の日々・二日目その2」（後書き）

ご予想されていた方も多いと思いますが、お約束通りのカリスマブレイクと忠誠心、でした（笑）

主従そろって似た者同士。特に茶々丸は段々とPA：メイド長似になってきました。

前回のアーティファクトについて補足するつもりだったのですが、予想以上に詰め込んでしまったので補足は次回にいたします。期待していた皆様には申し訳なく思います。

アンケート結果発表・其ノ三(前書き)

このお話は本編とまったく関係ございません。
どうかお付き合いをお願いいたします。

アンケート結果発表・其ノ三

大妖精「大丈夫チルノちゃん？」

チルノ「やつぱりまだ頭痛い……」

ルーミア「というわけで、お気に入り件数100件突破記念小説とアクセス総数30万件突破記念小説のアンケート結果を発表します」

茶々丸「幻想入りリクエストと麻帆良入りリクエストは、それぞれ桜咲刹那さん、東風谷早苗さんです。断トツでした」

エヴァンジェリン「創作意欲は沸いているが、年末年始は忙しくなるらしく、これらの投稿は1月10日になるそうだ」

慧音「さらにいうと、1月5日はもしかすると休むかもしれないということなので、ご了承していただきたい」

エヴァンジェリン「……って、なんで貴様がここにいる!?!」

茶々丸「遅れましたが、今回はゲストとして上白沢慧音さんをおよびしました」

慧音「とっても、今回限りになるが。発表も終わったのでこれきりだ。では私はこれにて」

3 バカ「……またねー」

エヴァンジェリン「一体何がしたかったんだあいつは・・・」

茶々丸「話がそれましたが、アンケートに御協力してくださった皆様、本当にありがとうございます。来年も魔法先生ネギま！ - 東方英雄録 - 略してネギろくをよろしくお願いします」

番外編「原初の闇」（前書き）

皆様、お元気でいらっしやいますでしょうか？

私は先日までひどい風邪をひいてしまいました（汗）

危うく新年を風邪をひいたまままで過ごしてしまう所でした・・・（汗）

皆様も体調管理に気をつけてください。

そんなこともあり、小説をまともに執筆することができました。

期待していた皆様には大変申し訳なく思います。

今回は思いつきと妄想でできた小説で勘弁してください（汗）

なお、この小説は多くの妄想と思いつきが混ざっています。

本編とはまったく関係ございませんので、ご了承ください。

番外編「原初の闇」

忘れてはいけない。忘れられてはならない。闇は闇でしかあらず

「あなたは闇を極めすぎてしまった。人を捨て、種を捨て、生命も精神も蔑にしてまで求めたあなたを、世界は忘れたいのよ。だからあなたはここにいます」

誰もが足りなくなること満たされることも無い。真なる祖先の吸血鬼、暗黒物質^{ダークマター}、影使い、太陰道、闇魔法・・・果てしない数の闇への導き手を我は生みだした

「魔ですら誇りを捨て恐れる闇の底。それは死も地獄も無い禁忌の領域^{タブー}。それに踏み入れたあなたは何でも無い。在り得てはならない忌名^{タブー}」

生命^{シユテル}と精神^{ニユクス}を宿す限り、その領域を導き手は示し、惑わし、力を与え、行く歩を止めはしない

「あなたは封印するわ」

意識の深淵へと閉じ込める我が意志を、我が闇の知恵を、決して

忘れてはならない。忘れるはずがない

「純粹なる闇に限りなく近づいた者。その名の意味を知らば無に還る。・・・原初の闇魔法使い」

「ルーミア」

「今こそ封印せり。されど忘れはしない。」

汝の「」

宵闇を

「なんていう設定がルーミアにあったらかつこいいんだけどね」

「割と本気で信じたぞ私は!？」

「私もパチエモルーミアの過去なんて知らないわ。紫も黙ってるけど、あれは言うのが面倒なだけね」

「ならなぜあのような大ボラを・・・」

「んー、ノリ？」

「真顔であんな話をするのがノリと言えるかーっ!!」

「どしたの主?」
マスター

結局わからず終いではないか!!

終われ

番外編「原初の闇」（後書き）

今年の最後の締めはなんちゃって設定でした。いかがでしたか？

動画サイトのとあるCMを見て妄想してしまったので書いてみた（

苦笑）

色々やり過ぎかな？とも考えましたが、まあこれは妄想ですし（笑）

お付き合いしていただきありがとうございました。

1/10には記念小説も含め必ず投稿できるようにいたします。

それでは皆様、来年もどうかよろしく願います。

外伝第参話「東方刀捧心 妖夢VS刹那」(前書き)

皆さん明けましておめでとございます。

さて、新年早々、これを見て予想外だと思った方もいらっしゃると思います。

今年の1月10日に投稿予定とありましたが、予定より早く記念小説の一つが出来たので、せっかくですので投稿する事に致しました。

残りの記念小説と本編は、後日1月10日に投稿予定です。

というわけで、お気に入り件数記念小説をお楽しみください。

外伝第参話「東方刀捧心 妖夢VS刹那」

刹那視点

戸を開くと、そこには桜吹雪が舞う、桜の木と灯籠が並ぶ光景がありました。

「　っ!？」

落ち着くんだ桜咲刹那。混乱してはいけない。

意識ははつきりしている。手足の感覚もある。夕凧は……大丈夫だ、背負っていた。

問題はこの視線と肌の感覚だ。景色は変わり、夜風の冷たさが肌に染み渡る。

私は確か、お嬢様を取り戻してホテルに戻った後、部屋に入ろうとただけだ。

入ろうと戸を開いた途端……目の前には暗くも美しく、そして静かな異世界が広がっていた。

そのあまりの美しさに見惚れてしまった私は、一瞬だけ身動きがとれなかった。

しかし遅すぎた。私が意識を取り戻し後方へ跳んだ頃には、既に世界が変わっていた。

私はこの異空間に閉じ込められてしまった……のか？

こんな高等な転移術を私は知らない。相当な腕前の陰陽師が敵に居たというのか？

そうだったとしても、まさか敵の術中がここにまで至っていたなんて……！

私は己の甘さに、ぎりり、と顎に力を込める。

これが関西呪術協会の刺客の物だとすれば、敵は必ず術中に潜んでいるはず。

そう考えた私は周囲を見渡すが、延々と続く桜と灯籠、そして石垣の道でしか写らない。

どこだ？どこにいる？この中に必ずいるはずなんだ。

「その者、何をしている？」

「!?!?」

背後からの声に、私は咄嗟に夕凧を手に持ち、振り返ると同時に刃を向ける！

ガキインツ！

（受け止められたっ!?!）

手に残るは、つい先ほどの月詠の斬り合いで覚えたままの、刃と刃がぶつかり合う感覚。

目に見えるのは、短く切りそろえた銀の髪に、あどけなくも鋭い銀の瞳、そして立派な太刀。

私とさほど変わらない背丈の、緑を基調とした服に身を包んだ少女。その少女が、しかと己の太刀を握り締め、私の刃を受け止めていた。

なにか隣でふよふよと白いのが浮いているが……気にしないでお
こう。

「いきなり刀を向けるとは何事だ！」

「その刀で何をするつもりだった！」

ほぼ条件反射の返答だった。それだけ私には余裕が無かったからだ。
力の拮抗は すなわち腕力はほぼ互角。ギリギリと刃と刃が擦れ
合う音が耳障りだ。

やがてその拮抗は、銀髪の少女のこり押しで終わりを告げる。
押すのなら引く。私は身を引き、その刃の押しを利用して軽く跳ん
で距離を取る。

距離を取ったことでお互いに睨み合い、刀を構える。

私は刀を引いて刃身を向ける守りの構えを、少女は切っ先をこちら
に向けた攻めの構えを取って。

少女は己の切っ先に負けずとも劣らぬ鋭い眼差しで、私を睨みつけ
る。

「ここは我が主、西行寺幽々子様が住まいし白玉楼！ここで刀を振
るう貴様を敵と見なし、お相手仕る！」

西行寺幽々子？白玉楼？

少女は堂々とした声で私に忠告まがいの言葉を並べるが……。
幽々子とやらがこの結界の主で、白玉楼がこの結界の名なのだろう
か？

だがそれにしてもこの少女は……私が敵だと解っていない？

この結界に居る者ならば、敵だと解っているはず。それが解っていないようだ。

「ええい何をぼつつとしてている!?!」

……はっ!?!

「す、すみません、つい考え事を……」

ああもうなんで私は敵かもしれない相手に謝っているんだ!

け、けど律儀に声を掛けてくれたわけだし……。

「刀と刀を向けているのに考え事とは、よほど余裕があると見受ける。ならば遠慮は無用。切り捨てる!」

「ちょ、ちょっと待ってください! 気に障ったのなら謝りますから!」

少女を怒らせてしまった! 私にだって解るぐらいに怒っている!

その切羽詰まった怒りに私は思わず引き腰になって落ち着くよう言うが……。

「問答無用! 斬れば解る事だ!」

「なんか理不尽だーっ!?!」

思わず私は叫んでしまったが、相手はとても速く、あっと言つ間に距離を縮めてきた。

月詠といい、なんでこんなにがつついてくる相手ばかりなんだ!?!

「この楼観剣に斬れぬものなど、あんまり無い！」

微妙ですねっ！？

妖夢視点

幽々子様の勘は見事の中なさった。

いつものようにぼよんとした幽々子様から「誰か来ているみたいね」と言っつて私を使いには走らせた。

そして向かってみれば、白玉楼に続く石垣の道中で刀を持って周囲を警戒する少女が居た。

明らかに怪しいと思いつつも声を掛けた途端、少女の刃が襲い掛かってきた。

そこから先はこの少女を侵入者と認め、刃を向けることになった。

誰だか解らないが、とりあえず斬り合ってみれば解る。

皆はそれを聞いて辻斬りだ辻斬りだというが……これは教えであつて、決して辻斬りなどではない。

その証拠に、刀を通じてこの少女の事が解つてきた。

少女のとても軽快な動きで刀を振るい、手や足を挟みこんだ技巧にも長けている。

ただでさえ速いのに、流れるような動きで、下手に手を休めればたちどころに刀の奔流に吞まれてしまう。

この動きは明らかに剣士を相手にした動き……どれも稽古相手の亡

霊からは学べない物ばかりだ。

私に似た太刀にも関わらず、その太刀筋は明らかに幼少の頃より鍛えられたもの。

何かを成し遂げる為に込められた、他人とは思えない何かを感じる

……。

その目には私などではなく、もっと大切な何かを見据えているようにも見える。

（なんと美しい太刀筋……刹那に舞い散る桜の花びらのような……）

不器用な私には無い、流れるように美しく、大切な物が込められた太刀筋。

代々受け継がれた流派をその小さな身体にぎゅっと詰められた経験と意志が、一太刀ごとに伝わってくる。

このような剣士が、幻想郷に居ただなんて……私は感動しています。もう何百、いや何千と打ち合っているというのに、気は高騰するばかり。

（あなたは一体……）

刹那視点

（何者なんですか……？）

踏み込みが甘い、飛び込みすぎ、太刀筋にムラがあるなど、検視相手に初な天が多すぎる。

……もしかこの子は、実戦経験がまるでないのか？

そう思っていたが、斬りあつ内に、徐々にその動き一つ一つに無駄がなくなりつつある。

そしてこの少女は 神鳴流とはまったく違った剣術で圧倒してくる。

そこに妥協や効率などない。刀だけに頼り、刀だけで戦うことを前提とした動き。

斬る。それだけを追求したが故の、力強く、速く、そして鋭い太刀筋。

刀を防ごうとすれば弾かれ、下手に踏み込めば逆に踏み込まれ、掠りですら死のイメージを植えつけられる。

(鋭く、そして重い……刀に込められた物の差がまるで違う)

既に何十……いや何百と受け止めたからこそ解る力量の差。

同じ歳に見えるのに、鍛錬と刀に捧げた物の質と量がまるで違いすぎる。

だからこそ、刀だけに頼り、刀だけで押せる。それがこの少女の強さ。

こんなに真つ直ぐな太刀筋を振るえるあなたが、とても羨ましい……。

「シッ！」

し、しまった！油断した！

いつしか少女は低い姿勢で私に向かって飛びこみ、袈裟向きに刀を振るい上げる。

神鳴流奥義！

『百花繚乱！！』

「のわっ！？」

桜吹雪が舞っていたこともあつてか、視界を遮るような斬撃と花吹雪が私を包む。

相手は咄嗟に刀でいなし、受け止めた力で身を翻して跳び、私と距離を取る。

咄嗟にやったこととはいえ、助かった……。

「貴様！スぺル宣言も無しに発動するとは！」

スぺル宣言？

相手の怒号に近い声が響き渡るが……なんだそれは？

すると途端に相手は思い直すかのように首をかしげ、動きを止める。

「まさか外来者？いや、しかし……」と訳のわからないことをぶつくさと言いだした。

構えたまま少し待ってみると……思いを振るい払うかのように頭を振り出した。

「ええい考えても仕方ない！斬れば解る事だ！」

「だからなんでそう物騒な方へと向けるんですか！？」

つい突っ込んだじゃいましたよ、明日菜さんの影響でしょうか？

「一番手っ取り早いからだ！」

「横着なだけじゃないですか！」

むしろ横暴ですよ！なんですかその拳と拳をぶつけ合って分かり合
う的な発想は！？

「ともかく！そちらがそうくるのなら……」

すつと腰に付けられていた脇指しに片手を伸ばし、それを抜く。

これもとても美しい光沢を放つ刃を持ったもので、僅かな光をも反
射し私の目を照らす。

「それなりの対応をさせて頂く！」

二刀流……！！

二つの刃。刀身の長さは互いに違えど、その姿は奇しくも月詠の姿
と重なる。

それなりの重量があるというのに、刀を構えるその動きにまったく
のブレがなかった。

「参るっ！」

（来るっ！）

私は構える。

そうしなければ、相手の攻めに耐え切らないかもしれないから……！
その予想は的中し、先ほどとは比べ物にならないぐらいの鋭い斬撃
が私を襲った。

右から刃 弾く。

左からも刃 防ぐ。

一瞬だけ距離を取り同時 両方とも防ぐ。されど押される。

これだけだと思いがなけれ。その一つ一つの動作がとてつもなく速く、鋭いものだ。

(月詠のような小回りや流れる動きは無いが、なんとという鋭さと速さ……！)

月詠との戦いをしたからこそわかる、二刀流の動きの違い。

例えるなら月詠は駒。

駒が回転するが如く、絶えず広く細かく斬撃を加えることで自分の優勢を保つ。

この少女は言うならば掘削機^{ドリル}。

その広く速い連撃は、全てただ一点の為に。まさしく掘削機《ドリル》が掘り進むが如く。

幸いなのは片手で持つが故の腕力不足だが……それを差し引いても、押しの強さはより極まっている……！

？動きが止まった？

懐に飛び込んだかと思えば、両足を地に着け、目を閉じ、柄を掴む手に力を込めている。

(何かが来る　　っ！)

私は本能に従った。ここは押すべきでもないし、守るべきでもない。

六道剣！

神鳴流奥義！

三つの刀身が淡く光る。

『一念無量劫！！』

『百列桜斬！！』

放った言葉はほぼ同時。放った斬撃もほぼ同時。

凄まじいまでの高速の斬撃が両者から放たれ、周囲全てを切り刻む。地面を斬り、灯籠を斬り、桜の花びらを斬り、衣服を斬る。そして残る斬撃は互いの斬撃がぶつかり合い、衝撃波を生む。

「がっ！？」

「ぐっ！？」

私達二人は、情けないことに互いの刀がぶつかり合うことで吹き飛んでしまった。

私は桜の木に、相手は灯籠に向けてその背を勢いよくぶつけてしまった。

口の中で鉄の味がし、背中に激痛が走る。

だが立てない程ではない。剣も握れる。

むしろ相手は大丈夫かろうか？

……よかった。向こうも相当なダメージを負ったようだが、生きている。

私も向こうも、刀を握ったまま、ゆっくりと起き上がる。

だが、すぐに戦うような真似はしない。それは向こうも同じ。

休憩のように互いに深呼吸をしつつ、互いの視線がぶつかり合う。

ただ まっすぐに。

「……もしも」

ぼつり、と相手の口が開いた。

真剣な表情で私を見つめ、それでも口元は僅かに笑みを浮かべている。

「もしもあなたが敵でなかったら……心行くまであなたと稽古をつけたかった」

実戦そのものは初めてであったろう少女は、静かにそう言った。

皮肉にも、同じ考えていたことを先に言われてしまった。

本当に甘い。

私なんか言葉に掛ける刺客も、そんな刺客に心を許してしまう自分も。

だから私も、思うがままをぶつけよう。

「私も同じ気持ちです……それでも、私には守るべきものがあります」

それだけを言っつて、私は刀を持つ。

この者相手に躊躇は要らない。全力を尽くす。むしろ、そうしなければ無礼だと思ったから。

そんな私を前に、相手は呆気に取られたように開いていた口を閉じる。

小さく笑って頭を振るった後、短い方の刀を鞘に戻し、持っていた刀を両手で握る。

「それは私も同じだ。私にも守るべきものがある。ならば私も譲れない。全力を持って、あなたを斬る」

真剣に、それでも口元に笑みを浮かべながら、相手は刀を構えた。

…… 本当に私達は似た者同士のようなのだ。

刀に気を込め、バチバチと紫電が身体と刀の上を走り、力となる。

幾多もの何かが向こうの刀に宿り、それが力となって巨大な刃を形成していく。

勝負は、一瞬でつく。

「神鳴流剣士 桜咲刹那おんくさな！参る！」

私は名乗る。それが彼女に向けるべき礼儀だから。

「白玉楼が庭師にして剣術指南役 魂魄妖夢こんぱくようむ！お相手仕る！」

彼女 妖夢が名乗ってくれた。

充滿された紫電と妖気が境界線を作り、押し合う。

そしてその刃を互いに

「はいそこまで」

え？誰ですか？

ふわり

これは……光る、蝶？

幽々子視点

危ない、危ない。

なにも互いに命を掛けることないじゃないの。

死んじゃったら大事な物を守るもなにもないでしょ？

この剣道馬鹿。

私の目の前では、気絶して倒れている剣士が二人。

一人はもちろん私の妖夢。もう一人は知らない子。

私が妖力で作った幻惑の蝶で気絶させたからいいものの。

もしあのままなら二人ともどうなっていたことやら。

それにしても、割と始め辺りからずーっと見ていたけど、凄いものねえ。

おかげで周りの桜も灯籠も石畳の床も切り傷だらけよ。

ま、直すのも掃除するのも妖夢のお仕事だから、別にいいんだけど。

「終わったかしら？」

不意に轟いた声。

聞きなれたその言葉に振り向けば、いつしかそこに我が親友 紫の姿があった。

扇子で口元を隠しているけど……私にはわかるわ。紫は今、面白が

っている。

「終わったわよ。両者引き分けでね」

「じゃあ、賭けは私の勝ちね」

あーあ。賭けに負けちゃった。

妖夢に賭けた、とっておきの饅頭が取られちゃったわね。さてと……よしよし、二人とも生きているわね。

二人ともいい顔して寝ちゃって……。

「……ありがとうね紫。いい練習相手だったわ」

「たまたまいい子を見つけただけよ」

またまたあ、素直じゃないんだから。

ここんとこ妖夢が稽古で息詰まっているようだったから、ダメモトで紫にいい相手が居ないか頼んでみたんだけど、してみるものねえ。

おかげで妖夢は初めて剣士と戦いあい、急成長を遂げることができた。

何事も経験から。剣士を相手にする機会なんて、幻想郷では滅多にないものね。

「さてと、私はこの子を連れて帰るけど、紫はどうする？」

そう紫に言いながら、私は妖夢を背負う。本当に軽い子ねえ。

すると紫はすっと扇子を動かし、さっきまで倒れていた子をスキマに落としてしまう。

「この子を送り返したのを確認した後で行くわ」

だから饅頭は出しておいてね、と言い残して紫はスキマに潜り込む。きつと送り先はあの子の居た場所なんでしょう。

紫はあれでいて意外としっかりしているから、多分大丈夫だとは思うんだけどね。

「さてと……」

とつとと妖夢（ユメ）を白玉楼に送って、お茶の用意をさせてやるつと。

桜咲刹那……か。まさに刹那に咲く桜の如く、ね。

私はひらひらと舞い散る桜吹雪を見てから、妖夢をおんぶして帰るとした。

584

刹那視点

目が覚めると、そこは布団の上でした。

「……？」

私は思わず周りを見渡し、目が慣れてくると、そこにはすやすやと眠っているクラスメートの姿が。

時計を見てみる。……まだ深夜。朝には早い。

いつの間にか夕風は片付けられていたし……汚れがまったくくない。

あれは、全て夢？

いや違う。

身体の節々に響くこの筋肉の痛みは、激しい運動をした証拠。

それに、この浴衣の裾にある切り傷……明らかに刃物で切られた痕だ。

だが仮に斬り合った後だとしても、何故見逃したのだろうか？

念のため、こっそりとお嬢様の様子を確認しに行きましょう。

……それでも、どうしてこんなに落ち着いていられるのだろうか？

何故だかわからないが……あの者はお嬢様を襲う輩ではないとばかり考えてしまう。

そうでもなければ生かす理由も、大騒ぎにならない理由もわからない。

第一……あんなに正々堂々と戦う相手が、そんな真似をするだろうか……？

そんな謎を抱えつつ、私は皆さんを起こさないよう、こっそり部屋を後にする。

魂魄妖夢。ここんぼく
よつむ

また、会えますよね？

完

外伝第参話「東方刀捧心 妖夢VS刹那」(後書き)

しまった、妖夢に「みよん」って言わせてn(略)

書いたら止まらなかった小説の一つ。いかがでしたか？

いいですよ、真っ直ぐな子同士がぶつかり合うのって(笑)

まずは東方キャラの私的設定紹介から。

魂魄妖夢

真っ直ぐで真面目な子。何事も一生懸命で苦勞人。自分、不器用ですから。

西行寺幽々子

ぽよよん系お嬢様。天然のようで割と策士。例に漏れず大食漢。

続いて今回の解説が一つ。

妖夢は弾幕勝負なら慣れていているけど剣士相手はこれが初ではないか？という疑問。

これは妖夢の「剣術を扱う程度の能力」により、常人よりも剣術の覚えがいいという私的設定です。

加えて刹那とは似た者同士ですし、割と早くなれるんじゃないかなーという考えです。

一番の理由は、勢いで剣劇を書いってしまったので、後付けで考えた設定ですが(汗)

作者のワガママをお許してください。

それでも、やはり気持ちのいい勝負にしたいなと思って書きました。お気に召していただけましたか？

そしてさりげないフラグ発言。何のフラグかって？知りませんがな。

まずはこれにて。リクエスト「刹那が白玉楼入り」でした。

では皆様、今年もどうかよろしく願いします。

第36話「マクダウェル家の日々・二日目その3」(前書き)

今回は結構長くなりました。

第36話「マクダウェル家の日々・二日目その3」

エヴァンジェリン視点

バキン、と激しい音を立てて。

『防御』と書かれた『言霊の妖精』は、レミリアの放った『スピア・ザ・グングニル』によって難なく貫かれ、砕け散った。

「やはり駄目か」

「あう……すみません……」

私の発する言葉全てにいちいち反応する必要は無いんだぞ大泉？
どのみち砕けるであろうと予測はしていたしな。

大泉は自らのアーティファクトの無残な姿を見て溜息を零す。

あれは自己再生に時間が掛かるからな。

今回の修行は、せっかくなのでレミリアに協力を願い、アーティファクトの能力検査をより過激に行うことにした。

その協力内容とは、大泉のアーティファクトに強力な攻撃を加えるというシンプルなもの。

最初は面倒だときっぱり断ったレミリアだが（徐々に態度が対等になったな……）、

私がレミリアの実力を知る為でもあると伝えたらあっさり了承した。日が落ちて長くなった柱や建物の影を日よけに、バンバン活躍してもらっている。

その結果、大泉のアーティファクトに新たな弱点や強度が明らかになった。

まずは『言霊の妖精』の能力。

『絶対』という言葉もアウト。これはむしろ当然か。

その他、『完全』、『無敵』、『無双』、『究極』、『無限』、『そして』、『最強』のNGワードに引つ掛かった。

そうだったNGワードは言霊の力が宿せなくなり、使い物にならなくなる。

上記のような言葉が言霊になってしまつたらチートどころか神の領域に入りかねん。

アーティファクトとはいえ、一つたりともそういった「神に近い力」は持てないのだ。

そういった意味では、実験するまでもなかったのかもしれないが、念のためだ。

二つ目に、あのアーティファクトはレミリアのような実力者には通用しない。

レミリアには様々なスペルカードとやらを使つてもらつたが、どれも攻撃力が高く、『魔法の射手』程度なら反射できた『反射』の盾も、そこそこの防御力を持つ『防御』の盾も尽く粉碎した。

さらに『困惑』や『混乱』といった状態異常の妨害系言霊も、私と同様まつたく通じなかつた。

逆の効果とはいえ、支援系言霊も同じく、『解呪』ももちろん無理だつた……。

『解呪』に限つてはかけた相手がナギだつたから仕方がないが。

ちなみに茶々丸とルーミアは程々に、チルノは馬鹿のように効いた。

二つ目においては、大泉の言葉に対する想像力の低さも起因しているのだろう。

だが、そもそも考えてみれば妖精と吸血鬼とでは実力の差があり過ぎる。

大泉の想像力と対象の実力差に応じて、『言霊の妖精』の効力が左右される。

つまりは、使い所を誤ればとことん役に立たなくなる、汎用性の強さ故の危険性。

これは大泉の知力を上げなければ活用は難しいかもしれんな……。

よし、今日から大泉に国語の勉強もさせてやろう。

「ふう」

「ただいま終わりました、マスター」

良い汗をかいて清々しい表情を見せる咲夜と、どこか不安げな茶々丸が戻ってきた。

その後ろには、咲夜の手で引きずられている、ナイフまみれのルーミアとチルノの姿があった。

「チルノちゃん！？ルーミアちゃん!？」

返事が無い。ただの屍のようだ。

大泉が叫ぶようにして駆けつけるが、ピクリとも動かない。

……まあ、血は出ていないし息はあるから、問題なからう。

それでも咲夜はそんな屍モドキ共を放り投げる辺り、割と非情だと思受けられる。

「お疲れ咲夜。二人の相手はどうだったかしら？」

「程よい運動になりましたわ」

まるでジョギングでもしてきたかのように清らしい表情を己の主に
見せる咲夜だった。

レミリアが、せっかくだから相手をしてやれ、と言って軽く引き受
けたとはいえ、ここまでとは……。

時間操作系の魔法や魔法具は貴重品だというのに、このメイドは難
なく発動した。

驚いて何故かとレミリアに問えば、それが彼女の 『時を操る程度
の能力』 の力なのだという。

まさか、たかが十数年しか生きていない女が時間操作能力を宿すと
はな……。

レミリア曰く拾い物で、以来優秀なメイドとして紅魔館には欠かせ
ない人材になっているという。

吸血鬼の館のメイド長というだけあって、ナイフの扱いや戦闘慣れ
は優れたもの。

片や絶対零度の妖精、片や吸収能力持ちの妖怪を相手にしてでも、
彼女は「程よい運動」扱い。

「なんだつまらないの。もう少し粘るかと思っていたのに」

だがそんな従者の能力の高さなど気にもせずに、レミリアは面白く
ないと溜息を零す。

さりげなくだが、この吸血鬼の力と寛大さを見た気がする……。

レミリアの溜息を見て、いえいえ、と首を振って否定の意思を見せ
る咲夜。

「そうはおっしゃいますがお嬢様、あの二人は以前に比べれば確か
に強くなっていますわ」

当然だ。強くなってもらわなくては困るからな。
しかしあいつらにアーティファクトを持たせてでも余裕で勝てる
は……。

中身はアレだが、実力・能力ともに優秀のようだ。しかも時間停止
能力持ち。

正直欲しい。中身はアレだが。

「ケケケ。イイないふ捌キダツタゼ。気二入ツタ」

傍から酒を飲んで観戦していたらしいチャチャゼロがカタカタと陽
気に笑う。

そんなチャチャゼロを視て困ったように笑う。

「人形相手に惚れられても困るのだけど？」

「いいわねえこの人形。アリスじゃ作れないような一品だわ」

そんなチャチャゼロと咲夜のやり取りを見ながら、レミリアは言う。
その目は、新しい玩具を見つけたような好奇心に満ちたものだった。

「ねえ、この子譲ってくれない？」

「だが断る」

「だが遠慮しない」

断った途端にこれだ。まさにドヤ顔。貴様の言っカリスマはどこに
やった、どこに。

「知らぬ間に随分と生意気になったな？……若造風情が」

「こんな時こそ、あなたが全盛期でないのが悔やまれるわ」

ほお……？この私相手に挑発ですら仕掛けてくる余裕があるか。

互いに口元は笑みを浮かべ、しかし目には軽い戦意を込めて、ただ小さく笑い合う。

本当に私が全盛期でないのが残念だ。全盛期なら貴様など軽く捻れるのにな……。

「クククク……」

「フフフフ……」

永らく忘れていた、強者同士の嘲笑。悪くは無いな……。だが覚えとけ。絶対にいつか泣かす。うーうー言わせるまで泣かせる。たる。

「よかったわね、モテモテで」

「ヤナモテカタダゼ」

そこの従者は口を慎め。

もう一人の従者はといえば、チルノ達の看病に必死だった。

「それにしても、凄まじい修行だな。チルノ達が恐れるわけだ」

日が地平線の彼方に落ち、復活したチルノとルーミアがレミアリア相

手に無謀な闘いを挑もうとしていた頃。
おろおろと戸惑うだけの大泉を視界に入れて観戦していた私の背後で、慧音が声をかけてきた。
軽く後ろを振り向いてその姿を確認するが、やがて慧音は私の隣に並ぶ。

「なんだ？私を残虐だと蔑むか？」

視線だけを慧音に向けて私は言うが、慧音の表情は穏やかなものだった。

明らかに虐待とも見える闘いを目の当たりにしても平然としている辺り、この女の芯の強さを物語る。

「いや、傍から見ただけだが、あれは理に適った鍛錬だ。きついで理不尽ではないから、蔑む理由にはなれないよ」

「ほう……」

理に適うというのは、経験を積む意味なのか、それとも心身を鍛える意味なのか。

慧音があいつらを見て何を思っているかは不明だが、少なくとも直情型ではないようだ。

出会った矢先に強烈な頭突きと抱擁をしてきた人物とは思えんな。

「実際、辛いと解っていてもあの3人は止める気配が無い。それだけ、あの3人は修行を得て強くなっていると実感しているということだ。私としても喜ばしい」

「保護者モドキが色々口煩いな。……まあ、いちいち口出ししてこようが、私は私のやり方で勝手にするがな」

いやいや、と慧音は小さく笑いながら首を横に振る。

「申し訳ないが、口煩いのは教師の性でね。ただ、私は一教師として感心しているだけだよ。あの子達 特に剣を振るチルノを見て思ったんだが、あなたは本当に教えるのが上手い。私なんか、チルノに筆は紙に書くものだとわからせるのに1ヶ月以上も頭突いたほどだ」

話を聞く限り、チルノは筆であらゆる所に落書きをしたのだろうな。それだけの馬鹿であることは、これまでのチルノを見てきた者なら容易に考えられる。

その馬鹿相手に一ヶ月以上も物を教え続けたという慧音は、並外れた精神力を感じさせる。

いや、度胸もそれなりになければ、この私相手に平然と話したりしないか。

「……私の手駒を鍛える理由はただ一つ。弱くては手駒として困るからだ」

「手駒、ね」

まるで私が褒められて照れている事を見通しているかのように、慧音はくつくつと笑う。

うぬぼれているわけではないが、表情にも声にも出していないはずだ。

すると慧音は、あろうことか口に指を当てて、声に出して笑い出した。

「なんだ、なにがおかしい？」

私に対する挑戦か？挑戦なのか？喧嘩売っているのなら喜んで買うぞ？

「いや、失礼した。少し思った所があつたのでな」

言葉ではそういふが、慧音は相変わらず笑いを止めようとしないういや、止めようとしているが笑いがこみ上げてくるようで、繭が困つたように歪んでいる。

「不老不死の女の子というものは、皆揃つて捻くれているもんだなあと思つたんだ」

「……………どういうことだ？」

気になる言葉がそこにあつた。

レミリアは長寿とはいへ、不老不死ではない。吸血鬼の弱点で死ぬこともある。

「皆揃つて」ということは、私以外の不老不死を知っている、という意味が捉えられる。

「私には真正正銘の不老不死の友人がいるんだ。それもあなたと似て、捻くれている素直でない女の子の、な」

捻くれている素直でない、は余計だ。それと女の子と言ふな、恥ずかしい。

「……………そいつは吸血鬼か？それとも妖怪か？」

「いや、薬を飲んで不老不死になってしまった人間だよ。昔はかなり荒れていたんだが、今ではだいぶ落ち着いて、仲良くしてもらっているよ」

元人間の不老不死……か。

「さらに言えば、その友人の悪友も不老不死で、その悪友の従者も不老不死だ」

「おいおいおい！？不老不死が3人もいるとかどうなっているんだ！？」

「しかも驚くなかれ、その不老不死はなんと月からきた宇宙人だ」

「嘘付けーっ！！！」

さらりと衝撃的な種族の名を言うな！

月からきた宇宙人だと！？信じられるか！！

「いや？本当だが」

真顔で本当だと言われてしまった……。

真面目な性格のフリーダムタイプとは面倒な奴だな……。

「まああなたが思うところは色々もあるかもしれないが、幻想郷とはそういうところなんだ」

だから諦めてくれ、と言わんばかりに首を振るが、幻想郷で片付けるな教師。

はあ……ただでさえパチュリーの名で驚いているのに、幻想郷には

宇宙人が居ますーなんて言われては啞然としてしまう……。
クラスメートの長谷川千雨の気持ちも、少しだがわかった気がする
……。

そんな肩を落として溜息を吐く私を見て、慧音は続けた。

「いつか幻想郷に来てみるといい。そうすれば、あなたの世界はも
っと広がるはずだ」

慧音は笑った。

歯をむき出しにして、楽しい場所だぞ？と言っているかのように。

私の世界が……か。

茶々丸視点

早いもので、既に別荘にて1日が過ぎてしまい、ついにレミリア様
ご一行が帰ることになりました。

「では、私はこれにて失礼するよ」

先に申し出たのは慧音さんからでした。

寺子屋の子供達の事もあり、元から早めに帰る予定だったそうです。
八雲様が開いたスキマにゆっくりと歩んでいきますが……名残惜し
いです。

「もう少しゆっくりされてはいかがでしょう？お茶もありますの
で……」

「いや、こちらの用事は済んだし、これ以上お邪魔するわけにはいかない。それに、寺子屋の仕事もあるからな」

遠慮がちに手を振るものの、慧音さんにはこやかに笑っていらっしやいます。

そのようなことをおっしゃらず、本当にゆっくりして行って欲しいのですが……。少し話ただけでは、ルーミアさん達が寂しがると思います。

「じゃあねせんせー！」

「またね」

「みすちーとリグルちゃんによろしくお願いします」

元気に手を振るチルノさんとルーミアさん、頭を下げる大妖精さん。そんなにあっさりと帰ってしまったていいのですか？

「ああ。エヴァンジェリンさんと茶々丸さんに迷惑をかけずにな」

微笑むのはいいのですが慧音さん、それだけでいいのですか？

慧音さんは紫様のスキマに向かって歩き出し、帰路に着こうとしています。

私としてはもう少しマスターとお話していただけるとありがたいのですが……。

……ほら、マスターがどことなく寂しそうな顔をしています。

「茶々丸、失礼なことを考えなかったか？」

そんなことはありませんマスター。全てはマスターの為です。あれほど教師らしく、そして母のように優しく接する慧音さんが眩しく見えました。マスターにとつても衝撃的な方だったはずですよ。

「ではまた機会があった時にゆっくりりさせてもらおうよ。……ではまた」

そういつて慧音さんはつつすらと笑い、スキマの奥に消えていきました。

本当に名残惜しいですね……主にマスターが。

「貴様、いつからそんなにわかりやすいぐらいに失礼な奴になった？」

何をおっしゃいますかマスター。これも全てはマスターの為です。慧音さんに続くようにして、次はレミリア様と咲夜さんがスキマに向かつて歩き出します。

「それではお嬢様。私達もそろそろ帰宅いたしましょう」

「名残惜しいわねえ。もっとお話したかったわ」

「いつそこちらに移り住みますか？」

咲夜さん、ナイスアイデアです。マスターも喜ぶかと。

「うーん、さすがに狭いわ」

「貴様、私を前にして私の家が狭いと言うか」

「失礼。何せ私は屋敷に住んでいるので」

「スケールがでない……」

聞けばレミリア様はお屋敷に住んでいらっしやるそうですね。今度、こっそりとマスターのご自宅の増築計画でも立ててみましょう。

「ま、戯事はここまでにしておいて。あなたと会えて本当に楽しかったわ」

「ま、私も悪くは思わなかったさ」

「これでパチエも居たら満点なのだけど」

「例え居たとしても、私的には50点だ」

「残り半分は？」

「全盛期の私でいること」

「なるほどね」

他愛のない会話のはずですが、マスターがとても楽しそうです。何より。

そんなお二人を他所に、私は咲夜さんに手を引く張られます。何事かと思いましたが、すぐに思い出しました。

私はマスターとレミリア様に背を向けて、こっそりと例の物を咲夜

さんに手渡します。

(では咲夜さん、これが例の写真になります)

例の物 それは本日に取ったマスターとレミリア様の可愛らしいお姿を記録した写真です。

総数20枚。厳選に厳選を重ねた結果の枚数です。

(感謝するわ茶々丸。次会えたら、私の秘蔵のコレクションを見せてあげるわ)

(是非お願いします。またいつでもいらしてください。マスターは表では見せませんがきつとお喜びになると思っています)

(それは恐らくだけどうちのお嬢様も同じよ。こちらこそよろしくね)

咲夜さん、あなたに会えたことを私は誇りにですら思えます。

「どつでもいいのだけど、帰るの？それとも残るの？」

八雲様、少しは空気を読んでいただきたいのですが……無理ですね。

この後、レミリア様と咲夜様もスキマを潜り抜け、最後に八雲様が

消えていきました。

さらにその後、マスターが何をしたのかというと。

「はっ！？なんで私は当然のようにチビ共を引き受けるような立場にいるんだ!？」

マスターは送り返すつもりがあつたんですか？

それはなりません。この子達の唇を奪った責任はきっちりつけてあげてくださいね。

もっとも、そうでなくても私が止めていると思いますが。

……私も随分変わった気がします。どうしてでしょうか？

その頃京都では

うーん、やっぱりこの魔法陣違ってねえかー？

京都旅行の二日目は、そりゃもー大変でしたよ。

なにせのどか嬢ちゃんに告白されるわ、朝倉の姐さんに魔法がバレちまうわで大問題でしたよ。

朝倉の姐さんの方は俺っちの説得もあってでなんとかかなりやした。姐さんと俺っちはどこことなく気が合い（エロ的陰謀的な意味で）、意気投合。

将来の独占レポートとある程度の魔法世界の知識を条件に秘密厳守を約束しやした。

今後とも姐さんとは仲良くしていきたいぜ……グッフッフ。

さて、次の問題はのどか嬢ちゃんの告白。
のどか嬢ちゃんの方は、何か決心がついたらしく、兄貴自身はどうにかするようです。

あの様子からみると真剣に受け止めるわけでも断るわけでもなく、友達でいましてよくてきな雰囲気みたいですし、大丈夫だろ。

残る問題は、ホテルをぐるりと囲む魔法陣。

兄貴が一日目の夜に書いた、曰く使い魔や式神を通さなくする魔法陣だという。

あの時は書き終える前に入られちゃったから、意味がなかったんすけどね。

それでもなにか気になったんで、見回りを終えた兄貴を置いて見に来たんだが……。

『……こりゃ仮契約の魔法陣じゃねえか！』

兄貴ったら、どこをどうやったら間違えるんすかー！まるで違うじやねえっすか！

こりゃ、ホテルの中でうつかり誰かとキスしちゃったら其の場で仮契約なんて。。。

あ、魔法陣が光った！

『バックティオー
仮契約！』

はっ！しまった！つい癖で！

ほぼ反射的に仮契約カードを受け取っちゃった俺は、そのカードの絵柄をしてみる。

こ、これはのどか嬢ちゃんじゃねーか!?

ま、まさか兄貴、のどか嬢ちゃんの思いを受け止めちゃったのか！
っ！

うっはー！こりや黙っていらねえや！

なんてったって『あの』お堅い兄貴がついに女を選んぢまったんだ！
今夜はお赤飯だぜ！あ、ホテルだから今は無理か。

さあてこうしちゃいらねえ！今すぐにも朝倉の姐さんに報告、
ついで兄貴に祝福だ！！

おじさんが手取り足取り、女の扱い方ってもんを教えてやるぜえー
っ！！

この後、ただのどか嬢ちゃんが躓いた拍子にキスしちまったただけ
だという残念な事実を知ることなど、俺っちは知る由もなかったの
です。

完

第36話「マクダウェル家の日々・二日目その3」（後書き）

オマケ

エヴァ「ところで、よくあの八雲相手に交渉できたな」

レミリア「・・・ええ、色々あったのよ」

エヴァ「そうか。（あの八雲が素直に送り迎えしてくれたほどだよほど高い対価を払ったに違いない）」

レミリア「そうよ。（言えないわ・・・八雲との条件が、霊夢とイチャつく権利一日分だなんて・・・）」

霊夢は色んな人に愛される愛さレイム。

感想にて、チルノと大妖精が出てきてからグダグダになっていると言われました。

あれこれネタを入れなくなつてグダグダになってしまいます（汗）
また、どうやら作者は大人数での場面が苦手なようです。誰かが空気になるります。

こんな作者ですみません（汗）

そんなこんなで二日目は終了。我ながら色々書いたなあ。

まずは大妖精のアーティファクトの検証。何か抜けてるぞ？という意見がありましたら是非お願いします。

大まかな弱点などはわかると思います。

そして慧音先生とエヴァ。実はこれもやりたくて混ぜたほどです。これも東方×ネギまでやってみたいことなのですが、いつか妹紅とも会わせてみたなと思っています。

吸血鬼だけでなく不老不死仲間ができたらいいなあと考えたので。エヴァが行くのか、向こうからくるのかは秘密です。

そして今回で完全に茶々丸がメイド長似になりました。

書いておいてなんですが、いつか鼻から忠誠心が出てきそう（笑）

そして京都では、原作通りのどかちゃんと仮契約。

ただし朝倉との「作戦X」は発動せずに、ネギが書き間違えた魔法陣のせいです。

この作品におけるネギは冷静な方ですが、その分ウツカリも多いです。

といますか、流れ的にのどかちゃんは必要不可欠です。はい。

以上になります。ありがとうございました。

三十万アクセス記念小説「東方奇跡録 早苗ハイテンション」(前書き)

この小説は、皆様のアンケートで頂いたご意見を参考にして作成した小説です。

今回のテーマは「早苗が麻帆良入り」。今回はいつもに増してカオスです。

若干のキャラ崩壊をご覚悟ください。

楽しんでいただければ幸いです。皆様のご意見ご感想をお待ちしております。

三十万アクセス記念小説「東方奇跡録 早苗ハイテンション」

早苗視点

幻想郷に降り注ぐ暖かな日差しと涼しげな風。

そんな日差しと風は、ここ守矢神社にもやってきます。

幻想郷における信仰もそこに栄え、神奈子様も諏訪子も元気で過ごしています。

少々元気すぎて、お二人曰く「じゃれあい程度」の喧嘩を毎日するのが難点ですが……。

それでも東風谷早苗は日々お二人に感謝と誠意を込めつつ、楽しく暮らしています。

ですが……。

「はあ……」

私は手元を持っている物を見ながら、つい溜息を零す。

棚を空けてうっかり落としてしまった、私が外の世界に居た頃の、思い出の品。

これは高校時代の友達から貰った、かの有名な学園都市のお土産アケです。

「麻帆良学園かあ……」

是非とも行ってみたいなあと思っていた頃があったなあ。

麻帆良学園といえば、テーマパークのように盛大な麻帆良祭が有名

な所。

あらゆる技術が飛び越えており、特にロボット技術は最先端を越えた最先端だとか。

是非とも見ていたいですねえロボット……大型二足歩行ロボットとあるかな？

「はあ……」

今となってはすっかり冷めてしまいましたし、夢のまた夢です。

なにより、私にとっては親以上に大切なお二人を差し置いてなど、もつての他。

……さて、思い出に浸った所でお夕飯の支度を……。

「行ってみたい？」

「のわっひゃあっ!？」

振り向いた瞬間、目の前にスキマ妖怪の顔がーっ!？

「なによおそんな化物を見たような驚きようは」

「あ、あなたは妖怪じゃないですか紫さん!」

驚かしておいてなんですかその反応は……。

そ、それよりも、驚いて息が……息がしにくいです……。
ひ、ひとまずは深呼吸、深呼吸……すー……。

「で、話は進めるんだけど、あなた麻帆良学園に行ってみたい？」

ぶっはっ!？

「げほ、げほ、ぶえっほ！」

「いちいち面白い反応をする子ねえ」

誰の性ですか誰の！！

神奈子視点

神二人が早苗なつめと紫を前にひそひそと耳打ちしているってのは、なんだかねえ。

(……で、どうするのさ、神奈子)

(どうするって言われてもなあ諏訪子……)

早苗の困った顔と八雲の胡散臭い笑みを見比べながら、私達二人は首を傾げる。

早苗の悲鳴が聞こえたから駆けつけてみれば、八雲の前で咳き込む早苗の姿。

とりあえず自慢の御柱で八雲を叩きつけようとしたが避けられた。残念だ。

しかし落ち着いて話を聞く限りでは、早苗が生きたい所に連れて行ってやると言う。

早苗はただ思い出に浸っていたただだからと首を横に振って否定していたが……。

相変わらず嘘の下手な子だね。どうしても行ってみたいっていう顔をしているじゃないか。

けど相手の諏訪子が耳打ちしてきたんだが、あの八雲が何か企んでいるのではと難を示していた。

八雲は単なる社会見学あるいは気まぐれだと言っているが……確かに妖しいねえ。

(素直に言えば、私は早苗に思いつきり遊んできて欲しいんだよ。ここんどこ疲れが溜まっているようだし、滅多に無い機会だから……)

(私も同意見なんだけど……相手があの紫だからねえ)

そう、それが問題だ。

何かあるのに違いない。

そう思う反面、本当に単なる気まぐれではないかとも思えるから面倒なんだよ。

さてさて、どう打つべきか……。

言っちゃ情けないが、私は頭を使うのが苦手だね。

(そこでさ、私に提案があるんだ)

我に策有り、とその小さな口が釣り上がり、黒い笑みを浮かべる。

ついでにその独特な帽子の目がにやりと笑った……ように見える。少なくとも私には。

私は首を傾げるが、諏訪子はこういった頭を使った事が得意中の得意だ。

可愛い早苗の為にも、諏訪子の策とやらに乗ってやるとしようかね。

早苗視点

輝く太陽！賑わう人々！都会の雰囲気！人が若かりき頃の声の数々！

「というわけで、やって来ました麻帆良学園んー！！」

今！私こと東風谷は、麻帆良学園のど真ん中にやってきましたーっ！！

あ、服装は私服（割とラフ）です。さすがに学園で巫女服は非常識だと思っただので。

見てくださいこの光景！

幻想郷どころか普通の日本社会にだってお目にかかれないうぐらいの都会らしさ！

学園都市というだけあって、人々の大半は学生ほどの年代ばかりです。

私は年齢的に高校生なので少々浮いていると思っただけなのですが……。

問題ありませんね。なんとか溶け込んでいるようです。

よく考えたらここは高校や大学もあるんですけどね。

正直、私もあの紫さんが善意で（お礼は釣れたての山魚）連れてきてくれるとは思ってもませんでした。

難を示していたお二人からの許可も得ましたし、不肖早苗、夕方まで麻帆良学園を楽しみます！

まずは友達が一番の苦い思い出と言っていた、ゴージャクレープとやらを探してみましよう！

茶々丸視点

本日の午後マスターの主のご予定は、囲碁部で過ごすこと。

続いて午後のルーミアさん・チルノさん・大妖精さんの3人の予定は、鳴滝姉妹と遊びに出かける様子。

いつしかチルノさん達は鳴滝姉妹と仲良くなっており、時折遊びに出かけているようです。

ちなみにチルノさんと大妖精さんは羽を封印して隠しています。バシたら一大事ですからね。我慢してください。

さらに言えば、チルノさんの名前も決まりました。

名はチルノ「F」ブルースノウ。私が名づけました。とても気に入っていただけました。

そして残された私といえば、日課の猫の餌やりに興じています。

最近になって解ってきたのですが……どうやら私は可愛いものが好きのようです。

確かにここ最近、猫を愛でることが増えましたし、密かにお小遣いで動物のぬいぐるみを購入する機会も増えました。

そしてお昼寝中のチルノさん達の寝顔を見る時が、とても充実した気分になります。

果たしてこれはどういった感情なのでしょう？

そんなことを考えていたからか、生体センサーの反応を見逃して

いました。

「ロボットだー！ーっ！！！！」

な、なんですか？いきなり？

後ろから突然叫ばれたからか猫達が逃げ出し、私は何故かわたたと慌ててしまう体たらく。

その声の主を確認すべく、私は後ろを振り向きます。

そこには緑の髪に可愛い髪飾りを飾った、綺麗な女性の姿がありました。

それにしても何故、そのようなキラキラした目で私を見るのでしょうか？

早苗視点

いやはや、麻帆良学園とは幻想郷並みに常識がありませんね！ですがそこがいい！

癖になるほどに苦いゴーヤクレープ（奇跡でバッチリゲットです！）。

パチュリーさん似の少女がくれた練乳ミートソースなるジュース（軽く吹きました……）。

紅魔館の地下図書館よりも広くて大きな図書館島（本棚に滝とか意味あるんですか？）。

麻帆良学園名物路上喧嘩（空手部など体育系部活同士がぶつかり合う事が多いそうです）。

どれもこれも面白い物ばかりですね！祭り時でなかったのが惜しま

れます……！

ですが私が一番会いたいの、最先端の上を行くというロボット技術！

それを探して西へ東へ（途中目移りはしましたが）廻った所、ついに発見しました！

なんとなんと！人間そっくりなロボットを見つけちゃいました！

思わず叫んじゃったほどです！これも守矢の信仰があつてこそです！

「あの、私に何かごようでしょうか？」

学生服を着込んだ女子学生のようなロボットさんが困ったように私に言います。

へえー、最新のロボットって女子学生にもなるんですね。さすが麻帆良！

「あ、あの、私は旅行でここに来た東風谷早苗（いちや さなえ）と言いますが、失礼ですが、あなたもしかしてロボットだったりしませんか？」

テンションが上がらなして口調が少しおかしいかもしれませぬ……。

ですが見た目はまんまロボットですから、今更コスプレだなんていうはずが……。

「はい。私は確かにロボット工学研究会で作られたロボットですが、正確には私はガイノイドです」

「やっぱりー！」

うはーっ！生ロボですよ生ロボ！生きていて良かったです！

言い方違つかもしれませんが、それっぽいということかどうかご勘弁を！

「ロボットがお好きなんですか？」

「はい！大好きです！正しくは特撮ヒーローやロボットモノですが……」

あはは、ついつい言っちゃいました。お恥ずかしい。

「ではこういっのはいかがでしょうか？」

そついうと茶々丸さんは片腕を上げて空へと向けました。まさか、まさかですよ？もしかしたりしますか……！？

バシユツ！

「ロケットパンチです」

「きゃーっ！！」

まさかのロケットパンチ！夢みたいです！

……あだだ、頬を掴っても覚めないから夢じゃありませんよね！？
空気の読めるロボットとか凄いですね！どこかの不良天人の付き添いよりも素敵です！

それよりなにより！まさかロケットパンチを搭載するとは！
この方を作った科学者は相当わかってるようですね！

「じゃあじゃあ、レーザーとか撃てますか！？」

「できますよ」

あっさりと茶々丸さんは頷いて、空へ顔を向けて……今度は目からレーザー!?

「きゃーっ!きゃーっ!」

この東風谷早苗!まさか幻想郷の外で本物のロボットを見られるなんて思いもしませんでした!

これも奇跡!麻帆良に来て本当によかったです!早苗幸せ!

「じゃあじゃあ、『あれ』はないんですか!？」

「……あれ、と申しますと?」

あれですよあれ!ロボット3大浪漫(私定義)でお約束のあれじゃないですか!

……あれじゃわからないようなので、実際に口で告げましょう!

「自爆装置ですよ!」

茶々丸視点

私の自己防衛機能が、私の前できゃあきゃあ騒ぐ早苗さんを危険人

物と判断しています。

私個人から見れば、葉加瀬やいいんちよさんと同じように感じられるのですが……。

……前言を撤回します。やはり現状の早苗さんは危険のようです。

「……………自爆装置、ですか」

「そうですね！ロボットモノのアニメやゲームではお約束じゃないですか！」

確かにアニメなどでは、何故か設置していることが多いそうです。ですがいくらあの葉加瀬とはいえ、そのような物騒なものをつけているわけが……。

……

……

……………否定できる要素より査定できる要素が多いのは何故でしょう？

「あるんですね？」

「いえ、その」

「あるんですねっ!?!」

そんなに近づかないでください早苗さん。

あまりの興奮ぶりに目が充血していますし、闘牛のように鼻を鳴らしていますよ。

なんといいいますか……今になって解りました。これが『恐怖』という感情なのですね。

「あの、仮にあったとして、早苗さんは、その、どうなさるおつもり、なのですか？」

「んー？……………んふ、んふふふふふ」

怖い。怖いですマスター。助けて欲しいですマスター。

答えもせずただ小さく笑っただけの早苗さんが今とても怖いです。

「見たいと言ったら……………どうします？」

自己防衛機能の警告レベルがMAXになりました。限界です。

「あの、私はこれで失礼しますっ！」

逃げます！私はなんとと言っても逃げます！

私は両足と背中中のバーニアを展開させ、限界ぎりぎりの最高速度を出して逃亡します。

高速で遠ざかっている上にエンジン音で遮られるはずなのですが、何故あの方の喜ぶ声がするのですか？

しかも「逃がしませんよ」なんて叫んでいた気が……………。

気のせいです。絶対に気のせいです。ええ誤作動です。後で葉加瀬に直してもらわなければ。生体センサーが誤作動するだなんておかしいですね。

決して、決して上空で高速飛行中の私の後方に人なんかいるはずが……！！！！

「待つてくださーいっ！！！！」

現実を受け止めます。早苗さんが私に負けぬ速度で空を飛んで追いかけてきます。

マスター。葉加瀬。

今、茶々丸は初めて、恐怖のあまりチビリそうという体験をしています。

何を漏らすかですって？……私が知りたいです。

早苗視点

逃がすか逃がすか逃がすか逃がすか逃がすか！

三大浪漫が、三大浪漫が目の前に！！

某王子物語に出てくる叱咤魔王が言いました……「漢のロマン！自爆スイツチ」！！

それが目の前にあるとなれば見たくなるのは当然っ！今私は、常識に囚われないっ！

「お待ちなさい！たまたま目撃して何事かと思っただけに見れば何をしていますかあなた！聞きたいことは沢山ありますが、まずは止まりなさい！この正義の魔法使い・高音Dグットマンの目が黒い内は……ちよつと愛衣！なんでそんな遠くにまで逃げているんですか！」

「お姉さま逃げてーっ！」

「大奇跡『八坂の神風』！！！」

ビュッゴウッ！！！！

「きゃーっ！！！」

「お姉さまーっ！！！」

某電子獣冒険第貳期のとある黄色電子獣が言いました……「自分で正義を名乗る奴にロクな奴はいない」と!

とりあえず私の邪魔をしてくるようだったので、神の風で吹き飛ばしました!

すれ違い際に全裸になった女性の姿が見えましたが、気にしない気にしない!

待つてください茶々丸さん!三大浪漫を、三大浪漫を私に見せてください!

見せてくれるまで、私はどこまでも追いかけますからね!!

茶々丸視点

燃料切れ。ここまでのようです。

私は失速して地へと落ちていきます。

もちろん高高度から落ちてても、耐久度的には問題なく着地できるのですが……。

できるものなら、このまま大地に直撃して壊れてしまいたいです。もちろん、マスターやルーミアさん達を置いて朽ちるわけにはいきません。

ですが今の私は、そんなマスター達を含めた、大事な何かを守りたい一心です。

それでも私のバランサーが作動して綺麗に着地を決めてしまいま

すが。

「んっふっふっふっふっふ……」

ああ、とうとう来てしまいましたか……。

後ろを振り向けば、なにやら黒いオーラののようなものを纏っている早苗さんの姿が。

怖いです。笑い声を口にして充血させた目で私を見ながら歩み寄りらないでください。

すみませんマスター。ルーミアさん。チルノさん。大泉さん。最後に、皆さんの笑顔が見たかったです。

「サンダイロマンっっ!!」

そんな魔王のような早苗さんを止めたのは、思わぬ人物でした。

「「いい加減にしな!!」」

人ほどもある御柱とフラフープのような鉄輪で早苗さんを殴りつ

ける、二人の見知らぬ女性でした。

諏訪子視点

やっぱり暴走しちゃったねえ。まったく。誰に似たんだか。

八雲に無理を言って、私達も現代入りして早苗の跡をつけてきて正解だったよ。

あ、ちなみに私達は割とそのまま。ただし神奈子は鏡と柱を置いてね。

「すまなかつたねえ、うちの子が迷惑かけてしまって」

「早苗には私達が後でしかと言っておくよ」

「いえ、お気になさらず……」

随分と礼儀正しい子だねえ。これが機械だっていうから驚きだよ。本来ならこの子に謝るべき早苗はといえば、でかいタンコブを2個作って気絶中。

相手から早苗を見れば、さながら連行された宇宙人みたいに見えるだろうね。

支えているのは私達二人。神奈子はもう片方の腕で御柱を抱えているよ。

「焚き付けてしまった私にも多少なりとも責任がありますし、そう早苗さんを責めないでください」

「……そう言って貰えると助かるよ」

「けど早苗の暴走は今に始まったことじゃないから、そこは私達で叱らせてもらおうよ」

「前からだつたんですか……」

あんな目にあつたんだ。そりゃ怖くて震えもするよね。

ロボットでも怖がらせるとは、この子の感受性が優れているのか、それともうちの子がそれだけ怖いのか……。

まあ後者の線が強いのは間違いない。

「しかし見事なもんだねえ。今時のカラクリはここまで進んでいるとは」

「ここまでくると科学と秘術の違いがわからなくなってくるねえ」

本当に丁寧な子だよ。もしかしてそれはコスプレか何かだったりしない？

……確かにこの子は生命じゃない。それは解っているんだけど……。

付喪神？けど違う……まるで……あーうー……まあいいや。

「……さて、日も暮れてきたし、私達は失礼するよ」

おっとそうだ。八雲の約束は夕方までだったね。

急がないと本気で私たちを置いたまま帰りかねないねあの年増妖怪は。

「重ね重ね、迷惑をかけてごめんね」

「どうかお気をつけて。早苗さんが起きたらよろしくお伝えください」

偉いねえ。

どこかの吸血鬼のメイドもこれぐらいの礼儀を見習ってほしいものだよ。

「ああ、わかった」

「それじゃあねー」

もう少し話しても見たかったけど、私たちは気絶中の早苗を引きずって帰る。

さあて、帰ったらたつぷり「OHANASHI」しないとね……ケロケロケロ。

「……こんなところで何をしている茶々丸？……おい、太ももに油みたいなのがへばりついているぞ？しかも身体が小刻みに震えているし……本気でどうした？」

「……マスター、今夜は一緒に寝てもよろしいでしょうか？」

完

「は？」

早苗の言っていることがわかったら、あなたと私はお友達。

というわけで、「東風谷早苗が麻帆良入り」です。いかがでしたか？
茶々丸には申し訳ないことをしました。ぶっちゃけ書いてて楽しかったです(笑)

神様が神社を離れるのもどうかなあと思ったのですが、普通に外出できるようですし、いいかなと思いましたが。

というか、暴走した早苗を止めるにはお二人の力がないと(汗)
高音さんは私の作品の中では基本やられキャラです(笑)

そして今回になってチルノの名前発表。感想にいただきました。
ありがとうございます！

丁度いい機会なのでここで発表しましたが、これは本編にも関わるのでご安心を。

ちなみにこの後、茶々丸は命令違反をしてもエヴァンジェリンと一緒に布団に入ったそうです。

最後に私的東方キャラ紹介をして終わりにします。

東風谷早苗

二柱の為に日々頑張る女の子。穏やかだが暴走すると手が付けられない。アニメ好き。

八坂神奈子

神様その1。カリスマ度数はレミリアよりも高い。割と短気。我が

子の無事が第一。

守矢諏訪子

神様その2。見た目は子供・頭脳は大人のな子。帽子は生物。ナマモノ 我が子の教養が第一。

それではみなさん、読んでくれてありがとうございました。

第37話「マクダウェル家、京都へ赴く」

エヴァンジェリン

パチン

「ぬむ……ま……」

「待ったはなしだ」

むしろ待ってやるものか。

京都旅行から三日目。レミアア達が来た日から一日ほど経った頃。あれだけ濃い一日を過ごしたからか、どうも退屈な気分になる。もちろん騒がしいには違いないし、修行はキチンとするが、それでも何か物足りない。

夜になった今も、爺が気まぐれで囲碁をしないかと誘われてやってきたが、やはり弱くて相手にならない。

昨日慧音とやったが、奴の方がまだマシなぐらいだ。レミアアは知らなかったのでパス。

ちなみに私達の左横では茶々丸が茶を居れ、右横では3バカとチャゼロがUNOをやっている

……チルノの手札の枚数が異常過ぎる。どうしてそうなった。

「なんじゃケチじゃのお。年上の癖に」

「同じ年下でも、決して待ったを言わぬ奴もいたが？」

老獺の癖に大人気ないぞ爺。……いや、慧音の方が大人びているだけか。

……そもそもを考えたら、慧音は半妖だと聞いたから、爺よりも長生きしているのかもしれない。というわけで、爺はまだまだガキだな。

トゥルルルル

「もしもし、わしじやが」

電話か。少し待ってやるとするか。

どうやら相手はネギらしいが……親書を渡せたとの話があったから、問題ないか。

「ケケケ。どろー4、黄色ダゼ」

「チルノちゃん、これとおなじの持ってない？」

「これかーっ!？」

「それ?だよー?色は合っているけど出せないよー」

「頑張ってくださいチルノさん。まだ逆転の可能性あります」

……随分と盛り上がっているなその5人。ていうか茶々丸、茶はどうした。

爺なんかと相手するよりはそっちの方がよかったかな……。

後で混ぜてもらおうとしよう。私の見事なカード捌きを見せるいい機会だ。

「なんじゃと!?!」

「どわっ!?!」

な、なんだいきなり叫んだりして!!

落ち着いて話を横から聞いていると、西の本山がどうのとか、一大事だとか話が出ている。

襲撃でもされたか。詠春がいるからと油断したとか、そんな所だろう。

しかし、いくら坊やと木乃香がいるからといって、関西呪術協会の本部に攻め込むとは酔狂な奴だな……。

それでいて、仮にも関東魔法協会の長が一大事だと叫んでいる所から見て、相手は相当な実力者なのだろう。

それほどの者なら、証拠隠滅として坊や達を殺しかねん。

ふむ……坊やの血が無くなつては困るな……ん?

「どうした爺?なんでそんなマヌケ面してこつちを見る?」

木乃衛門視点

ううむ、マズい、非っ常にマズいぞい……!!

まさか西の本山が全滅とは……しかも婿殿まで石になってしまったと聞く。

それどころか木乃香まで攫われるとは……想定外な上、最悪の事態じゃ。

ネギ君や刹那君達が無事なのがまだ幸い……いや、淡い希望じゃ。結果を破るところか婿殿まで抑えられたとなれば、相手は別格に違い無い。

その者を相手にするとなれば、ネギ君達が危うい。

なんとか救援を送りたいところじゃが、タカミチ君は海外におるし……。

待てよ。

「どうした爺？なんでそんなマヌケ面してこつちを見る？」

誰がマヌケ面じゃ、誰が。

しかし、そうじゃった！ここにはエヴァンジェリン君がおったわい！後は八雲殿が来るかどうかじゃが……それはさておき。

「エヴァンジェリン君、手短に話す。木乃香が攫われ、婿殿が石になり、西の本山が全滅した」

「あー、ご愁傷様だな」

いや、そんなあっさりと……。

予想していたとはいえ、やはり我関せずを貫くつもりか。

じゃから頼もつとするが……その前にエヴァンジェリン君の手が視界を遮る。

指と指の間から覗くエヴァンジェリン君の顔は、冷静で真剣なもの。

「まあ、あれだけ大声で言えば事情ぐらいは察するさ」

どうやら解ってくれたようじゃ。ようは協力してやるから少し黙れ、と。

そういつとエヴァンジェリン君は、ゆっくりと立ち上がって周囲を見渡す。

そして何かを見つけたかのようにその視線は一点に止まる。はて、そこには壁ぐらいしか無いんじゃないか……？

「居るんだらう八雲！緊急事態だ！」

なぬ？八雲殿が？じゃが、気配はまるで感じ取れんぞ？

「あら、お察しがいいですわねえ」

不意に轟く声。そして溢れ出す妖気と淀んだ空気。

この声と独特な威圧感のままさしく八雲殿のものじゃ。

空間がぱっくりと割れ、そこからゆっくりと八雲殿の上半身が現れる。

八雲殿の登場と切羽詰った空気が相まって、子供らも少し驚いている様子。

ここで騒ぐなりしなかったのは、空気を読んだからか、呆然としているだけか。

まあよい。事態は深刻じゃ。円滑に話を進めなければなるまい。

「八雲殿、実はの……」

「残念ですが事情は既に察していますわ。早い話が盗み聞き」

とんとん、と自分の耳を指で突いて意地悪く笑う八雲殿。

人が悪いのお。いや、八雲殿は妖怪じゃったな。

いつから聞いていたかはさておき、話が早くて本当に助かった。

「なら今すぐ私の呪いを解け。すぐに向かう」

八雲殿を相手に強気な口調を貫ける辺り、さすがと言えよう。

「わしからもお願いしたい。報酬は出来る限り払おう」

呪いの維持やら条件やらはこの際どうでも良い。

大事な孫娘と婿殿、そして子供達の命運がかかるとるんじゃ。悠長は許されん。

わしは頭を下げるが、八雲殿はただ扇子で笑みを隠しこちらを見るだけじゃ。

しばし目を閉じて無言でいたが、やがてぱっと目を開いて笑みを浮かべる。

「報酬は、以前の通り岩塩と調味料を。加えて特別料金として、木乃衛門殿のとおっておきの日本酒一本につき一名、現場へ直行させますわよ?」

なんじゃと!? どうしてそれを知っている!?

え、エヴァンジェリン君、そんな怖い目で睨まんでくれ!

いつか一緒に飲もうと考えていたんじゃ! こ、これは本当じゃぞ!?

「……………何本ある?」

……………と、エヴァンジェリン君は隣の八雲殿に尋ねる。

「いや、それはわしに聞くべきじゃね?」

「柵10本。隠し戸柵に2本。かなり大事に取っておいたようですわね」

ぬぬぬ、どうやら八雲殿はわししか知らないはずの酒蔵を熟知しておるようじゃ……。

それを聞いたエヴァンジェリン君は、ひいふうみいと、指で何かを数えておる。

指先にあるのは……エヴァを除くマクダウェル家の皆じゃった。

「6本だ。一番高そうな奴は私の分にとっておけ」

「商談成立。では二番目に高そうなのは私が頂きますわ」

勝手に二人だけで話を進めんでくれ！

仕方ないとはいえ、選ぶ権利ぐらいは与えてくれても……シクシク。

……む？6本じゃと？

「お主、まさかじゃと思うが……」

おそろおそろ、わしはエヴァンジェリン君に問いかける。

そしてわしの予想は当たったらしく、エヴァンジェリン君は凄惨な笑みを浮かべる。

とてもとても楽しそうで、それでいて何かを企んでいそうな笑みだった。

「喜べ爺。特別に、我がマクダウェル家の力を貸してやってもいいぞ？」

明日菜視点

こゝ、これはいくらなんでも怖すぎる……。

私と刹那さん、ネギにエロガモが武器を持って隣に居るとはいえ、これは怖い！

だって私達の周りを100体近くの化物がぐるりと取り囲んでいるんだもん！

歯がガチガチいって止まらない……立っているのが不思議なくらいに震えているし……。

あ、けど本気(?)のルーミアに比べたらこれぐらい……やっぱり怖いですごめんなさい。

「せ、刹那さん、こんなおさすがに無理……」

「明日菜さん落ち着いてください……大丈夫ですから」

だって刹那さんだって、あの白髪のカキに殴られて怪我しているじゃない！

怖いものは怖いのー！ルーミアも妖怪だけど、向こうは「これこそ妖怪！」って感じだし！

「……逆巻け春の嵐・我らに風を加護を」

ん？ネギ何言っているの？おまじないかなんか？

『風花旋風風障壁!』

うわわっ!? な、なにこの竜巻!?

化物達と私達を分ける壁みたいに、私達を竜巻が取り囲んでいる。これも魔法?

「風の障壁です! けど3〜4分しか持ちません!」

せめて時間稼ぎだけでもってことね。ついでに心の準備もさせて…。

『まずは作戦会議だ! どうするよこの状況!?』

私に聞かないでよバカカモ!

伊達にバカレンジャーレッドやってないもん! どうせ私に頭脳戦は無理ですよ!

け、けどだからといって、木乃香を見捨てることなんてできないわ! ……ん? 刹那さんが黙って頷いている。 ……まさかだと思っけど。

「二手に分かれ「まさか刹那さん、ここに残るだなんて言わないよね!?!」 ……って明日菜さん!?!」

やっぱりそうなのね! 刹那さんだったら言っと思っただ!

「そんなの駄目だからね! 絶対反対! 刹那さん一人で置いていけないよ!」

「で、ですが私はああいった化物相手には強いので…!」

言い訳無用! 断固阻止! 友達を置いていくぐらいなら無理やりだっ

て！
なら、なら私だっつてここに残　　。

その心配は無用だ

「「「！？」」」

『「この声は！？」』

エヴァンジェリンちゃん！？なんで！？なんで頭の中で声がするの！？

「落ち着いてください明日菜さん！これはエヴァンジェリンさんからの念話です！」

あ、解説ありがとうネギ……じゃなくて！

随分と面白いことになっているな

んなこと言っている場合じゃないでしょ！？こうしている間にも木乃香が！

落ち着かんかバカレッド！せつかく私が手助けしてやろうというんだ！最後まで聞け！

これが落ち着いていられる状況なわけ……え？

「待ってくださいエヴァンジェリンさん！手助けって！？」

ネギが驚いたように叫ぶ。刹那さんも目を丸くして驚いている。驚くのも無理ないわ。だってエヴァちゃんって、呪いで学園から出られないはずでしょ？

事情は後で説明するから3分ほど待て。そうすればすぐさま増援を送……ああもう煩いなチビ共！静かにしろ！

なんかエヴァちゃん以外の声が沢山聞こえるんだけど……ドタバタしながら。

とにかく！3分間、作戦会議でもしてろ！貴様らも動いてもらうからな！以上！

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

こら聞こえているんでしょ！？増援ってなによ！？さっきのドタバタは何！？

「……駄目です明日菜さん。念話が途絶えたみたいです。とにかくエヴァンジェリンさんを信じましょう」

「そうですね……藁にも縋る想いですし、ここはこちらで今出来る限りの事を考えましょう」

まあ二人がそう言うならいいんだけどさ……実際、本気でやばいんだし。

ここぞって時なんだから、さすがのエヴァちゃんもしっかりするだろうし。

『とにかく増援つてのが不確定には違いねえから、俺らでも出来る作戦を考えるべきだぜ！なら二手に分かれるつつーアイディアを採用だ！』

「ちよつとバカカモ！さつき私が反対だつて言つて……」

『聞いてくださいませ！明日菜の姐さんのアーティファクトは、ああいった召喚された化物を強制的に送り返す能力を持っているんだ！あいつらにはうつつつけだぜ！』

そ、そうなの？こんなハリセンがそんなに強い武器だったなんて……。
だ、だけどいくら武器が強くても、私は（一応は）弱い女の子なんだけど……？

「それなら、僕の魔力で明日菜さんの防御を保ちます！最低でも10分……いえ、15分は持ちこたえてみせます！だからお願いします！刹那さんと一緒に戦ってください！」

あ、あの仮契約の能力か！あれならいけるかも！ナイスよネギ！

「お願いされなくても刹那さんと一緒に戦うわよ！」

元々から（一応）か弱くても一緒に戦うつもりだったしね！

……あ、刹那さん軽くただけど泣いてる。えへへ、あたしなんかでも嬉しいんだ。よかった。

そういえばネギはどうするの？

「お二人に任せるのは忍びないですけど、僕は木乃香さんを救出しにいけます！杖さえあればこの中で一番早いのは僕ですし！」

『ナビはお任せくださいませ！念のため言っが、あの白髪の野郎と戦わないってのが鉄則ですぜ！』

わかってるよ、とネギはカモの言葉に頷く。

なるほどね……。ガキンチョに重大な役押し付けるのは難だけど……。

今はこいつを信じてみようじゃないの！

「……わかりました。障壁も弱まってきましたし、最後に確認します」

刹那さんが頷いて周りを見る。……ヤバっ！風が段々弱くなってきた！

とにかく、さっと纏めると以下の通り。

- 1．障壁が消えた直後、ネギが木乃香目掛けて飛び出す。
- 2．刹那さんと私で鬼をひきつける。
- 3．ネギが連中から木乃香を奪ったら、そのまま逃走！

わかりやすくいいじゃない！

後は応援が来たら状況を説明して、その時次第で対応してもらえばOK！

本当に頼むわよエヴァちゃん……！

『本当に仮契約しなくていいのかよ！？』

「私は気で防御力を上げるから大丈夫です。それよりも、ネギ先生の力を温存することに専念してください」

こればかりは力モに同意したいけど……本当に大丈夫なのかしら？
そしたら急に刹那さんが振り向いて、私の顔を見る。

「……すみませんが、よろしくお願いします。明日菜さん」

そういつて、刹那さんが笑った。

……なによ、いい笑顔しているじゃない！

「任せてよー！」

どーんとこの明日菜に任せなさいって！あんな奴らけちよんけちよんに……。

あ、けど。

「……私の事も助けてよね？怖い人には違くないから……」

弱音を吐くと、もちろんですって言って刹那さんが苦笑いを浮かべた。

情けないのも刹那さんがそんな薄情な人じゃないってのもわかって
いるけど、念の為ね。

「ネギ先生、木乃香お嬢様を頼みます」

「はい！」

刹那さんとネギが互いを見つめた後、障壁……ただしくは障壁の向
こうを見据える。

あとちょっとで戦闘開始ね……うっ、やっぱり怖い……。

あ、ちょっとまった。

「ネギ！」

「ひゃわっ!? な、なんですか!?!」

そんな素っ頓狂な声上げなくてもいいじゃない。

……柄じゃないかもしれないけど、言わせて貰うわ。

「……信じてるから!」

だからしつかりやんなさいよ!

「……はいっ!」

良い返事ね! 頼むわよ!……さあて、行くわよ!

……風が消えた! ぶっ放しなさい! ネギ!

「雷の……!」

「凍符『アイスエイジ』!」

ガツキイイイインツ！！！！

「……………あれ？」

さっき以上に素っ頓狂な声を上げているのは、ぼつと突っ立っているだけのネギ。

……………ネギ、あなたの魔法って風っぱいやつよね？

なんでこいつら全員、氷漬けになってんの？

カッチコッチの氷に化物達全員が包まれていて、まるで氷像みたい。

凍りつく静寂の中、和気藹々とした声と足音が後ろから響いてくる。私達はほぼ同時に、反射的に音がした方へと振り向く。

そこに居たのは。

「あたいサイツキョーツ！大ちゃん見た！？」

パキパキと身体中から冷気を放つガキンチョが胸を張ってはしゃいでいる。

「すごいよチルノちゃん！レティさんが見たらきつとびっくりするよー！」

すごいすごいと言ってはしゃぐ、緑色の髪をした女の子。

「わー、カッチカッチだねー」

その二人の女の子の間にいるのは、二振りの剣を持った……ルミ
ア。

「お見事ですチルノさん」

青いガキンチョに拍手を送っている人物は、間違いなく茶々丸さん。

「ケケケ。コリヤゴ主人モウカウカシテランネエンジンエノ？」

に、人形が不気味に笑いながら、ナイフを振り回して歩いてる……。

そして、そんな5人（4人と1体？）を引き連れるようにして歩いているのは……。

「馬鹿者。これはアーティファクトの力を加えたからこそだ。それに私の『こおるせかい』はこの程度ではないさ」

ふわりと靡く金色の髪、小さな体躯、それに似合わない強気な瞳……

……！

「なんだ。随分とマヌケ面しているな貴様ら」

エヴァちゃん!!?」

「小さな体躯は余計だーっ!」

「へびーっ!?!?」

なんで心を読んで蹴りを入れてくるのよーっ!?!?

完

第37話「マクダウエル家、京都へ赴く」(後書き)

ついにチルノが青キジもどきに近づきました。ただし本家に比べたらでんで劣る。

というわけで感想のアイディアを参考に技クロスさせました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3519v/>

魔法先生ネギま！ - 東方英雄録 -

2012年1月14日23時52分発行